

大阪市旭区

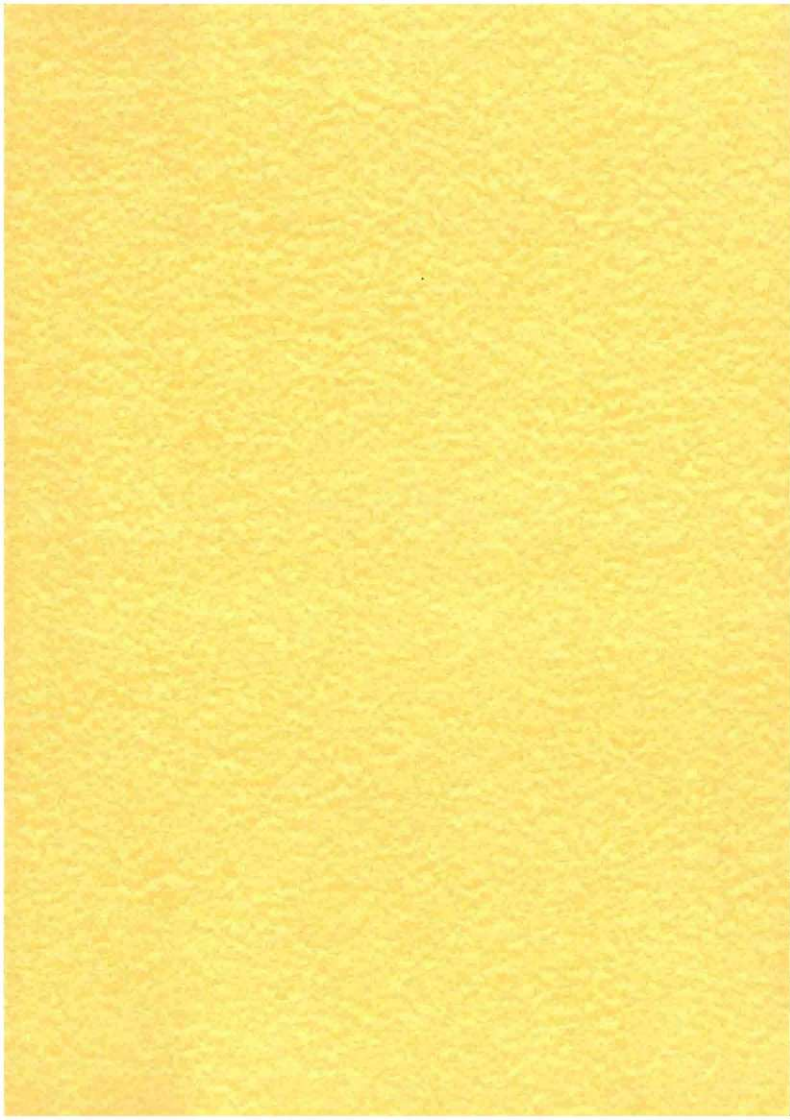
森小路遺跡発掘調査報告

I



2001.7

財団法人 大阪市文化財協会



大阪市旭区

森小路遺跡発掘調査報告

I



2001.7

財団法人 大阪市文化財協会



森小路遺跡出土の弥生土器

大阪市旭区

森小路遺跡発掘調査報告

I



2001.7

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

森小路遺跡は、弥生時代の河内潟北岸に位置する集落遺跡として著名な遺跡である。一帯は、北に淀川が流れ、南は弥生時代の河内潟を控えた古くから交通の要衝にあたる場所でもある。以前から本遺跡の重要性は広く知られており、この度、その正式な発掘調査報告書が刊行されたことは大きな喜びである。一つ一つの発掘調査は大規模なものではないが、それらがまとまって、大きな視点を持ったとき、森小路遺跡の歴史像が忽然と現れてきた。本報告書が、森小路遺跡の重要性を広く市民に知らしめ、考古学の研究に寄与することを心から願う次第である。

最後に、発掘調査から本報告書刊行にいたるまで、種々のご協力を賜った皆さまに、心より御礼を申し上げる次第である。

2001年7月

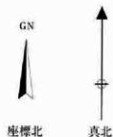
財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は、大阪市旭区新森および清水に所在する森小路遺跡において、1980年から1994年にかけて行った33件の発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、第1章第2節の表2に記した各事業者の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島暉臣(現調査研究部長)の指導のもと、同課田中清美・森穀・趙哲清・伊藤純(現大阪市教育委員会)・西田昭一(退職)・松尾信裕・藤田幸夫・植山洋・鈴木秀典(故人)・南秀雄・富山直人(現神戸市教育委員会)・川村紀子・松本(旧姓今津)啓子・西畑佳恵(退職)・黒田慶一・平田洋司・宮本康治・辻美紀が担当した。それぞれ調査の担当者・面積・期間などは第1章第2節の表2に記した。
- 一、本書の作成は、調査研究部研究副主幹田中清美の指導のもと、同部調査課大庭重信・学芸部企画広報課清水和明が編集した。本文の執筆は、田中・大庭・清水のほか、同部研究資料課資料係長趙哲清・同課池田研が分担し、執筆者名は担当した各節の最後に示して文責を明らかにした。また、第2章各節の弥生時代石器遺物は清水が記載した。巻末の英文要旨はMatthew W. Van Pelt氏(ワシントン州立大学)が作成した。
- 一、第3章第1節の磨製石器の石材については大部分を調査研究部調査課小倉徹也が同定し、一部を川端清司氏(大阪市立自然史博物館)にご教示を得た。第3節の動物遺存体については、本文で記したように髙山彦太郎氏(故人)、久保和土(元調査課、故人)・池田が同定し、そのほか富岡直人氏(岡山理科大学)・松井章氏(奈良国立文化財研究所)・石井久夫氏(大阪市立自然史博物館)・中井克樹氏(滋賀県立琵琶湖博物館)にご教示を得た。木製品の樹種については光谷拓実氏(奈良国立文化財研究所)・大山幹成氏(同特別研究員)・藤井裕之氏(京都大学大学院人間・環境学研究科)に同定していただいた。王造稲荷神社所蔵の弥生土器については、同宮司鈴木一男氏のご配慮により、実見することができた。また、MS87-6次調査出土の銅形木製品については兵庫県教育委員会種定淳介氏にご教示を得た。さらに、2000年12月3日に行われた第11回大阪弥生遺跡検討会の席上で、多くの方々からご意見をいただき、森岡秀人氏(芦屋市教育委員会)・濱田延光氏(寝屋川市教育委員会)・菅菜太郎氏(武庫川女子大学)・秋山浩三氏(大阪府文化財調査研究センター)・若林邦彦氏(同)・上田健太郎氏(兵庫県教育委員会)から、特に石器遺物・土器について有益なご教示を得た。心からお礼を申し上げます。
- 一、遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真の撮影については、徳永園治氏に委託した。また、原色図版1の航空写真は大阪市旭区役所から提供を受けた。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物・図面・写真などの資料は当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係る作業には、補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・地質学的用語については、[趙哲済1995]に準じる。
2. 遺構名の表記は、掘立柱建物(SB)、井戸(SE)、溝(SD)、土塹(SK)、柱穴(SP)、畦畔(SR)、自然流路(NR)、その他(SX)の分類記号の後に、各調査ごとに別個の番号を付している。また、調査で柱穴と確定できなかった小穴については、分類記号を与えずそのまま小穴とした。
3. 遺物には本書での通し番号を付したが、弥生時代の石器遺物についてのみ、当協会での登録番号をそのまま用いている。石器遺物の用語は[大阪市文化財協会1995]に従った。
4. 水準値は、各調査で測量したT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では「TP±〇m」と記した。挿図中の方位は、座標北・真北を下図のように区別して用いた。
5. 座標値は国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値である。なお、ほとんどの調査で国土座標に基づく測量が行われておらず、各調査区の配置図とバシフィック航業株式会社調製の大阪市道路現況平面図(1/500)とを重ね、そこから割り出した数値を用いた。
6. 本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類については次の文献に拠った。本文中では煩雑さを避けるために、これら引用文献をその都度提示することは割愛している。古墳時代の須恵器：[田辺昭三1966・1981]、奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976・1978]・[古代の土器研究会1992]。なお、弥生時代中期の土器編年については、[森田克行1990]に準拠し、凹線文出現前後で第Ⅲ様式と第Ⅳ様式を区分した。



本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の環境と既往の調査	1
第1節 遺跡の立地と歴史的環境	1
第2節 調査の歴史と今回報告する調査	3
第Ⅱ章 調査の結果	7
第1節 MS80-3次調査	7
1) 調査の経緯と経過	7
2) 層序	7
3) 遺構と遺物	8
i) 各層出土遺物	
ii) 第7層上面検出遺構	
第2節 MS80-5次調査	14
1) 調査の経緯と経過	14
2) 層序	14
3) 遺構と遺物	16
i) 各層出土遺物	
ii) 第5層下面検出遺構	
第3節 MS80-13次調査	19
1) 調査の経緯と経過	19
2) 層序	19
3) 遺構と遺物	20
i) 各層出土遺物	
ii) 第4層下面検出遺構	
第4節 MS80-14次調査	22
1) 調査の経緯と経過	22
2) 層序	23
3) 遺構と遺物	24
i) 各層出土遺物	
ii) 第4層下面検出遺構	
第5節 MS80-16次調査	25
1) 調査の経緯と経過	25
2) 層序	25
第6節 MS80-17次調査	26
1) 調査の経緯と経過	26
2) 層序と遺構・遺物	26

第7節	MS81-2次調査	27
	1) 調査の経緯と経過	27
	2) 層序	27
	3) 遺構と遺物	28
	i) 各層出土遺物	
	ii) 遺構	
第8節	MS81-13次調査	31
	1) 調査の経緯と経過	31
	2) 層序	31
	3) 遺構と遺物	34
第9節	MS81-15次調査	35
	1) 調査の経緯と経過	35
	2) 層序	35
	i) I区	
	ii) II~IV区	
	3) 遺構と遺物	38
	i) 弥生時代	
	ii) 鎌倉時代以降	
第10節	MS81-17次調査	43
	1) 調査の経緯と経過	43
	2) 層序	43
	3) 遺構と遺物	46
	4) 森小路遺跡の成り立ちについて	49
第11節	MS82-8次調査	52
	1) 調査の経緯と経過	52
	2) 層序	52
	3) 遺構と遺物	53
第12節	MS82-18次調査	54
	1) 調査の経緯と経過	54
	2) 層序	54
	3) 遺構と遺物	55
	i) I~III区	
	ii) IV区	
	iii) V区	
	iv) VI区	
第13節	MS83-1次調査	60
	1) 調査の経緯と経過	60
	2) 層序	60
	3) 遺構と遺物	62
第14節	MS84-5次調査	63
	1) 調査の経緯と経過	63
	2) 層序と遺構・遺物	63
第15節	MS84-6次調査	64
	1) 調査の経緯と経過	64
	2) 層序	64

3)	遺構と遺物	65
i)	各層出土遺物	
ii)	第5層下面検出遺構	
iii)	第4層上面検出遺構	
iv)	第3層下面検出遺構	
第16節	MS84-7次調査	74
1)	調査の経緯と経過	74
2)	層序	74
3)	遺構と遺物	75
第17節	MS85-15次調査	78
1)	調査の経緯と経過	78
2)	層序	78
i)	I区	
ii)	II区	
3)	出土遺物	82
第18節	MS85-32次調査	83
1)	調査の経緯と経過	83
2)	層序	83
3)	遺構と遺物	85
第19節	MS86-5次調査	87
1)	調査の経緯と経過	87
2)	層序	87
3)	遺構と遺物	89
i)	各層出土遺物	
ii)	第5層下面検出遺構	
第20節	MS86-18次調査	92
1)	調査の経緯と経過	92
2)	層序	92
第21節	MS86-38次調査	94
1)	調査の経緯と経過	94
2)	層序	94
3)	遺構と遺物	94
第22節	MS87-6次調査	96
1)	調査の経緯と経過	96
2)	層序	96
3)	遺構と遺物	98
i)	各層出土遺物	
ii)	I区	
iii)	2区	
iv)	3区	
v)	4区	
vi)	5区	
vii)	8区	
viii)	木製品	
第23節	MS88-12次調査	123
1)	調査の経緯と経過	123
2)	層序	123
3)	遺構と遺物	124

	i) 南北道路	ii) 東西道路	
第24節	MS88-22次調査		134
	1) 調査の経緯と経過		134
	2) 層序		134
	3) 遺構と遺物		136
第25節	MS88-31次調査		138
	1) 調査の経緯と経過		138
	2) 層序		138
	3) 遺構と遺物		140
第26節	MS88-33次調査		143
	1) 調査の経緯と経過		143
	2) 層序		143
	3) 遺構と遺物		145
	i) 各層出土遺物	ii) 第5層下面検出遺構	
	iii) 第3層基底面検出遺構		
第27節	MS89-1次調査		149
	1) 調査の経緯と経過		149
	2) 層序		149
	3) 遺構と遺物		150
	i) 各層出土遺物	ii) 第6層下面検出遺構	
	iii) 第2層下面検出遺構		
第28節	MS89-4次調査		156
	1) 調査の経緯と経過		156
	2) 層序		156
	3) 遺構と遺物		157
第29節	MS89-50次調査		160
	1) 調査の経緯と経過		160
	2) 層序		160
	3) 遺構と遺物		161
	i) 各層出土遺物	ii) 第3層内および基底面検出遺構	
第30節	MS90-25次調査		163
	1) 調査の経緯と経過		163
	2) 層序		164
	3) 遺構と遺物		165
	i) 雨水畔地点	ii) 平面調査地点	
第31節	MS93-29次調査		169
	1) 調査の経緯と経過		169
	2) 層序		169
	3) 遺構と遺物		169
第32節	MS94-11次調査		173

1) 調査の経緯と経過	173
2) 層序	173
3) 遺構と遺物	174
i) 第6層下面検出遺構	ii) 第4層下面検出遺構
iii) その他出土の弥生時代遺物	iv) 第3層下面検出遺構
v) 第2層下面および基底面検出遺構	
第33節 MS94-13次調査	187
1) 調査の経緯と経過	187
2) 層序	187
3) 遺構と遺物	189
i) 各層出土遺物	ii) 第3B層下面検出遺構
iii) 第3A層上面検出遺構	
第三章 遺構と遺物の検討	193
第1節 森小路遺跡の石器遺物	193
1) 打製石器	193
i) 石鎌	ii) 尖頭器
iii) 石錐	iv) その他の石器
2) 磨製石器	196
i) 石剣	ii) 石魔丁
iii) 石斧	iv) その他の石器
3) まとめ	199
第2節 森小路遺跡出土の動物遺存体	201
1) 脊椎動物	203
2) 貝類	203
i) 所属時期と出土量	ii) 貝種構成
iii) 出土状況	iv) 計測値からみた資料の特質
3) まとめ	207
第3節 弥生時代中期の集落構造とその変遷	208
1) 集落立地の復元	208
2) 弥生時代中期の遺構分布	209
3) 土器の出土頻度からみた集落変遷	212
4) まとめ	217
引用・参考文献	219
あとがき・索引	
英文目次・要旨	

原色図版目次

1 空から見た森小路遺跡とその周辺

2 出土石造丁・木製品

上：森小路遺跡出土石造丁

下：森小路遺跡出土木製品

図版目次

1 MS80-3・13・14次調査

上：MS80-3次

15区地層断面

中：MS80-13次

C地点地層断面

下：MS80-14次

調査地全景

2 MS80-16次調査

上：調査地風景

中：地層断面(1)

下：地層断面(2)

3 MS81-2次調査

上：参道部分調査状況

中：3区

下：2区SK04断面

4 MS81-13次調査

上：調査地全景

中：12地点地層断面

下：13地点遺物出土状況

5 MS81-15次調査

上：1区地層断面

中：II区第4層土器出土状況

下：I区下水6・植樹帯5地点第7層下面検出

小穴群

6 MS81-17次調査

上：B-1区全景

中：A-4区道橋検出状況

下：A-4区SD01地層断面

7 MS82-18次調査

上：I区全景

中：V区SD01

下：N区SK04地層断面

8 MS83-1次調査

上：調査区全景

中：SX01地層断面

下：果穴化石検出状況

9 MS84-6次調査

上：第5層下面道橋検出状況

中：第4層上面道橋検出状況

下：SK08地層断面

10 MS84-5・7次調査

上：MS84-5次

I区高杯出土状況

中：MS84-7次

II区SK101西壁地層断面

下：MS84-7次

II・III区間西壁地層断面

11 MS86-5次調査

上：第5層下面道橋検出状況

中：SK01~03

下：SK02貝類出土状況

12 MS87-6次調査(一)

上左：2区道橋検出状況

上右：3区南部道橋検出状況

下左：4区北部第5層下面道橋検出状況

下右：5区南部第8層上面道橋検出状況

13 MS87-6次調査(二)

上：4区北部第6層遺物出土状況

中：5区北部SK705・708東壁断面

下：8区南トレンチ木製品出土状況

14 MS88-12次調査

上：11区第5層遺物出土状況

中：11区SK01基底出土土器・貝類

下：14区SD01遺物出土状況

15 MS88-22次調査

上：調査区全景

- 中：南壁地層断面
下：SK01検出状況
- 16 MS88-31次調査
上：第5層上面遺構検出状況
中：調査区東平柱列検出状況
下：SK01
- 17 MS88-33次調査
上：第5層下面遺構検出状況
中：SD01
下：小穴群検出状況
- 18 MS89-1次調査
上：第2層下面遺構検出状況
中：第6層下面遺構検出状況
下：SD01
- 19 MS89-4次調査
上：調査区全景
中：調査区北壁地層断面
下：SK01遺物出土状況
- 20 MS89-50次調査
上：調査区全景
中：小穴群検出状況
下：SX01地層断面
- 21 MS90-25次調査
上：Ⅰ区全景
中：Ⅱ区全景
下：Ⅱ区SX01北壁地層断面
- 22 MS93-29次調査
上：調査区全景
中：SE01土器出土状況
下：SK02木製把手付碗出土状況
- 23 MS94-11次調査
上：第4層下面遺構検出状況
中：第6層下面遺構検出状況
下：SK02・03地層断面
- 24 MS94-13次調査
上：西区4A層上面遺構検出状況
中：東区4A層上面遺構検出状況
下：東区6～8層上面および地層断面
- 25 出土遺物(一)
- 26 出土遺物(二)
- 27 出土遺物(三)
- 28 出土遺物(四)
- 29 出土遺物(五)
- 30 出土遺物(六)
- 31 出土遺物(七)
- 32 出土遺物(八)
- 33 出土遺物(九)
- 34 出土遺物(一〇)
- 35 出土遺物(一一)
- 36 出土遺物(一二)
- 37 出土遺物(一三)
- 38 出土遺物(一四)
- 39 出土遺物(一五)
- 40 出土遺物(一六)

挿 図 目 次

図1	森小路道路の位置	1	図41	出土遺物(1)	40
図2	伝地区清水2丁目出土遺物	1	図42	出土遺物(2)	41
図3	河内湖の時代と森小路道路	2	図43	I区植樹帯3地点平面図・東壁断面図	42
図4	森小路道路および周辺道路位置図	3	図44	MS81-17次調査箇所位置図	43
図5	森小路道路調査位置図	4	図45	A-C区地層断面模式図	44
図6	MS80-3次調査箇所位置図	7	図46	C-2区地質柱状図	45
図7	地層断面図	8	図47	A区平面図・遺構部分地層断面図	47
図8	出土遺物(1)	9	図48	出土遺物	48
図9	出土遺物(2)	10	図49	雑波累層の層序対比	50
図10	9'-15区平面図	11	図50	MS82-8次調査箇所位置図	52
図11	遺構出土遺物	12	図51	C区地層断面図	52
図12	MS80-5次調査箇所位置図	14	図52	B区平面図・南壁地層断面図	53
図13	地層断面図	15	図53	MS82-18次調査箇所位置図	54
図14	出土遺物	16	図54	I-III区平面図	55
図15	29区SK06出土遺物	17	図55	IV・V区平面図・東壁断面図	56
図16	MS80-13次調査地点配置図・地質柱状図	19	図56	出土遺物(1)	57
図17	出土遺物	20	図57	出土遺物(2)	58
図18	MS80-14次調査地点配置図・地質柱状図	22	図58	VI区平面図・東壁断面図	59
図19	第4層出土遺物	23	図59	MS83-1次調査箇所位置図	60
図20	MS80-16次調査箇所位置図	25	図60	調査区平面図	61
図21	調査地点配置図	25	図61	調査区南壁断面模式図	61
図22	地質柱状図	25	図62	深掘り部分西壁断面図	61
図23	MS80-17次調査箇所位置図	26	図63	出土遺物	62
図24	調査地点配置図	26	図64	MS84-5次調査箇所位置図	63
図25	地質柱状図	26	図65	出土遺物	63
図26	MS81-2次調査箇所位置図	27	図66	MS84-6次調査箇所位置図	64
図27	I-4区平面図・地層断面模式図	28	図67	調査区東・北壁地層断面図	65
図28	各地点配置図・地質柱状図	29	図68	出土遺物(1)	65
図29	出土遺物	30	図69	出土遺物(2)	66
図30	MS81-13次調査箇所位置図	31	図70	出土遺物(3)	67
図31	A区各地点配置図・地質柱状図	31	図71	第5層出土遺物	68
図32	B-1・2区各地点配置図・地質柱状図	32	図72	第5層下面平面図	69
図33	B-3区各地点配置図・地質柱状図	33	図73	遺構出土遺物(1)	70
図34	出土遺物	34	図74	第4層上面平面図	71
図35	MS81-15次調査箇所位置図	33	図75	SK07平面図・断面図	72
図36	調査地点配置図	36	図76	遺構出土遺物(2)	72
図37	各区調査地点地質柱状図	37	図77	第3層下面平面図	73
図38	I区F水2地点平面図	38	図78	MS84-7次調査箇所位置図	74
図39	I区F水6・植樹帯5地点平面図・西壁断面図	39	図79	II・III区間地層断面図	75
図40	I区植樹帯4地点平面図・東壁断面図	39	図80	II・III区遺構平面図	75
			図81	出土遺物	76

図82	Ⅱ・Ⅲ区水田もしくは灌田層分布範囲	77
図83	MS85-15次調査箇所位置図	78
図84	I区調査地点の配置図・地層断面模式図	79
図85	Ⅱ区調査地点の配置図・地層断面模式図	81
図86	出土遺物	82
図87	MS85-32次調査箇所位置図	83
図88	調査地点配置図	84
図89	地質柱状図	85
図90	出土遺物	86
図91	MS86-5次調査箇所位置図	87
図92	第4層出土遺物(1)	88
図93	第4層出土遺物(2)	89
図94	第5層下面平面図・東壁断面図	90
図95	遺構出土遺物	91
図96	MS86-18次調査箇所位置図	92
図97	調査地点の配置・地層柱状図	93
図98	MS86-38次調査箇所位置図	94
図99	調査区平面図・北壁断面図	95
図100	MS87-6次調査箇所位置図	96
図101	地質柱状図	97
図102	出土遺物(1)	99
図103	出土遺物(2)	101
図104	出土遺物(3)	103
図105	出土遺物(4)	104
図106	1区平面図・東壁断面模式図	105
図107	2区平面図・西壁断面模式図	106
図108	2区遺構出土遺物	108
図109	3区平面図・東壁断面模式図	110
図110	3区SX701出土遺物	112
図111	3区遺構出土遺物	113
図112	4区平面図・西壁断面模式図および遺構出土遺物	114
図113	5区平面図・東壁断面模式図	116
図114	5区遺構出土遺物	117
図115	8区平面図・東および西壁断面模式図	119
図116	4・5・8区出土木製品	120
図117	3・4・8区出土木製品	121
図118	MS88-12次調査箇所位置図	123
図119	南北道路調査地点配置図	125
図120	南北道路調査地点地質柱状図	126
図121	東西道路調査地点配置図	127
図122	1区平面図・断面模式図	127
図123	5区平面図・断面模式図	128
図124	11区平面図・断面模式図	129

図125	11区平面図	130
図126	SK01平面図	130
図127	出土遺物(1)	131
図128	13区平面図・断面模式図	132
図129	SD01平面図	132
図130	出土遺物(2)	133
図131	16区平面図・断面模式図	133
図132	MS88-22次調査箇所位置図	134
図133	調査区平面図・南および東壁断面図	135
図134	SK01平面図・断面図	136
図135	SK01出土遺物	136
図136	MS88-31次調査箇所位置図	138
図137	調査区平面図・南壁断面図	139
図138	出土遺物	140
図139	SK01出土遺物	141
図140	MS88-33次調査箇所位置図	143
図141	出土遺物(1)	144
図142	第5層下面平面図・西壁断面図	145
図143	出土遺物(2)	146
図144	第3層下面平面図	147
図145	出土遺物(3)	148
図146	MS89-1次調査箇所位置図	149
図147	調査区西・南・北壁地層断面図	150
図148	出土遺物(1)	151
図149	出土遺物(2)	152
図150	第6層下面平面図	153
図151	SK04出土木製品	153
図152	遺構出土遺物	154
図153	第2層下面平面図	155
図154	MS89-4次調査箇所位置図	156
図155	調査区北・西壁地層断面図	157
図156	調査区平面図	157
図157	出土遺物(1)	158
図158	出土遺物(2)	159
図159	MS89-50次調査箇所位置図	160
図160	調査区東壁断面図	160
図161	調査区平面図	161
図162	出土遺物	162
図163	MS90-25次調査箇所位置図	163
図164	調査地点配置図	163
図165	各雨水井の地質柱状図	164
図166	平面調査地点のトレンチ配置図	165
図167	トレンチ3・4の地層断面図	166
図168	出土遺物	167

図169 MS93-29次調査箇所位置図	169	図185 第3層下面および第2層基底面平面図	184
図170 第2層基底面検出遺構平面図および西・南壁地層断面図	170	図186 出土遺物(5)	184
図171 出土遺物	171	図187 出土滑石製品	185
図172 SK02出土木製品	172	図188 SK09平面図・断面図	186
図173 SX01出土石器遺物	172	図189 MS94-13次調査箇所位置図	187
図174 MS94-11次調査箇所位置図	173	図190 東区南壁・SD01北壁断面図	188
図175 調査区南・東壁地層断面図	174	図191 出土遺物	190
図176 第6層下面平面図	175	図192 調査区平面図	191
図177 出土遺物(1)	176	図193 各類型の石簀	194
図178 第4層下面平面図	177	図194 各類型の磨製石庖丁	198
図179 出土遺物(2)	178	図195 出土石器の組成	199
図180 SK07平面図・断面図	179	図196 弥生時代中期前期の森小路遺跡の微地形	208
図181 SK08出土遺物(1)	180	図197 弥生時代中期前～中葉の遺構分布	210
図182 SK08出土遺物(2)	181	図198 弥生時代中期中～後葉の遺構分布	211
図183 出土遺物(3)	182	図199 壺・甕口縁部の形態分類	212
図184 出土遺物(4)	183	図200 壺の類型別出土頻度	214
		図201 広口壺の類型別出土頻度	215

表 目 次

表1 報告以外のおもな既往の調査一覧	5	表8 磨製石庖丁一覧表	197
表2 今回報告する調査一覧	6	表9 石器遺物一覧表	200
表3 MS81-2次調査順序表	27	表10 森小路遺跡出土動物種名表	201
表4 MS84-5次調査順序表	63	表11 森小路遺跡出土動物遺体一覧(貝類以外)	202
表5 MS85-15次調査順序表	78	表12 森小路遺跡出土貝類一覧	204
表6 各地区出土流木・木製品の樹種	122	表13 セタシジミとハマグリに平均計測値	206
表7 石簀計測表	195	表14 各調査で出土した類型ごとの土器数	213

写 真 目 次

写真1 MS81-15次Ⅰ区調査風景	35	写真6 MS86-18次調査風景	92
写真2 Ⅰ区下水2地点加工木・獣骨出土状況	38	写真7 6地点地層断面	92
写真3 C区地層断面	52	写真8 SX01出土コメ・オオムギ	166
写真4 MS84-7次Ⅱ区遺構検出作業風景	77	写真9 竈626	172
写真5 MS85-32次25・26地点の調査風景	86	写真10 森小路遺跡出土貝類	204

第I章 遺跡の環境と既往の調査

第1節 遺跡の立地と歴史的環境

森小路遺跡は、弥生時代中期および古墳時代中期後葉を主体とする複合遺跡として知られている。遺跡の範囲は、1980年代の後半までは、顕彰碑の立つ大阪市旭区新森中央公園北東部を中心に半径約350mに設定されていた。しかしその後、遺跡の範囲は大阪内環状線を越えてさらに東側に広がることが判明し、後述するように淀川の流れに沿って形成された自然堤防を中心とした、直径約800mが現在の遺跡の範囲となっている(図1・4)。

本遺跡の発見は、昭和6(1931)年に新森2丁目から清水1丁目で行われた土地区画整理事業にさかのぼるが、同年には京都大学の島田貞彦・有光教一両氏による踏査と小規模な発掘調査も行われている[島田貞彦・有光教一1931]。この調査では弥生時代中期の土器や打製石器および磨製石器が採集され、森小路遺跡は市内でも低地に位置する弥生時代中期の標式的な遺跡であることが初めて指摘された。現在、弥生時代中期の集落に係わる遺構や遺物は新森中央公園から北東方向にかけて広範囲に分布することが確認されているが、大阪市東区玉造2丁目に所在する玉造稲荷神社には、清水2丁目の出土とされる弥生時代後期末～古墳時代前期の甕が奉納されている[堀田啓一・関川尚功1988]。この甕は口縁部の一部が欠損しているがほぼ完形に近いものである。やや長手の体部の外面には平行タタキが施されており、その下半から底部の外面および体部内面の調整はハケである(図2)。同様な甕は近年の発掘調査では確認されていないが、既述した島田・有光両氏の報告の中に平行タタキが施された弥生時代後期後葉とみられる甕の底部が図示(島田・有光1931の第5図-5)されており、出土地点が玉造神社の奉納品とともに現在の遺跡の北部に当ることから、当該期の集落は清水2丁目よりさらに北側に存在する可能性がある。

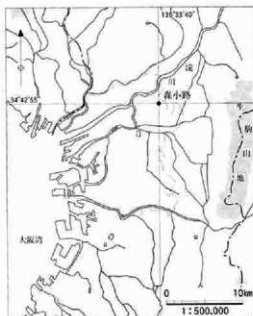


図1 森小路遺跡の位置

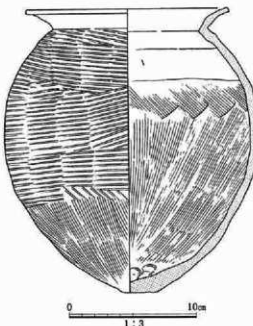


図2 伝旭区清水2丁目出土遺物

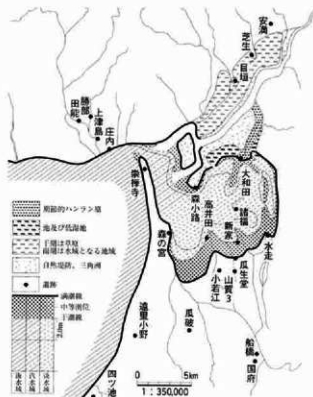


図3 河内湯の時代と森小路遺跡
(髙山・市原1985をトレース)

また、森小路遺跡は調査地点によっては近現代の水田や蓮根田の造成による改変を受けて攪乱されたり、区画整理時の土取りなどで削平されている場所もある。実際に遺跡の中央部に当る新森5丁目では、表土層を除去すると古墳時代中期後葉の遺物を包含する暗色帯が露呈する。これに対して、新森中央公園の周辺は自然堤防を形成する粘土質シルトや極細粒砂を基調とする水成層(無遺物)の上に、弥生時代中期前葉の遺物を包含する暗色帯、次いで弥生時代中期前～後葉の土器を包含するシルトや砂礫・細粒砂からなる水成層、これらの上に弥生時代中期後葉および古墳時代中期後葉の遺物を含む暗色帯が形成されている。なお、遺跡の北部に当る清水2丁目をはじめ、南部の新森4丁目の周辺には、遺跡中央部で集落が営まれた時期の前後に堆

積したシルトや粘土からなる低湿地が広がっており、ここでは将来当該期の水田跡が発見される可能性が高い。ところで、梶山彦太郎・市原実両氏による河内潟の時代(約3,000~2,000年前)とされる古地理図(図3)では、本遺跡は淀川が大きく流れを二手に変える分岐点の南方約4kmの自然堤防上にあり、河内潟に南面している[梶山彦太郎・市原実1985]。古地理図によれば、遺跡のある微高地の西側には広大な中等潮位帯があり、周辺は汽水域で、中等潮位帯がさほど発達していない遺跡の南および東側は淡水域に復元されている。したがって、森小路遺跡と他地域をつなぐルートとしては、自然堤防上を北東に進むルートと、船による河内潟から上町台地北方の長柄砂洲の北側を経て大阪湾にいたるルートがあったものと思われる(図3)。一方、森小路遺跡の北東方0.5~4kmの淀川沿いの自然堤防上には、図4に示すように守口市長池町遺跡[大阪府教育委員会1987]、橋波西之町遺跡[守口市役所1962]、八雲遺跡[大阪府教育委員会1987]、門真市西三莊遺跡[門真市教育委員会1993]、八雲東遺跡[門真市教育委員会1993]、普賢寺遺跡[門真市教育委員会1990]などの弥生時代前期末葉から中期中葉にかけての集落遺跡が点在しているほか、東南4kmの河内潟北辺に形成された沖積低地上には、大東市西諸福遺跡[大東市教育委員会1987]が存在する。また、門真市古川遺跡では、当地域では希有な弥生時代前期末~中期前葉の方形周溝墓群が検出されている[門真市教育委員会1999]。さらに、門真市宮野町に所在する大和田遺跡では、駅舎の工事中に3個体の扁平紐式契装澤文銅鐸が発見されているが、これは上述した弥生時代の集落を営んだ集団間で執り行われた地縁的な銅鐸祭祀に用いられた祭祀具として注目される[大阪府立泉北考古資料館1986]。

(田中)

(田中)

第2節 調査の歴史と今回報告する調査

本報告に収録した調査およびそれ以外の調査については図5、表1・2に示すとおりである。

森小路遺跡では、有光・島田両氏による調査以来、永らく発掘調査は行われなかった。戦後に最初に行われた調査は、1975年に旭区新森4丁目において水道工事に伴って実施された立会調査であった。この調査では、弥生時代中期ならびに平安時代の土器類を包含した地層が確認されたほか、新森中央公園内で磨製の太型蛤刃石斧が表面採集されている[中川信作1976]。続いて1975年に新森5丁目で実施されたMS1次調査は、老朽化した木造住宅の建替に伴う小規模な調査ではあったが、第Ⅱ～Ⅳ様式の弥生土器を伴う柱穴や土壌などからなる集落遺構が面的に明らかにされた最初の調査となった。1976年に清水1丁目～新森2丁目で水道工事に伴って行われたMS2・3次調査[八木久榮1978]以来、しばらく発掘調査はなかったが、1979年に新森5丁目で住宅建設に伴って実施したMS7次調査は本遺跡の最初の本格的な調査である[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1981]。本調査では

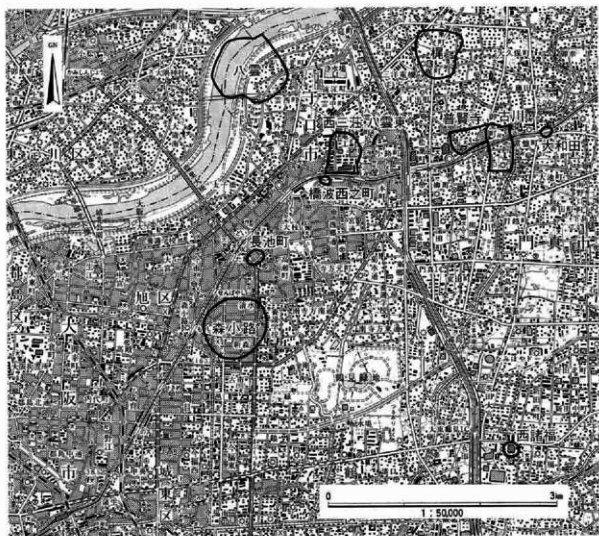


図4 森小路遺跡および周辺道路位置図

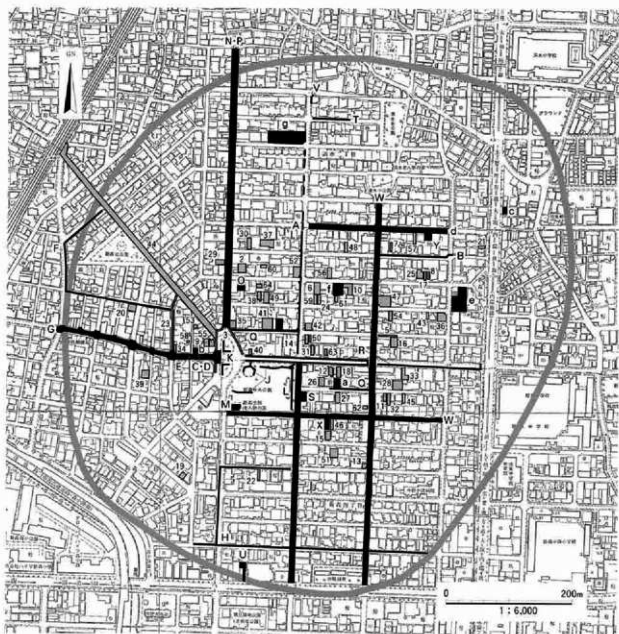


图5 森小路遺跡調査位置図

弥生時代中期前～後葉および古墳時代中期後葉の遺構・遺物が層位的に検出されたほか、弥生時代中期前葉の小規模な貝塚や火鉢・馬鉢・鋤などの木製農具や櫛状の木製品が出土した。また、当時は大阪府下最古とされた銅鐸の人物像に酷似した線刻の見られるⅡ様式の壺が出土して注目された[松尾信裕1986]。1976年以降は、新森4・5丁目を中心に引き続いて木造住宅の建替に伴う小規模な調査が実施されたほか、1980年に入ると戦前に施工された水道管やガス管などの補修や入替に伴う調査が始まった。これらの調査は結果として遺跡内にトレンチを設定した形になり、層序や弥生時代中期なら古墳時代中期後葉の遺構の広がりなどが徐々にではあるが明らかになった。この頃に新森4丁目で行ったMS80-12次調査では、本遺跡最初の弥生時代中期前～後葉の方形周溝墓が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1982]。1982年以降は高度経済成長下で、木造住宅から鉄骨造の住宅への建替えをはじめ、民間マンションの建設が徐々に増えて森小路遺跡の景観に

表1 報告以外のおもな既往の調査一覧

序号	調査次数	調査年	調査箇所	担当者	おもな遺構・遺物	参考文献
1	水尾正次	1975	新森1丁目	中田信作	獣生土器、石斧、平安棒	中田信作1976
2	MS1	1975	新森5丁目12-25	中田信作14小	獣生土器1器	中田信作1976
3	MS2-3	1976	清水1丁目・新森2丁目	中田信作、八木久美	獣生土器、石斧、平安棒	八木久美1978
4	MS5-5	1976	清水1丁目・新森4丁目	中田信作14小	獣生土器1器	
5	MS6	1979	新森5丁目13-5	八木久美14小	獣生土器1器	
6	MS7	1979	新森5丁目19-5	松尾信昭	獣生土器、小穴、地面土器、木製器、古墳	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1981、尾形信昭1985
7	MS80-1	1980	新森5丁目116-28	田中清美	獣生土器、小穴	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1982
8	MS80-2	1980	新森5丁目11-21	田中清美	獣生土器、小穴、小穴、磨石	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1982
9	MS80-6	1980	新森5丁目115-18	京崎定	古墳土器、奈良・平安朝土器	大阪市文化財協会1984
10	MS80-11	1980	新森5丁目9-10	木坂定司	獣生土器、古墳土器、土	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1982
11	MS80-12	1980	新森4丁目23-5	獣生土器、奈良朝土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1982	
12	MS80-15	1980	新森4丁目25-9	京崎定	獣生土器、古墳土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1982
13	MS80-18	1980	新森4丁目17-17	森政	平安朝土器、奈良朝土器	大阪市文化財協会1984
14	MS81-1	1981	新森5丁目12-5	田中清美	獣生土器、古墳土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1983
15	MS81-3	1981	新森4丁目20-24	藤田幸夫、伊藤隆	獣生土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1983
16	MS81-5	1981	新森5丁目13-6	藤田幸夫	獣生土器、土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1983
17	MS81-6	1981	新森5丁目11-21	藤田幸夫	獣生土器、小穴	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1983
18	MS81-7	1981	新森4丁目25-10	藤田幸夫	獣生土器、小穴	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1983
19	MS81-12	1981	新森2丁目20-20	森政	奈良朝土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1983
20	MS81-30	1981	新森5丁目10-10	藤田幸夫	獣生土器、土	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1983
21	MS82-1	1982	新森5丁目17-16	藤田幸夫	獣生土器、小穴	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1984
22	MS82-4	1982	新森5丁目15-9	黒田明	奈良朝土器、奈良朝土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1984
23	MS82-10	1982	新森5丁目14-14、15-28	森政	獣生土器、奈良朝土器	大阪市文化財協会1983
24	MS82-23	1982	新森5丁目19-25	八木久美	獣生土器、土器、小穴、有孔土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1984
25	MS83-11	1983	新森5丁目11-21	藤田幸夫	獣生土器、土器、小穴	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1985
26	MS83-25	1983	新森4丁目25-20	藤田幸夫	獣生土器、土器、小穴	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1986
27	MS83-28	1983	新森4丁目23-9	藤田幸夫	獣生土器、土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1986
28	MS85-3	1985	新森3丁目38-28	松尾信昭	獣生土器	大阪市文化財協会1986
29	MS85-4	1985	新森3丁目18-17	田中清美	獣生土器、土器	大阪市文化財協会1986
30	MS85-9	1985	新森5丁目14-25	山崎孝、川村紀子	獣生土器、古墳土器、土器、小穴、磨石、石斧	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1987
31	MS85-14	1985	新森4丁目12-25	山崎孝、川村紀子	獣生土器、古墳土器、土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1987
32	MS85-17	1985	新森4丁目24-6	藤田直彦	獣生土器、奈良朝土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1987
33	MS85-23	1985	新森4丁目25-9	南条勝	獣生土器、土器、磨石	大阪市文化財協会1986
34	MS85-27	1985	新森5丁目11-26	藤田幸夫	獣生土器、土器	大阪市文化財協会1986
35	MS85-38	1985	新森5丁目17-1	植山洋	獣生土器、打製石器	大阪市文化財協会1986、香取太郎1987
36	MS85-39	1985	新森5丁目15-13	植山洋	獣生土器、奈良朝土器、小穴	大阪市文化財協会1986
37	MS85-35	1985	新森5丁目14-24	南条勝	獣生土器、土器	大阪市文化財協会1986
38	MS86-4	1986	新森5丁目18-25	南条勝	獣生土器、小穴	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1988
39	MS86-24	1986	新森2丁目116-9-21	山田直人	奈良朝土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1988
40	MS86-30	1986	新森5丁目11-25	川村紀子	獣生土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1988
41	MS86-35	1986	新森5丁目17-24	松尾信昭	獣生土器、奈良朝土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1988
42	MS87-13	1987	新森5丁目11-1	田中清美、今津淳子	獣生土器、土器、奈良朝土器、奈良朝土器、木製器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1989、田中清美1987
43	MS88-5	1988	新森5丁目115-11	藤田幸夫、上村幸三	獣生土器、小穴、古墳土器、土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1989
44	MS88-15	1988	新森3丁目12-61	今津淳子	獣生土器、奈良朝土器、奈良朝土器、奈良朝土器	大阪市文化財協会1989
45	MS88-24	1988	新森3丁目124-9	西村孝也	獣生土器、奈良朝土器、奈良朝土器、土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1990
46	MS88-51	1988	新森4丁目20-9	今津淳子	奈良朝土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1990
47	MS89-21	1989	新森5丁目10-26	金村浩	獣生土器、土器、小穴	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1991
48	MS89-41	1989	新森4丁目115-22	藤田幸夫	獣生土器、古墳土器、小穴	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1991
49	MS90-1	1990	新森5丁目10-7	西郷徳正	獣生土器、小穴	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1991
50	MS90-14	1990	新森5丁目12-5	西郷徳正	獣生土器、土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1991
51	MS91-19	1991	新森4丁目111-8	植山洋	獣生土器、亀、奈良朝土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1992
52	MS92-6	1992	新森5丁目13-17	松本百合子	獣生土器、古墳土器、奈良朝土器、有孔土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1993
53	MS92-15	1992	新森5丁目15-13	松本百合子	獣生土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1993
54	MS93-8	1993	新森5丁目115-5	佐藤隆	獣生土器、土器、小穴、古墳土器、土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1995
55	MS93-15	1993	新森5丁目115-18	南条勝	獣生土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1995
56	MS93-35	1993	新森5丁目112-25	平田洋司	獣生土器、土器、小穴、磨石、石斧	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1995、平田洋司1991
57	MS94-6	1994	新森5丁目116-10	平田洋司、宮本雅浩	獣生土器、土器、磨石、石斧	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1996
58	MS94-15	1994	新森3丁目115-3	平田洋司	獣生土器、土器	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1996
59	MS95-18	1995	新森5丁目19-27	止花紀	獣生土器、奈良朝土器、土器、土器、小穴	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1997
60	MS95-23	1995	新森5丁目115-23	寺井謙	獣生土器、小穴、磨石、石斧	大阪市教育委員会、大阪市文化財協会1997
61	MS98-1	1998	新森5丁目9-23	寺井謙、池田樹	獣生土器、土器、小穴	大阪市文化財協会2009
62	MS98-14	1998	新森4丁目23-4	西郷徳正	獣生土器、小穴	大阪市文化財協会2009
63	MS98-29	1998	新森5丁目21-21	平田洋司	獣生土器、土器、土器	大阪市文化財協会2009
64	MS98-38	1999	新森5丁目8-9	寺井謙	獣生土器、小穴	大阪市文化財協会2009

表2 今回報告する調査一覧

調査年度	面積	調査地番	調査の範囲	担当者	調査期間
A MS80-3	42㎡	地区新築4・5丁目	大阪市水道管のライニング工事	田中清美	1980年6月2日～1980年8月9日
B MS80-5	71㎡	同 新築5丁目16	大阪ガス配管人替工事	田中清美	1980年8月1日～1980年9月10日
C MS80-13	30㎡	同 新築2・3丁目	配水管敷設工事	田中清美	1980年9月16日～1980年9月29日
D MS80-14	30㎡	同 新築2・3丁目	大阪ガス配管人替工事	田中清美	1980年10月11日～1980年11月29日
E MS80-16	66㎡	同 新築2・3丁目	下水道工事(東区)	森健	1980年12月16日～1981年1月31日
F MS80-17	190㎡	同 新築3丁目7・12、8-4	大阪ガス配管人替工事	森健	1981年1月30日～1981年5月30日
G MS81-2	2,150㎡	同 新築2・3丁目	歩道設置に伴う街並みの埋設工事	越智清、森健、伊藤純	1981年4月15日～1981年7月14日
H MS81-13	385㎡	同 新築2・4丁目	大阪ガス配管人替工事	森健、西田昭一	1981年9月1日～1981年11月30日
I MS81-15	364㎡	同 新築4丁目1～2・5	東淀区第1701号線歩道設置工事	松尾信雄	1981年10月13日～1982年3月31日
J MS81-17	152㎡	同 新築4丁目22(新築中央公園)	新築中央公園内の集水溝・管渠の埋設工事	越智清	1981年11月4日～1982年1月30日
K MS82-8	137㎡	同 新築4・5丁目	新築小路側面埋設工事	森健	1982年7月26日～1982年8月27日
L MS82-18	95㎡	同 新築4丁目22	新築中央公園埋設工事	森健	1982年12月8日～1982年12月27日
M MS83-1	168㎡	同 新築4丁目22-32	都市整備工事(集合所、老人憩の家建設)	森田幸夫	1983年4月26日～1983年5月19日
N MS84-5	70㎡	同 新築5丁目7・清水1丁目20	大阪ガス配管人替工事	松尾信雄	1984年7月23日～1984年7月31日
O MS84-6	105㎡	同 新築5丁目8-6	新築共同住宅の建設	飯山洋	1984年7月23日～1984年8月14日
P MS84-7	1,640㎡	同 新築3・5丁目1・清水1・2丁目	新築市ならびに街並工事	松尾信雄	1984年8月1日～1984年11月26日
Q MS85-15	205㎡	同 新築4丁目25・26、5丁目7	大阪ガス配管工事	鈴木秀典	1985年6月14日～1985年7月4日
R MS85-22	200㎡	同 新築4丁目22・25～27、5丁目1・2	大阪ガス配管人替工事	森秀典	1985年1月20日～1986年3月18日
S MS86-5	85㎡	同 新築4丁目23-3	田中氏による邸舎付住宅建設	富山直人	1986年4月22日～1986年5月13日
T MS86-18	30㎡	同 清水2丁目14・17	大阪ガス配管埋設工事	飯山洋	1986年7月18日～1986年7月24日
U MS86-38	110㎡	同 新築4丁目1・29	新井氏による共同住宅建設	川村紀子	1986年12月23日～1986年12月26日
V MS87-6	651㎡	同 清水2丁目・新築5丁目	東淀区第1701号線歩道設置工事	田中清美・今津啓子	1987年5月6日～1987年8月19日
W MS88-12	1,835㎡	同 新築4・5丁目他	東淀区第225号線歩道・2路橋、歩道設置工事等の施工	今津啓子	1988年7月1日～1988年2月22日
X MS88-22	75㎡	同 新築4丁目20-7	野村新子氏による建設工事	田中清美	1988年9月6日～1988年9月13日
Y MS88-31	65㎡	同 新築5丁目16-11	佐野増氏	西郷佳志	1988年10月24日～1988年11月1日
a MS89-1	44㎡	同 新築4丁目25-24	伊部廣氏による建設工事	飯田隆一	1989年4月4日～1989年4月14日
b MS89-4	57㎡	同 新築3丁目15-23	久保重造氏による建設工事	飯田隆一	1989年4月17日～1989年4月27日
c MS89-50	26㎡	同 清水4丁目1・2	泉屋組による建設工事	西郷佳志	1990年2月10日～1990年2月22日
d MS90-25	1,760㎡	同 新築5丁目	地区第141号線歩道設置工事	西郷佳志	1990年11月19日～1991年2月20日
e MS92-29	81㎡	同 新築5丁目4・10地	阪1不動産所による建設工事	森秀典	1993年8月18日～1993年8月27日
f MS94-11	91㎡	同 新築5丁目9-8	室井氏による建設工事	平田洋司・宮本康治	1994年5月19日～1994年6月1日
g MS94-13	230㎡	同 清水2丁目15-19	住友石炭炭田所による建設工事	田中清美・辻美紀	1994年5月26日～1994年6月23日

も変化が生じ始めた。さらに、1985年頃から旭区内のほぼ全域で住宅環境に適した道路整備などの公共事業が増大して、これらに伴って発掘調査の件数が急増した。今回報告した道路ならびにライフラインの整備に伴って実施した調査以後、瓦葺きの木造住宅が立ち並んだ閑静な住宅街の景観も大きく変貌したが、「ゆずりはの道」の整備や街路樹の植樹など、地域住民の生活環境の保全を念頭に置いた公共事業が功を奏して現在にいたっている。最近の調査は、主として住宅の建替に伴うものが大半を占めているが、本書では、表2に示した33件の調査成果を報告する。(田中)

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 MS80-3次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森4・5丁目にあり、遺跡のはほぼ中央部に位置している。

今回の調査は工事用ビット(1m×2m)の掘削中に弥生土器が出土したことに端を発して緊急に始めたこともあり、工事をすでに終えた1～8区については一部地層の観察にとどめた。調査の主たる対象は未掘削所の9～17区で(図6)、6月16日より9区の調査から着手した。ところが、併行して行われていた工事に問題が生じて調査が一時中断され、さらには、工事終了後の検査用ビットに対する大阪市教育委員会からの調査依頼などがあり、契約当初の調査期間内で調査を終えることが不可能となった。そこで、7月17日に大阪市水道局と当協会との間で発掘調査の契約変更を行い、7月26日に現場におけるすべての調査を終えた。

2) 層序

9～17区の地層を以下の第1～7層に区分した(図7、図版1)

第1層：アスファルトおよび道路敷き整地層である。

第2層：淡茶褐色砂泥りシルトからなる作土層で、層厚は10～15cmある。

第3層：暗茶褐色砂泥りシルト層で、層厚は10～45cmある。新森中央公園の東側にある15区では上部の暗茶褐色砂泥りシルト層と下部の黒色粘土に細分された。第Ⅱ～Ⅳ様式の弥生土器をはじめ、5世紀後葉の製塩土器や須恵器を含む。調査地域では本層の下面で古墳時代中期後～末葉の遺構が確認されている。

第4層：灰褐色細粒砂～褐色シルト泥り細粒砂層で、層厚は約30cmある。本層は15区以外では確認できなかったが、本遺跡では下位の弥生時代中期前～中葉の地層を覆う水成層として認識されている。

第5層：黒～黒褐色粘土および砂泥り粘土層で、層厚は10～40cmある。調査個所のほぼ全域で確認されており、炭・灰や有機物を多く含み、サヌカイトフレーク、結晶片岩製の磨製石庖丁をはじめ第Ⅱ～Ⅲ様式に属する多量の弥生土器が出土した。

第6層：第5層に類似するが、第Ⅱ様式に属する弥生土器を含み、部分的に植物遺体を多量に含む。



図6 MS80-3次調査箇所
位置図

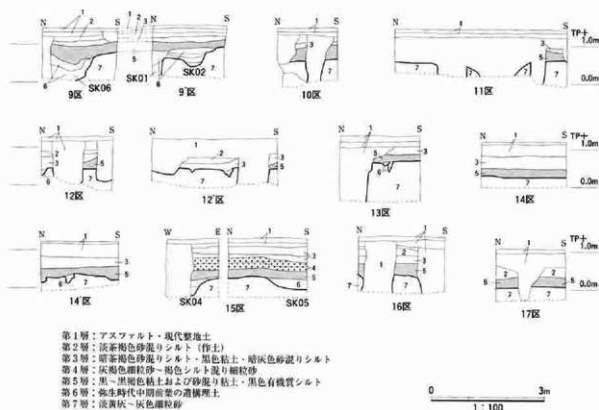


図7 地層断面図

9'区および15区では本層を埋土とする土壌が検出された。

第7層：淡黄灰ないしは灰色細粒砂からなる水成層である。本層上面の高さはTP+0.1～0.8mあり、調査個所の南から北にかけて徐々に高くなることが確認できた。なお、本層はほぼ均一な細粒砂層であるが、一部では上部が灰色粘土のところもあった。

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物(図8・9、図版25)

第3層および第5層から出土した弥生土器について、地区ごとに記述する。

9区の第3層から13・36が、第5層から26が出土した。13は口縁部が緩やかに開く甕で、体部外面をヘラケズリ調整している。胎土中に結晶片岩粒を含む。26は口縁部が短く開いた甕で、体部の調整は内外面ともヘラミガキである。

11区の第5層から9が、12区の第5層から11が、第3層から29がそれぞれ出土した。9は口縁部が緩やかに屈曲する広口壺である。29は口縁部が短く開いたのち、垂下する甕である。

13区の第5層からは1・2・20・30が出土した。1・2は口縁端部を下方にわずかに肥厚させた広口壺で、ともに頸部を備描直線文で加飾している。20は口縁端部を上方に肥厚させた甕で、体部の内外面の調整はナデである。30は口縁端部を下方に肥厚させた甕で、器表面の残りは悪い。

14区の第3層から15・17・22・24・27・28・32が、第5層から3・4・7・8・10・14・16・21・31・34・35が出土した。3・4は口縁端部を上方あるいは上下にわずかに肥厚させた広口壺で、3は口

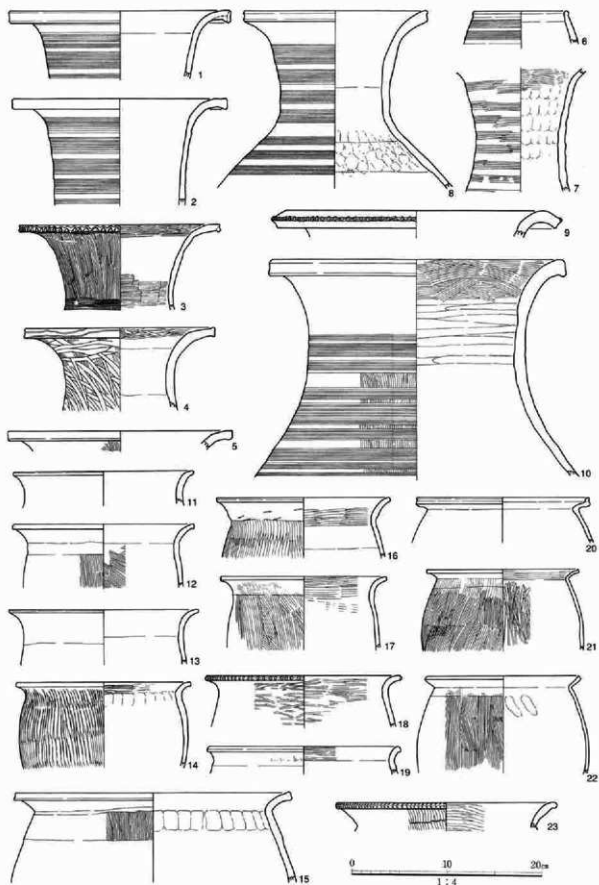


图8 出土遗物(1)

9区第3层(13)、11区第5层(9)、12区第5层(11)、13区第5层(1·2·20)、14区第3层(15·17·22)、14区第5层(3·4·7·8·10·14·16·21)、15区第5层(5·6·12·18·23)、16区第5层(19)

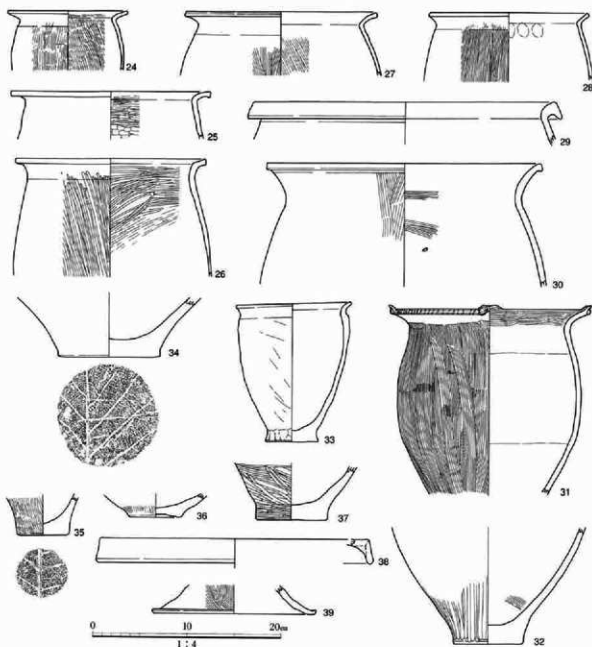


図9 出土遺物(2)

9区第5層(26)、12区第3層(29)、13区第5層(30)、14区第3層(24・27・28・32)、14区第5層(31・34・35)、15区第5層(25・33・37・39) 9区第3層(36)、16区第5層(38)

緑部の下端にキザミメ、頸部の下方に櫛描直線文を施している。4は無文である。7は口縁部を欠損した広口壺で、頸部を8条の櫛描直線文で加飾している。8は体部に張りのある広口壺で、頸部から体部の上半にかけて7条の櫛描直線文を施している。10は口径31cm前後の広口壺で、頸部から体部にかけて8条の櫛描直線文を施しており、口縁部の内面にはハケが残る。14～17は甕で、口縁部は単に屈曲する15以外は緩やかに外反している。口縁部をていねいにヨコナデ調整する15以外は口縁部の内面に粗い横方向のハケメが残る。21・22は屈曲した口縁部の端部をわずかに肥厚させた甕で、口縁部をていねいにヨコナデ調整している。体部内面の調整は21が細かいヘラミガキで、22はナデである。24・27・28は口縁部がく字状に開く甕で、27の端部は沈線状にわずかに凹む。体部の器面調整は内

面がナデの28以外は内外面ともに縦方向のハケである。31は口縁部の4個所に瘤状突起を持つ甕で、口縁端部の外面にキザミメを施している。調整は体部外面が粗いタテハケ、内面はナデであり、口縁部の内面には粗いヨコハケが残る。32は甕の体部から底部で、調整は外面が縦方向のヘラミガキ、内面はハケののち、ナデで整えている。34は壺、35は甕の底部で、ともに裏面に木の葉圧痕がある。

15区の第5層から5・6・12・18・23・25・33・37・39が出土した。5は口縁部が無文の広口壺、6は短頸壺で、やや内傾した体部の外面には3条の縄直線文が巡る。12・18は口縁部が緩やかに開く甕で、前者の体部の内外面の調整は縦あるいは左上りのハケで、後者は口縁部の外端面にキザミメ、口縁部の下端から体部の内外面には横方向のヘラミガキを施している。23は甕の口縁部で、中程が肥厚しており、調整は外面が縦、内面は横方向の粗いハケである。口縁端部の外端面にはキザミメを施している。25は口縁部が水平に開く甕で、調整は外面がナデ、内面は横方向のヘラミガキである。33は完形の甕で、口縁部は短く開く。調整は体部の外面がヘラケズリで、内面はナデである。37は壺の底部で、外面を横および左上りのヘラミガキで調整している。

39は甕の蓋で、外面の調整は粗い縦方向のハケで、口縁部の裏面には煤が付着している。

16区の第5層から19・38が出土した。19は口縁部が短く開く甕で、38は壺もしくは高杯の口縁部で、端部は垂下する。

以上の土器のうち、7・8・10・15・18・25・27・29・33・37・39は胎土中に角閃石を含む生駒西麓産、13は紀伊産である。また、31は近江系の土器と思われる。前述した土器のうち、第Ⅲ様式に属するものと思われる15・20・22・24・27・29・36・38以外は第Ⅱ様式に属するものである。

ii) 第7層上面検出遺構(図10・11、図版32・37)

本調査では第5層を除去した段階で溝・土壁・柱穴・小穴などの遺構を検出したが、調査範囲が狭小なため、遺構の全形や規模が明らかにできたものはない。ここでは9・9'区および15区で検出した第6層を埋土とする遺構のみを報告する。9'区ではSK01・02、15区ではSK04・05、9区ではSK06をそれぞれ検出した。

SK01 第5層を除去した段階で、後述するSK02とともに第7層の灰色粘土の上面で検出した土壁である。遺構の大半が調査範囲外であり、形状は不明である。深さは検出面から約0.6mあり、南に位置するSK02を掘込んでいる。内部には炭や灰が混る黒色有機質粘土・暗褐色粘土や、植物遺体を多く含む灰色砂泥りシルトが堆積しており、第Ⅱ様式の土器細片をはじめ、緑色片岩を素材にした大型石廬丁の破片80VB205が出土し

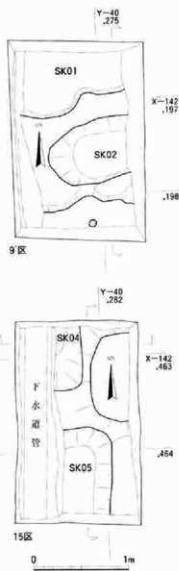


図10 9'・15区 平面図

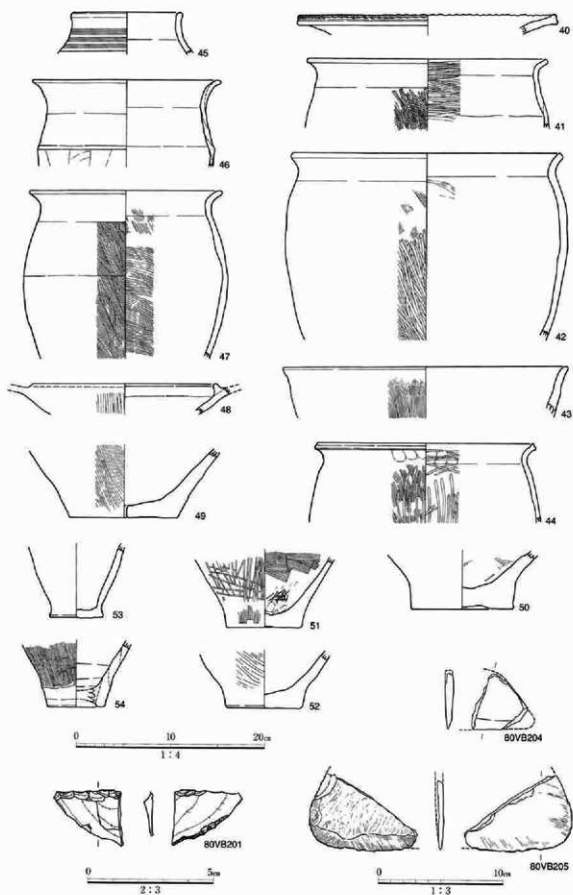


图11 道榜出土遗物

9TKSK01(80VB205), SK02(40·42·43·45·46·48~50·54·80VB201·204), 15TKSK05(41·44·47·51~53), 9TKSK06(45)

た。埋土は水つきであるが、近年の調査でゴミ穴とされている土壌の埋土に似ている。

SK02 遺構の東側は調査範囲外であるが、短辺0.6m、長辺0.8m以上の土壌である。深さは検出面から0.5mあり、埋土は上層が黒色有機質粘土、下層は植物遺体や炭・灰を多く含む暗灰色粘土で、ともに水つきであった。

上層から弥生土器40・42・43・45・46・48～50・54や石器80VB201・204が出土した。40は広口壺の口縁部で、端部の上端にキザミメが巡っている。45は直口壺で、頸部から体部にかけて櫛描直線文が施されている。42は口縁部が短く開く甕で、体部外面の調整は縦方向のヘラミガキである。胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。43は口縁部が体部の上端からわずかに開いた甕で、体部外面の調整は縦方向のハケである。甕46はやや内傾する体部の上半から口縁部が緩やかに外反している。体部の中程以下を横方向にヘラケズリ調整しているほか、胎土中に結晶片岩粒を含むことから紀伊地域からの搬入品と考えられる。48は口縁部を欠損した高杯の杯部破片で、外面の調整は縦方向のヘラミガキである。胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。49は外面に縦方向のハケを施した甕の底部で、中央に小孔を穿つ。50は壺の底部で、外面をナデしており、内面には左上りのハケが残る。54は外面を粗い縦方向のハケで調整した甕の底部で、裏面は浅く凹む。以上の土器のうち、第Ⅲ様式に属する高杯48以外は第Ⅱ様式に属するものであることから、前者は混入品と考えられる。なお、口縁端部をつまみ上げる甕44は第Ⅱ様式でも新相に属するものであろう。

80VB201は主要剥離面側から細部調整を加えたサヌカイト製の剥片である。80VB204は片刃の磨製石庖丁の破片で、素材は珪質頁岩である。これらの石器は共伴遺物から判断して弥生時代中期前葉に属するものであろう。

SK04 SK05の北側に位置する土壌で、遺構の大半は調査範囲外にある。深さは検出面から0.4m前後あり、埋土は黄灰色細粒砂のブロックを含む水つきの黒褐色砂泥りシルト、および炭・灰を含む黒褐色シルトで、第Ⅱ様式の土器細片が出土した。

SK05 SK04と同様に遺構の大半は調査範囲外である。深さは検出面から0.3m前後あり、埋土は炭・灰を含む黒褐色砂泥り粘土で、第Ⅱ様式に属する弥生土器41・44・47・51～53が出土した。41・44・47は口縁部が緩やかに外反する甕で、44は口縁端部をつまみ上げている。体部の器面調整は41・44が縦あるいは横方向の細かいヘラミガキで、47は縦および左上りのハケである。51・53は甕、52は壺の底部である。42は胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓産である。

SK06 9区で検出した土壌で、断面図のみ示した(図7)。埋土から第Ⅱ様式に属する短頸壺45が出土した。頸部から体部に櫛描直線文を施している。(田中)

第2節 MS80-5次調査

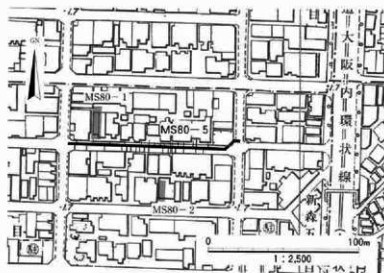


図12 MS80-5次調査箇所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森5丁目16にあり、遺跡の北東部に位置している。本調査はガスの東西本管(幅0.4m、長さ120m)と支管(32本)の入替に伴って実施した。調査に際しては配管箇所が道路敷き内であるため、調査区間を本管と支管に二分して、本管を東から西に3m間隔に1～35区とした(図12・13)。また、これまでの周辺部の調査結果から、調査地一帯の遺物包含層は浅いと予想されたので、機械掘削

を道路面下0.4mの現代整地層までとし、それ以下はすべて人力によって掘削した。8月5日から本管の調査に着手して、9月10日には支管を含めてすべての調査を終えた。

2) 層序

本調査では道路面下1mまでの地層を第1～7層に区分した(図13)。

第1層：現代整地層で、層厚は15～40cmある。

第2層：暗灰色砂泥りシルト層で、層厚は5～10cmある。江戸時代以降の陶磁器を含む作土層である。

第3層：暗茶褐色砂泥りシルト層で、層厚は20～35cmある。第Ⅱ～Ⅳ様式の弥生土器片や古墳時代中期後葉の須恵器の細片を含むが、層相からみて江戸時代以降の作土層であろう。

第4層：暗灰色粘土層で、層厚は20～40cmある。第Ⅱ～Ⅳ様式の弥生土器片をはじめ、古墳時代中期後葉の須恵器や土器片が出土した。本層は下面に踏込みが見られることや周辺の調査の成果からみて江戸時代以降の作土層と思われる。

第5層：黒褐色砂礫泥りシルト～粘土層で、層厚は10～40cmある。本層は炭・灰および植物遺体や有機物を含んでおり、第Ⅱ～Ⅳ様式の弥生土器やサヌカイト製の尖頭器・クサビが出土した。弥生時代中期の暗色帯と考えられる。なお、4区では、1～3区に堆積していた第5層の黒褐色砂礫泥り粘土が炭化物を多く含む黒色有機質シルト層に変化し、包含する弥生土器もほかの地区にくらべて第Ⅲ様式に属するものが多く認められた。

第6層：淡黄灰色細粒砂層で、層厚は最大で80cmまで確認した。本層の上面の高さはTP+0.3～0.8mあり、12～13区が微高地状に高くなっていた。

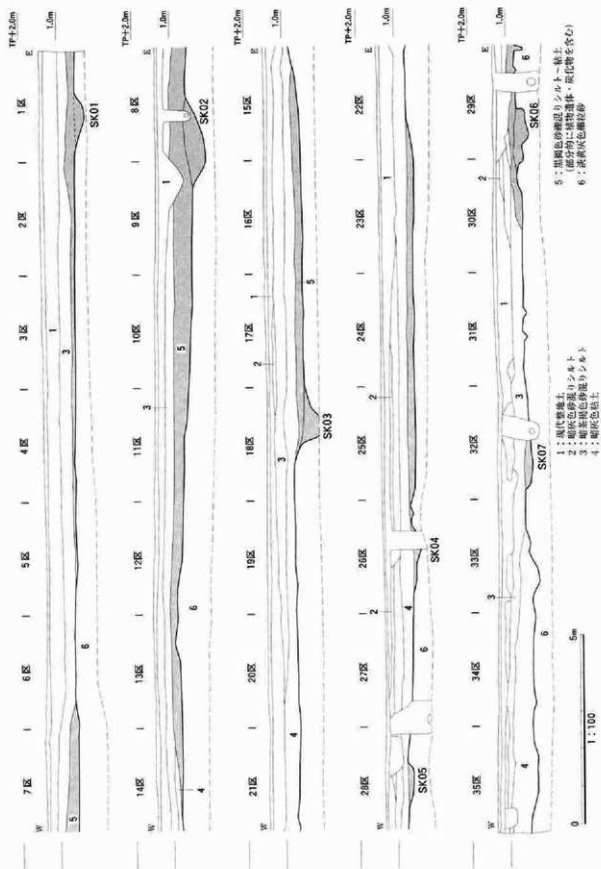


図13 地層断面図

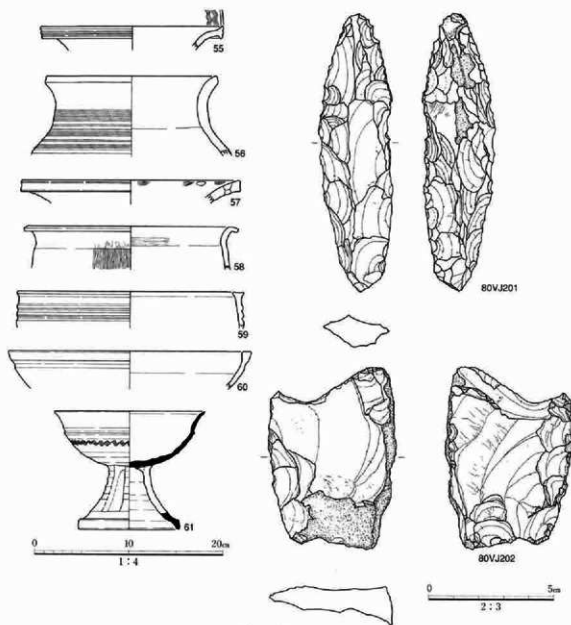


図14 出土遺物
第5層(55~60・80VJ201・80VJ202)、第4層(61)

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物(図14)

61は第4層から出土した須恵器の無蓋高杯である。杯部に1条の櫛描波状文が巡り、裾が緩やかに開いた脚部には三方に長方形スサシ孔を穿つ。脚部がやや長脚化していることからTK47型式に属するものであろう。

55~60は第5層から出土した弥生土器である。55は口縁部を上下に拡張した広口壺で、端面に2条の凹線文、内面にも櫛描波状文が巡る。56は筒状の頸部から口縁部が緩やかに開いた広口壺で、頸部の下半から体部に櫛描直線文を施している。57は口縁部が大きく開いた広口壺で、口縁端部の近くに紐孔がある。58は口縁部が端部の近くで折れ曲がった甕である。59・60は高杯で、前者の口縁部

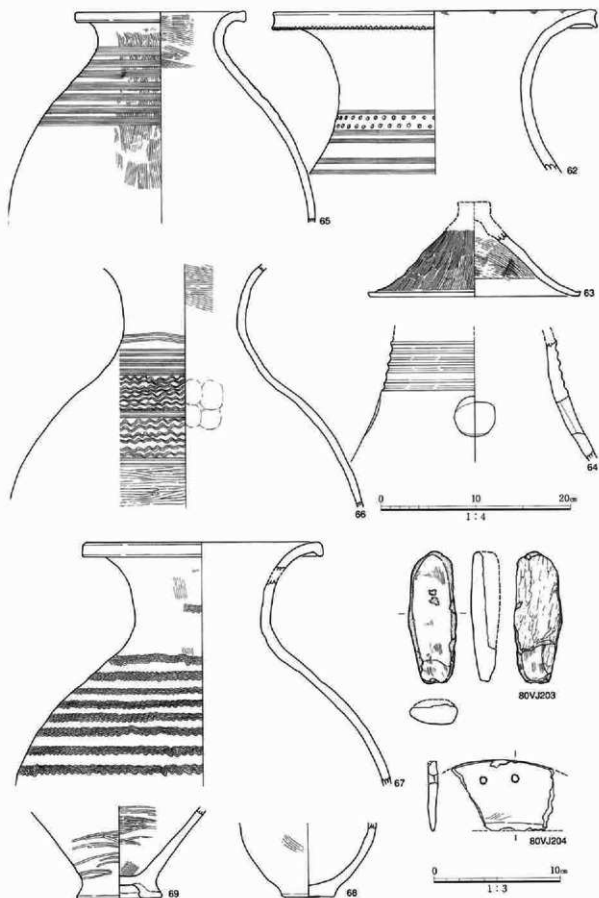


图15 29区SK06出土器物

下には2条の凹線文が巡る。55・59・60は第Ⅳ様式、56～58は第Ⅱ様式に属するものと考えられる。

80VJ201・202は第5層から出土したサヌカイト製の打製石器である。前者は尖頭器で、表面側には自然面が残っている。後者はクサビ(石核)で、図の上下方向では向かい合う加撃で形成された剥離面がある。

ii) 第5層下面検出遺構(図13)

本調査では第5層を除去した段階で土壌や小穴を検出したが、遺構の形状や規模については調査範囲の狭小さも加わって明確でない(図13)。ここでは、遺構の概略と出土遺物について述べる。

SK01 1区に位置する幅約1.6m、深さ0.4mの土壌である。埋土は炭化物を多く含む暗灰色シルト混り細粒砂で、第Ⅱ様式の弥生土器細片が出土した。

SK02 8～9区に位置する幅2.5m、深さ0.5mの土壌である。埋土は炭化物・植物遺体を含む暗褐色シルトで、第Ⅱ様式の弥生土器細片が出土した。

SK03 17～18区に位置する幅1.6m、深さ0.6m以上の土壌である。埋土は炭・灰を含む黒色シルトで、第Ⅱ～Ⅲ様式の弥生土器や加工木が出土した。

SK04 26区に位置する土壌であるが、遺構の東部を攪乱されていた。深さは約0.2mと浅く、埋土は黒色有機質シルトで、第Ⅲ様式の弥生土器細片が出土した。

SK05 28区に位置する幅1.2m、深さ0.2mの土壌である。埋土は黒色有機質シルトで、木片が出土した。

SK06 29区に位置する幅1.8m、深さ0.4mの土壌である。埋土は黒色有機質シルトで、弥生土器62～68をはじめ、磨製石斧80VJ203や石庖丁80VJ204が出土した(図15、図版25・37・38)。

62は口縁部が大きく開いた壺で、口縁端部の下端にキザミメ、内面に扇形文を施している。体部の上半には櫛描直線文および竹管文が巡る。なお、櫛描直線文は2帯複合櫛によるものである[森田克行1988]。63は壺の蓋、64は器台の筒部である。後者には凹線文帯の下方に円形スカシ孔を四方に穿つ。65～67は広口壺で、口縁端部を65は面取っており、67は下方に拡張している。いずれも頸部から体部に櫛描直線文や波状文を施している。66の直線文および波状文は2帯複合櫛によっている。68・69は壺の底部で、ともに器面調整はヘラミガキである。以上の土器のうち、混入品と考えられる第Ⅳ様式の器台64以外は第Ⅱ様式に属するものであろう。

80VJ203は結晶片岩製の磨製石斧の未製品で、片面が欠損している。80VJ204は結晶片岩製の磨製石庖丁で、身の両側が欠損している。刃部は直線で、身中央の背部近くに紐孔が2孔ある。

SK07 32区に位置する幅1.3m以上、深さ0.2mの土壌である。埋土は炭・灰を含む黒色有機質シルトで、サヌカイトフレックが出土した。

以上、おもな遺構・遺物について報告したが、調査範囲が狭小なこともあって、個々の遺構のつながりについては明らかにしなかった。しかし、弥生時代中期前葉から後葉の遺物を含む暗色帯の第5層は調査箇所より周辺に広がっていることから、森小路遺跡は従来の範囲を越えて東北方向にさらに拡大することが確認された意義は大きい。

(田中)

第3節 MS80-13次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森2・3丁目にあり、遺跡の西部に位置している(図5)。本調査は当該地において予定された水道管の入れ替え工事に伴って実施した。

調査の範囲は、大阪市教育委員会が本調査に先がけて行った試掘によって弥生時代の包含層が確認された工事区間とした(図16)。調査に際しては配管箇所が道路敷き内であるため、仮復旧の問題から、調査対象区間を20m単位に3分割して1日1区間のペースで調査を実施した。9月16日から調査に着手して、10月31日には一部の立会調査を含めてすべての調査を終えた。

2) 層序

調査箇所が道路敷き内にあるため、随所に既設の水道・ガス管や電柱による大きな擾乱があり、当該地の全域を通した地層の堆積状況を把握することはできなかった。したがって、本報告では比較的

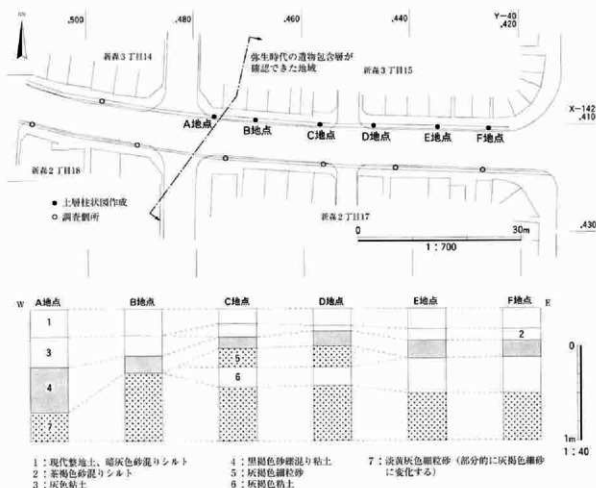


図16 MS80-13次調査地点配置図・地質柱状図

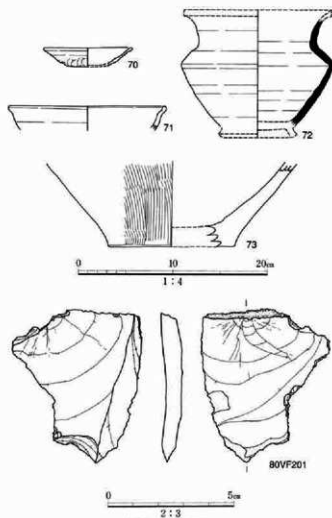


図17 出土遺物
第2層(70～72)、第4層(73・80VF201)

攪乱の少なかった新森3丁目15番にあるA～F地点の調査結果について述べる。

本調査では道路面下1.4mまでの地層を第1～7層に区分した(図16、図版1)。

第1層：昭和6(1931)年から実施された区画整理事業の際の整地層および江戸時代以降の作土層である。

第2層：調査地の中央部以東で確認した層厚20cm前後の茶褐色砂泥りシルト層である。本層には須恵器や土師器の破片が散見されたが、鎌倉時代以後の遺物は含まない。

第3層：灰色粘土層で、層厚は30cm前後ある。本層は植物遺体を含んでおり、調査地の中央部以西で確認された。

第4層：黒褐色砂礫混り粘土層で、層厚は10～40cm前後あり、炭・灰と多量の有機物を含むほか、弥生時代中期前葉の土器片や石器遺物が出土した。本層はA地点以西では、有機物や弥生土器の包含量が少なく、色調も黒色から灰色あるいは青灰色に変わる。弥生時代中期前葉以降の暗色帯である。

第5層：灰褐色細粒砂層で、層厚10～20cmの水成層である。C～D地点で確認された。本層の上面の高さはTP+1.1m前後ある。

第6層：灰褐色粘土層で、層厚は15～30cmの水成層である。本層はC地点以東で確認されており、E・F地点では上部が暗色化していた。

第7層：淡黄灰色細粒砂層で、層厚が70cm以上あると思われる水成層である。本層の色調は部分的に灰褐色を呈していた。

以上の地層のうち、第5～7層は弥生時代中期前葉以前に形成された自然堤防の堆積物と考えられるもので、調査箇所中央部から東方に向かって微高地状に続くことが認められた。

本調査ではC地点で第5層の上面から土壌と杭痕が検出されたが、ほかの地点では調査範囲が狭小なこともあって特に遺構は確認されなかった。

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物(図17)

70～72は第2層から出土した。70は土師器皿で、口縁端部を丸くおさめている。71は土師器皿で、口縁部は短く開いており、端部は丸い。72は口縁部および底部を欠損した須恵器広口壺である。以上は11～12世紀代に属するものであろう。

73は第4層から出土した大型の甕の底部である。器体の外面をハケ調整しており、第Ⅱ様式に属するものと思われる。

80VF201は第4層から出土したサヌカイト製の自然面を打面とする剥片である。主要剥離面の右側には使用痕とみられる微細な剥離がある。

ii) 第4層下面検出遺構

C地点で土壌状の遺構を検出した。平面形態や規模は大半が調査範囲以外のため明確にできなかったが、底面は船底状を呈しており、深さは約0.3mあった。埋土は炭・灰を多量に含む黒色シルトで、少量の炭化した木片が出土した。

以上が本調査の主要な成果であるが、中でも弥生時代中期前葉以降の暗色帯である第4層や生活面を形成する第5～7層が森小路遺跡の中央部と比較して50cm以上も低く、当地域が自然堤防から湿地帯へとつづく遺跡の縁辺部であることが確認された意義は大きいといえる。(田中)

第4節 MS80-14次調査

1) 調査の経緯と経過

調査箇所は新森2・3丁目にあり、本章第3節で報告したMS80-13次調査地点とほぼ重なっている(図5)。本調査は当該地内で予定されたガス管入れ替え工事に伴って実施した(図版1)。

調査の範囲は大阪市教育委員会が本調査に先がけて行った試掘調査で遺物が出土した部分に限っており、このほかの地区については立会調査に留めた(図18)。1980年10月11日に新森3丁目14番地点の調査から着手して、11月29日には立会調査を含めてすべての調査を終了した。

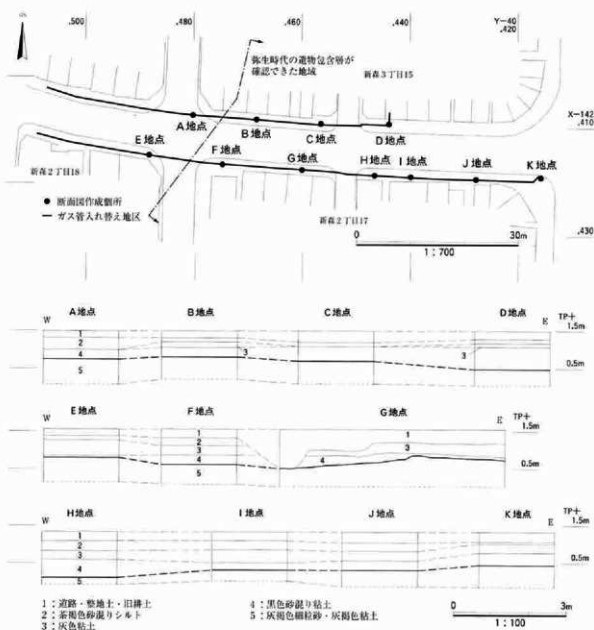


図18 MS80-14次調査地点配置図・地質柱状図

2) 層序

本調査に先行して実施したMS80-13次調査と同様に既設管による大きな攪乱があり、全区間を通じて地層の堆積状態を把握することはできなかった。したがって、本報告では比較的攪乱の少なかった新森3丁目15番地および新森2丁目17番地にあるA～K地点の調査結果について述べる。

本調査では道路敷きおよび昭和6(1931)年に実施された、土地区画整理事業の際の整地層で

ある。

第2層：茶褐色砂混りシルト層で、層厚は10～30cmある。本層は調査個所の中央部以東では薄く、以西では厚く堆積しており、古墳～平安時代に属する須恵器・土師器の細片が少量出土した。

第3層：灰色粘土層で、層厚は10～30cmある。本層は調査個所の東から南西に向かって徐々に厚みを増しながら堆積しており、水成層と思われる。遺物は出土しなかった。

第4層：黒色砂混り粘土層で、層厚は20～40cmある。炭・灰をはじめ多量の有機物を含んでおり、A～D地点では第Ⅱ～Ⅲ様式に属する弥生土器片をはじめ、サヌカイト製の尖頭器の破片やフレークが出土した。本層は弥生時代中期前葉以降の暗色帯で、F地点より以西では有機物や包含された遺物の量が減少し、色調も黒色から灰色あるいは青灰色に変化する。

第5層：灰褐色細粒砂層で、層厚80cm以上の水成層である。本層内には灰褐色粘土の部分もあったが、特に区分していない。

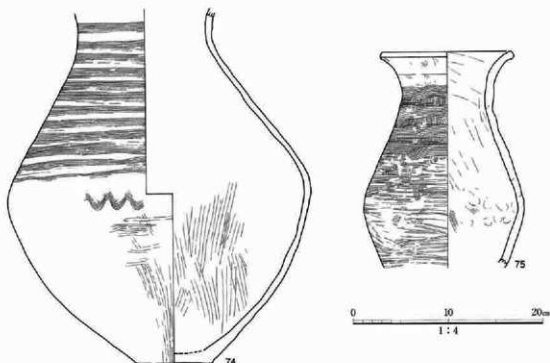


図19 第4層出土遺物

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物(図19、図版25)

74・75は第4層から出土した弥生土器である。74は頸部の中程以上を欠損した壺で、頸部から体部の中程に櫛描直線文を12条と波状文を1条施している。体部の器面調整は外面がヘラミガキで、内面はタテハケである。75は体部の下半以下を欠損した壺で、口縁部は頸部から緩やかに開く。頸部と体部の境は不明瞭で、体部上半に櫛描波状文1条と直線文3条が巡る。74は第Ⅲ様式、75は第Ⅱ様式に属するものである。

ii) 第4層下面検出遺構(図18)

G地点の第4層を除去した段階で土壌を検出したが、明確な輪郭が確認されなかったことから、自然の落込みの可能性もある。埋土は炭・灰が多量に混る黒色シルトで、出土遺物は少量の弥生土器片と木片である。なお、ほかの地点でも遺構かと思われる窪みがあったが、調査範囲が狭小なこともあって、明確にすることができなかった。

(田中)

第5節 MS80-16次調査

1) 調査の経緯と経過

遺跡の西部に当る新森2・3丁目で行われた下水道管の入れ替え工事に伴い、1980年12月16日～1981年1月13日に調査を実施した。調査地は新森中央公園北西のロータリーに接する東西道路である(図20、図版2)。事前に行われたMS80-13・14次調査地点(本章第3・4節)とはほぼ重なる位置にある。



図20 MS80-16次調査箇所位置図

2) 層序

今回の調査地は、従前の下水管埋設工事のため、地層の遺存状況が悪かったが、約20本の枝管部分のうち数地点で弥生時代の遺物包含層を確認することができた(図21、図版2)。

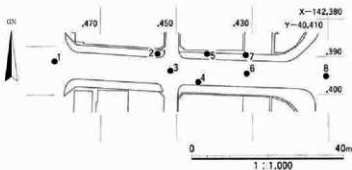


図21 調査地点配置図

基本的な層序は以下の第1～5層で、MS80-13・14次調査地における知見と同様である(図22)。

第1層：黄褐色砂混り粘土層で、江戸時代以降の作土層である。

第2層：灰色粘土層で、江戸時代以降の作土層である。

第3層：暗灰色粘土層で、弥生時代の遺物包含層である。

第4層：暗灰色砂混り粘土層で、弥生時代の遺物包含層である。

第5層：黄灰色粗粒砂層で、遺物は出土しなかった。

第3・4層から、第5地点で第Ⅱ～Ⅲ様式と考えられる弥生土器が出土したが、MS80-13・14次調査地のような多量の遺

物を含む地層は確認できなかった。これらの土器は細片のため図化していない。また、遺構は確認できなかった。(清水)

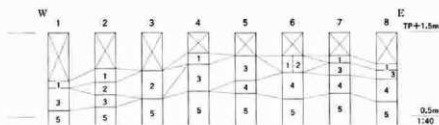


図22 地質柱状図

第6節 MS80-17次調査



図23 MS80-17次調査個所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は遺跡の北西部に当る。ガス管入替え工事に伴う調査のため、おもに各地点の地層観察を行い、遺物が出土した地点は、一部を人力掘削して遺構・遺物の検出に努めた。調査は1981年1月30日～5月30日に行った。

調査区は図23の範囲であるが、本節では、地層の堆積状況が比較的良好であった北側(図24)について記述する。

2) 層序と遺構・遺物

調査地の層序は以下の5層に分けられた(図25)。

第0層：現代の攪乱埋土である。

第1層：黄褐色粗粒砂層で、江戸時代以降の整地層である。

第2層：緑灰色粘土層で、鎌倉時代以降の作土層である。土師器・瓦器・陶器が出土した。

第3層：暗灰色粘土質細粒砂層で、古墳時代の遺物包含層である。古墳時代中期の須恵器・土師器・製塩土器・加工木が出土した。

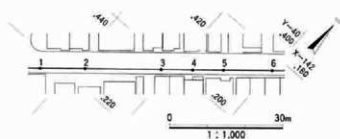


図24 調査地点配置図

第4層：黄灰色粗粒砂層で、遺跡全体で見つかっている弥生時代以前の沖積層である。遺物は出土していない。

第3層が確認できたことから、古墳時代の遺物包含層が遺跡の北西部に広がっていることが明らかとなった。北部の5地点において、第2層上面で幅約10m、深さ1m以上に達する江戸時代以降の溝状となる落込みを確認した以外に遺構はない。(清水)

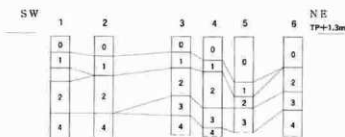


図25 地質柱状図

第7節 MS81-2次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森2・3丁目の東西道路部分で、遺跡西部に位置する(図26)。歩道設置に伴う埋設管工事に伴い、1981年4月15日～7月14日の間、調査を実施した。

当初、調査は当時の遺跡指定範囲内の新森ロータリー西側の東西約70mの区間に予定されていた。ところが、さらに西側に当る歩道部分の工事において、その排土内で弥生～古墳時代にかけての遺物が発見されたため、調査範囲を西に延長し、東西約260mの区間に変更することとなった。しかし、すでに道路北側の歩道部分は工事に着手していたため、延長部分の調査は道路南側の歩道部分と車道部分を対象とし、約20m間隔で深掘りを行い、地層断面の観察と遺構の確認を行った(図版3)。東西に細長いトレンチを設定して平面調査を行った地区を1～4区、それ以西の深掘りトレンチを5～15地点と呼称する(図28)。



図26 MS81-2次調査箇所位置図

2) 層序

上述のように調査方法・精度が全域を通じて同じではないため、平面調査を行った主要調査区の1～4区の層序を中心に報告し、それ以西については柱状図を示すにとどめる。

現地表下1.9mまでの地層を、第0～8層に区分した(図27・28、表3)。各層の特徴は表3に示す。

第0層：現代の整地層および攪乱埋土である。

第1～3層：陶磁器類を含むことから江戸時代以降の地層と考えられる。第1層はSX01～04の埋土として分布する。第2層は上部の青灰色シルト層と下部の灰褐色砂質シルトないし粘土質砂層に区分でき、上部は1区北部でのみ確認された。作土層の可能性がある。第3層はSX05の埋土として1・2・4区に分布する。黒灰～灰色のシルト質砂層で、上半部は褐鉄鉱で汚染される。

第4層：3区東部でのみ確認された水成層で、鎌倉～室町時代の瓦器および土師器を含む。

表3 MS81-2次調査層序表

層序番号	層序概念図	層 相	最大層厚(m)
0		現代整地層・攪乱埋土	
1		暗青灰色含砂シルト質粘土	70
2		青灰色シルト	20
		灰褐色砂質シルト～粘土質砂	15
3		黒灰～灰色シルト質砂	50
4		暗灰～灰色シルト質砂(ラミ+発達)	15
5		黒褐～暗灰色含砂シルト質粘土	25
6		黒灰色シルト質粘土～粘土質シルト	10
7		灰白色シルト質粘土	30
		黒灰色シルト質粘土	30
8		灰白～褐色シルト質粘土・礫(ラミ+発達し、植物遺体含む)	≥140

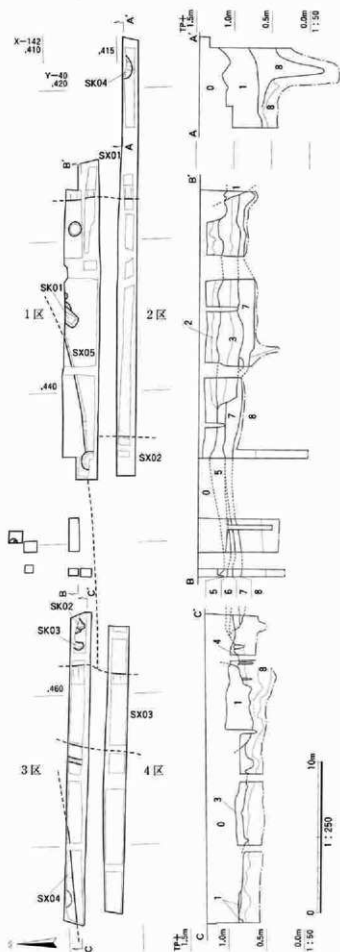


図27 1～4区平面図・地層断面模式図

第5層：黒褐～暗灰色シルト質粘土層で、少量の砂を含む。奈良時代の須恵器・土師器が出土した。

第6層：3区東部のSK02・03の埋土として確認した。第Ⅱ様式を中心とした弥生土器を含む。

第7層：上部の灰白色シルト質粘土と下部の黒灰色シルト質粘土とからなる水成層である。主として1・2区に分布するが、上下の境界は南側へいくにしたがい明瞭になり、各層はさらに細分可能である。4区東部では砂質となる。

第8層：灰白～褐色を呈し、砂質を主体とするが、シルト質粘土から細礫までを含む層相変化の著しい地層である。ラミナの発達がよく、概して上部には細粒物質が多い。調査区全域に分布する。最大層厚140cmまで確認し、下限は未確認である。10地点の本層最上部に相当する黒色シルト質砂層から多くの植物遺体片とともに、第Ⅱ様式の弥生土器多数点が出土した。8地点の本層上部からも同時期の土器片が出土している。

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物(図29)

第3層出土遺物 本来の地層から避難した資料であるが、3区で弥生土器の広口壺77・79が出土した。77は生駒西麓産の胎土で、79は胎土中に赤色粒を多く含む。第Ⅱ～Ⅲ様式に属する。

第5層出土遺物 3区から須恵器杯B86・87、同杯A88、土師器皿A89、同杯A90、甕91が出土した。89・90はともに口縁端部を内側に肥厚させており、杯部に

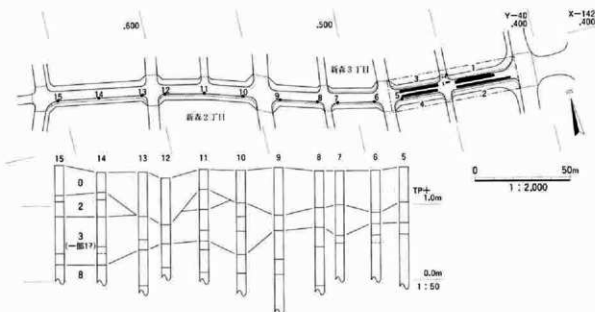


図28 各地点配置図・地質柱状図

は暗文が認められない。平城宮土器Vに属するものであろう。

第6層出土遺物 10地点から弥生土器の甕81・83が、3地点から甕85が出土した。また、1区では第5層と第6層の区分が困難であったが、ここから出土した広口壺76・78も、第6層に伴う可能性がある。78は胎土中に赤色粒を多く含む。78が第Ⅲ様式に属する以外は、第Ⅱ様式のものである。

第8層出土遺物 3区の第8層上部から弥生土器の甕82が、10地点の第8層最上部から甕80・84が出土した。80は体部上半に柳描直線文を2条、口縁端部にキザミメをそれぞれ巡らす。ともに第Ⅱ様式に属する。

ii) 遺構(図27、図版3)

1～4区で、SX01～05、SK01～03を検出した。

SX01～04 第1層を埋土とする、検出面からの深さが0.3～0.5mの落込みである。SX01・02は南北方向に、SX04は東西方向に延びる一辺をそれぞれ検出した。SX03は南北方向に溝状に延び、幅5.0mある。染付磁器やガラス片を含み、時期は近代以降と考えられる。

SX05 第3層を埋土とする、検出面からの深さが0.3～0.4mの落込みである。1区で東西方向に延びる北辺を検出した。埋土の第3層は2区および4区東半にも分布しており、大規模な落込みであったと考えられる。唐津焼が出土しており、時期は江戸時代と考えられる。

SK01 1区で南半分を検出した土壌で、平面は長方形になると思われる。深さは0.4mあり、第5層を埋土とする。奈良時代の須恵器および土師器の破片が出土した。

SK02・03 3区東端で検出した不整形の土壌で、深さは0.1～0.2mあった。第Ⅱ様式に属する弥生土器の破片が出土した。

SK04 2区東端で検出した土壌で、深さは0.8mあった。埋土は粗粒砂混り黒灰色シルト質粘土で、上半はラミナが顕著に見られる(図版3)。第8層内で検出しており、第8層堆積最末期の遺構と考えられる。

(大庭)

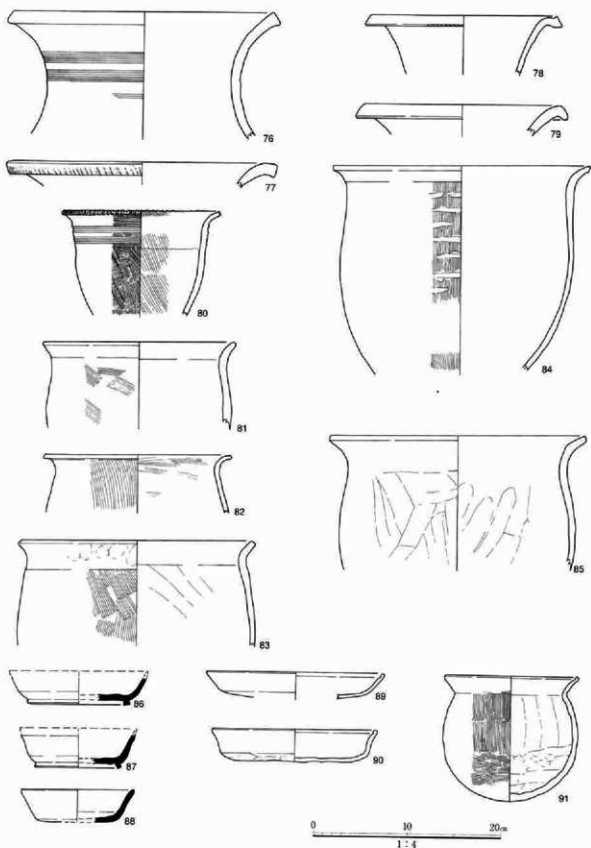


图29 出土遗物

第3层(77·79)、第5层(86~91)、第5~6层(76·78)、第6层(81·83·85)、第8层(80·82·84)

第8節 MS81-13次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は森小路遺跡の南端部に位置している(図30、図版4)。ガス管の入替え工事に伴い、1981年9月1日～11月30日の間、調査を実施した。調査区はA・B・Cの3地区に大別し、B区はさらにB-1～B-3区に区分した。各トレンチの地層観察に主眼をおき、遺物が出土した地点は一部を人力掘削して、遺構・遺物の検出に努めた。総計72個所で地層観察を行った。

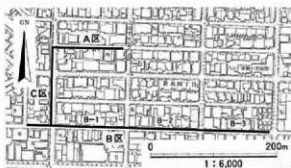


図30 MS81-13次調査箇所位置図

2) 層序

地層を観察した各地点は、既設の水道・ガス管などによって攪乱されており、調査地全体の地層の堆積状況を把握することはできなかった。特にC区は攪乱が著しく、比較的地層が残っていたA・B区について報告する(図31～33)。

本調査地の基本的な層序は以下の第0～9層である。

第0層：現代のアスファルトないし整地層である。

第1層：青灰色粘土混りシルト層で、現代の作土層である。

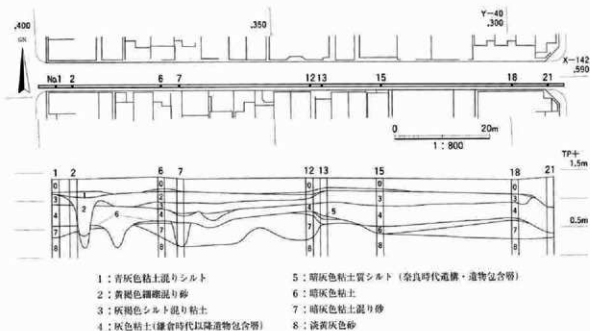
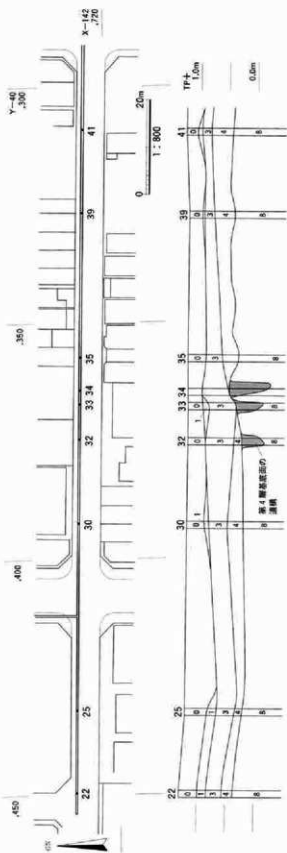
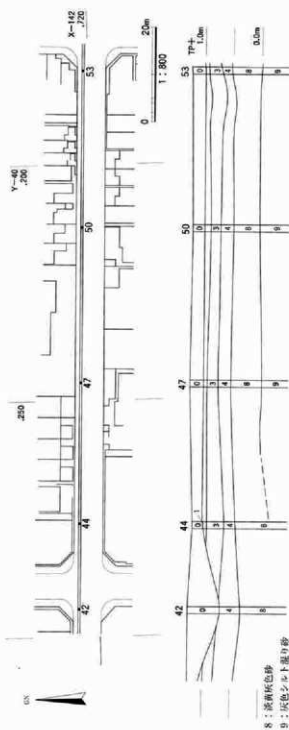


図31 A区各地点配置図・地質柱状図



B-1区



B-2区

図32 B-1・2区各地点配置図・地質柱状図

- 1 : 青灰色粘土混りシルト
 2 : 灰褐色シルト混り粘土
 3 : 灰褐色シルト混り粘土
 4 : 灰褐色土(中層は砂層部を含む)
 5 : 灰褐色シルト混り砂
 6 : 灰褐色シルト混り砂
 7 : 灰褐色シルト混り砂
 8 : 灰褐色シルト混り砂
 9 : 灰褐色シルト混り砂

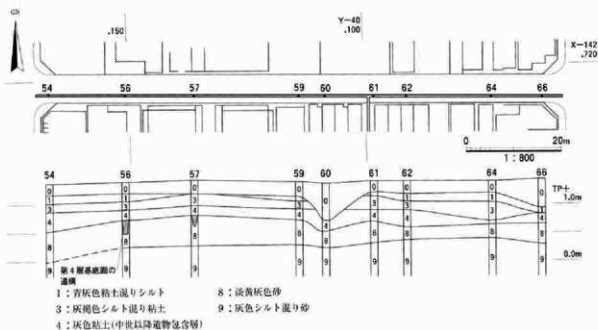


図33 B-3区各地点配置図・地質柱状図

第2層：黄褐色細礫混り砂層で、江戸時代の作土層である。

第3層：灰褐色シルト混り粘土層で、江戸時代の作土層である。

第4層：灰色粘土層で、鎌倉時代以降の遺物包含層である。

第5層：暗灰色粘土質シルト層で、奈良時代の遺構埋土ないし遺物包含層である。

第6層：暗灰色粘土層で、遺物が出土しなかったため時期不詳であるが、古墳時代以前の地層に対応する可能性がある。

第7層：暗灰色粘土混り砂層で、遺物が出土しなかったため時期不詳であるが、弥生時代の地層に対応する可能性がある。

第8層：淡黄灰色砂層の水成層で、遺跡全体で確認されている弥生時代以前の沖積層である。第9層とは一連の堆積物である。

第9層：灰色シルト混り砂層の水成層で、上位の第8層と一連の堆積物である。

A区では、第0～8層までの地層が確認された(図31)。第8層上面をはじめ、各層の境界面には凹凸が見られるが、自然地形の影響か、遺構が存在するためかは不明である(図版4)。

B区では、A区で堆積している第2・5～7層が欠落し、一方で第8層の下位に第9層が認められた。A区と違い各層の境界面は凹凸が少なく、ほぼ水平に堆

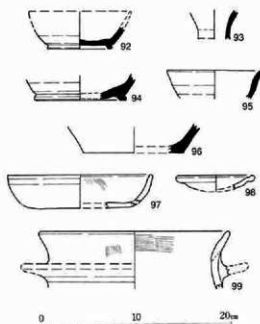


図34 出土遺物

13地点(92・93・95～97・99)、32地点(94・98)

積している(図32・33)。

3) 遺構と遺物

A区では、第4層の基底面で、暗灰色砂混り粘土を埋土とする溝状の遺構が7地点で検出されたが、遺物は出土していない。奈良時代の遺物包含層である第5層からは、13地点で奈良時代の須恵器・土師器が多量に出土した(図34)。多くは細片であるが須恵器の杯・壺、土師器の杯・甕・羽釜がある。92・95は須恵器杯である。93は須恵器の小型の壺と考えられる。96は須恵器壺である。97は土師器杯Cで、暗文はないが、ほかに螺旋状の暗文を施文した細片が存在する。99は土師器羽釜である。これらは8世紀代のものであろう。

平安時代以降の遺物は第1～4層に含まれており、いずれも磨滅した細片がわずかに出土した。特に第4層は瓦器が主体である。

B区もA区と同様な遺物の出土状況であるが、量は少ない(図34)。第4層基底面で暗灰色粘土を埋土とする溝状の遺構が5条あり、32地点では土師器小皿98が1点出土した。口縁部が「て」の字となり、平安京Ⅲに属するものである[古代の土器研究会1993]。第4層内からは奈良時代の須恵器壺の底部片94が1点出土した。

本調査地では遺跡中心部に分布している弥生・古墳時代の遺物包含層は確認されなかったものの、奈良時代以降の遺物包含層が確認された。これらの遺物包含層の調査例として新森中央公園の北西100mのMS80-6次調査地[大阪市文化財協会1981a]や、南東200mのMS80-18次調査[大阪市文化財協会1981b]でも同様の地層が検出されており、古代以降の森小路遺跡の様相を示している。(清水)

第9節 MS81-15次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森中央公園の東側を起点とする南北道路である。調査原因である土木工事の対象となった区間は、遺跡の中心付近から南限付近まで、南北にまっすぐ延びている。そのため、南北方向での地層の堆積状況を調査し、遺跡の南限付近の様相を確認することがおもな目的となった。

1981年10月13日～1982年3月31日の間、調査を実施した。道路工事の工程に合わせて2街区分を1ブロックとし、調査地を北からⅠ～Ⅳ区までの4区に分けた(図35・36)。各ブロックで下水管・街灯・ガス管などの埋設工事や植樹帯の設置工事が行われ、それらに伴って調査を実施した(写真1)。その結果、後述するとおり、調査地の南半では弥生時代の遺物包含層が後世の地層で削平されていることが判明した。報告では、各区のうち、地層の堆積状況が比較的良好な個所を提示している。



図35 MS81-15次調査個所
位置図

2) 層序

調査地の層序は、基本的に以下の10層に区分できる。

第0層：表土層

第1層：暗青灰色シルト質細粒砂層

第2層：灰褐色粘土質シルト層

第3層：暗灰色シルト質粘土層(水田作土層)

第4層：灰黄色シルト混り砂層

第5層：黒色含炭化物砂質シルト層

第6層：黒灰色砂質シルト層

第7層：暗褐色含有機物粘土質シルト層

第8層：黒～灰色粘土層

第9層：灰色砂層

Ⅰ区とそれ以南のⅡ～Ⅳ区では地層の堆積状況が異なり、第0～3層と第9層が共通するほかは、弥生時代の遺物包含層ないし遺構埋土である第5～7層がⅠ区にのみ認められた。

i) Ⅰ区

Ⅰ区の層序は第0～3・5～9層である(図



写真1 MS81-15次Ⅰ区調査風景

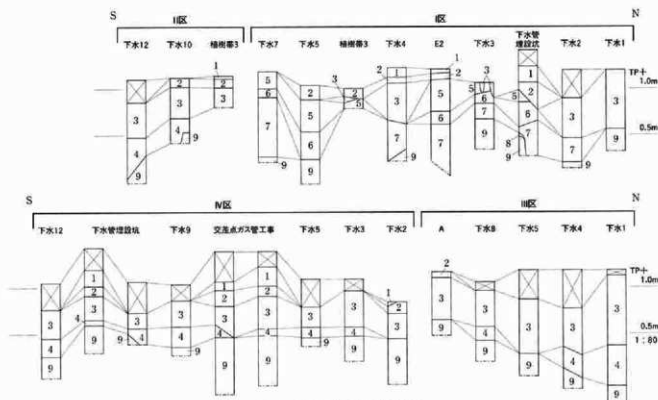


図37 各区調査地点地質柱状図

37、図版5)。

第1層は陶磁器・瓦を含む江戸時代以降の作土層である。基底面に南北方向の浅い溝状の落込みが見られ、耕作に係わるものと考えられる。

第2層は江戸時代の遺物包含層で、土師器・陶磁器が出土している。

第3層は水田作土層と考えられ、I区南部を除き、調査地全域に分布している。深いところではTP+0.5m付近にまで達する厚い粘土層である。出土遺物は瓦器がほとんどであるが、その量は少ない。

第5層は炭化物を含む。この層の上で小穴が検出されるが、調査面積が狭いため、その性格は不明である。出土遺物は第Ⅲ～Ⅳ様式の弥生土器などである。

第6層は場所によって色調・層相に変化が見られるが、第5層の黑色含炭化物砂質シルト層と第8層の黑色粘土層の間に挟在する地層として把握することができる。出土遺物は第Ⅱ～Ⅲ様式の弥生土器である。

第7層は第8・9層を切った落込み内に堆積し、有機物を多く含む層で、弥生時代の遺構埋土と考えられる。

第8層は黑色粘土層と灰色粘土層と上下2層に分けられる。両者の境界は漸移的である。遺物は出土しておらず、第9層の砂層と一連の堆積物の可能性がある。

第9層は弥生時代以前に淀川の沖積作用によって堆積した地層で、遺物を含まない。

ii) II～IV区

基本的な層序は第0～4・9層であり、弥生時代の遺物包含層は認められない(図37)。これは第3層である水田作土層によって、弥生時代の地層が削平されたためと考えられる。ただし第4層とした

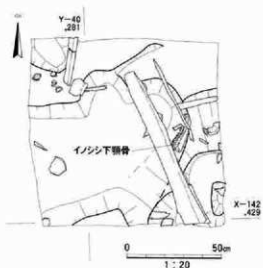


図38 I区下水2地点平面図

I区に集中しており、第5～7層の各層内から掘込まれたと考えられる遺構が多数確認された。しかし、地層断面の観察にとどまったものが多く、溝・土壇・小穴が存在するものの詳細については不明である。

I区北部の下水2地点では、遺構と思われる第7層を埋土とする複雑な形状の落込みが存在した(図38)。弥生時代の遺物が多量に出土しており、土器には壺119・無頸壺105・甕106・蓋118などがある(図41、図版26)。119は口縁部を欠失しているが、頸部から体部上半にかけて4条の櫛描直線文が施されている。櫛描文はさらに1条が上位に施された痕跡を認めるが、施文ののち、磨り消されている。体部外面の調整はタテハケののち、下半に横方向のヘラミガキを施している。105は細片のため、土器の傾きはさらに内傾する可能性がある。口縁部直下から櫛描直線文が施されている。106は口縁部が緩やかに外反し、体部内外面にはヘラミガキが施されている。これらは第II様式に属する。ほかに、加工木・イノシシの上・下顎骨・鳥類の大腿骨が出土している(写真2)。イノシシまたはブタの可能性もある(第III章第2節)。また、第3層以上の作土層から、同時期の甕110が出土している(図版32)。胎土中に結晶片岩粒を多く含むことから紀伊からの搬入品と考えられる。

I区南端の下水6・植樹帯5地点でも第7層を埋土とする小型の土壇ないし小穴が多数検出された(図39、図版5)。土壇あるいは小穴と思われるものはトレンチの中央付近に2基あり、平面形は長径0.7m弱の楕円形で、深さは0.2m以内である。そのほかの小穴は、直径0.3～0.15m、深さ0.3～0.1mの各種があり、トレンチ西側のものは南北方向に一直線に並ぶ。これらは建物や柵を構成した柱穴の可能性が高い。これらからは、弥生時代中期の土器が出土したが、細片のため図化していない。



写真2 I区下水2地点加工木・獣骨出土状況

灰黄色シルト混り砂層からは弥生土器104が出土しており(図41、図版5)、弥生～古墳時代の遺物包含層に相当する可能性もある(図版5)。104は口縁端部を下方へ拡張させ、綾杉文の後に円形浮文を施している。頸部と体部の屈曲部に2条の櫛描直線文があり、体部上半は櫛描直線文で区画して、その間を斜格子文で埋めている。体部下半に直径3cm弱の穿孔がある。第IV様式に属する。

3) 遺構と遺物

i) 弥生時代

I区南部の植樹帯4地点では、第5層内から

掘込まれた溝または土坑・小穴を多数確認した(図40)。トレンチの北端に位置する落込みは、溝または土坑と考えられるが、ほぼ同位置を江戸時代の第2層を埋土とする遺構で壊されているため、深さは判明しない。その南側では、長径0.3m以内、深さ0.2m以内の平面形が楕円形となる小穴と、ごく小型の直径0.1m前後、深さ数cmの小穴が集中して見つかっている。前者については建物や櫓などの目的で設けられたものの可能性もあるが、性格を明らかにすることはできなかった。遺物は弥生時代中期の土器片が出土しているが、細片のため図化していない。

そのほかの遺物もⅠ区のものを図示した(図41、図版32・33)。120・

121は弥生時代の土製品、ほかは弥生土器である。出土層準は103・107・108・113・115が第1～3層、101・111が第5層、ほかは第7層である。

弥生土器のうち、100～103・108・109は壺である。100は大型の壺で、口縁端部はやや肥厚させ、端面をナデで凹ませている。頸部はナデしている。101は口縁端部に櫛波状文を施し、頸部にも櫛描直線文を施している。102は体部を斜め方向のハケで調整した後、上半部に7条以上の櫛描直線文を、下半部にヘラミガキを施したものである。103は口縁端部をわずかに肥厚させている。108は体部下半をヘラミガキで調整し、上半は櫛描直線文と波状文を交互に施文している。109は口縁部が直口する壺で、体部上半に櫛描直線文・波状文を施している。100～102は第Ⅱ様式、103・108・109は第Ⅲ様式に属する。

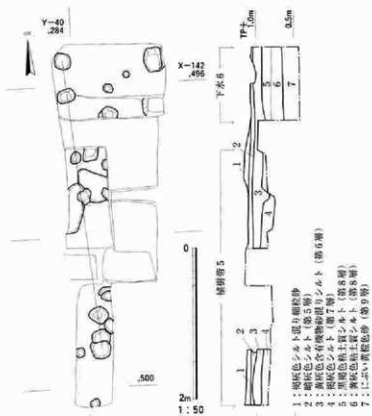


図39 Ⅰ区下水6・植樹帯5地点平面図・西壁断面図

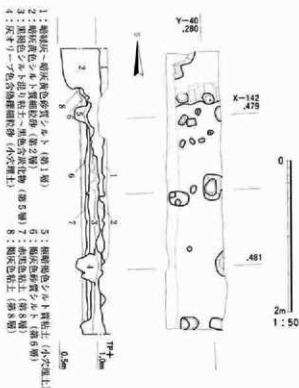


図40 Ⅰ区植樹帯4地点平面図・東壁断面図

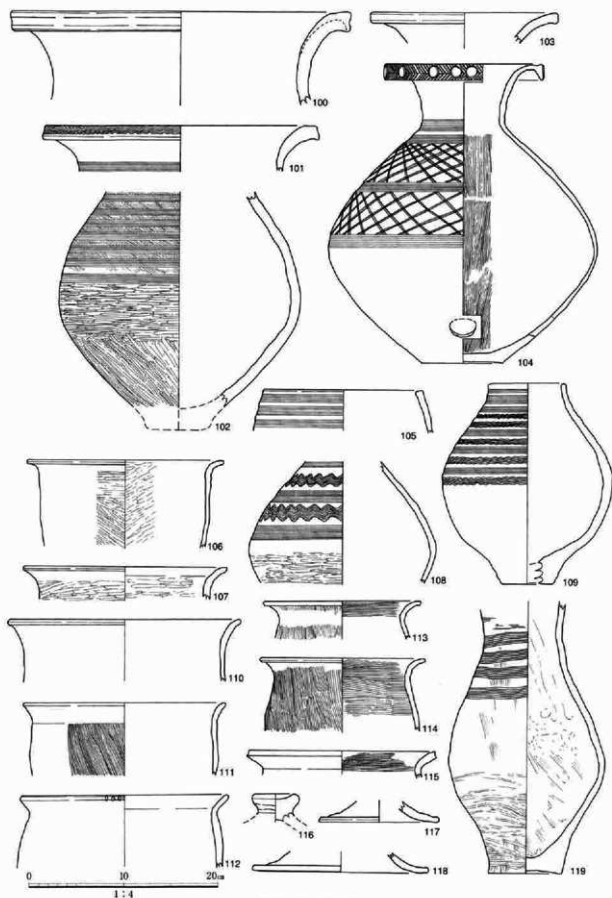


図41 出土遺物(1)

層単：第7層(100・102・105・106・109・112・114・116～119)、第5層(101・111)、第4層(104)、第1～3(103・107・108・110・113・115)
 地層：街灯1(114)、下水2(105・106・110・118・119)、下水3(101)、下水4(102・113・116・117)、下水5(107・108・115)、下水7(109・112)、
 下水管理施設(100・111)、車道部分(103・104) ※104のみⅡ区、ほかはⅠ区

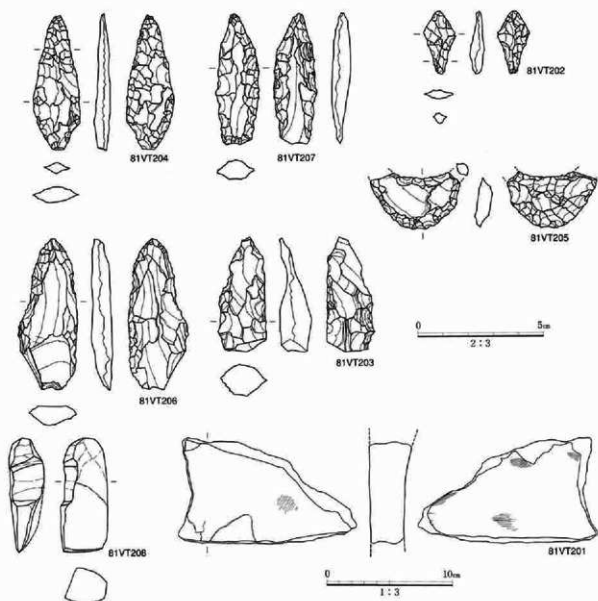


図42 出土遺物(2)
第7層(81VT208)、その他(81VT201~207)

107・110~115は甕である。107・111は口縁部を緩く外反させたもので、第Ⅱ様式に属する。113・114は口縁部を緩やかに折り曲げており、口縁部ないし体部にかけて内面にハケを施す特徴をもつ。112は口縁端部にキザミメを施している。これらは第Ⅱ様式に属する。115は口縁端部に面をもち、内面にハケを施す特徴がある。第Ⅲ様式に属する。116・117は蓋で、第Ⅱ様式に属するものである。106は生駒西麓産の胎土である。土製品には土器片を再利用した円板状土製品が2点ある(図版33)。120が甕の破片を、121が甕の破片を再利用して中央付近に穿孔したものである。

石器は8点を図示した(図42、図版38・39)。サヌカイト製の石鏃・尖頭器・石錐・両面加工石器のほか、砂岩製の磨製石斧・砥石などが出土している。これらの石器は磨製石斧がI区下水6地点・植樹帯5地点の第7層から出土した以外は遊離資料である。石鏃は凸基有茎式の81VT204と凸基無茎式の81VT207がある。後者は基部が未完成であると判断したが、尖端部が厚く、図とは上下が逆転し

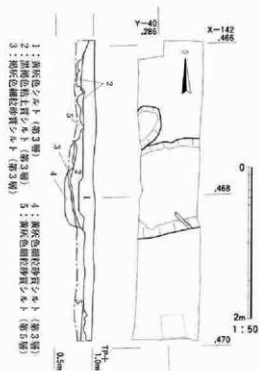


図43 I区植樹帯3地点平面図・東壁断面図

らかにし得なかったが、埋土は第3層の水田作土層であり、耕作に伴うものであろう。遺物は出土していない。

(清水)

で石錐になる可能性もある。81VT203・206は尖頭器と考えられる。前者は欠失のため全体形が不明で断定できず、石錐の可能性もある。後者は横形剥片に細部調整を加えたものである。素材の側縁の一方が尖るように整形されているため、尖頭器と考えられるが、全体に調整は不十分である。81VT202は小型の石錐である。平面形は菱形に近く、下部は使用痕によって側縁が摩耗している。81VT205は剥片を素材とし、平面形が舌状となる両面加工石器の一種である。81VT208は磨製石斧で、太型蛤刃石斧の欠損品を、破断面の先端を研いで再利用したものであろう。一方の側面に幅4cm程度の挟りがあるが、破断面ができる以前に作られていたものである。また、砥石の破片81VT201がある。

ii) 鎌倉時代以降

I区植樹帯第3地点で検出された溝・土城と思われる遺構がある(図43)。調査面積が狭いため、その性格は明

第10節 MS81-17次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森4丁目22の新森中央公園内にある(図44、図版6)。公園内の集水溝および管渠埋設に先立ち、1981年11月4日～1982年1月30日の間、調査を実施した。

公園内北部および南西部に幅約1mの細長いトレンチを設定し、原則として集水溝部分で現地地表下1.1m、管渠部分で現地地表下0.7mの工事敷までを掘削した。小規模な遺構については基底まで検出した。掘削方法はすべて人力による層位掘りを行い、遺構・遺物の検出に努めた。なお、C-2区のTP-2.8～4.6mの地層は、ハンドオーガーにより採取した堆積物に基づいて記載した。

公園内北部をA・B区、南西部をC区とし、さらに各区を図44のように呼び分ける。

2) 層序

第0～11層に区分した(図45・46)。

第0層：現代の整地層および攪乱の埋土である。

第1層：含細礫灰褐色砂質シルト層で、層厚は10～20cmある。B-5区では下面で南北方向の溝が、C区では下面で耕作痕が認められた。作土層である。

第2～4層はB・C区の全域、およびA区の東半に分布し、下位層を切る落込み(SX01～03)の堆積層である。第2・3層は蓮根田として利用されたこともあったと推定される作土層であり、第4層

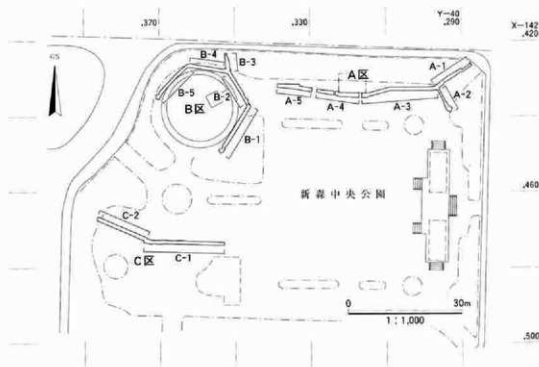


図44 MS81-17次調査箇所位置図

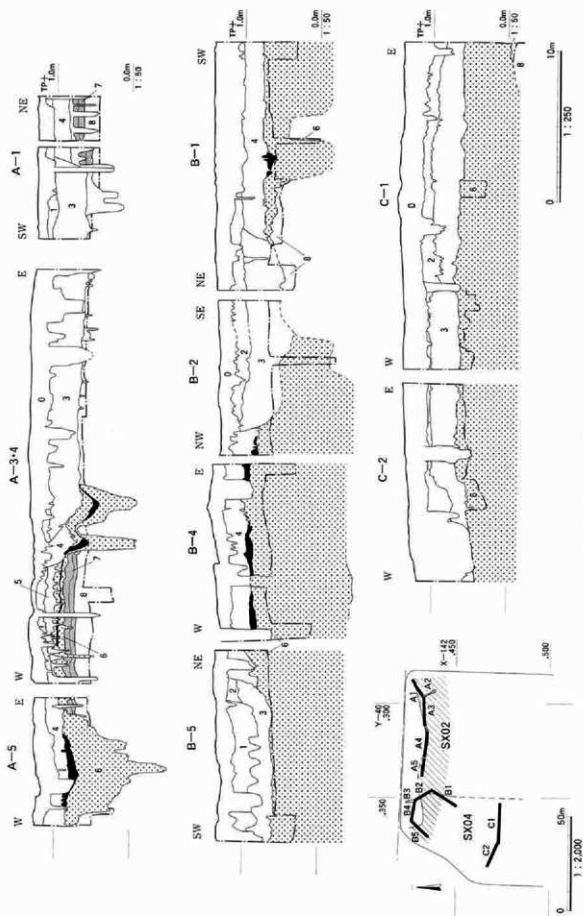


图45 A~C区地槽断面模式图

も作土であった可能性がある。各層が形成された時期については、出土遺物の数が少なく、かつ磨滅が進んでいるものが多いため不確実であるが、古墳時代以降である。

第2層：第3層の上位にあるSX01内に分布する作土層である。含細礫暗灰色砂質粘土層で、層厚は50～60cmある。上部は灰色シルト、黒色シルト質粘土などからなる偽礫を含み、上面付近は褐鉄鉱で汚染されている。下部は上部より泥質である。江戸時代の陶磁器を含む。

第3層：A-1～3区・B-1・2・5区のSX02内に分布する作土層である。含細礫暗灰色砂質粘土層で、分布域周辺で灰色シルト、暗灰色シルト質砂などからなる偽礫を含む。層厚は20～40cmある。鎌倉～室町時代の瓦器を含む。

第4層：A・B区のSX03を埋める含砂暗灰褐色シルト質粘土層で、層厚は20～40cmある。第5層が分布するA区西半では層厚10cmと薄くなり、黒灰色を呈し多量の砂粒を含む。須恵器・土師器を含む。

第5層：第6層の上部が攪乱された古土壌であり、A区に分布する。含細礫黒灰色シルト質砂で、層厚は10cm前後ある。淘汰は悪く、上面付近は褐鉄鉱で汚染される。本層の上面および本層内から掘込まれた小穴を多数検出した。弥生時代中期の土器片を含む。

第6層：B・C区全域に分布する落込み(SX04)を埋積し、A区に分布する第7層を薄く覆う、礫・砂・シルト・粘土からなる層相変化の著しい堆積層である。A区では第Ⅱ～Ⅲ様式の弥生土器を多く含む。調査深度の制約により本層の大部分が未調査であり、地層区分に要するデータ不十分であるが、岩相上、第6a～6e層に区別される。最大層厚は145cmである。

第6a層は、C-2区西端のTP+0.45m以上に分布する黒色粘土層である。

第6b層は、灰色から暗灰色を呈する砂質シルト～粘土質シルト層である。C区の東半では第6c層の一部に漸移する。

第6c層は、B・C区の全域で確認された黒灰色から暗灰色を呈するシルト質砂層である。斜交葉理の発達が顕著で、植物遺体を多量に含み2枚以上の植物遺体薄層を挟在する。

第6d層は、黒灰色から暗灰色を呈する砂質粘土～シルト質砂層である。第6c層の下位層であり、これと類似するが、概して泥質である。基底には多量の中礫を含む。

第7層：上部の黒色粘土と下部の灰色から褐色を呈するシルト質粘土からなる。両者は漸移関係にある。A区に10～15cmの厚さで残存しており、上面の高さはTP+0.7m前後である。本層の上

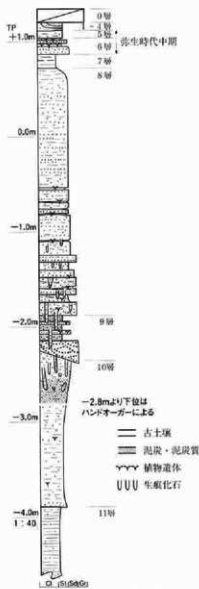


図46 C-2区地質柱状図

面で溝や流路を検出した。第Ⅱ様式の弥生土器を少量含む。

第8層：上部のややシルト質の黄灰色中粒～粗粒砂層と、下部の粗粒砂を主体とする暗黄灰色砂層からなる。上部は比較的淘汰がよく、下部は斜交葉理の発達が顕著である。本層の下半部には径数mm～2cmの果穴の化石が認められる。第5層の下位に良好に残存しており、C区で確認した本層基底の高さから推定して、最大層厚は2.6mに及ぶ。

第9層：植物遺体を多く含む暗灰色細粒砂層と泥炭質シルト質砂層の互層で、層厚は0.5mあった。上面の高さはTP-1.6～2.0mである。本章13節で報告するMS83-1次調査地や、MS81-1次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983]では、本層に相当する層準で径2～3cmの果穴の化石が多数認められた。

第10層：暗青灰色細粒砂質シルト層で、上方へ粗粒化する。層厚は約1.4mあった。少なくとも本層の上半部には径2～3cmの果穴の化石が多数認められる。上面の高さはTP-1.9～2.5mである。

第11層：暗緑灰色砂質粘土層で、層厚は0.8m以上ある。上位層に比べてきわめてしみがよい。海成粘土層であると推定される。上面の高さはTP-3.9m前後である。

3) 遺構と遺物

A区では弥生時代の遺物を包含する第5～7層の大部分がSX02により削平されていたが、これらの地層が残存する範囲では、流路・溝・落込み・小穴などを検出した。また、B・C区では第6層で埋め大規模な落込みが広がっていた。以下では弥生時代の遺構・遺物を報告する(図47・48、図版6・40)。

NR01 A-5区で検出した、埋土が第6層の南北方向の流路である。幅6～7m、深さ約1.3mで、断面は緩やかな傾斜をなすが、中央の幅0.6mほどは急激に落込んでおり、流水で抉られたことが断面観察からわかる。上半は水成の比較的細粒な堆積物で埋っており、最上部には黒色粘土が堆積している(図47)。

埋土から広口壺122、甕126、鉢129といった弥生土器、および打製石鏃81VU203が出土した。122は口縁端部が強いヨコナデによって凹んでいる。126の調整は体部外面がタテハケのちヘラミガキで、口縁部内面がヨコハケであり、色調は黄灰色である。129は大型の鉢で、口縁部より少し下がった位置に断面三角形の突帯を貼付け、突帯の上位に櫛波状文を、下位に直線文および波状文を巡らす。122・129は第Ⅲ様式、126は第Ⅱ～Ⅲ様式に属するものである。81VU203はいわゆる木葉形の凸基無蓋式石鏃である。

SD01 A-4区東端で検出した、埋土が第6層の南北方向の溝である。幅1.2m、深さ0.9mあり、断面は逆台形である。炭化物を多量に含む、黒色のシルト質砂～砂質シルトで比較的短期間に埋まっている(図47、図版6)。

埋土中から甕124・127などの弥生土器、打製石器81VU202が出土した。124はハケ原体によって口縁端部にキザミメを施し、口縁部内面はヨコハケ調整のち、ハケ原体によって液状文を巡らす。近江・山城系の甕である。127は胎土中に結晶片岩粒を多く含む紀伊産の甕で、器形がほぼわかる個体

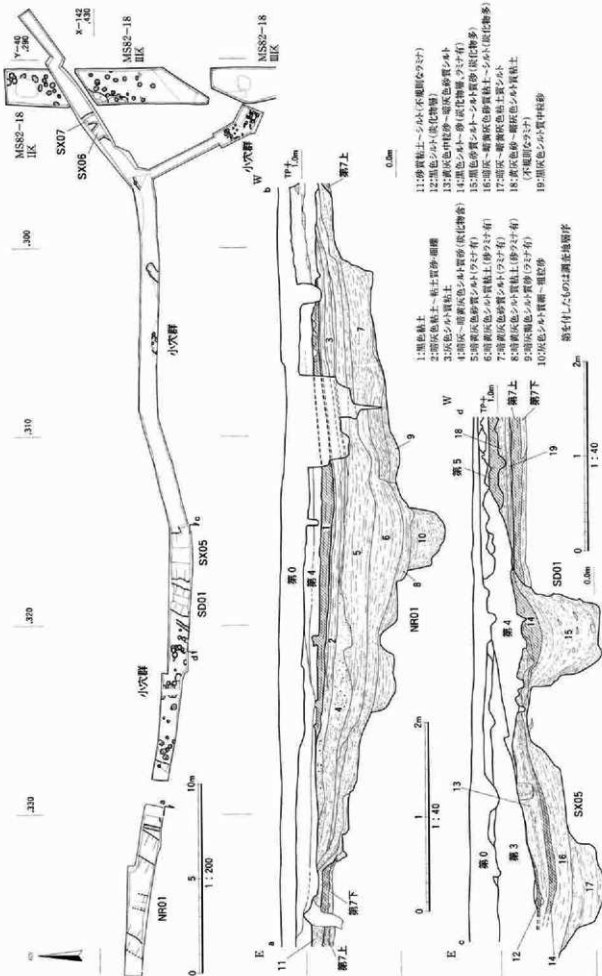


図47 A区平面図・遺構部分地層断面図

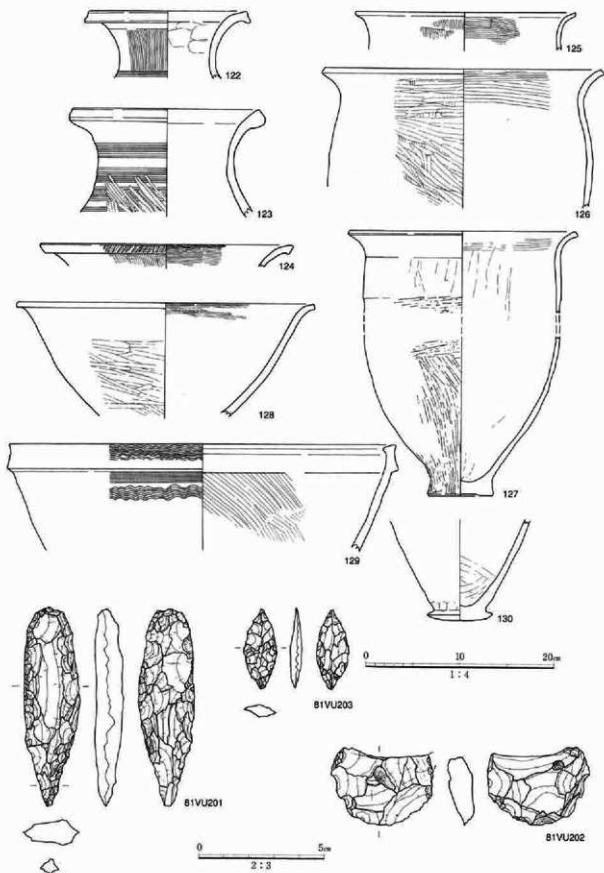


图48 出土遗物

NR01(122 · 126 · 129 · 81VU203), SD01(124 · 127 · 81VU202), SX04(123), SX05(125 · 128 · 130 · 81VU201)

である。体部上半から口縁部にかけては、横あるいは縦方向のナデ調整で、底部から体部中程にかけて縦方向のヘラケズリを施したあと、体部中位に横方向にヘラケズリを施し、その上端が痕跡程度に屈曲する。口縁部は緩やかに外反し、端部はヨコナデにより面をもつ。これらは第Ⅱ様式に属し、同時に出土したほかの土器片もほぼ同時期のものである。

81VU202はサスカイト製で、平面形は81VT205に似る(本章第9節)。図下部は背面・主要剥離面の両面から調整が施されている。図の上部は折れ面であるが、右図右上の小さな剥離面はそれを切っているため、現状で目的とする製品の形状と考えられる。表面中央に自然面が残っている。

SX04 B・C区に広がる大規模な落込みで、B-1区とB-2区の境界付近に東肩が存在するものと思われる。第6層で埋っており、深さは最大で1.3mほどある。B-1区の第6層上部付近から弥生土器の広口壺123が出土した。123は頸部から体部にかけて櫛描直線文を4条以上施すが、最上部以外は上からヘラミガキを施すことによって消えている。生駒西麓産の胎土である。123は第Ⅱ様式に属する。

SX05 SD01の東隣で検出した南北方向の落込み状の遺構である。SD01と平行する溝の可能性もあるが、東肩が削平されており、不明である。埋土の下半は粘土質シルト、上半は中粒砂〜シルトで、上半には炭化物を多く含む薄層が2枚見られる(図47)。

埋土中から第Ⅱ様式に属する弥生土器壺125・130、鉢128、打製尖頭器81VU201、およびウリ科の種子が1点出土した。81VU201は剥片を素材とする尖頭器としたが、石錐の可能性もある。石錐としたばあいは図の下部が頸部になろうが使用痕は認められない。

SX06・07 A-1区東端で検出した埋土が第6層の落込みである。深さは0.4〜0.5mあった。埋土から第Ⅱ〜Ⅲ様式の弥生土器片が出土した。

小穴群 A-2・4区で小穴を多数検出した。第5層上面および第5層内検出遺構である。調査範囲が狭いため確定できないが、建物を構成する柱穴に含まれているものと考えられる。A-1区の壁面でも同一層準から掘込まれた小穴が確認されており、これらはA区全域に広がっていた可能性が高い。小穴の埋土から出土する遺物は弥生時代中期の土器片に限られており、この時代の遺構と判断できる。(大庭・趙)

4) 森小路遺跡の成り立ちについて

河内平野をつくる沖積層は、最終氷期の最寒冷期より後に堆積した地層であり、難波累層と呼ばれる。一般に標識的な岩相をもって下部砂泥互層、中部海成粘土層(Ma13海成粘土層)、上部砂層と呼ばれている[那須孝徳1987]。また、上部砂層は泥層を挟んで多くのところで2分され、大阪市域でも上部層・最上部層としている[大阪市文化財協会2001]。大阪平野の地下でみられる難波累層の下部層は、古深野沼をはじめとする低位段丘面の窪地に堆積した陸水成層であり、平野縁部で扇状地成〜沼沢地成の堆積層としてしばしば認められるほか、古大阪平野を流れ下った諸河川の河成堆積層として分布する。しかし、更新世を通して近江・京都などの盆地の排水路であった淀川流域では、砂礫の供給量が多く、下位の低位段丘礫層との識別は容易ではない。

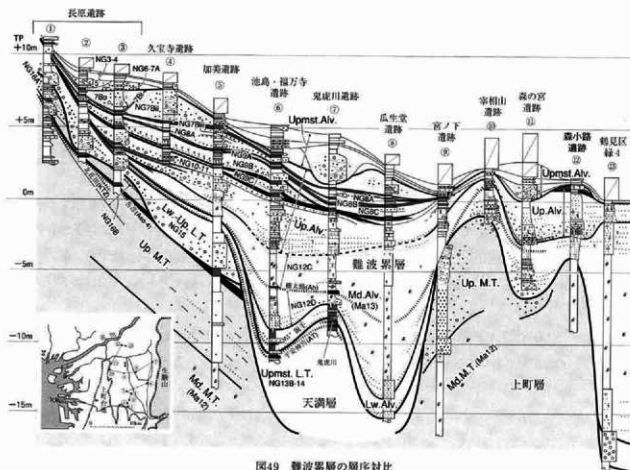


図49 難波群の層対比

M.T.; 中位段丘構成層(上町層), L.T.; 低位段丘構成層(天満層), Alv.; 沖積層(難波層), Lw.; 下部, Md.; 中部, Up.; 上部, Upst.; 最上部, 北花田(KTZ)・香彦(Aso-4)・平安神宮(AT)・阪手・横大路(Ah); 火山灰層名, NG15層; 長原遺跡標準層序15層(はか河様), 各柱状図は[道2000], [赤本1987], [那須ほか1980・1984], [別所1996], [東大阪市文化財協会1998]の各記載, および使用許可を得た(財)八尾市文化財調査研究会の未公表資料の記載, ほかもとにして作成した。各柱状図の中程にある不連続の部分から下位は, 最寄りのボーリング資料[土質工学会関西支部ほか1987]による。

河内平野の入り口にあたる現淀川の河口付近では, 1万年前より少し後に中部層の堆積が始まっている[梶山・市原1986]。海成粘土層は淀川流域および旧大和川流域の河内平野中央部の沖積層基底面深度が深い地域に発達し[土質工学会関西支部ほか1987], 海成砂層は主として中部層の下部層準および平野縁辺部に発達する(図49)。中部海成層の最拡大域は横大路火山灰層(K-Ah火山灰; 約6,300年前)の上位にあり, 平野南縁の長原遺跡の北部まで分布する。

難波層の上部砂層の堆積は, 平野縁辺部では縄文時代中期初頃ごろのおよそ5,000年前に始まると考えている[大阪市文化財協会2001]。平野南縁の長原遺跡から加美遺跡までは長原12A-B層の粗粒部(図49-③~⑤)がこれに当り, 上町台地の東斜面, 河内平野西縁にある森の宮遺跡や幸相山遺跡では顕著な不連続面を覆う砂礫層が認められている。この砂礫層の上位は再び泥質になり, 干潟堆積層が認められる(図49-⑩・⑪)。このような上部砂層の堆積サイクルは, 平野東部の池島・福万寺遺跡でいわれている海水準の低下・上昇現象[別所秀高2000]に呼応するものと考えられる。しかし, 鬼成川遺跡や平野中央部の瓜生堂遺跡, 宮ノ下遺跡では粗粒堆積層の発達は貧弱で, 砂泥かなる溺成

層が連続して発達している(図49-⑦～⑨)。

平野中央部の遺跡を見ると、多くは縄文時代晩期以降に遺跡が成立している。宮ノ下遺跡は縄文時代晩期、瓜生堂遺跡は弥生時代前期(あるいは縄文時代晩期)、高井田遺跡(図49のa)は弥生時代前期からである。いずれの遺跡も遺構群を構成する遺物包含層の下位に海成層がある。この年代は長原遺跡の長原9Ci-9B層の堆積年代に当る[大阪市文化財協会2001]。

さて、現淀川左岸から南へ2km足らずの距離にある森小路遺跡の地層をみることにしよう(図46・49-⑫)。本調査地の第11層は粘土層でありながら上位層に比べてしまりがよく、上位層とは不連続の地層と考えられる。森小路遺跡付近は中位段丘構成層が沖積面下の比較的浅いところに分布しており[土質工学会関西支部ほか1987、趙1994]、TP-3.9mという第11層の上面高度とは矛盾しない。したがって、本調査地の第11層は中位段丘構成層中部のMa12海成粘土層であり、第10層との不連続面は沖積層と低位段丘構成層との不整合面だと考えられる。

森小路遺跡から東へ約1kmにある鶴見区緑4丁目(図49-⑬)では、中部海成粘土層は約13mの層厚があるが、中位段丘構成層が高く分布する森小路遺跡では、海成粘土は分布せず、上方粗粒化する砂泥からなる第10層が中位段丘を覆っている。第10層はカニのものとみられる巣穴の化石によって擾乱され、堆積構造は判読できていない。このような岩相は干潟の堆積層によく見られる。第10層は、当時の内湾北部に前進しつつあった淀川の、デルタの周辺にできた干潟の堆積層であろう。

この第10層を削削して堆積した第9層は、植物遺体を多く含む泥炭質シルト層と斜交葉理が発達した砂層の互層であり、ここにも巣穴化石が密集して分布している。デルタ面にできた湿地に堆積した地層とみられる。この第9層基底の削削面は、森の宮遺跡(図49-⑪)の上部砂層基底の侵食面に連続するとみられることから、縄文時代中期初頭ごろにはじまった海退期(上部砂層堆積期)の現象だと考えられる。

その上位の第8層の下部にも小さな巣穴化石が認められるが、上方では植物片の含有量が減少するとともに、しだいに不鮮明な平行ラミナ構造のあるややシルト質の粗粒～中粒砂となる。河口州や河口付近の自然堤防堆積層を推定することができる。

第7層は湿地に堆積した泥層であり、のちに干上がって、弥生時代中期以降の人がとが生活した第7層上部の古土壌が生成されている。第8～7層の堆積時期は、縄文時代後～晩期と考えられる。

以上概観してきたように、淀川下流域にある森小路遺跡は、基盤の分布が高かったことや淀川からの堆積物の供給が多かったことにより、中部海成粘土層の堆積期のかかなりの期間が汽水域であったと考えられる。汽水環境は上部砂層の堆積が始まった縄文時代中期になっても続いたが、縄文晩期ごろには離水していたようである。淀川下流域と旧大和川流域との違いはあるが、旧大和川流域にある平野中央部の諸遺跡とよく似た時期に遺跡の成立条件が整ったといえる。なお、中位段丘構成層の分布高度からは、森小路遺跡の中部海成層の下には、縄文時代早期以前の遺構・遺物が遺存している可能性が示唆される。

(趙)

第11節 MS82-8次調査

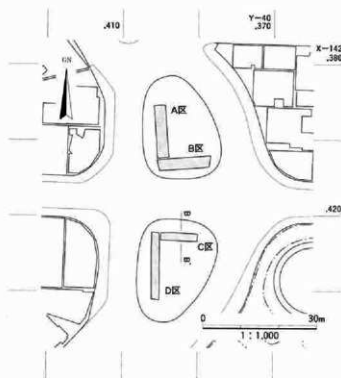


図50 MS82-8次調査箇所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森中央公園北西側のロータリー部分、新森4・5丁目に所在する(図50)。街園整備工事に伴い、1982年7月26日～8月27日の間、調査を実施した。調査では北と南に分かれた街園部分に、長さ10～18m、幅2～3mのトレンチを南北・東西方向にそれぞれ2箇所ずつ、あわせて4箇所設定した。各調査区を北側からA～D区と呼称する。

調査の方法は、重機の搬入および、排土の搬出が不可能な条件であったため、掘削をすべて人力によって行い、排土は調査区外に仮置きした後、埋戻すことにした。調査の結果、弥生時代の遺物包含層は室町時代以降の耕作によってすべて削平されており、明確な遺構・遺物は確

認されなかった。ここでは、B区で検出した遺構、およびB・C区の地層断面の観察結果のみを報告し、それ以外の調査区の内容については必要に応じて言及することとする。

2) 層序

B区で現地表下1.2mまでの地層を、C区では一部深掘りを行って現地表下1.8mまでの地層を確認し、以下の第1～8層に区分した(図51・52、写真3)。出土遺物が少なかったため、各層の年代を



写真3 C区地層断面

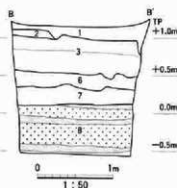


図51 C区地層断面図

確定することはできなかったが、第2・3層は江戸時代、第4・5層は室町時代、第8層は弥生時代中期と推定される。

第1層：現代の整地層および掘削の埋土である。

第2層：黄褐色シルト質粘土層で、層厚は10～30cmある。

第3層：上部は淡緑灰色粘土層、

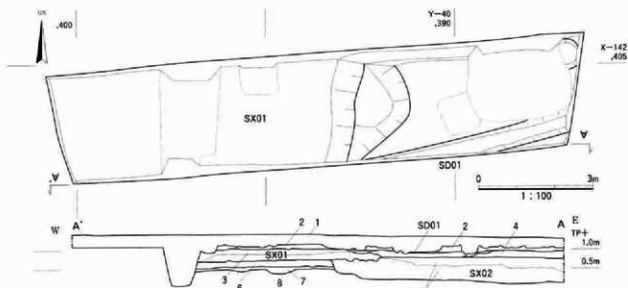


図52 B区平面図・南壁地層断面図

下部は灰色粘土質シルト層で、B区ではSX01の埋土として分布していた。層厚は30cmある。D区では江戸時代の染付磁器を含む。

第4層：暗緑灰色砂泥り粘土層で、層厚は20cmある。

第5層：暗灰色粗粒砂泥り粘土層である。B区東半の南壁断面で確認したSX02の埋土である。層厚は60cmあり、室町時代の白磁が出土した。

第6層：暗灰色シルト層で、層厚は20cmある。

第7層：淡灰色粘土質シルト層で、層厚は10～20cmある。

第8層：C区の深掘り部分で確認した水成層である。灰色粗粒砂層を主体に、植物遺体の薄層が複数挟在する。層厚は90cmまで確認し、遺物は出土しなかった。A・B・Dの各区でも調査で掘下げた面の下に、本層に相当する灰色粗粒砂層が認められた。標高・層相からみて、本調査地南東側のMS 81-17次調査で確認した、弥生時代中期のSX04の埋土に対応する可能性がある(本章第10節)。

3) 遺構と遺物

検出した遺構はすべて室町時代以降のものである(図52)。

SD01 第2層基底面で検出した東西方向の溝で、第3層を埋土とするSX01を切っている。幅0.6m、深さ0.3mある。埋土は淡黄灰色砂泥り粘土層で遺物は含まれない。

SX01 B地区西半に分布する深さ0.3mの落込みで、第4層上面で検出した。埋土である第3層からは遺物は出土しなかったが、D区のこれに対応する層準からは染付磁器が出土しており、江戸時代の遺構と考えられる。

SX02 B区東半に分布する深さ0.6mの落込みで、調査区南壁断面で確認したのみである。第5層で埋まっており、中国製白磁小片および弥生時代中期の土器片が出土した。(大庭)

第12節 MS82-18次調査

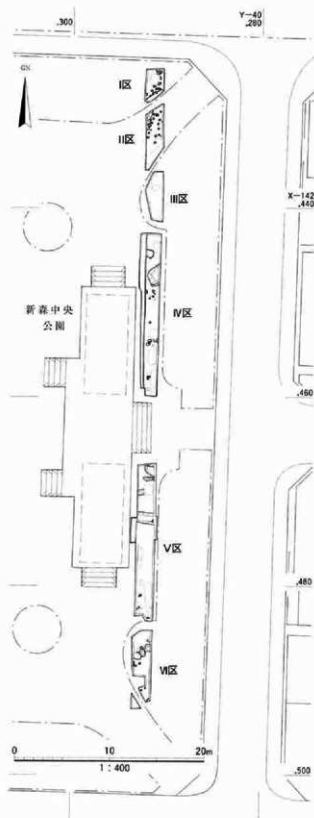


図53 MS82-18次調査観所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森中央公園内の東部、新森4丁目22に所在する。公園整備工事に伴い、1982年12月8～27日の間、調査を実施した。

調査対象は南北約80m、東西約2mの範囲であるが、花壇や藤棚などの基礎によって調査が不可能な部分が存在するため、調査区は6個所に分断されることとなった。これらを北からI～VI区と呼称する(図53)。

2) 層序

各調査区の層序を以下の第1～7層に区分した(図55・58)。

第1層：現代の整地層もしくは現代の攪乱埋土である。

第2層：灰褐色砂混り粘土層である。各調査区に約10cmの厚さで分布し、江戸時代の陶磁器を含む。

第3層：暗灰褐色砂混り粘土層である。各調査区に分布し、層厚は最大40cmある。瓦器・瓦質土器・白磁を含み、室町時代の蓮根田に係わると思われる作土層である。I・IV・V区の本層下面で東西方向の溝を検出した。

第4層：黒褐色粘土層で、V区の中央部に20cmの厚さで分布する。奈良時代の須恵器および土師器を含む。

第5層：IV～VI区に分布する水成層で、層相から第5a・5b層に区分できる。

第5a層は下部が黄灰色砂礫、中部が淡灰色シルト～細粒砂、上部が淡灰色シルトからなり、上方にいくにつれて細粒化する一連の堆積物である。V区北半に分布しており、下位の地層を

大きく削っている。下部の砂礫層には第Ⅱ～Ⅳ様式に属する弥生土器が礫と同量程度と大量に含まれていた。

第5b層は第5a層とは分布を異にしており、Ⅳ区、Ⅴ区南半およびⅥ区で見られた。灰褐色砂混り粘土層で、炭化物の薄層を含む。第5a層との前後関係は確認できなかったが、下位の第6層を直接覆うことから、第5a層に先行する可能性がある。第Ⅱ～Ⅲ様式に属する弥生土器片が出土した。

第6層：上部が黒色粘土層、下部が灰黄色シルト質粘土層の暗色帯で、下位層とは漸層関係にある。各調査区に部分的に残存しており、層厚は約20cmある。本層上面およびこれを除去した段階で溝・土壌・小穴を検出した。これらの遺構には第Ⅱ～Ⅲ様式の弥生土器が含まれる。Ⅳ～Ⅵ区の第6層上面の高さは、TP+0.7～0.9mである。

第7層：灰黄色細粒砂層である。遺物は出土していない。

3) 遺構と遺物

調査区ごとに検出した遺構および出土遺物について記述する。Ⅲ区を除いたほぼ全域で弥生時代中期の遺構を検出した。これらはすべて第6層に伴う遺構と判断される。

i) Ⅰ～Ⅲ区(図54、図版7)

第3層出土遺物 本来の地層から遊離した資料であるが、瓦器を含む室町時代の東西溝から、広口壺131、壺体部134、蓋147、甕136・137、甕底部144、扁平片刃石斧82VW201が出土した(図56・57)。134は幅の狭い原体を用いた2帯複合帯で、直線文と波状文を巡らせている[森田1988]。136・144は胎土中に結晶片岩粒を多く含む紀伊からの搬入品である。これらは第Ⅱ様式に属するものである。82VW201は石鑿に用いられたと思われる小型の扁平片刃石斧で、刃部は欠失している。結晶片岩製である。

小穴群 Ⅰ・Ⅱ区で多数の小穴を検出した(図版7)。調査範囲が狭いため、直接組み合わせるものは確認できないが、建物や横の柱穴の可能性もある。埋土は第5b層と類似する。Ⅲ区では小穴は検出されなかった。

Ⅰ区の小穴の一つから第Ⅲ様式の甕143が、Ⅰ区の別の小穴から第Ⅱ様式の甕145が出土した(図56)。145は体部調整が、内外面とも下半に縦方向、上半に横方向のヘラミガキで、口縁部内面の調整がヨコハケである。生駒西麓産の胎土である。これら以外的小穴から出土した土器も、時期の判別できるものは第Ⅱ～Ⅲ様式に限定されており、小穴群はこの時期の遺構と判断される。

ii) Ⅳ区(図55、図版7)

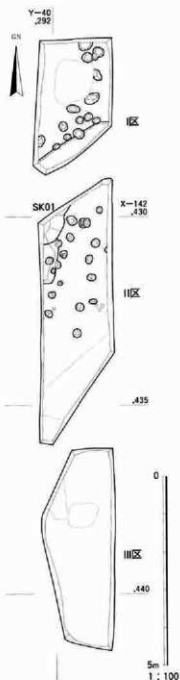


図54 Ⅰ～Ⅲ区 平面図

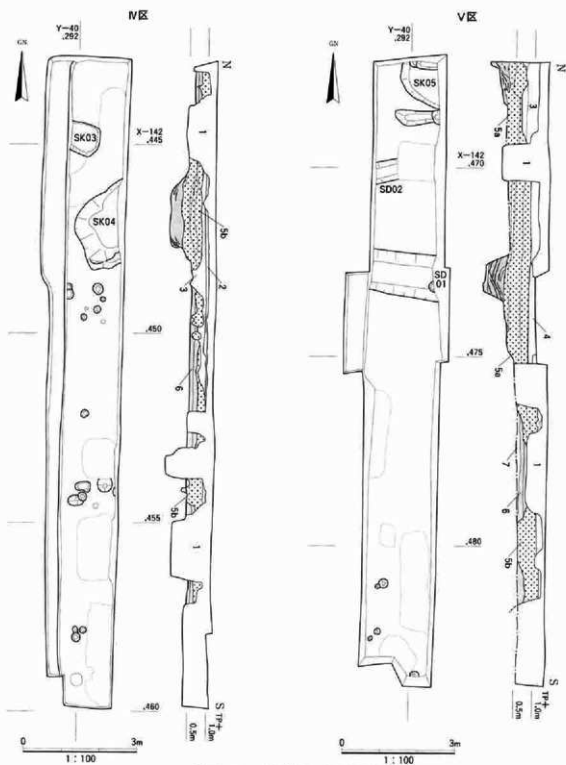


図55 IV・V区平面図・東壁断面図

SK04 IV区北半で検出した大型の土窟で、深さは0.6mある。埋土の下半は暗灰色砂泥り粘土で、上半は第5b層に相当する、植物遺体を多く含む茶褐色粘土質シルトである(図版7)。第Ⅱ様式の土器片を含む。

小穴群 I・Ⅱ区はどの密集度ではないものの、IV区の中央から南部にかけて第6層上面で複数の小穴を検出した。埋土はI・Ⅱ区の小穴群と同様、第5b層と類似する。小穴の一つから、第Ⅱ～Ⅲ様

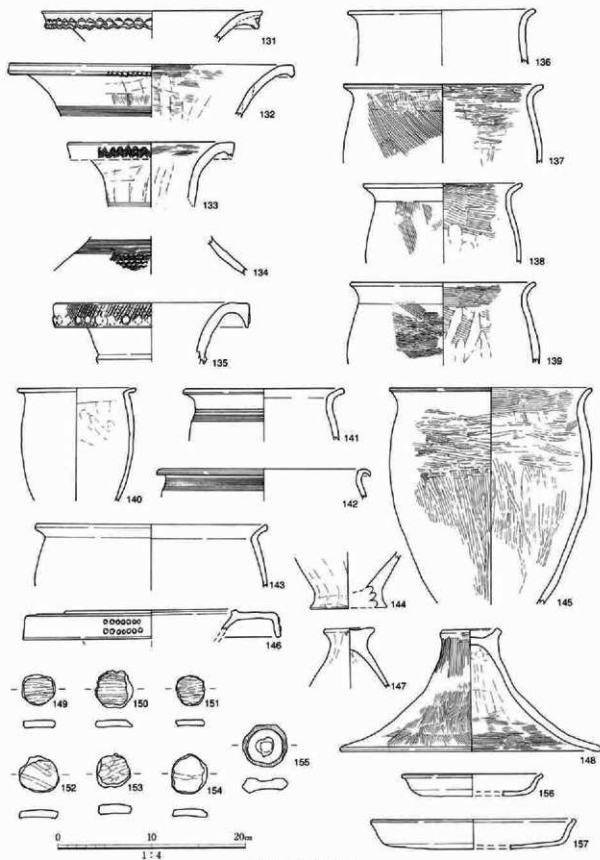


图56 出土遗物(1)

I区小穴(143·145)、同第3层(131·134·136·137·144·147)、V区第4层(156·157)、同第5a层(132·133·139
~142、146·149~155)、W区SK09(138)、同第3~6层(135·148)

式の土器片が出土している。

iii) V区(図55、図版7)

第4層出土遺物 奈良時代の土師器皿156・157が出土した(図56)。この時代の遺構は確認できなかったが、包含層の存在から付近に集落などが存在していた可能性がある。

第5a層出土遺物 V区北半に分布する第5a層からコンテナ4箱におよぶ多量の弥生土器を中心に、土製品、石器遺物、動物遺物が出土した。土器のほとんどは小片であり、これらは調査区外から水路によって運ばれてきたものと考えられる。

弥生土器は広口壺132・133、甕139～141、鉢142、高杯146を図化した(図56)。146は垂下した口縁部の端面に上下2段に7個の円形浮文を配している。132・141は生駒西麓産の胎土である。以上の土器は多くが第Ⅱ様式に属するものであるが、133・146は第Ⅲ～Ⅳ様式に下るものである。図化していないが、凹線文を施す壺片が数点出土しており、第5a層を堆積させた洪水は、第Ⅳ様式のごく初期に起ったと推測される。

土製品は円板状土製品149～155がある(図56)。壺の体部や甕の底部の破片を打ち欠いて丸く仕上げたものであり、直径は3.0～4.5cmある。

石器遺物は石錐82VW204・206、石小刀82VW205がある(図57、図版40)。82VW204は基部が楕円形に整形されており、錐部に使用痕は認められない。82VW206は平面形が紡錘形となるものであり、下半付近の側縁が使用によって摩耗している。82VW205は厚みがあり、調整もやや粗いことから未製品の可能性もある。石材はともにサヌカイト製である。

動物遺体はイノシシの切歯・距骨とシカの下顎骨が出土した(第三章第2節)。

第6層出土遺物 82VW203が出土した(図57)。左図中央部は調整を施した後に横方向に研磨して

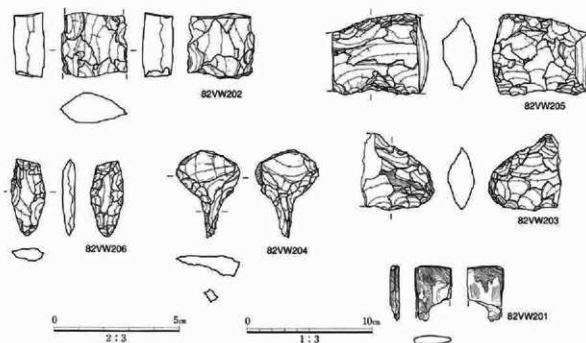


図57 出土遺物(2)

I区第3層(82VW201)、V区第5a層(82VW204～206)、V区第6層(82VW203)、Ⅳ区第6層(82VW202)

いる。石材はサヌカイト製である。

SK05 V区の北端で検出した土壌で、調査区内での深さは0.5mあった。下半は植物遺体を含む灰色シルトで、上半は第5a層である。

SD01 V区のほぼ中央で検出した東西方向の溝である(図版7)。検出面での幅は1.1m、深さは0.6mあり、溝の断面形は逆台形である。上を第5a層下部の砂礫によって削られており、本来はもう少し規模が大きかったと予想される。埋土の最下部にシルト層が薄く堆積し、上半はラミナが顕著な灰色粗粒砂と茶褐色シルトの互層堆積である。埋土中から第Ⅲ様式の弥生土器片が出土した。

SD02 SD01の北側で検出した東西方向の溝で、検出面での幅は0.5m、深さは0.2mある。埋土から第Ⅱ～Ⅲ様式の弥生土器片が出土した。

iv) VI区(図58)

第3～6層出土遺物 第3～6層から広口壺135、蓋148が、第6層からサヌカイト製の矢頭器82VW202が出土した(図56・57)。135は口縁部が垂下し、頸部に断面三角形突帯を有するもので第Ⅲ様式に属する。148は壺の蓋で、内面下端に帯状の焦げつきがある。生駒西麓産の胎土である。

SK06 VI区北端で検出した土壌で、深さは調査区内で0.3mである。第Ⅱ様式の土器片が出土した。

SK07 SK06の南隣に位置する土壌で、検出面からの深さは0.5mあった。弥生時代中期の土器片が出土した。

SK09 SK06の西側に位置する土壌で、検出面からの深さは0.1mと浅い。第Ⅱ様式に属する壺138(図56)が出土した。

(大庭)

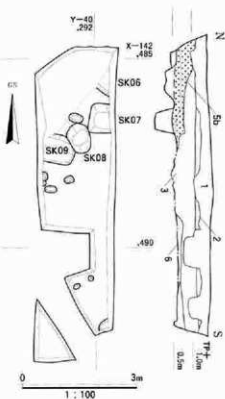


図58 VI区平面図・東壁断面図

第13節 MS83-1次調査

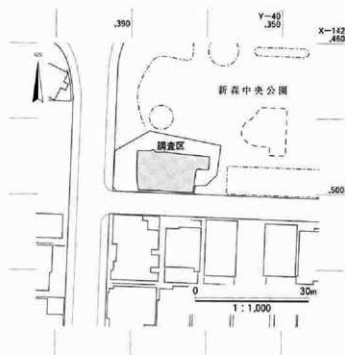


図59 MS83-1次調査箇所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森中央公園内南西端の新森4丁目22に所在する(図59)。同公園内では、これまでもMS81-17次(本章第10節)、82-18次(同第12節)などの調査が行われている。都市整備工事に係わる公園内の施設建設に伴い、1983年4月26日～5月19日の間、調査を実施した。

調査区は建物建設部分の南北約10m、東西約20mの範囲に設定した。調査の方法は、鎌倉時代以降の作土層と考えられる第2層までを重機によって除去し、それ以下を人力で掘削した。第7層の上面で遺構検出作業を行い、調査区西半に深い落込みを検出した。この落込みの基底は工事の掘削深度より深くなるために、

部分的なトレンチを設定して遺構の規模や埋土を確認するととめた。また、調査区東部で一部深掘りを行い、現地表下約3mまでの地層の堆積状況を確認した。

2) 層序

現地表下3.0mまでの地層を第1～16層に区分した(図61・62、図版8)。なお、第8層以下の地層は、調査区東部の深掘り部分で確認したものである。

第1層：現代の整地層である。

第2層：灰色シルト泥り粘土層である。上部は黄色味を帯びている。13世紀前半代の瓦器碗163が出土した(図63)。

第3層：淡緑灰色シルト層である。

第4層：暗緑灰色シルト層である。弥生時代中期の壺底部162のほか、土師器の細片が出土した(図63)。

第5層：黒灰色粘土層で、層厚は約5cmある。弥生土器の破片が出土した。

第6層：暗灰色粘土層で、層厚は約10cmある。上面の高さは、TP+0.3m前後である。調査区北西半には本層内で形成された自然の落込みが存在する。

第7層：暗灰色細粒砂泥り粘土層で、層厚は20cmある。上下の地層とは漸移関係にある。

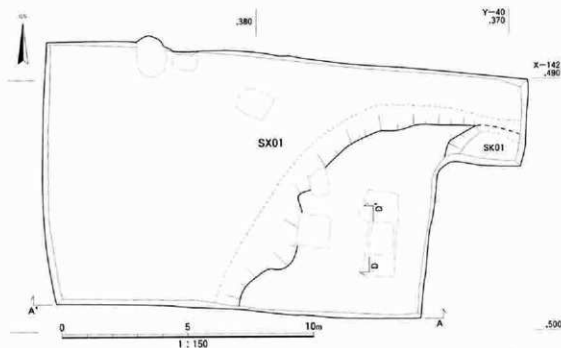


図60 調査区平面図

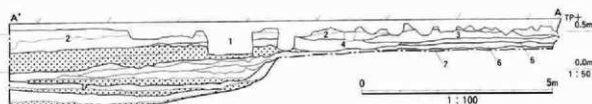


図61 調査区南壁断面模式図

第8層：黄灰色細粒砂の偽礫を含む灰色細粒砂泥りシルト層である。層厚は70～90cmある。

第9層：黄灰色粗粒砂泥り中粒砂層で、層厚は20cmある。

第10層：淡黄灰色粗粒砂泥り細粒砂層で、上部に有機物を若干含む。層厚は80cmある。

第11層：黄灰色粗粒砂泥り細粒砂層で、層厚は18cmある。ラミナは認められない。本層から第13層にかけて、縦方向に延びる直径2～3cmの果穴化石が多く認められた(図版8)。

第12層：泥炭層と細粒砂層が互層で堆積しており、層厚は15cmある。

第13層：茶黑色粘土からなる泥炭層で、下半に細粒砂およびシルトの薄層を挟在する。層厚は20cmある。

第14層：青灰色シルト泥り細粒砂層で、層厚は30cmある。

第15層：暗灰色粗粒砂層で、層厚は7cmある。

第16層：暗青灰色シルト泥り細粒砂層である。層厚は20cm以上で、下

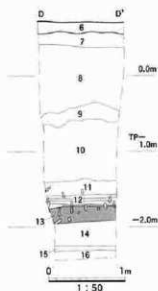


図62 深掘り部分西壁断面図

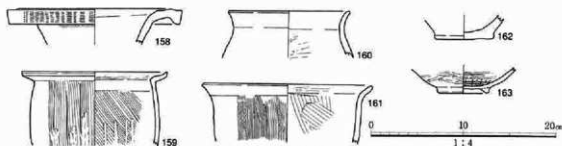


図63 出土遺物

SX01(158~161)、第2層(163)、第4層(162)

限は未確認である。

深掘りによって確認した地層のうち、TP-1.4~1.9mで認められた第11~13層は果実化石が密集する層準で、特に下半の第12・13層は植物遺体を多く含んでいる。また、これらの上には、厚い砂層(第8~10層)が堆積し、第8層上位の第7層は暗色化している。同様の状況はMS81-17次調査でも認められており(本章第10節)、淀川の沖積作用によって干潟から徐々に陸化していった過程を想定することができる。

3) 遺構と遺物(図60・63、図版8)

SK01 調査区の東北部で検出した土坑で、東西3.0m以上、深さ0.4mある。埋土は下半が第8層を起源とした偽礫を含む灰色シルト質粘土層、上半は暗灰色シルト質粘土である。須恵器・土師器の破片が出土しており、古墳時代の遺構と判断される。

SX01 調査区西半で検出した大規模な落込みである。これは人為的なものではなく、自然の落込みと考えられる。深さは約0.5mあり、埋土は粗粒砂~細粒砂とシルト~粘土の互層からなり、砂を主体とする地層ではラミナが見られた。シルト~粘土層中には枝や葉などの植物遺体が含まれる。粘土層の上部もしくは粗粒砂層の基底から第Ⅲ様式に属する広口壺158、甕159や第Ⅱ様式に属する甕160・161が出土した(図63)。遺物の年代観から、SX01の埋没時期は弥生時代中期中葉を下限とすることができる。

北側で行われたMS81-17次調査でも、新森中央公園の西半部分で第Ⅱ~Ⅲ様式の弥生土器を含む落込みが確認されており(本章第10節)、SX01は公園西部以西に広がっていた谷地形の一部であった可能性がある。調査地周辺は弥生時代には居住域とはならない低湿な場所であったと考えられる。

(大庭)

第14節 MS84-5次調査

1) 調査の経緯と経過

新森ロータリーから北へ延びる南北道路におけるガス枝管の入替え工事に伴う調査で、森小路遺跡のほぼ中央北半に位置する。1984年7月23～31日の間、調査を実施した。街区ごとに10個所の調査区に分け、南端をI区として北に向って順に番号を付した。1区につき1～4個所程度の調査を実施したにすぎないため、成果に制約が大きく、詳細については後に行われた南北道路の東西歩道、車道部分の改裝工事に伴う調査と下水管・新設植樹帯・電柱などの立会調査の報告(MS84-7次：本章第16節)に記述した。

2) 層序と遺構・遺物

調査地の層序は後述するMS84-7次調査地と同一である。表4のとおり第0～7層に分けられるが、調査地の北部と南部とは層序が異なる。弥生時代の遺物は第3～5層から出土した。第3・4層は南部のI～Ⅲ区にのみ確認され、第4層は地点によって砂を多く含む個所がある。両層は弥生～古墳時代の遺物包含層で、下面で遺構が検出される。層厚は約0.1～0.2mである。第5層は細粒砂のラミナが発達した水成層で、有機物を多く含み、弥生土器を少量包含する。ほかには、鎌倉時代以降の第1・2層、遺物が出土しなかった第6・7層である。

明確な遺構は確認できなかったが、I区の第4層から完形の高杯164が出土した(図65、図版10、本章第16節第82図)。垂下した口縁部の上下端に凹線文を巡らせるもので、第IV様式に属する。(清水)

表4 MS84-5次調査層序表

地層	層相	分布域	遺物時期
第0層	表土	北・南部	現代
第1層	青灰～黄灰色シルト質細粒砂	南部のみ	近代
第2層	暗灰色粘土質シルト	北・南部	鎌倉～江戸時代
第3層	暗褐色含砂粘土質シルト	南部のみ	弥生～古墳時代
第4層	黒褐色含砂粘土質シルト	南部のみ	弥生～古墳時代
第5層	暗灰色細粒砂～シルト	北部のみ	弥生時代
第6層	灰色粘土	南部のみ	遺物なし
第7層	黄灰色細～中粒砂	北・南部	遺物なし



図64 MS84-5次調査箇所位置図

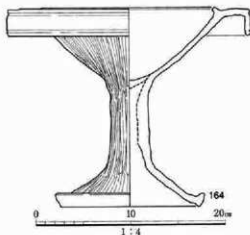


図65 出土遺物

第15節 MS84-6次調査

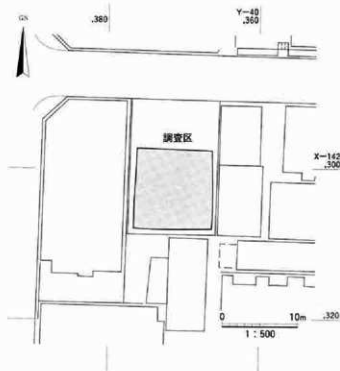


図66 MS84-6次調査箇所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森5丁目8に所在し、遺跡のほぼ中央に位置する(図66)。西側の南北道路部分ではMS84-7次調査(本章第16節)が行われている。共同住宅の建設に先立ち、1984年7月23日～8月14日の間、調査を実施した。

調査の対象は南北約10m、東西約10mの範囲である。現代の整地層を重機により除去し、第2層以下を人力によって掘下げた。遺構の検出作業は、第3層および第5層を除去した段階の、2回に分けて行った。

2) 層序

現地表下1.1mまでの地層を以下の第1～6層に区分した(図67)。

第1層：現代の整地層および攪乱の埋土である。

第2層：江戸時代以降の作土層で、層厚は約20cmある。上部は暗褐色シルト層、下部は黒褐色細粒砂泥りシルト層である。

第3層：オリーブ黒色のシルト質粘土層で、上部に褐鉄鉱の斑紋が見られた。調査区の南部に約20cmの厚さで分布する。瓦器を含んでおり、鎌倉～室町時代の作土層と考えられる。本層下面で溝を検出した。

第4層：黒褐色砂質シルト層の暗色帯で、調査区北部に約15cmの厚さで分布していた。南部は鎌倉・室町時代の耕作により削平され残存していない。調査区北東部では下部に砂の偽礫を含む。第Ⅳ様式に属する弥生土器を多く包含し、上面で土壌、掘立柱建物、小穴群を検出した。本層上面の高さは、調査区北部でTP+1.2m前後である。

第5層：炭化物を多く含む黒色シルト層の暗色帯である。第4層とほぼ同じ範囲に分布し、層厚は最大で30cmある。調査区北部の中央では砂粒を含む。下位層との境界は明瞭である。第Ⅱ～Ⅲ様式に属する弥生土器を含み、本層を除去後に溝・土壌・小穴群を検出した。本層上面の高さは、TP+1.0m前後である。

第6層：黄灰色中粒～細粒砂層で、硬くしまっている。層厚30cmまで確認し、遺物は出土しなかった。

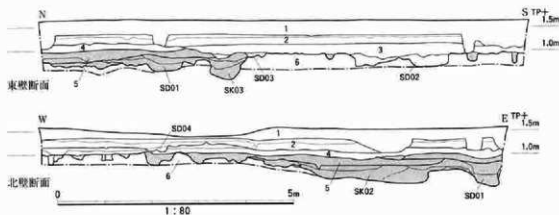


図67 調査区東・北壁地層断面図

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物

第2・3層その他出土遺物 本来の地層から遊離した資料であるが、弥生時代の土器・石器遺物として第2層から84VZ209・214が、第2・3層から171が、第3層から175、84VZ212が、第3層に伴う鎌倉～室町時代の溝から84VZ216が、調査区の中央北端で側溝を掘削中に168が、それぞれ出土した(図68・69、図版39・40)。

168は無文の無頸壺で、口縁部に段を有する。171は口縁部を垂下させる高杯、175は脚端部を斜め上方に拡張させる高杯脚部で、脚基部に描直線文を巡らす。これらは第Ⅳ様式に属する。

84VZ209は石鏃で、扁平な基部をもち、剥片の打面側を刃部に、先端側を基部に加工している。84VZ212・214は石鏃である。84VZ212は基部が内湾する凹基式で、調整は表裏面ともに粗い。

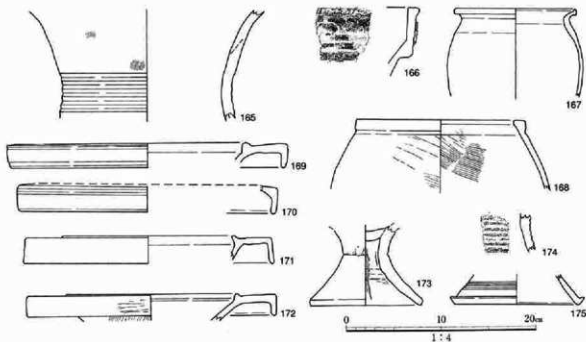


図68 出土遺物(1)

第2・3層(171)、第3層(175)、第4層(165～167・169・170・172～174)、側溝内(168)

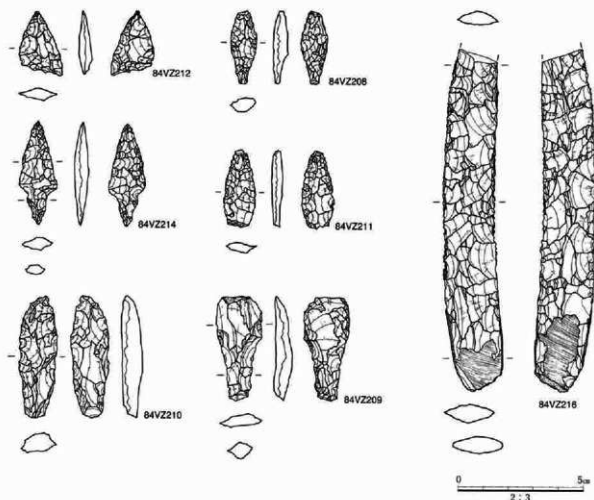


図69 出土遺物(2)

第2層(84VZ209・214)、第3層(84VZ212・216)、第4層(84VZ208)、第5層(84VZ210・211)

84VZ214は凸基有茎式で、素材剥片の剥離面は残っていない。84VZ216は石小刀で、先端が欠失しているが復元長は16cm程度に達する。側縁の一方はわずかに内湾し、刃部になる。反対側は外反し、弧を描いている。基部の先端から3cm前後にかけて表裏面・側縁を研磨しており、着柄のためと考えられる。これらの石材はすべてサヌカイトである。

第4層出土遺物 弥生土器は、壺頸部165、広口壺166、甕167、高杯169・170・172～174が出土した(図68)。165・166・170は頸部に凹線文を巡らすもので、165は凹線の間隔が狭い。174は高杯柱状部の破片で、多条のヘラ描沈線文を巡らす。これらは第IV様式に属するものである。

石器遺物は、84VZ203～205・208が出土した(図69・70、図版38)。84VZ203は磨製の柱状片刃石斧である。縦方向に割れているが、全体によく研磨されている。緑色片岩製である。84VZ204は磨製の扁平片刃石斧である。側縁の厚みが左右で不均整であり、別の石器から転用した可能性も考えられる。白色の凝灰岩を素材としている。84VZ205は磨製の太型蛤刃石斧と考えられるが、刃部は欠失している。表面の一部に製作時の敲打痕が残る。砂岩製である。84VZ208は凸基有茎式石鏃で、サヌカイト製である。

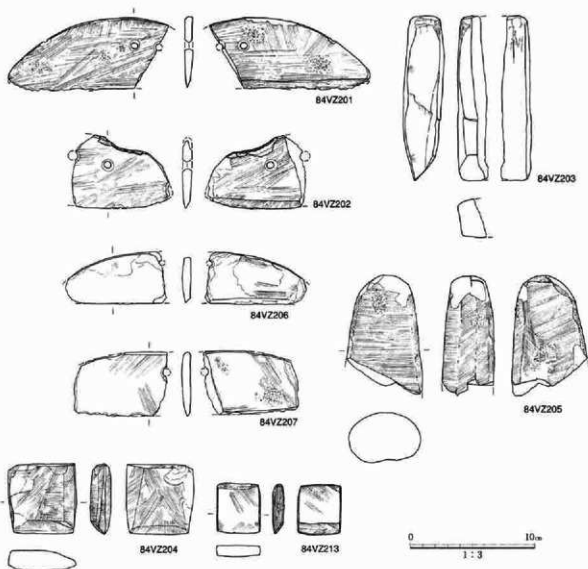


図70 出土遺物(3)

第4層(84VZ203～205)、第5層(84VZ207・213)、SD01(84VZ201・202)、SK08(84VZ206)

第5層出土遺物 弥生土器は広口壺176～179、短頸壺180、甕181～193が出土した(図71、図版26・32)。179は頸部の上半に縦方向の櫛描直線文を3条以上施したのち、下半に横方向の直線文を巡らせている。頸部は約半分残存しているが、縦方向の直線文は一方のみに限定されている。また、縦方向の直線文の上にはヘラミガキを施し、ミガキの範囲も直線文の部分に限定されている。181は口縁部がL字に折れ曲がる甕で、口縁部下に櫛描直線文を3条巡らす。185は口縁部が外に大きく広がり、内面にヨコハケ調整を行う甕で、口縁端部にキザミメおよび押圧を施すものである。近江からの搬入品と考えられる。177・182・184・186・187・189・191は生駒西麓産の胎土であり、192は胎土中に結晶片岩を多く含む紀伊からの搬入品である。以上の土器のうち、178・190が第Ⅲ様式に下るほかは、第Ⅱ様式に属するものである。

石器遺物は84VZ207・210・211・213が出土した(図69・70、図版37～39)。84VZ210は凸基無茎式石鐏と考えたが、厚みがあり平面形もいびつである。石材はサヌカイト製である。84VZ211はサヌ

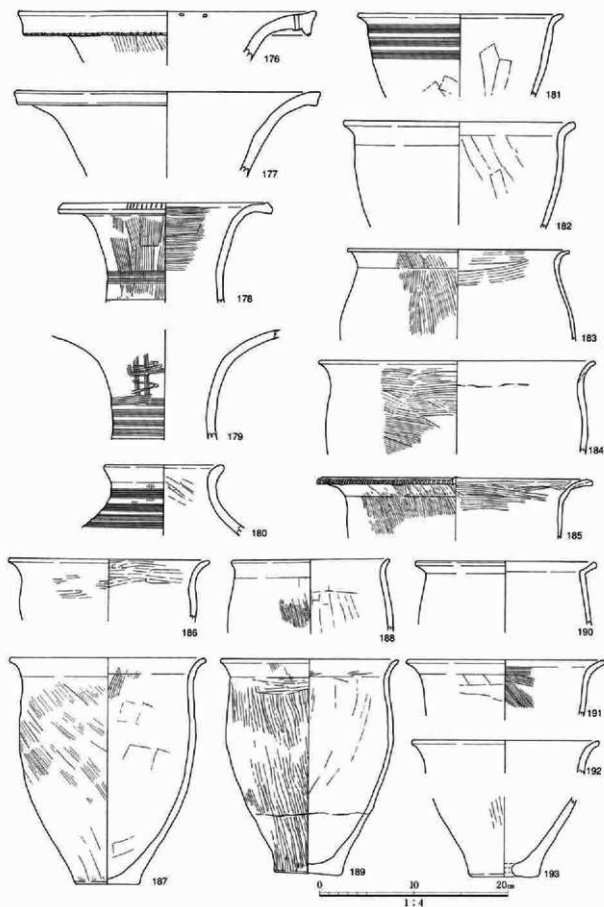


图71 第5层出土器物

カイト製の凸基無基式石鏃である。基部が折れているが、細身の本葉形になるものであろう。基部側から先端へ向って細部調整が施されている。84VZ207は結晶片岩製の磨製石庖丁である。84VZ213は磨製の扁平片刃石斧である。結晶片岩製である。小型であるため、石鑿のような用途が考えられる。

ii) 第5層下面検出遺構(図72、図版9)

SK01～04、SD01、および小穴群を検出

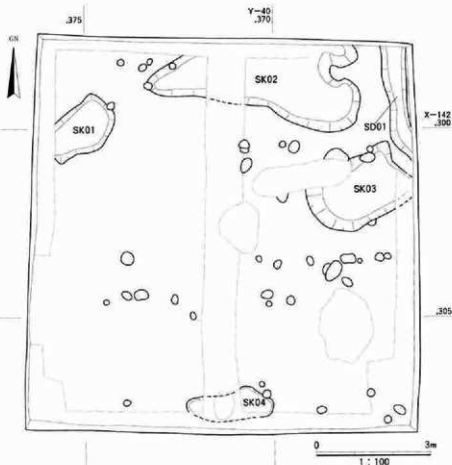


図72 第5層下面平面図

した。これらは第5層を除去した第6層土で一括して検出したものであり、第4・5層が削平され残存していなかった調査区南部では、上位の層準に伴うものも含まれている可能性もある。

SK01 調査区北西部で検出した土壌である。深さ0.1～0.2mで、弥生土器片が少量出土した。

SK02 調査区北端で検出した、緩やかな傾斜をもつ落込み状の土壌である。深さは0.2mで、埋土は下半が細粒砂混りシルト質粘土、上半が有機物を含む粘土質シルトで、ラミナが見られる。

埋土中から弥生土器の広口壺194～196、甕201～207、鉢208が出土した(図73)。壺の文様は、195が頸部と体部の境界に2段に分けて多条のヘラ描沈線文を巡らし、194が頸部に御播直線文を4条、その下に流水文を配する。壺・甕ともに頸部・体部から口縁部に同じ厚さで移行し、端部を丸くおさめている。201～203は外面がハケメ調整で、口縁部内外面がヨコナデ調整である。195・204・205は生駒西麓産の胎土で、それ以外は長石を中心とした混和材を多く含み、硬質な焼きの個体が主体である。これらは森小路遺跡内の第Ⅱ様式でも古相に位置づけられよう。また、森小路遺跡で散見される多条のヘラ描沈線文をもつ壺破片についても、前期資料のみで一括で出土した例はなく、本資料のように第Ⅱ様式古相の資料に伴うものであった可能性があろう。

SK03 SK02の南側で検出した土壌で、深さは約0.6mある。埋土下半は第6層を起源とした偽礫を含む灰色砂混りシルト質粘土、上半が灰色砂混り粘土である。出土遺物は多くないが、第Ⅱ様式の甕200が出土したほか、第Ⅲ様式に下る土器片も含まれる(図73)。200は生駒西麓産の胎土である。

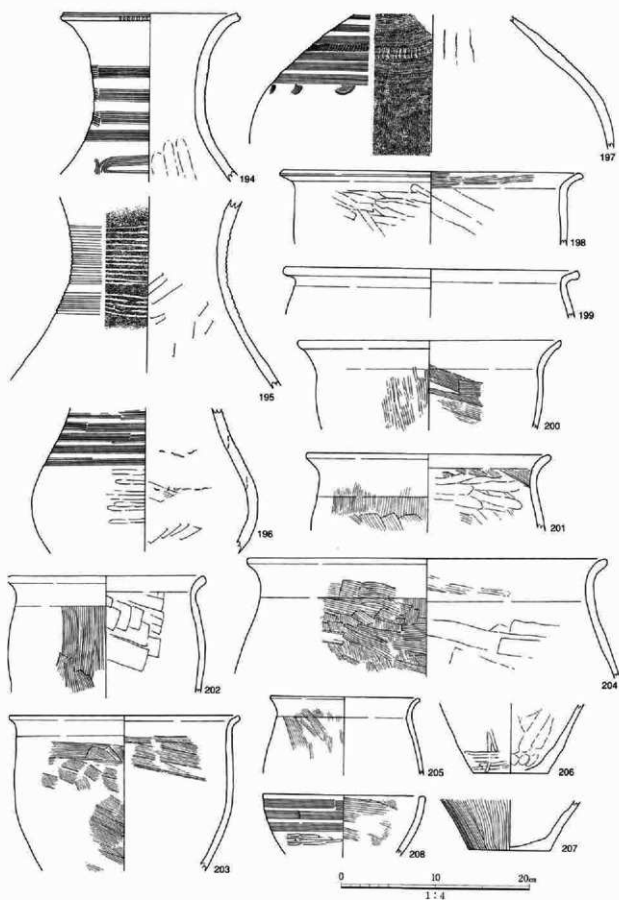


圖73 遺構出土遺物(1)
SK02(194~196・201~208), SK03(200), SD01(197・198), 小穴(199)

SK04 調査区南端で検出した土壌で、深さは0.2mある。弥生時代中期の土器片が少量出土した。

SD01 調査区の北東端で検出した南北方向の溝で、幅0.5m、深さ0.4mある。埋土はオリーブ黒色シルト～粘土質シルトで、ラミナが見られる。

埋土中から弥生土器の壺体部197、甕198、石庖丁84VZ201・202が出土した(図70・73、図版37)。

197は櫛歯直線文の間にピッチの狭い深く刻んだ籐状文を1条巡らし、体部上半の文様帯の最下段には扇形文を等間隔に配する。198は第Ⅱ様式、197は第Ⅱ～Ⅲ様式に属するものであろう。

84VZ201は結晶片岩製の磨製石庖丁である。表裏面に製作時の敲打痕が残る。84VZ202は緑色片岩製の磨製石庖丁である。2個の孔は刃部と平行しない。図の上部は叩いて潰れている。

小穴群 調査区のはほぼ全域で約45基の小穴を検出した。規模・形状とも均一ではなく、北壁断面で検出した一部を除いて柱痕跡が認められるものはほとんど存在しなかった。小穴の一つから甕199が出土した(図73)。生駒西麓産の胎土で、第Ⅲ様式に属する。

iii) 第4層上面検出遺構(図74・75、図版9)

第4層上面でSK05～07、SB01および小穴群を検出した。また、SK08は第6層を除去した段階で検出したものであるが、出土遺物から第4層から掘込まれた遺構と判断した。調査区の南半が後世の耕作により削平されており、検出した遺構は北約1/3の範囲に限られている。

SK05 調査区西

壁沿いで検出した土壌で、深さは調査区内で約0.6mある。埋土は有機物を多く含むシルト～粘土質シルトであり、ラミナが認められる。弥生土器の破片が少量出土した。

SK06 楕円形の土壌で、深さは約0.2mある。偽磔を含む黒色砂質シルトで埋っており、第Ⅳ様式の弥生土器片が出土した。

SK07 SK06の東隣で検出した土壌である。深さ約0.4

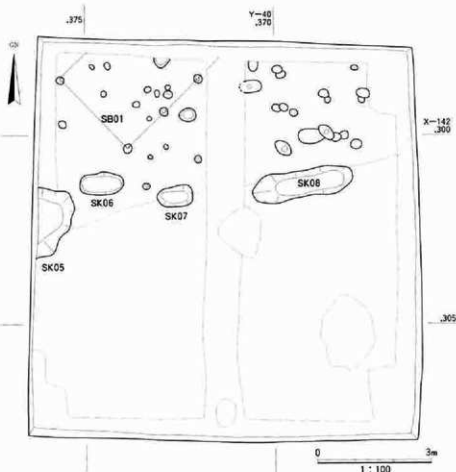


図74 第4層上面平面図

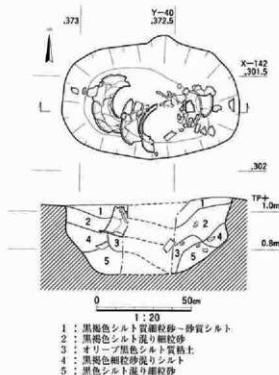


図75 SK07平面図・断面図

土器片の中には第IV様式のものが含まれており、213もこの時期に属するものであろう。ほかにも、黒色の頁岩製の磨製石庖丁84VZ206が出土した(図70、図版37)。

小穴群およびSB01 調査区北半で約40基の小穴を検出した。柱痕跡が確認されるものもいくつか

mあり、弥生土器の広口壺209～211、甕212がまとまって出土した(図75・76、図版26)。

把手を有する211は口縁部に2孔一對の紐通し用の孔を6方向に配する。209は生駒西麓産の胎土である。これらは第IV様式に属するもので、209は生駒西麓第III様式新段階に位置づけられる[濱田延光1993]。

SK08 調査区北東部で検出した細長い土壺である。深さ0.4mあり、壁面は垂直またはそれに近い傾斜をなす。ラミナが顕著に見られる黒色有機質土で埋っている(図版9)。遺物はさほど多くないが、注目されるものとして弥生土器の台形土器213が埋土上部の肩付近から出土した(図76、図版26)。213は色調が橙色で、胎土中に長石・赤色粒を含んでおり、在地の胎土ではない。上面平坦部は器面が風化しており、使用痕などは確認できない。同時に出土した

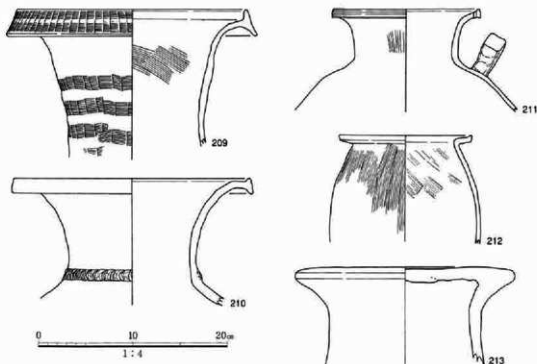


図76 遺構出土遺物(2)
SK07(209～212)、SK08(213)

あり、複数の建物が存在したと考えられる。出土した遺物は、第Ⅲ～Ⅳ様式の弥生土器に限られており、この時期の遺構と判断される。このうち柱筋が通るものをSB01とする。

SB01は梁行1間(柱間隔2.6m)、桁行2間以上(柱間隔1.3m)の掘立柱建物と考えられる。確認できた柱痕跡は直径0.1mあった。SB01の柱穴からも、第Ⅲ～Ⅳ様式の弥生土器片が出土している。

iv) 第3層下面検出遺構(図77)

SD02～04を検出した。これらは出土遺物から鎌倉～室町時代の遺構と考えられる。

SD02 調査区南部で検出した東西方向の溝で、幅1.7m、深さ0.4mである。埋土はオリーブ黒色砂質シルト～シルト質粘土で、層相は第3層と類似する。瓦器片が出土した。

SD03 SD02の北隣でこれと平行する東西溝である。幅0.6～1.2m、深さ0.1mである。埋土はオリーブ黒色シルト質粘土で、瓦器片が出土した。

SD04 SD03の北側でこれと直交し連結する、南北方向の溝である。幅0.5m、深さ0.1mである。埋土はオリーブ黒色シルト質粘土で、SD02・03と共通する。瓦器片が出土した。(大庭)

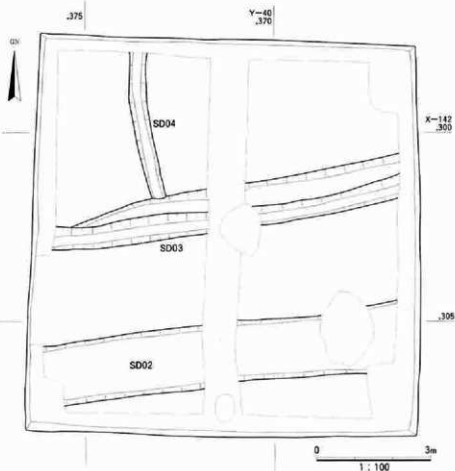


図77 第3層下面平面図

第16節 MS84-7次調査

1) 調査の経緯と経過

新森ロータリーから北へ延びる南北道路で、ガス枝管の入れ替えに伴う調査(MS84-5次調査:本章第14節)が行われた後に、南北道路の東西歩道、車道部分の改装工事と、下水管・植樹帯・電柱などの設置に際して調査を実施した。調査期間は1984年8月1日～11月26日である。

調査区は、MS84-5次調査の区分を踏襲し、南端をⅠ区として北に向って順に番号を付した(図78)。

2) 層序

調査地は以前の工事によって攪乱された部分が多く、調査範囲も狭小なため、地層観察にとどめた場所が大部分である。弥生時代の遺物包含層はⅡ・Ⅲ区でのみ確認することができ、ほかの調査区では後世に削平されていた。

調査地の層序は第0～7層に区分されるが、おもにⅠ～Ⅲ区とそれ以北で異なっている。

調査地の南部にあたるⅠ～Ⅲ区の層序は、以下の第0～4・6・7層である。

第0層:現代の整地層である。

第1層:青灰～黄灰色シルト質細粒砂層で、江戸時代の作土層である。

第2層:暗灰色粘土質シルト層で、鎌倉時代以降の水田もしくは蓮根田に係わる作土層である。層厚は0.2～1.0mで、南部で薄く、北部では厚い。北部では3層に細分できる個所もある。瓦器が出土している。

第3層:暗褐色含砂粘土質シルト層である。

第4層:黒褐色含砂粘土質シルト層で、第3・4層は南部のⅠ～Ⅲ区にのみ確認できた。第4層は地点によって砂を多く含む。弥生～古墳時代の遺物包含層で、下面より遺構が検出されている。層厚は約0.1～0.2mである。

第6層:灰色粘土層である。

第7層:黄灰色細粒砂層で、第6・7層は遺跡全体に広がる水成層で、出土遺物はない。

Ⅳ区以北の層序は、第1・3・4・6層が欠落し、反対に第5層が確認された。

第5層は細粒砂のラミナが発達した水成層で、有機物を多く含み、弥生土器を少量包含する。

図79は、調査区南部のⅡ・Ⅲ区間で作成した地層断面図である(図版10)。図中の3層は鎌倉時代



図78 MS84-7次調査箇所位置図

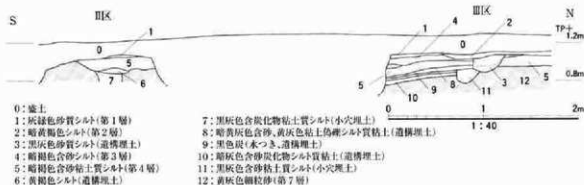


図79 II・III区間地層断面図

以降の遺構埋土であるが、断面のみの観察のため詳細は不明である。4層から下位の地層は弥生時代に属する。4層は第3層に、5層は第4層に相当する。5層の南側は遺構の埋土となる可能性もある。北側の5層の下位では、水つきの炭層(9層)と埋戻し土と考えられる偽礫泥りの地層(8層)に挟まれて、11層を埋土とする小穴が観察され、複雑な状況を呈している。

3) 遺構と遺物

遺構はII・III区付近に存在する(図80、図版10)。いずれも第3層ないし第4層下面検出遺構である。遺構が分布する範囲の北と南は上位の耕作により削平され残存していなかった(図82)。

検出された遺構には溝・土塹・小穴があるが、ほとんどは掘下げて調査することができず、平面で確認したにとどまった。そのため、正確な規模や形状および時期が判明しないものが多い。溝にはSD101・102があるが、同一のものであろう。北北西-南南東方向に延びており、西側歩道部分の北端でもその延長が認められるため、全長は28m以上になる。この溝は重複するいずれの土塹よりも新しい。土塹のうちII区北端のSK103~107には重複関係が認められる。

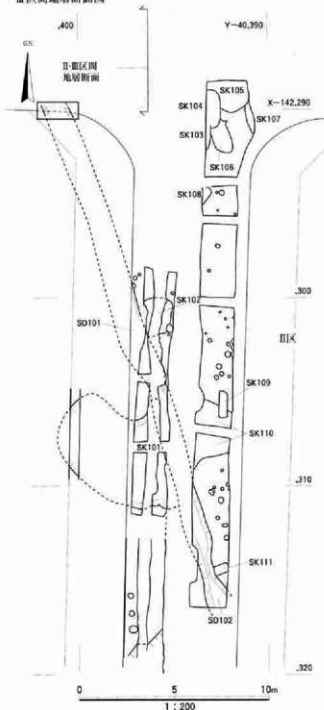


図80 II・III区遺構平面図

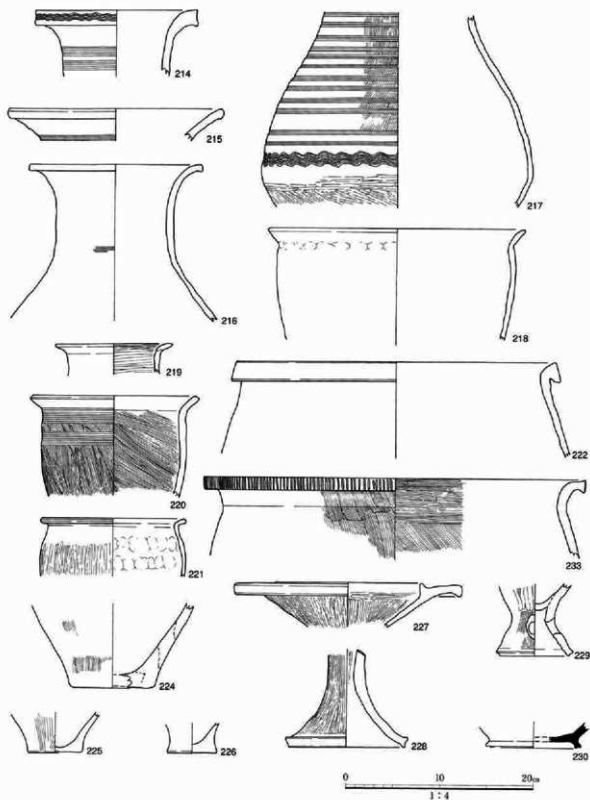


图81 出土器物

第2层(217·226·230)、第3·4层(216·218·219·223·225)、SK101(221·227~229)、SK110(214·215·220·224)、不明(222)



写真4 MS84-7 次Ⅱ区遺構検出作業風景

平面形は円形ないし楕円形と思われる。南側のSK101と110は同一の遺構となる可能性もあるが定かではない。埋土は黒色砂混り粘土偽跡である。小穴はⅡ区全面に分布しており、さらに、北端の地層断面の観察からも小穴の存在が明らかで、本来の分布域はさらに広い。数10個があるが、柱痕跡などは不明である。

遺物の多くは、Ⅰ～Ⅲ区の第3・4層およびその下面で検出した遺構から出土した(図81)。

本来の地層に伴うものではないが、第2層からは弥生土器壺217、甕226、須恵器壺230が出土した。217は第Ⅲ様式、226は甕の底部で、226は生駒西麓産の胎土である。

第3・4層からは広口壺216、甕218・219・223・225が出土した。219はⅡ区の第3層から出土したが、断面の観察からは遺構に伴うものと考えられる。SK101から甕221、高杯227・228、台付鉢229が出土した。SK110では広口壺214・215、甕220・224が出土した。これらの弥生土器のうち、216・218・221・222は生駒西麓産の胎土である。214・216・218・220・223は第Ⅱ様式に、217・221・227・228は第Ⅲ様式、215は第Ⅱ～Ⅲ様式、222は第Ⅳ様式に属するものである。

図80に示した遺構からも、弥生土器が採取されている。細片のため図化していないが、SK105・112からは第Ⅱ様式の土器片が、SK106からは第Ⅱ～Ⅲ様式の土器片が、SK108からはⅣ様式の土器片が出土し、さらに、SD101・102、SK102・104・109・111からも弥生中期の土器片が出土している。遺構の時期については、前述のとおり、検出面での確認にとどまったため、これらの遺物をもって断定することは困難であるが、いずれも弥生時代中期におさまっている。

(清水)

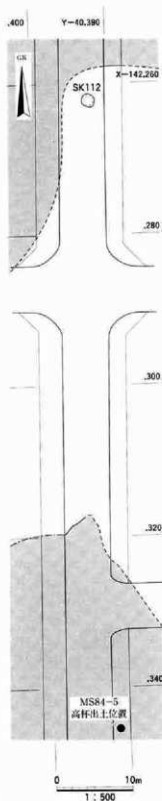


図82 Ⅱ・Ⅲ区水田もしくは蓮田層分布範囲

第17節 MS85-15次調査

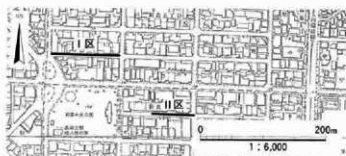


図83 MS85-15次調査箇所位置図

であるが、掘削幅は0.4～0.5mと狭く、調査は地層断面の観察にとどまった。

2) 層序

現地地表下1.3mまでの地層を確認し、I・II区ともに1～3mおきに地層柱状図を作成した。I区では42箇所、II区では24箇所に及ぶ。前者をI-1～42地点、後者をII-1～24地点と呼称する。調査で得られたデータをもとに、各区の地層の重なりを検討し、I・II区の層序を作成した(図84・85、表5)。ただし、I・II区の層序を統一して把握することはできなかった。なお、調査で用いたレベ

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森4・5丁目の東西道路部分である(図83)。ガス管の入替え工事に伴い、1985年6月14日～7月4日の間、調査を実施した。

調査地は2箇所に分かれており、北側をI区、南側をII区と呼称する。I区は東西約95m、II区は東西60mに及ぶ範囲

表5 MS85-15次調査層序表

Ⅰ区				Ⅱ区			
層序 番号	層序概念図	層 相	層 厚 (cm)	層序 番号	層序概念図	層 相	層 厚 (cm)
1		灰白色シルト質粘土	≦20	1		黒灰色砂混りシルト	≦10
2		灰黒色砂混りシルト	≦10	2		淡い灰色粘土	10
3		白色砂礫	13～27	3		灰白色粘土	5～20
4		黒色粘土	5	4		黒色粘土	5
5		灰白色粘土	15～27	5		淡灰色シルト質粘土	≦30
6		黒色粘土(暗色帯)	10	6		黒色粘土(暗色帯)	12～23
7a		灰白色粘土	5～15	7		灰色シルト質粘土～粘土	10～23
7b		淡灰色シルト～砂混りシルト	15～42	8		黒色粘土(暗色帯)	10
7c		灰色細粒～中粒砂	7～37	9a		灰白～灰色シルト～中粒砂	≧95
7d		灰白色砂混りシルト	10	9b		灰白色砂礫	≧30
8a		黒灰色シルト(暗色帯)	10～16	10		灰黒色粘土(暗色帯)	10
8b		黒色細粒～粗粒砂(暗色帯)	8～30	11a		黄褐色～灰白色シルト～砂礫	10～30
8c		灰色砂混り粘土	10	11b		灰白色シルト～粗粒砂	≧25
8d		灰白色粘土	≧45				
9a		灰白色粘土	7				
9b		淡灰色シルト～粗粒砂	8～20				
10		灰黒色粘土(暗色帯)	20				
11a		灰色粘土	≧35				
11b		灰白色シルト～中粒砂	≧27				
11c		黄白色砂礫	≧32				

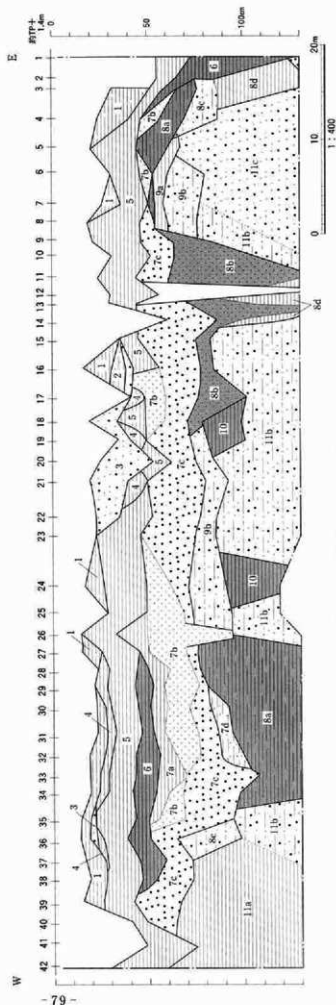
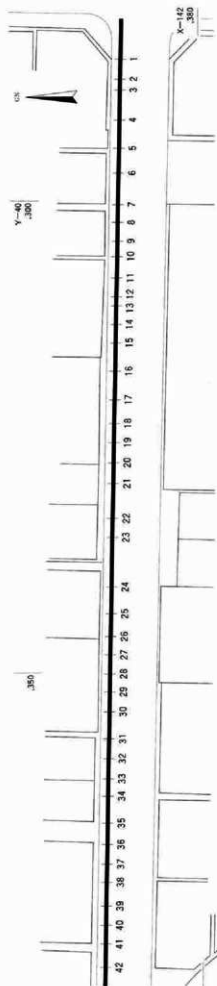


図84 I区調査地点の配置図・地質断面概式図

ル数値は現地表面下からの深さであり、現在の地表面のおおよその標高を併記しておく。

i) I区(図84、表5)

I区では現地表下1.3mまでの地層を第1～11層に区分し、第7～9・11層をさらに細分した。各層の層相は表5のとおりである。以下では、おもな層準の特徴と各層の重なりを記す。

第5層は遺跡内の広い範囲に分布する江戸時代以降の蓮根田に係わる作土層と考えられ、これより上位は人為的に形成された地層が主体である。I-16～22地点に分布する第3層は砂礫からなり、水成層と考えられる。

第6層以下は自然状態で形成された地層を主体とし、第6・8・10の各層が暗色帯、第7・9・11の各層が水成層である。

第7層はおもにI-5地点以西の窪地部分に堆積しており、第7a～7d層に細分できる。第7a～7c層は一連に堆積した地層で、上方へは細粒化している。I-30～32地点の第7c層の下位には、第8a層を埋土とする落込みの最上部に堆積した砂泥りシルトからなる第7d層が見られる。I-28～38地点では第7a層の上位に暗色化した粘土層である第6層が分布しており、第7層堆積後の窪地に形成されたものであろう。また、第6層は第7層が分布しないI-3地点以東の落込み内でも認められた。

第8～10層は起伏の激しい地形下で局所的に堆積したもので、場所によって層相が異なり、各層を統一的に把握することがむずかしい。

第8層は第7層によって覆われる暗色帯で、シルトからなる第8a層と細粒～粗粒砂からなる第8b層に区分される。第8a層は周囲より高いI-3～7地点、およびI-27～34地点で確認した落込み内に、第8b層はI-9～11地点で確認した落込み内にそれぞれ分布していた。第8d層はI-3地点以東にある第6層で埋る落込み、およびI-9～14地点にある第8b層で埋る落込みの下半で確認した。第8c層はI-2・3地点の第8d層の上位およびI-36地点で確認した。第8b層からは第Ⅱ様式の土器が出土した。

第9層は層相から第9a・9b層に区分される。第9a・9b層はI-5～8地点では第8a層の下位に連続して堆積していた。第9b層はI-19～25地点にも分布しており、I-24地点ではこの下に黒灰色土の第10層で埋る深い落込みが存在する。

第10層はI-24地点およびI-18・19地点で確認した、暗色化した粘土層である。第8b層および第9b層の下位に存在する。

第11層は層相から第11a～11c層に区分できる。第11a層はI区西部に分布する粘土層で、シルト層の偽層が帯状に含まれる。第11b層は中央部に分布するシルト～中粒砂層、第11c層は東部に分布する砂礫層である。各層の前後関係および下限は不明である。

出土遺物から地層の時期を押さえることはできなかったが、周辺の調査成果からみて、第6層は弥生時代中期後葉～古墳時代、第8～10層は弥生時代中期前～中葉に相当するものと考えられる。

ii) II区(図85、表5)

II区では現地表下1.3mの地層を第1～11層に区分し、第9・11層をさらに細分した。各層の層相は表5のとおりである。

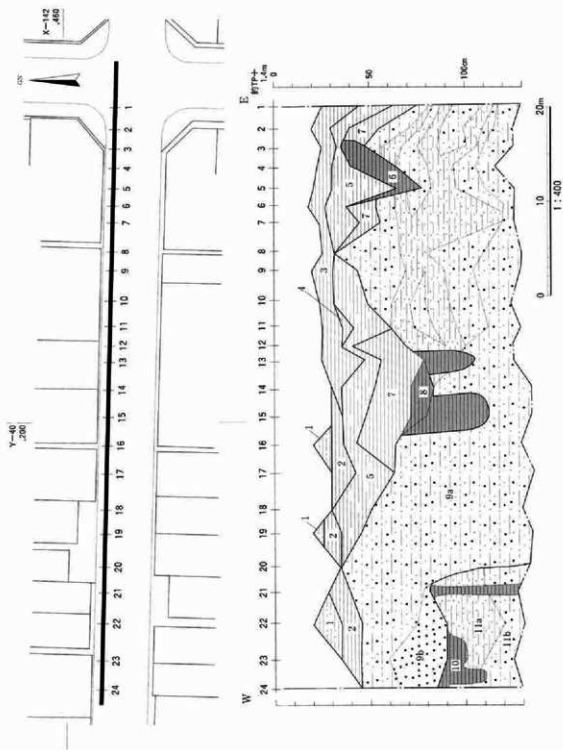


図85 II区調査地点の配置図・地層断面模式図

第5層より上の地層は、均質かつ細粒な堆積物からなり、人為的に形成されたと考えられる。特に、第5層はI区の第5層に相当する作土層と考えられ、II-19地点以東に分布する。

第6層以下は自然によって形成された地層で、水成層の堆積と暗色化のサイクルが3回認められた。このうち、第6・8・10の各層は暗色化した粘土層、第7・9・11の各層は水成層である。

第9層は調査区の全域に分布する水成層で、砂礫からなる第9b層と、中粒砂～シルトからなる第9a

層に区分できる。第9b層はⅡ-21地点以西に分布し、第10層を直接覆っている。第9a層はⅡ-20地点以東で下位の地層を挟って厚く堆積しており、Ⅱ-14地点以東では地層の延びがよく、灰白色を呈するやや粗粒な地層と灰色を呈する細粒な地層が互層で堆積していた。

第8層は第9層堆積後の窪地部分に形成された暗色帯で、Ⅱ-13・15地点では溝状の落込み内を埋積している。この上位にはシルト質粘土～粘土からなる第7層が堆積している。第6層はⅡ-3～5地点に分布する暗色帯である。第7層との前後関係は未確認であり、第8層と同一層の可能性もある。また、第10層はⅡ-21地点以西に残存する暗色帯で、Ⅱ-21・24地点では土壌もしくは溝状の遺構を確認した。

第11層はⅠ-22地点以西に残存しており、層相から第11a・b層に細分できる。第11b層は層厚25cmまで確認し、下限は不明である。

Ⅰ区同様、周辺の調査成果から、第6・8層は弥生時代中期後葉～古墳時代、第10層は弥生時代中期前～中葉に相当するものと考えられる。

3) 出土遺物

弥生土器甕231・232、壺底部233を図化した(図86)。231はⅠ-8もしくは9地点から、232はⅡ-23もしくは24地点から出土し、233は出土地の記載がなく不明である。出土層位についても調査の記録に残っておらず、不明である。ともに第Ⅱ様式に属するものであろう。(大庭)

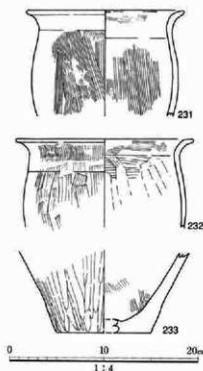


図86 出土遺物
Ⅰ-8・9地点(231)、
Ⅱ-23・24地点(232)、不明(233)

第18節 MS85-32次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森4丁目と5丁目を区切る東西道路部分である(図87)。1986年1月20日から調査を開始し、道路の歩道部分に対し、幅0.4~1.0m、深さ1.2~1.5mのトレンチを26箇所掘削した(図88、写真5)。道路の東半分近くの範囲では、以前の道路建設などに伴う攪乱が著



図87 MS85-32次調査箇所位置図

しく、弥生時代の遺物包含層・遺構はおもに西側で検出された。ガス管入れ工事に伴う調査のため、平面的な調査は実施せず、地層断面の観察と遺構・遺物の確認を主体に3月18日に終了した。

2) 層序

本調査地では、大別して以下の5層準を確認した(図89)。

第1層：黒褐～灰褐色含砂礫粘土質シルト層である。

第2層：灰色含砂粘土層である。

第3層：黒～暗褐色含砂粘土質シルト層である。

第4層：黒～灰色含砂シルト質粘土層である。

第5層：(上部)灰白～灰黄色細～中粒砂層である。

(下部)暗青灰～緑灰色細～中粒砂層である。

第1層は江戸時代以降の作土層で、第2層は江戸時代の運根田に係わると考えられる作土層である。道路建設による攪乱の及んでいない範囲では、調査箇所全体に広がっている。

第3・4層は調査箇所の西半分と東半分の西側にかけて残存する弥生時代の遺物包含層である。7～9・11地点ではこれらの地層が確認できる。なお、11地点では、第3層の下位に、第4層の礫層が混った灰オリブ色細砂層が認められる。第3・4層は分けて掘削しておらず、両者からは第Ⅱ様式を主体に第Ⅲ様式の土器が若干出土している。また、ほかには弥生土器が包含されるものの、第3・4層のようなシルト～粘土ではなく細粒砂を主体とする場所(12～15地点)がある。12地点では礫のラミナが認められるため、溝または自然流路の埋土と考えられるが、14・15地点では認められない。12地点では第Ⅳ様式の土器が出土しており、第3・4層から出土した遺物よりも新しい。第3・4層間に挟在する細砂層の存在を考えると、第4層が弥生時代中期前～中葉、砂層および第3層が中期後葉の遺物包含層に対比される可能性もある。8地点に北接するMS85-14次調査地では、弥生時代の遺物包含層が2層準認められ[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1987]、上層の緑灰色シルト混り黒色粘土層の下面で第Ⅲ～Ⅳ様式の遺構が、下層の灰色粘質シルト層下面で第Ⅱ～Ⅲ様式の遺構が

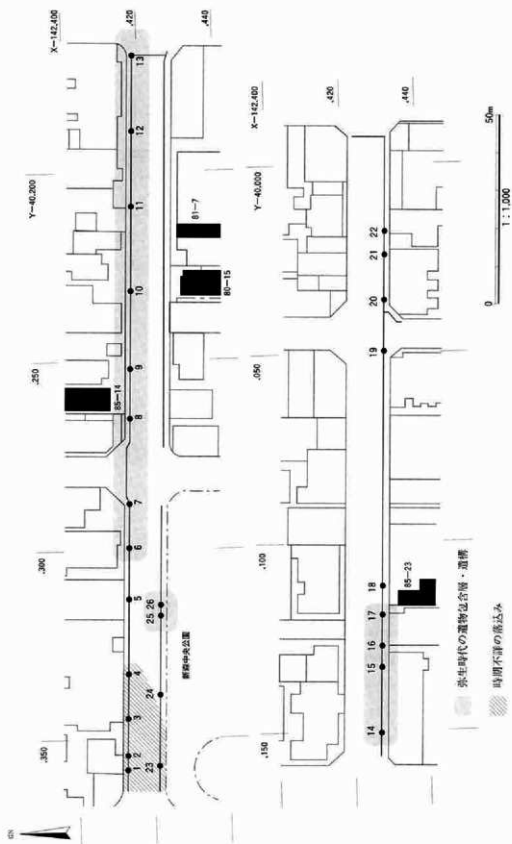


図88 調査地点配置図

検出されており、第3・4層がそれらに対比されると考えても矛盾はない。

第5層は水成の砂層で、弥生時代以前に淀川の沖積作用で堆積した自然堤防に当る。また、4地点以西の第5層上位の第2層基底で時期不詳の落込みが見られた。基底に粘土質シルトないしシルト質粘土層が堆積し、上方へは粗粒化している。調査地南側のMS81-17次調査で確認した弥生時代中期のSX04の埋土に対応する可能性がある(本章第10節)。

なお、古墳～平安時代のいずれかの時期に属する遺物包含層は認めることができなかった。周辺の調査では確認されているため、江戸時代以降の作土層によって削平されたものと考えられる。

3) 遺構と遺物

ガス管の埋設工事に伴う調査のため、性格を明らかにできた遺構はない。10地点では断面の観察から土壌と考えられる遺構の存在が推測される。

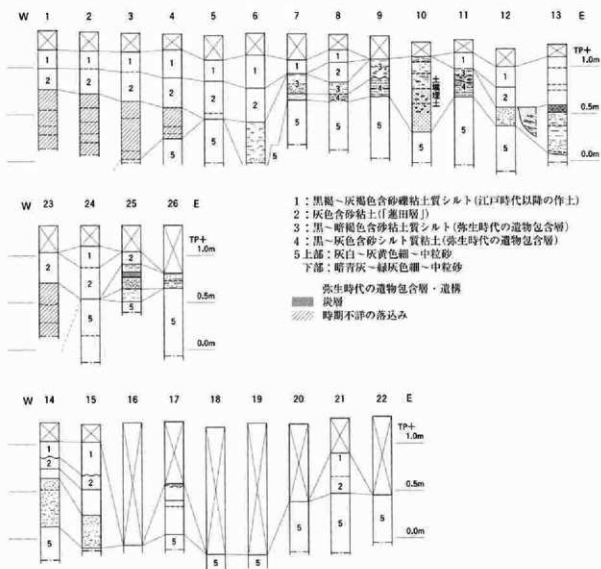


図89 地質柱状図

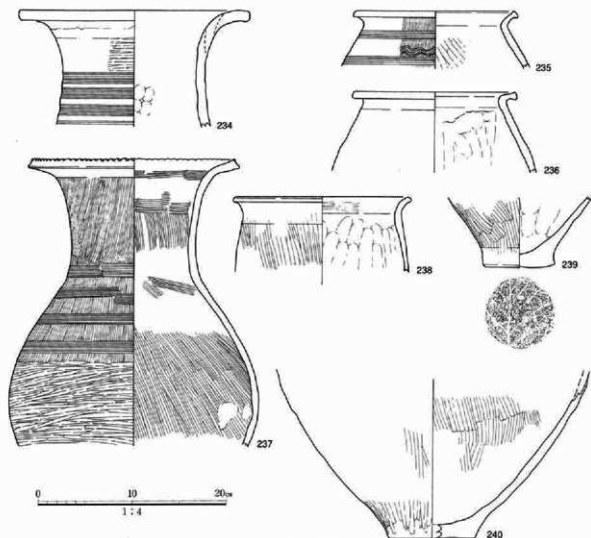


図90 出土遺物

8地点(238)、9地点(236)、11地点(234・237)、13地点(235・239・240)

遺物は弥生時代の遺物包含層および土壌から出土している。代表的な遺物を図90に示した。出土地点は、238が8地点、236が9地点、234・237が11地点、235・239・240が13地点である。234・237は広口壺、235は短頸壺である。施文は櫛描文を主体とし、口縁端部はあまり肥厚させていないが、

237は上端にキザミメを施している。236・238・240は甕である。239も甕と思われる、底部に木の葉圧痕がある。234・238は第Ⅱ様式に、235～237は第Ⅲ様式に属する。

ほかにもイノシシの後脚骨が11地点の第3層から出土している(第Ⅲ章第2節)。(清水)



写真5 MS85-32次25・26地点の調査風景

第19節 MS86-5 次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森4丁目23に所在し、遺跡のほぼ中央部、新森中央公園の隣に位置する(図91)。民間の建物建設工事に伴って1986年4月22日～5月13日の間、調査を実施した。

調査対象は敷地内の南北13m、東西7mの範囲である。第2層を除去した段階と、第5層を除去した段階の、合計2面で遺構の検出作業を行った。第2層を除去して確認した鎌倉～室町時代の溝や落込みについては記述を省略し、第5層下面で検出した弥生時代中期の遺構およびこの時代の遺物について報告する。

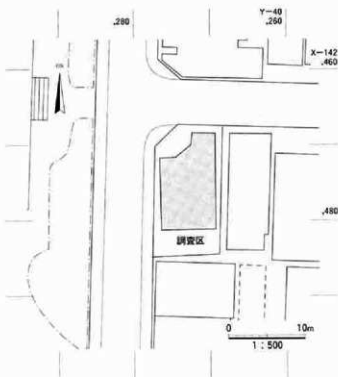


図91 MS86-5 次調査箇所位置図

2) 層序

現地表下1.5mまでの地層を、以下の第1～6層に区分した(図94)。

第1層：現代の整地層である。

第2層：黒褐色極細粒砂混り粘土質シルト層である。層厚は10～20cmある。瓦器を含み、鎌倉～室町時代の作土層と思われる。本層上面および基底面で東西方向の溝を検出した。

第3層：灰オリーブ色極細粒砂混り粘土質シルト層で、調査区北端に分布していた。最大層厚は20cmある。奈良時代の須恵器・土師器を含む。

第4層：下部の灰オリーブ色極細粒砂混り中～大礫と、上部のオリーブ灰色極細粒砂からなる水成層である。上部層は調査区全域に、下部層は調査区北半にそれぞれ分布し、下部層は下位の地層を挟んでいる。層厚は40～50cmあり、第Ⅱ～Ⅳ様式に属する大量の弥生土器や、石器遺物・動物遺体などが出土した。

第5層：暗色化した灰色細粒砂混りシルト層で、炭・植物遺体を含む。調査区南半に残存しており、層厚は約20cmある。第Ⅱ様式の弥生土器を含む。本層を除去した段階で土壌・小穴を検出した。本層上面の高さは、TP+0.7m前後である。

第6層：淀川の沖積作用で堆積した自然堤防に当る。

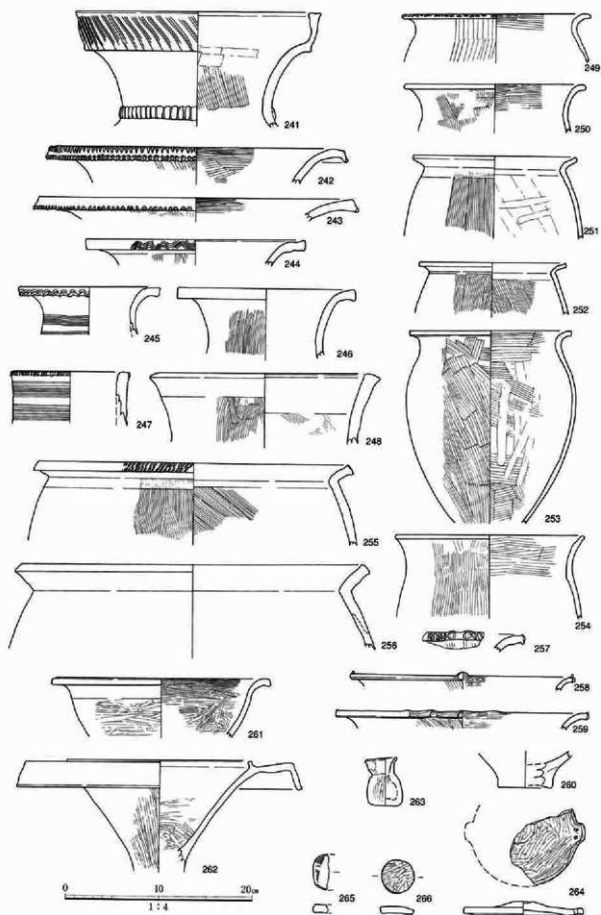


图92 第4层出土文物(1)

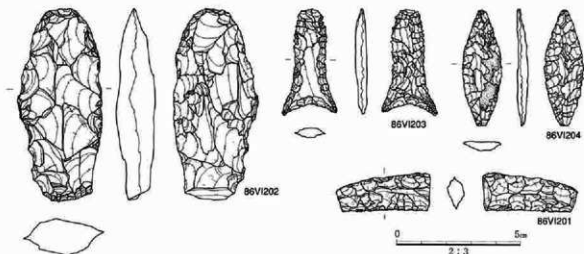


図93 第4層出土遺物(2)

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物

第4層出土遺物 弥生土器は広口壺241～246、直口壺247・248、甕249～260、鉢261、高杯262、ミニチュア壺263、蓋264が、土製品は円板状土製品265・266が出土した(図92、図版29・32)。261が第4層上部から出土したほかは、すべて下部の砂礫層に含まれていた。250は生駒西麓産の胎土で、254は胎土中に雲母粒を含む。260は結晶片岩を含む紀伊からの搬入品である。257～259は口縁端部に瘤状突起を有する近江系の甕である。また、口縁部内面にヨコハケを施し、口縁端部にキザミメを巡らす249は山城地域からの搬入品であろう。これらは第Ⅱ様式から第Ⅲ様式にかけてのものである。図化していないが、本層内から出土した土器の中には、第Ⅳ様式に下る可能性のある個体もわずかに含まれている。

石器遺物は打製の石小刀86VI201、尖頭器の未製品86VI202、石鏃86VI203・204が出土した(図93、図版39・40)。86VI201は先端・基部は折れて欠失している。86VI202は表裏面ともに縁辺から調整を施しているが粗い。86VI203は刃部の長い凹基無茎式石鏃である。表裏面ともに素材剥片の剥離面が残り、刃部の調整は縁辺に浅く施されている。先端は丸いまま残っており、未製品と考えられる。86VI204は細身の本葉形となる凸基無茎式石鏃である。表面に自然面が残っている。石材はすべてサヌカイトである。

動物遺体はシカの前頭骨、イノシシの歯および大腿骨が出土した(第三章第2節)。

ii) 第5層下面検出遺構(図94、図版11)

第5層を除去後に遺構の検出作業を行った結果、SD01、SK01～05、SX01、小穴を確認した。第5層上もしくは第5層内から掘込まれた遺構が含まれている可能性もある。これらの遺構および第5層から出土した土器は第Ⅱ様式に限定される。

SD01 調査区北西部にあり、調査時には幅0.9m、深さ0.6mの細長い土壌として認識していたものである。東側でこれとつながりそうな落込みを検出しており、調査ではその間を掘り残してしまったようである(図版11)。位置関係から西隣のMS82-18次調査のV区で検出したSD01(本章第12節)

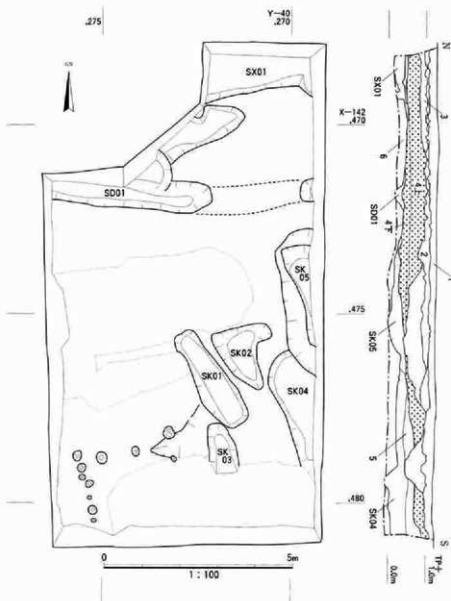


図94 第5層下面平面図・東壁断面図

とつながる東西方向の溝の可能性が高い。埋土は緑灰色礫混り細粒砂である。出土遺物の有無は不明である。

SK01 調査区の中央南よりで検出した平面が長方形の土壌である。長軸2.8m、短軸0.8mで、深さは約0.2mあった。埋土中から比較的多くの土器が出土しており、壺体部267、甕268・269・273・274、甕の蓋277を図化した(図95、図版32)。268は胎土中に結晶片岩粒を多く含む紀伊からの搬入品である。273・274は生駒西麓産の胎土である。これらは第Ⅱ様式に属するものである。

SK02 SK01の東隣で検出した浅い土壌で、平面は不整形である。第Ⅱ様式に属する甕275・276とともに、セタジミを中心にヒメタニシやハマグリなどの貝がまとまって出土した(図95、図版11、第Ⅲ章第2節)。

SK03 SK01の南側で検出した土壌である。南半は攪乱を受け残存しないが、SK01と同様、平面

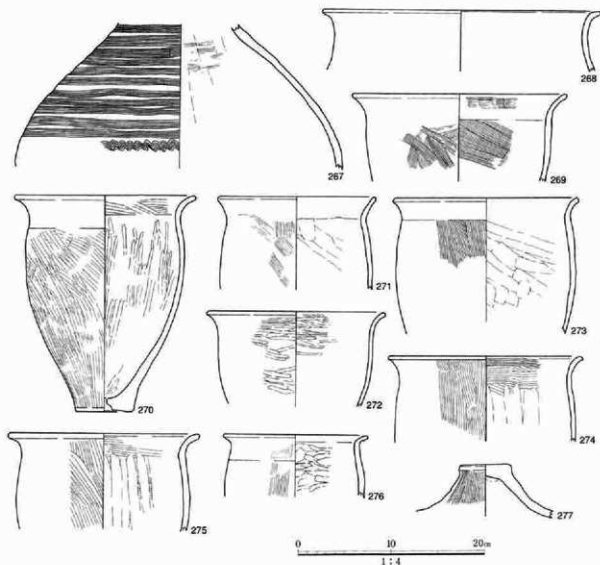


図95 遺構出土遺物

SK01(267・269・273・274・277)、SK02(275・276)、SK03(270・272)

形は長方形を呈する。ほぼ垂直に掘込まれており、深さは0.7mあった(図版11)。埋土は黒褐色粘土質シルトが主体で、上部に植物遺体を多く含む。第Ⅱ様式の甕270～272のほか、同時期の土器片が比較的多く出土した(図95、図版29)。270は完形に復元できる個体で、焼成後に底部に小孔を穿っている。調整は体部外面および口縁部内面が粗いハケで、体部内面に縦方向のヘラミガキを施す。

SK04・05 調査区の東壁沿いで一部を検出した土壌で、調査区内での深さはSK04が0.5m、SK05が0.4mあった。埋土はSK04が黒色細粒砂泥り粘土質シルト、SK05が灰色砂泥り粘土質シルトである。SK04はSK05に切られている。

SK01 調査区北端で検出した落込みで、調査区内での深さは0.3mあった。埋土は灰色細粒砂泥り粘土質シルトである。第Ⅱ様式の土器片が少数出土した。

小穴群 調査区南西部でし字状に並ぶ小穴群を検出した。建物や欄を構成する柱穴の可能性もある。

(大庭)

第20節 MS86-18次調査



図96 MS86-18次調査箇所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は遺跡北部の清水2丁目14・17に所在する(図96)。1986年7月18日～24日の間、ガスの入替え工事に伴い、東西道路部分で調査を実施した。

調査は公道上で工事と併行して行ったため、要所毎に地層観察を行う方法に限定された(写真6)。これらの地点を1～11地点と呼称する。このうち、枝管部分を除いた本管部分の1～8地点の観察結果について報告する。

2) 層序

現地表下1.2～1.4mまでの地層を確認し、以下の第1～12層に区分した(図97、写真7)。なお、遺物がほとんど出土していないため、各層の年代観は周辺の調査結果と照らし合わせて推定した。

第1層：現代の攪乱および整地層である。

第2層：黒灰色粘土層と灰黒色中粒～細粒砂層の互層である。

第3層：青灰黒色粘土層～暗青灰色粘土質シルト層である。江戸時代以降の作土層で、連根田耕作に係わる可能性がある。

第4層：灰黄色粘土層で、5地点でのみ確認した。

第5層：暗灰色シルト質粘土層で、5地点でのみ確認した。

第6層：灰黒色中粒砂層で、1・2地点で確認した。

第7層：黒～灰黒色シルト質粘土層で、7・8地点で確認した。

第8層：黒褐色シルト質粘土層である。5地



写真6 MS86-18次調査風景



写真7 6地点地層断面

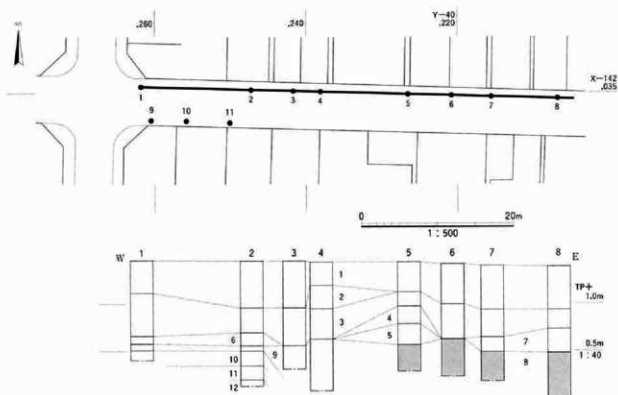


図97 調査地点の配置・地質柱状図

点以東に分布しており、植物遺体を含む。

第9層：黒灰～灰黒色砂混りシルト質粘土層で、4地点以西に分布する。

第10層：灰黒色中～細粒砂層で、1・2地点で確認した。

第11層：灰黒色砂混りシルト質粘土層で、2地点で確認した。

第12層：灰色中粒砂層で、2地点の最深部で確認した。

第5層以下は自然堆積によるもので、弥生時代の地層と推定される。これらのうち、第5層と第6層、第7・8層と第9層との前後関係は不明である。また、3・4地点で第9層が分厚く堆積しており、この範囲に自然の窪地があった可能性がある。遺跡北部にある調査地周辺は、弥生時代には低湿地であったことが予想されよう。

(大庭)

第21節 MS86-38次調査

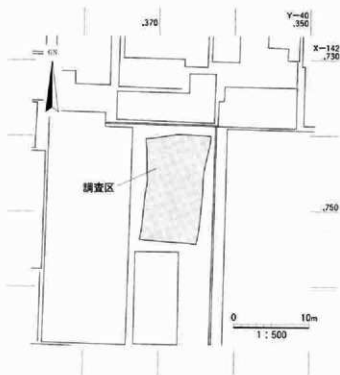


図98 MS86-38次調査箇所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は遺跡南端の新森4丁目1に所在する(図98)。民間の建物建設工事に先立ち、1986年11月14日に試掘調査を行い、現地表下約0.9mで黒褐色シルトを埋土とする遺構を確認した。再度、12月23日に工事に伴って立会調査を行ったところ、南北方向の溝が検出されたため、調査を12月26日まで続行した。

調査区は敷地の北部で、南北約14m、東西約8mの範囲に設定した。現地表下約1mまでの第1・2層を重機によって除去し、以下の地層を人力によって掘下げた。

2) 層序

現地表下1.5mまでの地層を、第1～4層に区分した(図99)。

第1層：現代の整地層である。

第2層：灰色粘土～シルト層で、層厚は70cmある。色調は上部に比べ、下部がやや暗い。瓦片を含む。江戸時代の作土層と考えられる。本層の基底面で溝および土塹を検出した。

第3層：黒褐色極細粒～細粒砂層で、層厚は10cmある。遺物はまったく含まれない。残存していた上面の高さはTP+0.3mであり、調査地以北の遺跡各所で確認される、弥生時代中期の遺物を包含する地層に対応する可能性がある。

第4層：黄褐色細～中粒砂層である。層厚は20cmまで確認したが、遺物は出土しなかった。

3) 遺構と遺物

弥生時代中期の遺構・遺物はまったく検出されなかった。遺跡の南端に位置する調査地周辺は、この時代の生活域外であったと考えられる。新しい時代の遺構としては、第2層の基底面でSD01～04、SK01を検出した(図99)。これらは埋土の遠いから2ないし3時期に分けられるようである。

SD01 調査区の北部で検出した東西方向の溝である。幅2.0m、深さ0.4mを測り、断面はU字形を呈する。溝の両肩には0.7～0.9m間隔で平行する杭列がある。埋土は淡灰～青灰色粘土で、肥前系磁器が出土した。

SD02・03 調査区の南西部で検出した。SD02は南北方向の溝で、幅0.9~1.5m、深さ0.1mと浅い。SD03はこれに取付く幅0.5m、深さ0.3mの東西溝である。ともに埋土は淡灰~青灰色粘土で、SD01と共通することから江戸時代の遺構と考えられる。

SD04 調査区のほぼ中央で検出した南北方向の溝で、調査区の南端で東に曲る。調査区北壁の地層観察によれば、異なる溝が切合っているが、調査時には一括して掘上げている。深さは最大で0.2mあり、埋土は黒色シルト~極細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SD05~07 調査区の北西端で検出した南北方向の溝で、規模はともに幅0.5m、深さ0.2mである。埋土は黒色シルト~極細粒砂で、遺物は出土しなかった。SD04と平行しており、また埋土がこれと共通することから、SD04~07は同時期の遺構と考えられる。

SK01 調査区の東壁沿いで検出した長方形の土塼で、南北3.0m、東西0.4m以上ある。黒色シルトと第4層を起源とした偽磔で埋戻されていた。遺物は出土しなかった。(大庭)

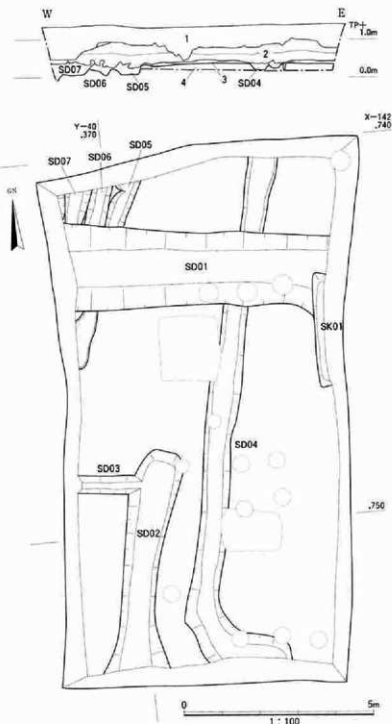


図99 調査区平面図・北壁断面図

第22節 MS87-6次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は清水2丁目～新森5丁目にあり、森小路遺跡のほぼ中央部に位置している(図100)。今回調査の対象となった歩道設置工事区内でも1980年に水道管のライニング工事に伴ってMS80-3次調査が行われており、弥生時代中期前～後葉にかけての遺構・遺物をはじめ、古墳時代中期後葉の遺物が出土している(本章第1節)。本調査に先立って行われた試掘調査でも、各所で弥生時代中期の遺物を含む地層が確認され、道路内であるにもかかわらず遺跡の残りが予想以上に良好なことがわかった。特に新森5丁目付近では道路敷整地層の直下から弥生時代中期の遺物を含む地層や柱穴などの遺構が確認されたため、歩道設置区間の651㎡を対象にした発掘調査を実施することになった。

調査に際しては、民家の通路および片側車線を確保する必要があったため、調査箇所を10区画(1～10区)に区分し(図100)、1987年5月6日から1・6区より着手して、8月19日には民家の出入口やガレージなど、工事とのかね合いをみて実施した立会調査を含めてすべての調査を終えた。



図100 MS87-6次調査箇所

位置図

本報告ではまず1～8区の基本層序および各層出土の遺物を述べた後、1区から順を追って各区の調査成果について記述する。なお、後世に攪乱されていた6・7区については層序の説明のみにとどめ、遺構や遺物がまったく確認されなかった9・10区は報告対象から除外した。

2) 層序

1～8区では現在の歩道の整地層の下で、第1～8層の地層を確認した(図101)。

第1層：明黄褐色砂礫混り細粒砂層の水成層である。層厚は10～30cmある。

第2層：暗灰黄色砂礫混りシルト層で、層厚は10cm前後ある。戦前に行われた土地区画整理以前の水田の作土層である。

第3層：灰オリブ色砂礫混りシルト層で、層厚は30cm前後ある。酸化鉄やマンガンを含む作土層である。江戸時代以降の陶磁器片を含む。

第4層：層厚が30cm前後あり、第4a層の暗灰黄色極細粒砂混り粘土質シルト層と第4b層の灰オリブ黒色粘土質シルト層に区分される。ともに江戸時代以降の陶磁器を含み、下面の近くで踏込みや耕作痕跡などが認められた。本層は当地域で「蓮田層」と呼ばれている蓮根田の作土層に対比される。

第5層：黒褐色粘土質シルト～シルト混り細粒砂層で、層厚は20cm前後ある。1～5区では本層の

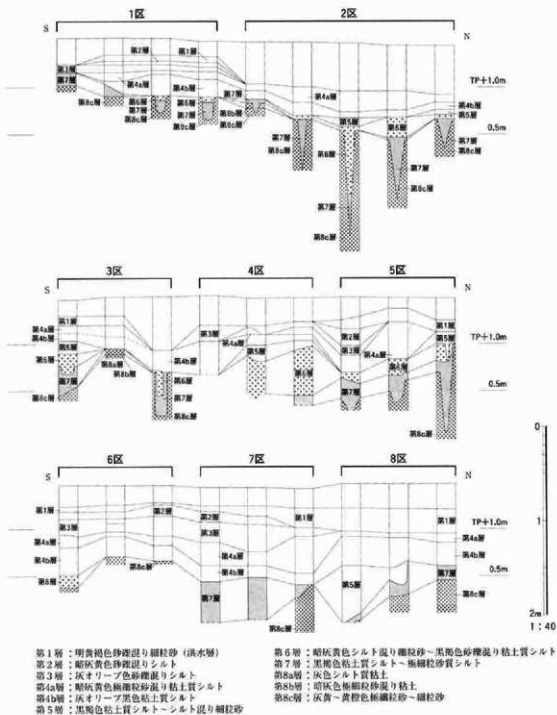


図101 地質柱状図

下面から弥生時代中期後葉の土壌や小穴群が検出されたほか、上部においては古墳時代中期後葉の遺物が出土した。本層は暗色帯であるが上位の耕作で攪乱されており、2～4・8区以外では残りはよくなかった。また、8区では本層準の水成層が確認されており、ここでは多量の植物遺体や流木のほか、古墳時代中期後葉の本製品がまとめて出土した。

第6層: 暗灰黄色シルト混り細粒砂～黒褐色砂礫混り粘土質シルト層で、層厚は30～40cmあり、砂粒のラミナが顕著に観察された。本層の上部には直径5mm前後の円礫が薄く堆積していたが、これ

は当地域を円礫をも押し流す濁流が襲ったことを示している。なお、本層から出土した多量の第Ⅱ～Ⅲ様式に属する弥生土器片は、接合関係にあるものがきわめて少ないことから、これらは当地の北東・北部より円礫とともに、水流によって運ばれて再堆積したものと思われる。

第7層：黒褐色粘土質シルト～極細粒砂質シルト層は、層厚が20～40cmあり、調査地のほぼ全域で認められた。本層は7区以北の低地部では多量の流木を含むほか、葦や木葉の薄い層を挟んでおり、全体にビート質であった。

第8層：本層は第8a・8b・8c層に区分される水成層で、従来より森小路遺跡の地山と呼ばれていた地層に相当する。このうち、第8a・8b層は灰～暗灰色シルト質粘土あるいは極細粒砂混り粘土層で、1・3区の微高地部で確認されており、第8c層の黄灰～黄橙色極細粒および細粒砂層は調査地の全域に堆積していた。第8層の上面の高さはTP+0.5～1.0m前後あり、微高地上に位置する1～6区では弥生時代中期前～後葉の土溝・小穴群などの遺構をはじめ、落込みや流路が検出された。

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物

調査区が細長く広範囲にわたるため、各調査区を一括して記すこととする。それぞれの出土地区は図を参照されたい。なお、木製品については、viii)項に記述した。

278～305・307は弥生土器の壺である(図102・103、図版28)。289は第2層、278・288・291・299・303・305は第3層、302は第4層、279・282・290・295・297・298・300・304は第5層、280・281・283・284・286・292～294・296・301・307は第6層、285・287は第7層から出土した。

278は緩やかに外反した口縁部の下端が肥厚する広口壺である。279～281は口縁部が水平に開いた広口壺で、281以外は口縁部の外端面あるいは下端にキザミメが巡る。282は口縁部が短く開く広口壺で、口縁部の外端面に櫛描波状文を、頸部に4条の櫛描直線文を施す。283は口縁部と頸部の境が不明瞭な広口壺で、口縁部の外端面に櫛描波状文、頸部に3条の櫛描直線文が巡る。284は口縁部を上下に大きく拡張した広口壺である。口縁部の外端面に櫛描簾状文を綾杉状に施したのち、刺突文を加えている。285は口縁部を下方に拡張した広口壺で、口縁部の上下端にキザミメがある。286は口縁部が大きく開いた広口壺で、頸部に3条の櫛描直線文が巡る。287は無頸壺で、器体の外面には6条の櫛描直線文が時計回りに巡る。288・289は口縁部が垂下した広口壺である。口縁部の外端面に櫛描簾状文を施している。288は胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。290は一旦開いた口縁部に粘土紐を縫ぎ足した受口状口縁の壺で、口縁部の外端面には櫛描波状文とにぶい沈線が巡る。291は大きく開いた口縁部の端部を上下に拡張した広口壺で、口縁部の外端面には3条の凹線文が、内面には扇形文が巡る。292は外上方に直線的に開く頸部から口縁部が短く外反する広口壺である。口縁端部は下方に肥厚し、面をもつ。293～296は口縁部の下端を肥厚させた広口壺で、口縁部の下端に293・294・296はキザミメ、295はユビオサエによるキザミメを施す。294の口縁部の外端面には斜格子文が、同内面には櫛描波状文が巡る。297は短く開いた口縁部を上下にわずかに肥厚

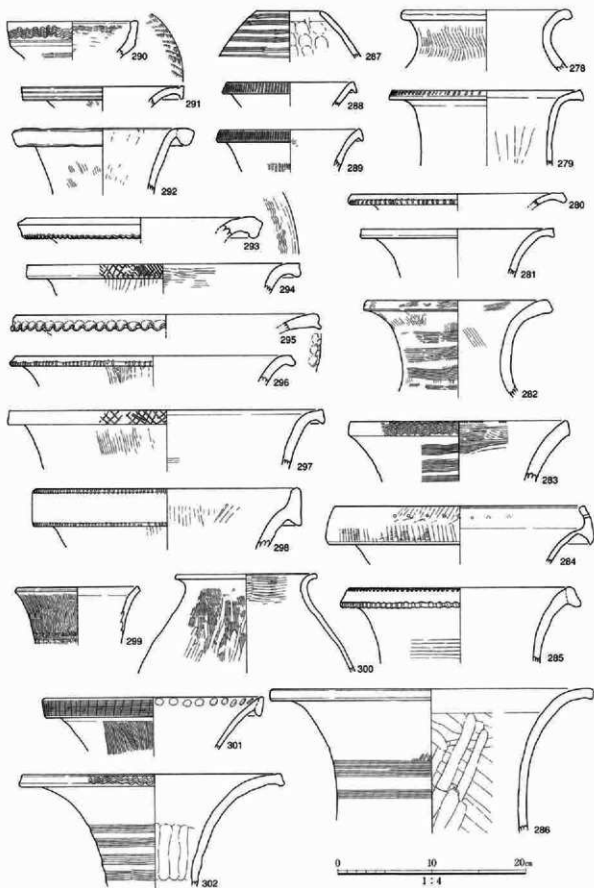


图102 出土文物(1)

1区第2层(289)、1区第3层(278·288·291·299)、1区第4层(302)、4区第5层(279·282·295·297·300)、3区第5层(290·298)、2区第6层(280·283·294)、4区第6层(281·284·286·292·293·296)、5区第6层(301)、5区第7层(285)、2区第7层(287)

した広口壺で、口縁部の外端面には斜格子文を施す。298は口縁部を上下に拡張させ、その上下端にキザミメを施す広口壺である。299の口頸部は筒状で、頸部の外面にはタテハケののち、横描直線文を施す。300の口縁部は短い頸部から緩やかに外反しており、体部の外面はタテハケののち、縦方向のヘラミガキを施す。頸部の内面に粗いヨコハケが残っており、形態的には甕とすべきものかもしれない。301は口縁部を垂下させた広口壺で、口縁部の外端面に横描波状文、内面に円形浮文が巡る。胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。302は細い筒状の頸部から口縁部が大きく開いた広口壺で、口縁部の下端がわずかに肥厚する。口縁部の外端面に横描波状文、頸部に4条の横描直線文が巡る。303は口縁部が大きく開いた広口壺で、口縁部の外端面に横描波状文とキザミメ、内面にも縦方向の横描波状文を施す。304は体部の上半以上を欠損したミニチュアの壺で、底部をエビオサエで整形する。305は壺の底部で裏面に粘土紐の接合痕が残る。胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。307は口縁部および底部を欠損した壺で、体部の上半にタテハケののち、やや蛇行した横描直線文を施す。

以上の壺類のうち、279・280・282・283・285～287・293～296・302・303・307は第Ⅱ様式、278・281・284・292・297～300・305は第Ⅲ様式、288～291・301・304は第Ⅳ様式に属するものであろう。

306・308～342は弥生土器の甕である(図103・104、図版27)。342は第2層、303・327・329・332・335・341は第3層、309・310・321は第4a層、308第4b層、322・323・330・337は第5層、306・307・311・312・316～320・324～326・328・333・334・338・339は第6層、313～315・331・336・340は第7層から出土した。

306は甕の底部で、調整は外面がタテハケ、内面はハケおよびナデである。308～310は口縁部が緩やかに外反した甕で、外面調整は308がタテハケ、309はタテハケののち、横方向の粗いヘラミガキを施す。310は器面が磨減しており、調整は不明である。309は胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。311は口縁部が頸部から短く外反した甕で、口縁部端をつまみ上げており、外端面にはキザミメが巡る。器体の内外面をナデにより整えている。312～314は口縁部が緩やかに外反する甕で、最大径は体部の中程にある。314は口縁部の下端がわずかに肥厚しており、調整はいずれも外面がタテハケで、内面は口頸部にヨコハケを施した314以外はナデである。315は口縁部が外上方に短く開いた甕で、体部も底部から直線的に開く。調整は体部の外面が粗いタテハケ、内面は頸部がヨコハケで、体部が縦方向のナデである。316は口縁部が頸部から短く開いた甕で、最大径は体部の中程にある。体部の調整は外面がタテハケののち、ヘラズリ状のナデ、内面はナデにより整えている。317～319は口縁部が緩やかに外反する甕で、317以外は体部を直線ぎみにおさめている。いずれも調整は体部の外面が粗いタテハケで、内面は口頸部が粗いヨコハケ、体部はナデである。このうち口縁部がやや湾曲した319の体部内面にはエビオサエが残る。320は口縁部が緩やかに外反した甕で、体部の調整は外面が縦方向のヘラミガキ、内面はナデである。321は口縁部が外上方に開いた甕で、調整は口頸部の内面が粗いヨコハケ、体部の外面は粗いタテハケである。322・323は口縁部が水平に開く甕で、後者は口縁部端をつまみ上げている。調整は322の外面がナデ、内面はハケののちナデで、

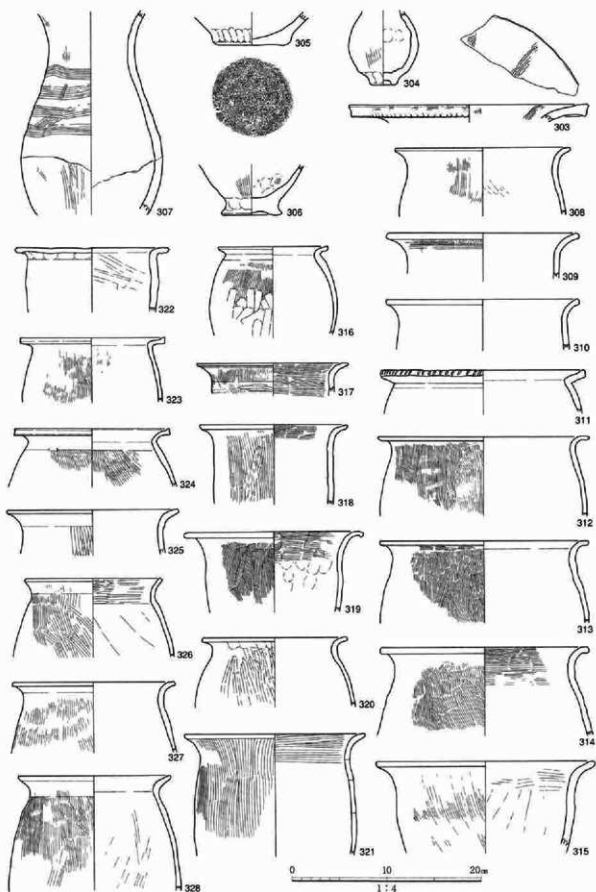


图103 出土遗物(2)

4区第3层(303)、1区第3层(305·327)、3区第4a层(309·310·321)、1区第4b层(308)、4区第5层(304·322·323)、4区第6层(306·307·312·316~320·325·326·328)、1区第6层(311)、7区第6层(324)、4区第7层(313·314)、5区第7层(315)

323は内外面ともタテハケである。324は緩やかに外反した口縁部に強いヨコナデを加えて端部をつまみ上げた甕で、口縁部の外端面が浅く凹む。体部の調整は内外面ともにタテハケである。325・327は口縁部が緩やかに外反する甕で、326・328は口縁部が外上方に開く甕である。体部の調整はいずれも外面がタテハケで、内面は縦方向のナデである。326は口縁部の内面に粗いヨコハケが残る。326は胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。329は口縁部が頸部から短く開いた甕で、体部の外面をタテハケののち、ナデにより整えている。330・331は口縁部が緩やかに外反する甕である。ともに体部の調整は粗い縦および左上りのハケで、330の口頸部内面にはヨコハケが残る。330は胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。332は口縁部が緩やかに外反する口径41cmの大型の甕で、口頸部の調整は外面がタテハケ、内面がヨコハケである。333は口縁部が水平に開く甕で、体部の調整は外面がタテハケ、内面はナデで、口頸部の内面にはヨコハケが残る。334は口径24.8cm、器高35.2cmで、口縁部が緩やかに外反する甕である。体部の調整は外面がタテハケ、内面は下方から上方へのナデで、口頸部の内面にはヨコハケが残る。335・336は甕の底部で、前者の裏面には木の葉圧痕がある。体部外面の調整は335がタテハケ、336は縦方向のヘラミガキで、内面はともにナデている。337は口縁部が外上方に開いた甕で、口縁端部をつまみ上げている。体部の調整は外面がタテハケ、内面は左上りのハケである。338～340は口縁部が短く開いた甕で、338の口縁部外端面にはキザミメが巡る。338・340の体部の調整は外面がタテハケ、内面はヨコハケで、339は体部の内外面をヘラミガキで調整する。341・342は外上方に開いた口縁部を上方あるいは上下に拡張した甕で、342の口縁部の外端面には3条の凹線文が巡る。体部の調整は341が内外面ともに縦あるいは左上りのハケで、342は外面が左上りのハケ、内面は幅広い横方向のナデである。

以上の土器のうち310・312～315・317～319・321・330～335・338～340は306・308・309・311・316・320・322・325～329・336・337が第Ⅲ様式、323・324・341・342は第Ⅳ様式に属するものであろう。

343～351はそのほかの弥生土器である(図105)。348は第4a層、345・351は第4b層、343・344・349・350は第5層、346・347は第6層からそれぞれ出土した。

343・344は高杯あるいは直口鉢の口縁部で、外面に3ないし4条の凹線文が巡る。345は口縁端部を内側に肥厚させた鉢で、口縁部の下方にキザミメを施した1条の突帯を貼付けており、体部には櫛掻波状文と直線文が巡る。346は口縁部が水平に開いた鉢で、体部の調整は外面がタテハケの後、左上りのヘラミガキで、内面は左および右上りのヘラミガキである。347は口縁部を欠損した蓋で、器面の調整は外面がタテハケ、内面がヨコハケで、頂部はヨコナデである。348は杯部の大半を欠損した高杯である。脚部の外面を縦方向のヘラミガキで調整しており、裾端部にはぶい凹線文が巡る。349は口径4.6cm、器高8.6cmで、口縁部の直下に紐孔を穿った版蛸壺である。器体の調整は内外面ともにナデである。350は脚台付きの鉢とみられるもので、体部の外面には2条の凹線文を施したのち、断面長方形の把手を貼付けている。351は裾が開く器台の脚部で、外面に細い5条の凹線文が巡る。

以上の土器のうち347は第Ⅱ様式、345・346は第Ⅲ様式、343・344・348・350・351は第Ⅳ様式に属するもので、第5層から出土した349も第Ⅳ様式に属するものであろう。

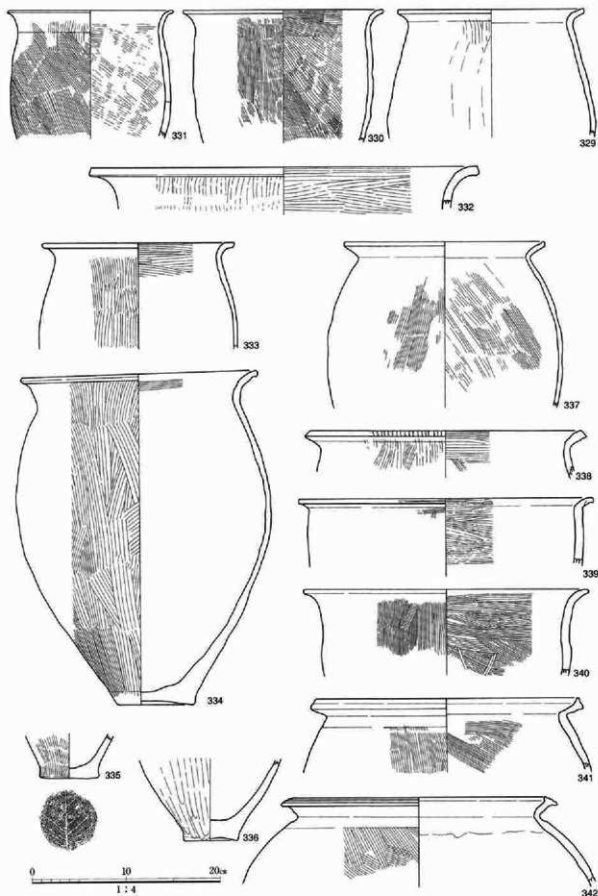


图104 出土文物(3)

1区第2层(342)、1区第3层(329·332·335·341)、4区第5层(330·337)、4区第6层(333·334·338·339)、4区第7层(331·336·340)

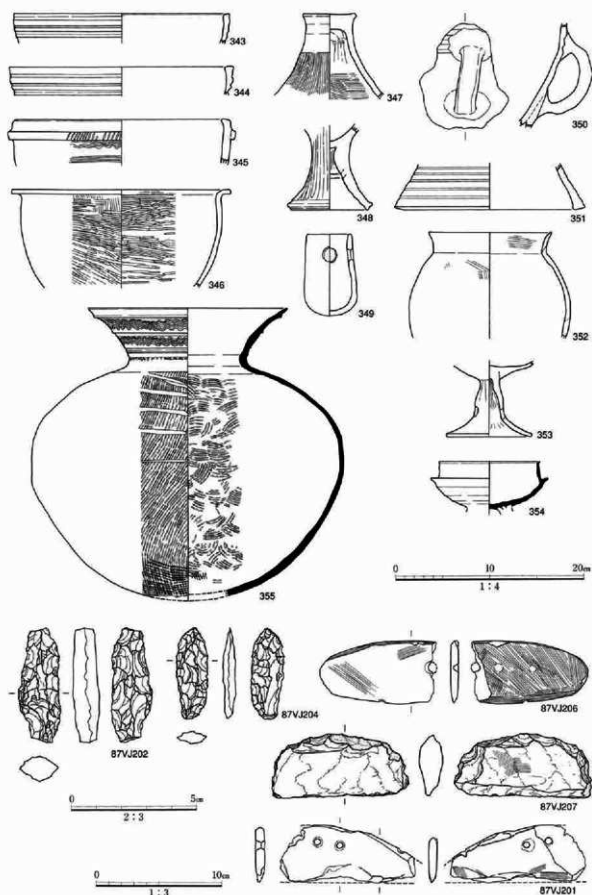


图105 出土遗物(4)

2区第4a层(348)、5区第4b层(351)、2区第4b层(345)、3区第5层(343·344·352)、4区第5层(350·353·354·355)、5区第5层(349)、2区第6层(347)、4区第6层(346)、5区第4a层(87VJ202)、3区第4b层(87VJ206)、6区第4b层(87VJ201·207)、1区第5层(87VJ204)

352~355は第5層から出土した土師器・須恵器である(図105)。352以外、いずれも4区から出土した。352は口縁部が直立ぎみに開く土師器甕で、体部の調整は外面が左上りのハケ、内面はナデである。353は杯部の大半を欠損した土師器高杯で、脚部の内面にはシボリメがある。脚部の上に円孔を三方に穿つ。354は脚部を欠損した須恵器有蓋高杯で、受け部の近くまでヘラケズリ調整する。355は口径20.4cm、器高30cm前後の須恵器甕で、体部はやや扁平である。口頸部は外上方に大きく開き、口縁端部を失りぎみにおさめる。口頸部の外面を3条の突帯で区画して襷描波状文を施す。体部の外面には細筋の平行タキで整形した後、やや幅のあるナデが螺旋状沈線様に巡る。このうち354・355はTK23型式に属し、352・353も同時期のものであろう。

以上の土器の年代観から、第7層は弥生時代中期前葉、第6層は弥生時代中期前～中葉、第5層は弥生時代中期後葉～古墳時代中期に相当すると考えられる。なお、第6層から出土した第Ⅳ様式に属する弥生土器301・324は上層からの混入品と判断する。

つぎに各層出土の石器遺物について記述する。87VJ202は5区第4a層、87VJ206は3区第4b層、87VJ201・87VJ207は6区第4b層、87VJ204は1区第5層から出土した(図105、図版39)。

87VJ201は結晶片岩製の磨製石庖丁で、刃部は直線、背部は半月形である。約1/3を欠損している。87VJ206は結晶片岩製の磨製石庖丁で、刃部はわずかに外反している。実測図の右図に示した身部には欠損後とみられる穿孔途中の紐孔が2個所ある。87VJ207は結晶片岩製の磨製石庖丁の未製品である。背および刃部に当る部分に剥離が施されている。87VJ202はサヌカイト製の小型の尖頭器あるいは石錘と考えられるものであるが、上下端が欠損しており、断

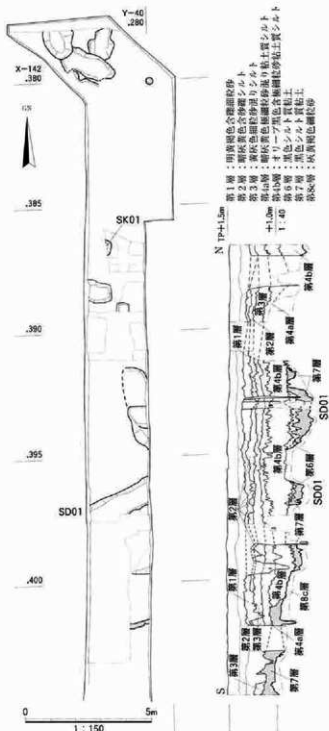


図106 1区平面図・東壁断面模式図

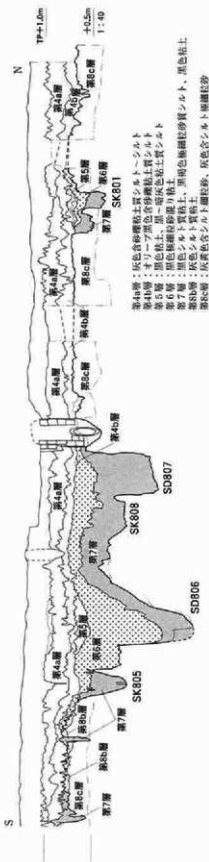
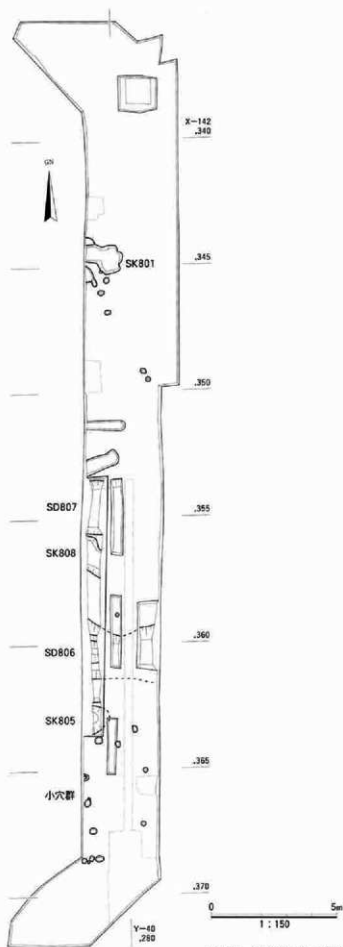


图107 2区平面图・西壁断面模式图

定しがたい。87VJ204はサスカイト製の凸基有茎式石簾である。基部は折れているが調整の状況から無茎とは考えがたい。

ii) 1区

本区では第8層上で第5～7層を埋土とする弥生時代中期の遺構を複数検出した(図106)。ただし、その性格は遺構の大半が調査範囲外であるため明らかになったものは少ない。

SD01 1区の南部に位置する幅約1.0m、深さ約0.3m前後で、断面の形態が逆台形状を呈する溝である。溝は調査区の東壁付近でL字形に曲っており、その先端は途切れている。溝内には第7層の黒色含極細粒砂シルト質粘土が堆積しており、植物遺体や第Ⅱ様式に属する弥生土器の細片が出土した。溝の形態からみて方形周溝墓の可能性もある。

SK01 1区の北部に位置する長辺1.1m、短辺0.5m前後で、平面形がやや不整形な土壌である。土壌内には第6層の水つきの灰色極細粒砂泥り粘土および灰色粘土が堆積しており、第Ⅱ～Ⅲ様式の弥生土器細片が出土した。埋土中に燃え木や炭・植物遺体などを含むことからゴミ穴と考えられる。

iii) 2区

本区では、第5～7層を埋土とする弥生時代の小穴群・土壌・溝などの遺構を検出した(図107、図版12)。調査区の中央部以南は既設の下水管の攪乱を受けており、遺構の遺存状況は悪かった。

小穴群 2区の南部に位置する10基の小穴で、それぞれ直径10～20cm、深さ30cm前後ある。これらの多くには直径10cm前後の柱痕跡が確認されたほか、掘形や柱痕跡内から第Ⅱ～Ⅳ様式に属する土器の細片が出土した。小穴群は形態や遺物から判断して複数回建替えられた堅穴住居あるいは掘立柱建物の柱穴と考えられるが、1棟の建物として組み合うものは確認されなかった。

SK801 1区の北部壁際に位置する平面形が不整形な東西1.5m以上、南北0.7～1.0m前後の土壌である。深さは検出面から0.2m前後あり、埋土の下半は第7層に相当する黒～暗灰色粘土質シルトで、上半は第6層が覆っている。弥生土器361・363・364が出土した(図108、図版27)。

361は口縁部が外上方に短く開いた甕で、体部の調整は外面がタテハケ、内面にはユビオサエが残る。363は口縁部が緩やかに外反する甕で、体部の調整は外面がタテハケ、内面はナデである。口頸部の内面にはヨコハケが残る。364は底部を欠損した口径33cm、器高31cm前後に復元される甕である。口縁部は外上方に開いており、頸部には四方に瘤状の把手がある。器体の調整は体部から口縁部の外面は左上りのハケののち、同方向のヘラミガキで、体部の内面はタテハケ、口頸部の内面は横方向のヘラミガキである。以上は第Ⅱ様式に属するものであることから、土壌の時期は弥生時代中期前葉と考えられる。

SK805 1区の南部西壁際に位置する楕円形の土壌であるが、遺構の大半が調査範囲外のため、詳細は不明である。深さは検出面から1m前後あり、埋土は第7層の水つきの黒色シルト質粘土および黒褐色極細粒砂質シルトで、弥生土器360をはじめ、貝類がまとまって出土した(図108)。

360は口径10.6cm、器高8.2cmの小型の甕である。わずかに内傾しながら立つ体部から口縁部が水平に開いており、器体のほぼ全体をユビオサエで整える。第Ⅱ様式に属するものであろう。土壌の時期は出土遺物から、弥生時代中期前葉と思われる。

SD806 SK805の北側に位置する。調査時には土壌と認識していたが、埋土からみて溝と判断した。幅5.0m前後、深さ約1.2mある。溝内には第6層に相当する黒色極細粒砂混り粘土、第7層に相当する黒色シルト質粘土・黒褐色極細粒砂質粘土・黒色粘土が堆積しており、第6層からは弥生土器356～359・362や石器遺物87VJ205をはじめ、植物遺体・炭・燃え木・貝類がまぎって出土した(図108、図版40)。

356は無頸壺で、体部外面には上から櫛描扇形文を加えた直線文3条、扇形文を加えた波状文2条、直線文が巡る。357は壺の底部で、外面の調整はヘラミガキである。358は筒状の頸部から口縁部が外上方に開いた壺で、口縁部の外端面に櫛描簾状文、内面にわずかに蛇行した櫛描直線文、頸部の外面には2条を重ねて幅太にした櫛描直線文を施している。359は口縁部が緩やかに外反したのち、水平に開いた甕である。調整は体部の外面がタテハケののち、横方向のヘラミガキで、口頭部の内面はヨコハケである。362は一旦開いた口縁部に粘土紐を継ぎ足して上方に拡張した壺である。口縁部の外端面に4本一単位のヘラミガキによる暗文がある。以上の土器のうち、壺362や簾状文が見られる壺358、ヘラミガキ調整を施した甕359などが第Ⅲ様式に下るものであるほかは、第Ⅱ様式に属する

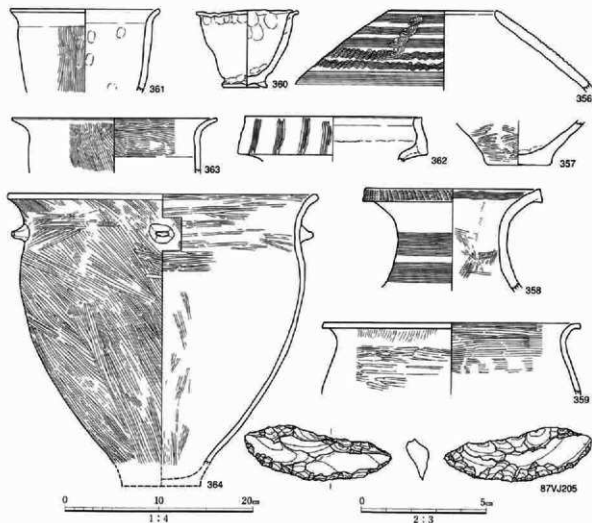


図108 2区遺構出土遺物

SK801(361・363・364)、SK805(360)、SD806(87VJ205・356～359・362)

ものであろう。

87VJ205は横形剥片の縁辺に細部調整を施して刃器としたものである。形態から鎌ないし小刀の機能が考えられる。

SD807 SD806の北側3.5mに位置する幅約2.0mの東西方向の溝で、深さは検出面から0.8m前後ある。本溝は既設管の管底より深い位置で確認されたため、調査区の東半分については工事との兼ね合いで現状保存した。溝内には第6層の黒色極細粒砂混り粘土、第7層の黒色シルト質粘土、黒褐色極細粒砂質シルトが堆積しており、植物遺体や貝殻がまとまって出土した。層準から判断して弥生時代中期前葉の溝と考えられる。

SK808 SD807の南側にある幅1m前後の土壌で、深さは0.2m前後あり、内部には第7層の黒色シルト質粘土が堆積していた。植物遺体が見られた以外に遺物は出土しなかった。

これらの遺構のうちSD806・807、SK808は出土遺物や層準から判断して弥生時代中期前葉に掘込まれたものであろうが、第Ⅱ様式の新しい段階の土器を含む第7層の堆積が終息するころにはSD807およびSK808は埋没しており、SD806も大きな窪地になっていたものと考えられる。さらに、第Ⅲ様式土器を含む第6層が堆積したところには、SD806も完全に埋没しており、ほぼ平坦になっていたようである。SD806・807は規模や方向から、弥生時代中期前葉の集落を画する大溝の可能性があるが、ともに機能した期間は短かったものと思われる。

iv) 3区

本区では南部および北部に遺構の分布が偏る傾向が窺われた。弥生時代の遺構には第6・7層で埋まる土壌や落込みがあり、古墳時代の遺構は第5層内から掘込まれた土壌や小穴群がある(図109・図版12)。これらのほかに3区の南部では須恵器や土師器からなる土器溜りが見られた。

SX701 3区の北部に位置する南北幅3.0~3.5mの落込みで、底面には凹凸がある。落込みの東西端は調査範囲外で、深さは検出面から0.2~0.6mあった。内部には第6層の黒褐色砂礫混り粘土質シルト・黒色含シルト極細粒砂、第7層の黒色含極細粒砂粘土質シルトが堆積しており、弥生土器365~379をはじめ、丸太材が出土した(図110・117、図版27)。

365は口縁部が外上方に開く甕で、体部の調整は外面がナデ、内面は左上りのハケの後、縦方向のヘラミガキを施している。366は口縁部が緩やかに外反した甕で、体部の調整は外面が左上りのヘラミガキで、内面は横方向のヘラミガキである。367は口縁部が直立ぎみに開いた甕で、体部の調整は外面がタテハケののち、横方向のヘラミガキで、内面はナデである。368は口径23.1cm、器高23.8cmで、口縁部が外上方に開いた甕である。体部の調整は外面がタテハケののち、左上りのナデとヘラミガキ、内面はナデを施しており、口頸部の内面にはヘラミガキが残る。369は底部を欠損しているが、口径22.8cm、器高21.5cm前後に復元される甕である。口縁部は緩やかに外反しており、端部がやや肥厚している。体部の調整は外面が縦および横方向のヘラミガキで、内面は縦方向のハケである。370も口縁部が緩やかに外反する甕で、体部の調整は外面がタテハケ、内面はナデで、口頸部の内面にはヨコハケが残る。371は短く開いた口縁部をユビオサエで整えた甕である。体部の調整は外面が左上りおよび横方向のヘラミガキで、内面は左上りのハケである。372は口径10.4cm、器高2.6cmの甕であ

る。口縁部の近くに紐穴を穿つ。器体の調整は内外面ともにヘラミガキである。373は内傾しながら立つ頸部から口縁部が外上方に開いた壺である。頸部の外面をタテハケののち、左上りのヘラミガキを施す。374は口縁部が緩やかに開く広口壺で、口縁部の外端面は浅く凹む。頸部の下端に2条の櫛直線文が巡る。体部外面の調整は横方向のヘラミガキである。375は大きく開く口縁部の下端が肥厚した広口壺である。内面に横方向のヘラミガキを施す。胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。376は口径17.6cm、器高23.4cmの甕で、緩やかに外反した口縁部の端部にキザミメがある。細身の体部の調整は外面がタテハケ、内面はナデである。口頸部の内面にはヨコハケが残る。377は甕の底部で、外面を縦方向のヘラミガキで調整する。378は口径19.0cm、器高25.0cmの甕で、口縁部や体部の形態は甕376と変わらない。体部の調整は外面がタテハケ、内面はタテハケののち、ナデ整える。口頸部の内面にはヨコハケが残る。379は口径26.0cm、器高34.7cmで、口縁部は外上方に緩やかに開く。体部の調整は外面がタテハケののち、縦方向のナデおよびヘラミガキで、内面はハケののち、右から左上りのナデ、次いで頸部に縦方向のナデを施す。以上の土器は第Ⅱ様式に属するが、口縁部の内外面をヨコナデ調整した甕365・369・379は新しい段階のものであろう。

SK701 3区の中央部に位置する南北1.6m前後の土壌であるが、東半分を攪乱されていた。深さは検出面から約0.2mあり、埋土は第7層の炭・灰を多量に含む水つきの黒色シルトで、燃え木や弥生土器380が出土した(図111)。

380は口縁部が緩やかに外反する甕で、口縁端部がわずかに肥厚している。体部の調整は外面が左上りのハケ、内面はナデであり、口頸部の内面にはヨコハケが残る。第Ⅱ様式に属するものである。

SK703 SX701の北側に位置する南北1.2m、深さ0.15m前後の土壌である。遺構の西部は攪乱され、東部は調査区外のため、詳細は不明である。埋土は第7層の暗灰色含極細粒砂粘土質シルトで、少量の弥生土器が出土した(図111)。

382は脚裾部を欠損した小型の高杯で、杯部は直線的に開く。杯部の外面をユビオサエで整える。第Ⅱ～Ⅲ様式に属するものであろう。

SX705 3区の南部に位置する南北3～3.5m、深さ0.3m前後の落込みで、底面には凹凸がある(図109)。埋土は第7層の炭・灰の薄層を挟む黒色含極細粒砂粘土質シルトで、水つきである。第Ⅱ様式に属する弥生土器の細片のほか、植物遺体が出土した以外は顕著な遺物はない。

小穴群 3区南部に分布する小穴で、直径0.1～0.2m、深さ0.2m前後のものが多い。埋土は第5層の黒色細粒砂泥りシルトあるいは黒褐色含細粒砂粘土質シルトで、中には柱痕跡の確認されたものやSP2のように古墳時代の遺物が出土したものがある(図111)。

383は口縁部を上下に拡張した須恵器甕で、体部外面は平行タタキののち、カキメ調整を施す。TK47型式に属するものである。

小穴群は南北10mの範囲に集中する傾向にあることから、これらは弥生時代中期後葉か、古墳時代中期後葉の集落に係わる建物の柱穴の一部と考えられる。調査範囲が狭小なこともあって、1棟の建物としてはまとまらなかった。

SX501 3区の南部、先述したSX705が第6・7層で埋没した後で掘込まれた南北1.5m、深さ0.2

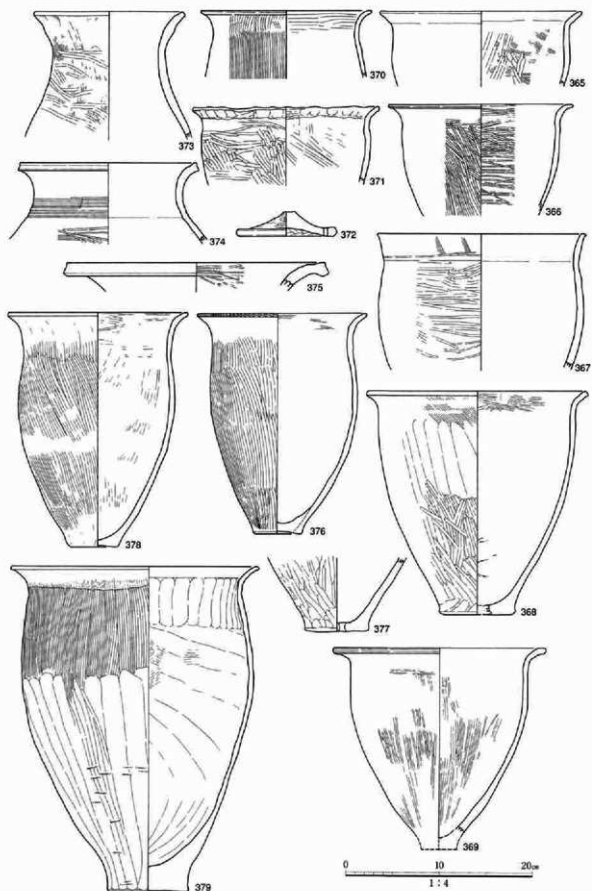


图110 3区SX701出土器物

～0.3mの落込みである。埋土は第5層の黒色細粒砂混りシルト～黒褐色含極細粒砂粘土質シルトで、炭・灰や極細粒砂の薄層を挟み、弥生土器381・384や石甕丁87VJ208のほか、古墳時代の須恵器385～388が出土した(図111、図版28・37)。

381は脚部の大半を欠損した高杯で、口縁部は斜状の体部から水平に開く。器体の内外面をヘラミガキ調整する。384は口縁部が外上方に開く広口壺で、頸部の外面に2条の櫛描直線文が巡る。381・384はともに第Ⅱ様式に属するものである。

87VJ208は結晶片岩製で背部が丸く、刃部が直刃の磨製石甕丁である。わずかに偏るが中央の背部より一対の紐孔を身部の両面から穿っている。刃部や身部のほぼ全体を研磨しているが、片面の身部には敲打痕が残る。

385は口径11.7cm、器高4.9cmの有蓋高杯の蓋で、天井部の中央に中凹みのつまみがある。天井部の2/3以上をヘラケズリ調整する。口縁部と天井部の境界には突帯状の稜がある。386は口径10.9cm、器高9.6cmの有蓋高杯である。立上りは内傾しており、脚部は短脚で、裾部の近くに円形スカシ孔を三方に穿つ。387は口径11.4cm、器高4cm前後の杯身である。立上りは内傾しており、底部の1/3をヘラケズリ調整する。388は口径12.3cm、器高4.6cmの杯蓋で、天井部の2/3をヘラケズリ調整する。口縁部と天井部の境界の稜はシャープである。以上の須恵器はTK23型式あるいはTK47型式に属するものであろう。

v) 4区

本区では中央部以北において第5層および第7層で埋まる弥生時代の遺構が検出された(図112、図版12)。南部は既設管で擾乱されており、遺構や遺物は確認できなかった。

SD02 4区の北部に位置する北西～東南方向の溝である。溝の幅は2.5～3.0m、深さは0.6m前後で、溝内には第7層の黒褐色極細粒砂質シルトやビート質の黒褐色粘土質シルトが堆積しており、流

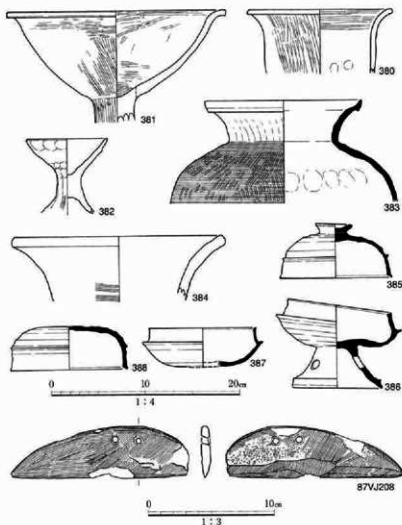


図111 3区遺構出土遺物

SK701(380)、SK703(382)、SP2(383)、SX501(381・384・388、87VJ208)

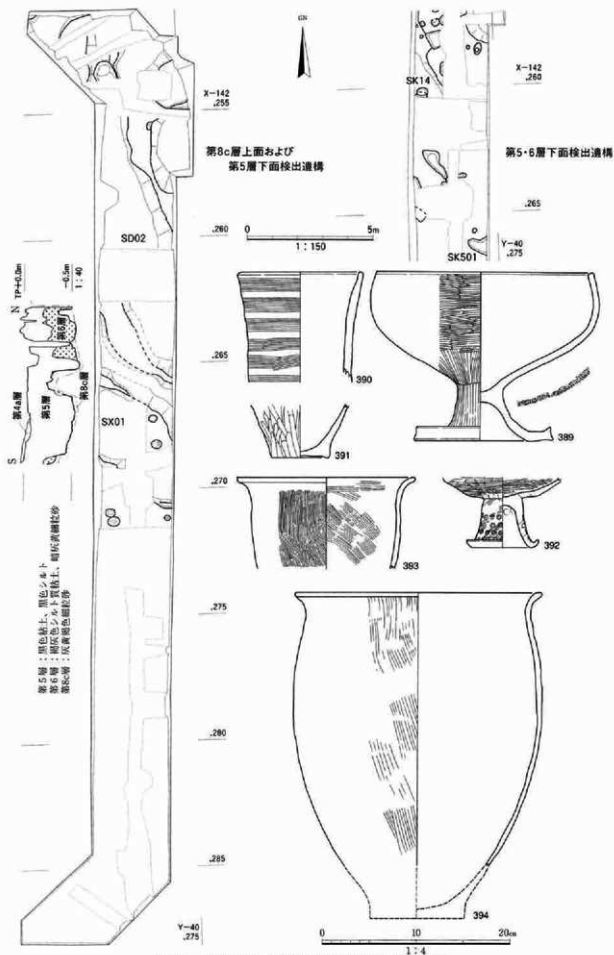


図112 4区平面図・西壁断面模式図および遺構出土遺物
 SD02(389・391)、SX01(390)、SK14(394)、SK501(392・393)

木・植物遺体をはじめ、弥生土器389・391や木製高杯・加工木が出土した(図112・116・117、図版28)。本溝は規模や方向からみて集落を区画する大溝の可能性はある。なお、i)項で既述した本区の第7層出土土器の多くはSD02の掘下げ中に出土したものである。

389は口径23.0cm、器高17.8cmの高杯である。杯部は体部の中程近くで内湾しており、口縁部の上端面には巻き貝(ヘナタリ?)による押圧がある。脚部は裾が大きく開き、設置面を平坦におさめる。脚部から杯部の下半の外面を縦方向、これより上半を横方向のヘラミガキで調整する。391は甕の底部で、外面の調整は縦方向のヘラミガキである。以上の土器は第Ⅱ様式に属するものである。

SX01 4区中央部の西壁際に位置する南北3.0m前後の落込みである。深さは検出面から約0.3mあり、埋土は第5層の黒色粘土～シルトで、弥生土器390や植物遺体が出土した(図112)。

390は口頸部が筒状の細頸甕で、口縁端部を丸くおさめる。器体の外面に6条の櫛描直線文が巡る。第Ⅲ様式に属するものであろう。

SK14 調査区北部の第6層下面で確認されたが、遺構の大半が調査範囲外であり、詳細は不明である。深さは検出面から0.2m前後あり、埋土は黒色シルトである。植物遺体とともに、弥生土器394が出土した(図112、図版27)。

394は底部を欠損した甕で、口縁部は外上方に開く。口縁端部を肥厚させており、体部の調整は外面が左上りのタテハケ、内面は口頸部を含めてナデである。口縁部の内面をヨコナデ調整しており、第Ⅱ様式でも新しい段階のものであろう。

SK501 SK14の南東約6mの東壁際にある南北1m前後、深さ約0.2mの土壌である。本遺構の下部には第7層で埋まる溝状の窪みがあることから、SK501はこの上部の可能性もあるが、ここでは第5層下面遺構と考える。埋土は第5層の黒色シルトで、弥生土器392・393が出土した(図112)。

392は杯部の大半を欠損した高杯で、脚部の外面には4段の竹管文を施す。393は口縁部が緩やかに外反した甕で、体部の調整は外面が縦および左上りのハケ、内面は左上りのハケである。口頸部の内面にはヨコハケが残る。392は第Ⅲ様式、393は第Ⅱ様式に属するものであろう。

vi) 5区

本区は南北端および中央部が既設管で攪乱されていたほか、南部には江戸時代以降の作土層である第4a・4b層が堆積しており、ここでは遺構の残りはよくなかった。以下に報告する遺構は第5層および第7層を埋土とするものである(図113、図版12・13)。

SX01 5区の南部に位置する平面形が不整形な段状の落込みである。幅は南北5.5m前後あり、深さは検出面から0.2～0.3mある。一見すると溝かとも思われるが詳細は明らかにできなかった(図113)。埋土は水つきの黒色含粘土極細粒砂シルト・黒色粘土質シルトからなる第7層で、弥生土器395・396・400・404が出土した(図114)。

395は口縁部が大きく開いた広口甕で、頸部の外面には櫛描直線文が巡る。396は甕の底部で、外縁は張り出す。397も甕の底部で、外面の調整はタテハケである。400は口縁部が緩やかに外反した甕で、体部の調整は内外面ともにナデで、頸部の内面にはヨコハケが残る。胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。404は甕の体部上半から頸部にかけての破片で、外面には8条の櫛描直線

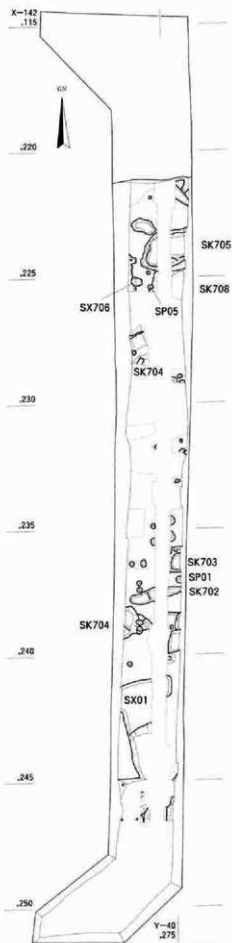


図113 5区平面図・東壁断面模式図

文を施した後、文様の上下をつなぐように弧状の飾描文を足して、横型の流水文を表現している。以上の土器は第Ⅱ様式に属するが、口縁部をヨコナデ調整した甕400は新しい段階のものと思われる。

SX706 SK704の北側の西壁際に位置する落込みで、遺構の大半が調査範囲外にあり、また、南部を攪乱されているため、詳細は不明である。深さは検出面から0.2m前後あり、埋土は第5層の黒褐色砂礫混りシルトで、弥生土器398・399が出土した(図114)。

398は口縁部が外上方に開く甕で、体部の調整は外面が左上りのハケの後、横方向のヘラミガキ、内面は左上りのハケの後、右および左り上りのヘラミガキを施す。399は高杯の脚部で、大きく開いた裾部には三方に円形スカシ孔を穿つ。内面は横方向にヘラケズリ調整する。398は第Ⅱ様式の新しい段階、399は第Ⅳ様式に属するものと思われる。

SK702 5区の中央部に位置する南北0.4m前後、東西2.2m以上、深さ約0.2mの溝状の土壌である。埋土は第7層の黒色粘土質シルトで、弥生土器402・403が出土した(図114)。

402・403は甕の底部で、外面をタテハケ調整している。後者の裏面には木の葉痕がある。ともに第Ⅱ様式に属するものであろう。

SK704 5区北部の西壁際に位置する南北約0.8m、深さ0.3m前後の土壌である。埋土は第7層の植物遺体を含む黒褐色含粘土極細粒砂シルトで、弥生土器397・401が出土した(図114)。

397・401は甕の底部で、前者は大型品である。ともに外面をタテハケで調整する。これらは第Ⅱ

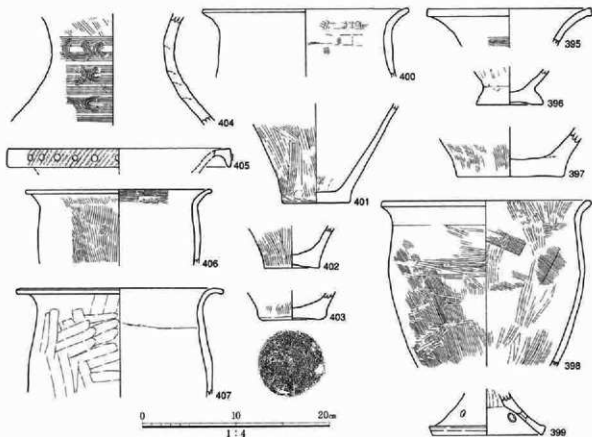


図114 5区遺構出土遺物

SX01(395・396・400・404), SX706(398・399), SX702(402・403), SK704(397・401), SK705(406・407), SP05(405)

様式に属するものであろう。

SK705 5区の北部に位置する南北1.5m、東西1.7m以上の土壌で、深さは検出面から約1mある。埋土は第7層の黒色含粘土極細粒砂質シルトおよび黒色粘土質シルトで、ともに水つきである(図版13)。第6層の堆積が始まるまでには遅くとも機能を終えている。下層の黒色粘土質シルトから弥生土器406・407をはじめ、木製品410・413・414が出土した(図114・116)。

406は口縁部が外上方に開いた甕で、体部の調整は外面がタテハケ、内面がナデで、口頸部の内面にはヨコハケが残る。胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。407は口縁部が大きく反する甕で、体部の調整は内外面ともにナデであるが、外面のナデの原体は板状の工具と思われる。以上の土器は第Ⅱ様式に属するものである。

SK708 SK705の南に隣接する土壌であるが、遺構の大半が調査範囲外のため、詳細は明らかでない。遺構の深さは検出面から約0.6mあり、埋土は上述したSK705と変わらない(図版13)。木製品411・416が出土した以外にはさしたるものは見られなかった(図116、図版35)。

SP05 SK708を切る直径0.2m、深さ0.3mの柱穴で、直径0.15mの柱痕跡があった。埋土は第5層の黒褐色砂礫混りシルトで、弥生土器405が出土した(図114)。

405は口縁部が垂下した甕で、口縁部の外端面にはキザミメを施したのち、円形浮文を貼付けている。第Ⅳ様式に属するものであろう。

小穴群 5区中央部に分布する直径0.1～0.2m、深さ0.3mの小穴群である。直径0.15m前後の柱根や柱痕跡が確認されたことから建物の柱穴と考えられるが、1棟の建物としてはまとまらなかった。出土遺物や埋土からみて、第5～7層準の遺構と思われる。

vii) 8区

8区では試掘調査の結果に基づき、調査区内に南北2個所のトレンチを設定した。第5層の褐灰色極細粒砂質シルト層を掘下げて第7層の上面で精査をしたところ、南トレンチにおいて上部層から踏込まれた状態で木製品408・409が出土したほか、第7層内でも加工木415・418が出土した(図115・116・117、図版35・36)。8区では既述したように弥生時代中期前～後葉あるいは古墳時代中期後葉の暗色帯上面の標高が60～70cmと低くなり、遺物の包含量も激減するほか、北トレンチの第8c層上面の標高も30～50cmと低い。これに対して、弥生時代中期前葉の遺物を包含する第7層の層厚は50cm前後あり、微高地上とは明らかに異なっている(図115、図版13)。本区は低湿地に相当するものと判断された。

viii) 木製品

各区で出土した木製品および加工木について記述する(図116・117、図版35・36)。

408・409は8区第7層上から出土した。408は全長56.8cm、幅5cmの幅台目盛板である。上面に当る位置に切込みが3箇所ある。片方の先端が残っており、ここは台に取り付けるために両側を削って細くしてある。樹種はヒノキで、辺材を使用している。409は全長56.6cm、中央の幅が8.8cmで、両端から長さ14cmないし16.5cmの部分の幅を削って幅3.4～3.8cmと細くしている。幅の狭い部分には先端から9cmないし12cmのところに、長方形および台形の孔を穿つ。形態からみて、織機の一部かとも思われ

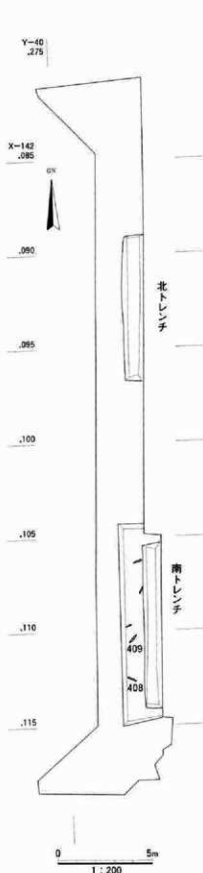
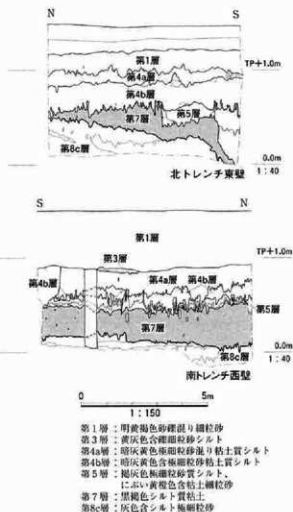


図115 8区平面図・東および西壁断面模式図



たが用途は不明である。樹種はヒノキで、心材を使用している。408・409は出土層準や形態からみて、古墳時代中期に属するものと思われる。

415・418は8区第7層から出土した。415は直方体に切落とした部材で、用途は不明である。418は全体に土圧で変形しており、一見角柱のようであるが直径約10cmの柱材で、片方に鉄斧によるものとみられる切断痕がある。樹種はヒノキである。

411は5区のSK708から出土した高杯の脚部で、接地面が焼けている。416も容器の断片とみられるものである(図版35)。ともに樹種はケヤキである。

412は4区のSD02から出土した高杯の脚部である。柱状部には金属器で1本ずつ押し引きした4帯の直線文がある。据部の上端にはスカシ孔を穿つほか、折損部を核

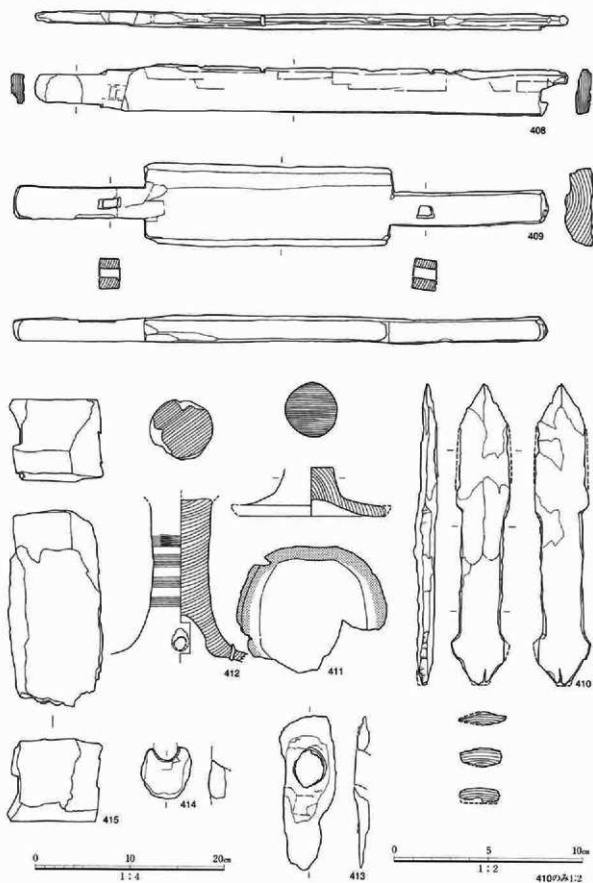


图116 4・5・8区出土木製品

4区SD02(412)、5区SK705下層(410・413・414)、5区SK708(411)、8区第7層上面(408・409)、8区第7層(415・418)

の皮で結束している。樹種はケヤキで、一本を削り貫き製作している。

410・413・414は5区のSK705の下層から出土した木製品である。410は全長15.8cm、最大幅3cmの剣形木製品である。腐食が進んでいるため、調整痕は判別しにくい。切っ先は両面から加工しており、片面の鋒は肩部の先端のみしか残存していないが、もう片方は柄の中ほどまで伸びている。刃部の断面も菱形を呈しており、柄頭は突出している。本例は有柄式銅剣あるいは有柄式石剣を模倣したものであろう。樹種はヒノキで刃材を使用している。413・414は楯の舟形隆起部で、ともに柄を差込む孔がある。樹種はアカガシ亜属である。

417は4区のSD02から出土した全長51.9cm、幅2.9cmの棒状の木製品である。419は3区のSX701から出土した最大径12.2cm、長さ50cmの柱材で、一端に鉄斧によると思われる加工痕がある。樹種はヒノキである。時期は417と変わらない。420は4区SK14から出土した柱材で、全体に腐食が進んでいる。径14.7cm、長さ42.5cmある。一端に加工痕が残る。421は3区のSX701の上面に見られた踏込み内から出土した幅24.4cm、長さ66.4cmの板材で、全体に腐食しており、加工痕は確認されなかった。樹種はアカガシ亜属である。以上の木製品の所属時期は共伴した土器からみて、弥生時代中期前葉と思われる。

次に各地区の遺構や地層から出土した流木や加工木について樹種を中心にまとめておく。今回、国立奈良文化財研究所埋蔵文化財センター発掘技術研究室で樹種の同定をしていただいた結果は表6の通りである。これによると、出土した樹木の点数はヒノキが17点で、次いでスギ・コウヤマキ・モミ属・マツ属ニヨウマツ類などの針葉樹が12点あり、コナラ節・クスギ節・アカガシ亜属・ヤナギ属な

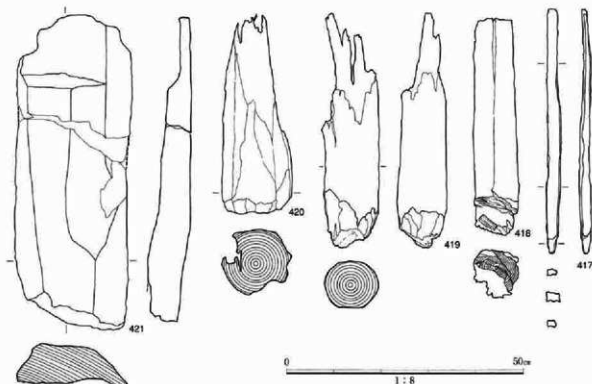


図117 3・4・8区出土木製品

3区SX701(419)、3区SX701上面(421)、4区SD02(417)、SK14(420)、8区南トレンチ(418)

表6 各地区出土流木・木製品の樹種

サンプル 番号	地 区	層序・埋土	遺 構	樹 種
1	2区	第7層	SD806	ヒノキ
1-2	2区	第7層	SD806	コナラ節
2	3区			ヒノキ
3	3区中央	第7層		ヒノキ
3-2	3区中央	第7層		ヒノキ
4	3区中央	第7層	SK701	針葉樹
5	3区北部	灰褐色シルト		スギ
6	3区北部	灰褐色シルト		ヒノキ?
7	4区	灰褐色シルト		針葉樹
8	4区	第5層	溝下層	ヒノキ?
9	4区	第7層	SD02下層	クスノキ
10	4区	第7層	SD02底	ヒノキ
10-2	4区	第7層	SD02底	ヒノキ?
11	4区	第7層	SD02下層	ヒノキ
12	5区北部	第7層	SK705	コウヤマキ
13	5区北部	第7層	SK705下層	イチイ属
14	5区北部	第7層	SK705下層	ヒノキ
15	5区北部	第7層	SK703	ヒノキ
16	5区南部			アカガシ重属
17	5区北部	第7層	SK705下層	モミ属
18	5区北部	第7層	SK705下層	クスノキ節
19	5区北部	第7層	SK705下層	クスノキ節
21	5区北部	第7層	SK705下層	スダジイ
21-2	5区北部	第7層	SK705下層	コナラ節
21-3	5区北部	第7層	SK705下層	コウヤマキ
22	8区	第7層		モミ属
25	8区	第7層		ヒノキ
26	8区	第7層		ヤナギ属
27	8区	第7層		マツ属ニヨクマツ類
28	8区	第7層		アカガシ重属
29	8区南レンテ	第7層		スギ
30	8区南レンテ	第7層		ヒノキ
31	5区北部	第7層	SK705下層	ツブラジイ
32	水道路路南端	黒褐色粘土質シルト		針葉樹
33	5区	第7層	SK705下層	アカガシ重属
45	8区	第7層		スギ
46	8区	第7層		ヒノキ
47	8区	第7層		ヒノキ
48	8区	第7層		マツ属ニヨクマツ類
49	8区	第7層		ヒノキ
50	8区	第7層		ヒノキ

どの落葉樹は8点、イチイ属・スダジイ・ヤナギ属・ツブラジイ・ヤマグワ・クスノキなどの常緑樹は4点あった。つまり、ヒノキを含めた針葉樹が70%、落葉樹が20%、常緑樹が10%で、出土樹木の中で針葉樹が過半数を占めることが判明した。弥生時代中期の森小路遺跡の植生や古環境については現在復元しうるための基礎的な資料の蓄積と十分な検討を経ていないため、不明といわざるをえない。今後、樹木の同定のみならず花粉分析や種子分析データの収集と検討を加えて明らかにする必要がある。なお、ヒノキなどの針葉樹は弥生時代に木製品の素材として多用されていることから、本遺跡でも同様の状況にあったと思われる。また、既述したようにアカガシ重属は鍬などの農具に、ケヤキは高杯ほかの容器の素材に用いられたようである。(田中)

第23節 MS88-12次調査

1) 調査の経緯と経過

調査は南北約610m、東西約340mの道路部分に対し、歩道設置工事に先だって行われた(図118)。

まず、1988年7月1日から雨水管・電柱・水道・ガス枝管の埋設に先立つ立会調査を開始して、遺跡の広がりや遺構・遺物の遺存状況を確認した。

その後、東西道路については、立会調査の結果にもとづき、新規にアスファルト舗装を敷設する際の掘削深度について大阪市建設局東工営所と協議し、遺構および遺物包含層に達する箇所については、車道部分も含めた平面的な調査を行った。一方、南北道路は歩道・車道とも攪乱が著しく、立会による断面確認にとどまり、最終的に、1989年2月22日に調査を終了した。

なお、便宜上、南北道路は遺構・遺物がある程度確認された範囲をⅠ～Ⅹ区とし、東西道路は全体を1～20区として報告する。



図118 MS88-12次調査観所位置図

2) 層序

調査地では、大別して以下の9層準が確認された(図120)。

第0層：アスファルトである。

第1層：現代の整地層である。

第2層：暗黄灰色含砂礫シルト層である。江戸時代以降の水田・畠の作土層である。

第3層：黄灰色含砂礫シルト層である。江戸時代の水田もしくは連根田の耕作による作土層である。

第4層：上部の第4a層と下部の第4b層に区分できる。第4a層は暗灰黄色含極細粒砂粘土質シルト層である。第4b層は灰～オリーブ黒色含極細粒砂粘土質シルト層である。江戸時代の水田もしくは連根田の耕作による作土層である。

第5層：黒褐色極細粒砂質シルト層である。須恵器のほか弥生土器・土師器を含む古墳時代の遺物包含層である。下面・基底面で遺構が検出される。

第6層：上部の第6a層と下部の第6b層に区分されるが、分層できなかった場所もある。第6a層は

褐灰色含炭化物極細粒砂質シルト層、第6b層は暗灰黄色細粒砂層で、一部シルト薄層を含む。両層とも下面で遺構が検出される。第6a層は弥生土器の第Ⅲ～Ⅳ様式、第6b層は第Ⅱ様式を主体としながらも第Ⅲ様式のことを包含している。

第7層：黒褐色シルト質粘土層である。弥生時代中期の遺物包含層で、第Ⅱ様式の弥生土器を含んでいる。

第8層：水成の灰黄褐色細粒砂層である。遺物は出土しなかった。弥生時代以前に淀川による沖積作用で堆積した自然堤防で、遺跡全体で確認されている。

3) 遺構と遺物

以下、南北・東西の道路に分けて、調査の結果を記述する。

i) 南北道路

南北道路は図119のように合計120個以上の立会調査を行った。前述のとおり、攪乱によって地層の遺存状況は悪く、古墳時代以前の遺物包含層である第5層以下が比較的良好に確認できる地点を代表させて、連続した地層の堆積状況を図120に示した。

第5層以下の地層は、現在の地表下0.3～0.6mより下位に分布している。それらに伴う遺構や遺物はⅩ区以北に集中して見つかった。各地点の面積が狭いうえに、攪乱を受けているため全体が判明した遺構はなかったが、地層断面の観察から人為的な掘込みが確認できた個所があり、図120の柱状図に記載している。

古墳時代の遺構は第5層下面で検出された。Ⅰ区(114地点)・Ⅲ区(91地点)・Ⅳ区(70地点)・Ⅴ区(58地点)・Ⅵ区(23地点)に見られる。

弥生時代の遺構は第6a層および6b層下面で検出された。Ⅰ区(34地点)・Ⅲ区(66地点)・Ⅳ区(99地点・70地点)・Ⅴ区(50・80地点)・Ⅹ区(93地点)に見られる。また、特にⅠ区南半部では第6b層に伴う遺物が集中して出土する個所があった。

なお、第7層に伴う遺構は確認されなかった。

出土遺物には、第5層から古墳時代の須恵器・土師器があり、それより下位の地層からは弥生時代中期の土器・石器遺物がある。土器は細片が多く図化していない。Ⅲ区の第6b層からは第Ⅱ～Ⅲ様式の土器とともに、磨製石庖丁88VL203(図130)が出土した。88VL203は両端が欠失しているが、刃部が直線で、背側は半月状になっている。穿孔は4個が直線上に並んでいるが、左図右端と、対をなす右から3番目の孔の位置は、全体の中で端に寄りすぎている。破損や研ぎ減りによって全体の形状が変わった結果、穿孔しなおした可能性がある。ほかにサヌカイト製の尖頭器片も同層準から出土している。

ii) 東西道路

東西道路では南北道路と違い、現在の地表面下0.2～0.3m程度で弥生もしくは古墳時代の遺物包含層が確認される。そのため舗装工事による影響が大きく、ガス管の立会調査の結果から遺物包含層や遺構が良好に遺存していると思われた範囲についてのみ、平面的な調査を行った。ただし、調査深度

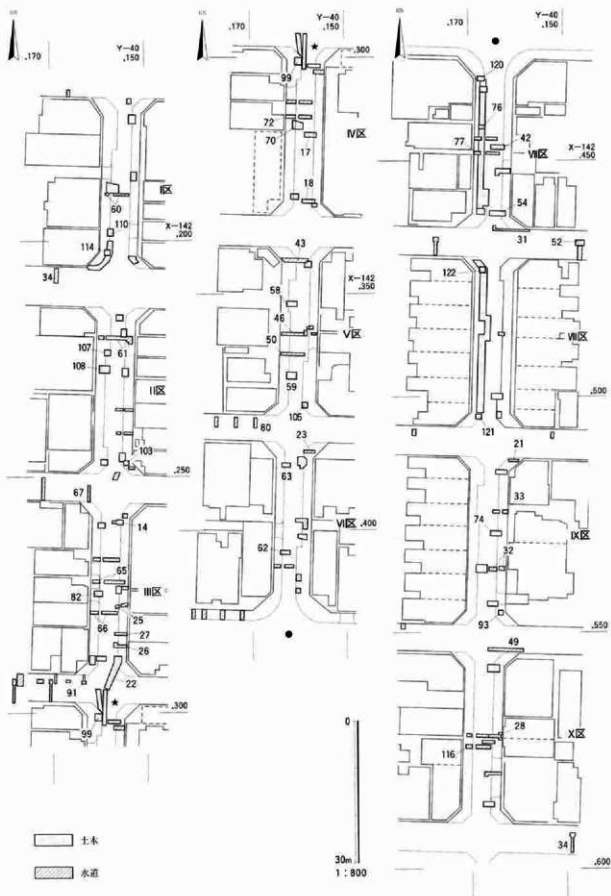


图119 南北道路调查地点配置图

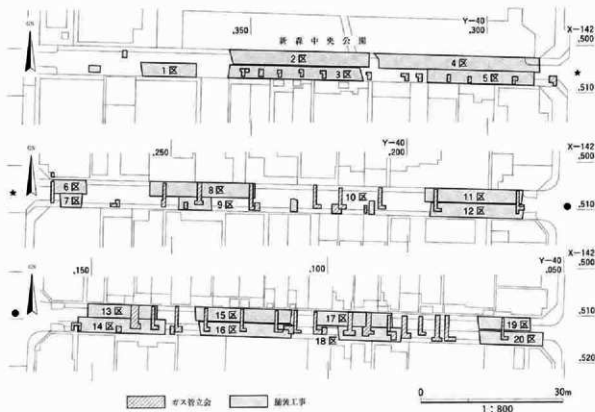


図121 東西道路調査地点配置図

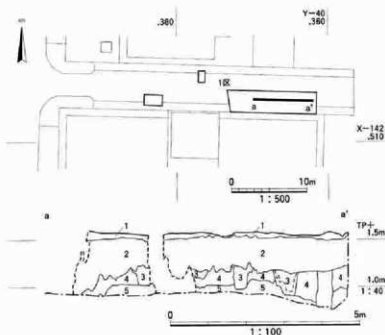
は舗装の工事数が達する遺物包含層までとし、それよりも下位の地層については攪乱部分の断面で層序を観察するにとどめた。

遺構には第5・6層に伴うものがある。

a. 1区

1区は東西道路の西端に位置する。江戸時代の作土層である第3・4層(図122の1・2層)の下に時期不詳の遺構が地層断面で観察された(同3層)。下位の地層(同4層)が第6層に相当すると考えられることから、古墳時代の土壘や小穴であると考えられる。

b. 4・5区



- 1: 青灰～灰褐色含砂礫シルト (第3層)
- 2: 灰色シルト質粘土 (第4層)
- 3: 黒灰色シルト質粘土 (灰白色粘土礫を含む遺構埋土)
- 4: 暗灰褐色粘土質シルト (黄灰白色細粒砂の薄層をミナ含む)
～褐灰色シルト質粘土 (第6層)
- 5: 灰黄褐色細粒砂 (第8層)

図122 1区平面図・断面模式図

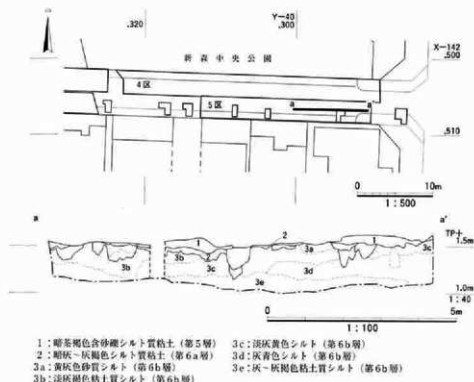


図123 5区平面図・断面模式図

4・5区では第5層に伴う土塊・小穴が数個確認された。5区の第5層(図123の1層)の基底面で検出された土塊からは弥生土器・土師器が出土し、古墳時代の土塊と考えられる。さらに、それらの遺構の下位に、より古い遺構が地層の断面で確認され、弥生時代にさかのぼる可能性がある。また、4区でも東側で古墳時代の小穴など数個の遺構があり、須恵器・土師器が出土している。遺物はいずれも細片で、図化できなかった。

4・5区より東側の6～12区では、弥生・古墳時代の遺物包含層の残りは悪かった。

c. 11区

11区は東西のトレンチに分かれており、西側の地層断面をa-a'に、東側をb-b'とc-c'に示した(図124)。

西側トレンチでは第6a層内から掘込まれたSK02がある(図125)。東西0.5m、深さ0.3m弱で、南側は攪乱によって壊されている。埋土は上下2層に分かれ、第IV様式の甕が出土した。西側トレンチでは、さらに、第6b層に相当する水成層(図124: a-a'の4層)の下位にも第7層を埋土とする遺構が地層断面で確認されたが、その形状は不明で、木片のほかに出土遺物はない。

東側トレンチでは第5層に相当する地層(図124: b-b'の1層)の基底面で小穴を検出した。トレンチの北辺・南辺に沿って2列に並んでおり、北辺の小穴は10個がほぼ一直線に存在する(図125)。ほとんどが、トレンチ内の攪乱によって南側を壊されているが、平面形は円形と思われ、直径0.4m前後で深さ0.4～0.7mのものと、直径0.2m、深さ0.2～0.3mのものがある。柱痕跡は確認していない。トレンチ南辺の小穴は4個ある。平面形は不整形であるが、おおむね北辺の大きい方の小穴と同様の規模である。深さは0.1～0.3mと浅い。柱痕跡は確認していない。北辺のものとはほぼ平行して、一直

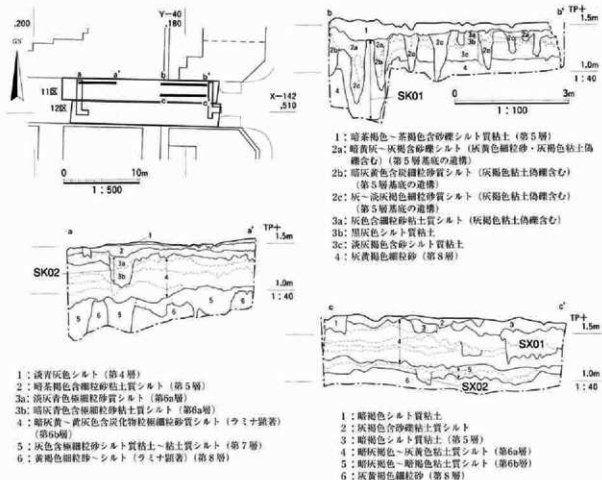


図124 11区平面図・断面模式図

線に並んでいる。柱痕跡を確認していないものの、直線に並ぶことから、櫓や建物の可能性が考えられるが、両方の小穴は、向い合う位置からややずれているため、前者の方が妥当であろう。これらの小穴からは、弥生時代中期の土器が出土している。層序から判断すれば、弥生時代中期後葉の可能性はある。

ほかに、第5層基底面で検出された遺構にSX01がある(図124)。東側トレンチの東端に位置し、北・東側はトレンチ外へ続いている。深さは約0.3mである。SX01から出土した遺物には425・430などの弥生土器があり、検出面付近に投棄されていた(図127、図版14)。425は広口壺で、口縁部を下方に折り曲げて4条の凹線文を施し、体部に櫛描直線文と波状文を交互に施したものである。430は細頸壺の口頸部で、口縁部下に4条の凹線文を施している。これらの土器は第IV様式に属し、SX01の時期を表している。

第6層に伴う遺構には、東トレンチのSK01・SX02がある(図125)。SK01はトレンチ西端に位置し、東西1.5mで、南北は2mを確認したが北側は調査区外に続いている(図126、図版14)。深さは約0.8mである。埋土は黒灰色シルト質粘土(図124: b-b'の3b層)で、直下層である淡灰褐色含砂シルト質粘土の偽混を多量に含んでいる。水成の堆積物は無く、埋土はすべて埋戻されたものである。この土壌からの出土遺物には弥生土器・木片・貝がある。弥生土器にはトレンチ北辺で遺構の基

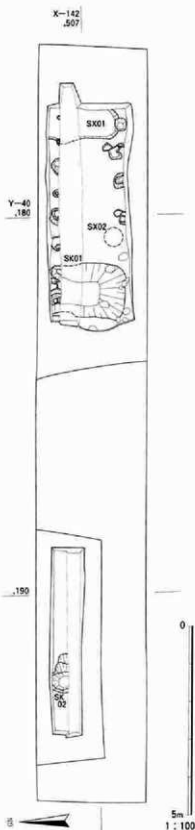


図125 11区平面図

底に接して出土した完形の広口壺427や、土壌の西側の肩部付近から出土した壺424がある(図127、図版28)。427は口縁端部をあまり肥厚させず、頸部から体部上半にかけて櫛描直線文を施している。第Ⅲ様式に属するものである。424は口縁端部をやや肥厚させ、端面に竹管文を、口縁部内面に粘土による浮文を施している。第Ⅲ様式に属するものである。貝は427と同様に、土壌の基底に廃棄されていた。ほとんどはセタシジミで、カワニナ・タニシ・ハマグリ・サルボウ・サザエが確認されている。同定の詳細に関しては、第Ⅲ章第2節を参照されたい。

SX02は地層断面でのみ確認されたため(図124：c-c')、形状や規模は不明である。弥生土器の甕433が出土した(図127)。433は口縁部の屈曲が緩やかな甕で、第Ⅱ様式に属するものである。生駒西麓産の胎土である。

以上のほか、第6a層内から出土した弥生土器に、台付鉢429・甕434がある(図127)。429は口縁端部を外方に折り曲げて端面にキザミメを施し、その直下に櫛描縞状文を施している。体部はヘラミガキで調整している。口縁部直下には、蓋を綴付けるための穿孔がある。第Ⅲ様式に属し、生駒西麓産の胎土である。434は口縁部を緩やかに外反させ、体部をハケで調整したものである。第Ⅱ様式に属するものである。

また、11区からは結晶片岩製の磨製石庖丁が第6層と攪乱の埋土から1点ずつ出土した。そのほか、サヌカイト製の石核が第5層から、両面加工石器が攪乱の埋土から出土している。石

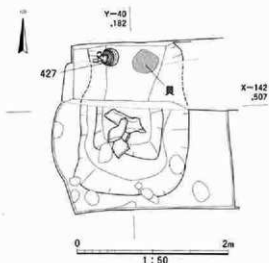


図126 SK01平面図

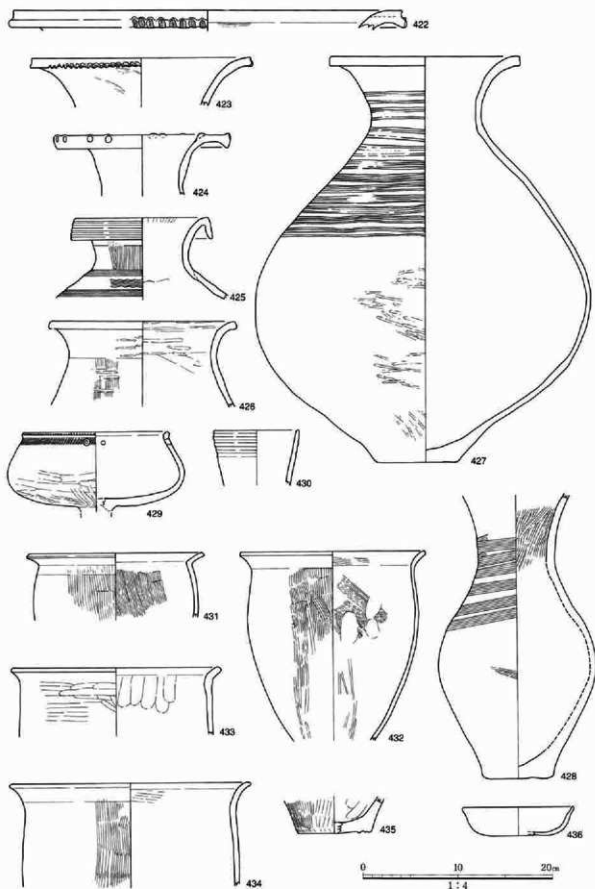


圖127 出土遺物(1)

SD01(426・428・432・435), SK01(424・427), SX01(425・430), SX02(433), 第6b層(422・423), 第6a層(429・431・434), 第5層(436)

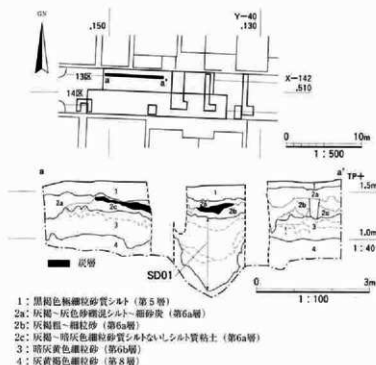


図128 13区平面図・断面模式図

やかに外反させ、口縁部内面はヘラミガキ調整、外面は体部にハケを施した後、全体にヘラミガキを施している。広口壺428は14区のSD01最下層から出土した。口縁部を欠損しているが、体部にていねいなナデを加えたのち、上半に6条の櫛直線文を施している。432は口縁部を緩やかに外反させ体部をハケで調整したものである。これらは第Ⅱ様式に属し、遺構の時期を示していると考えられる。88VL201は厚みがあるため尖頭器と考えられるが、下半部が折れて欠失している。図の上方から下方へ向って細部調整を施している。サヌカイト製である。

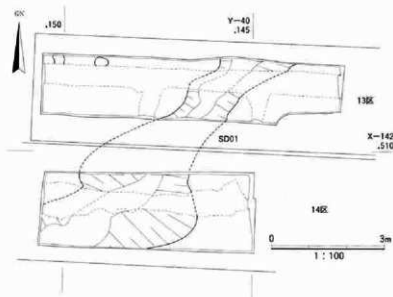


図129 SD01平面図

核は、肉眼観察では金山産のものに類似している。これらは固化したくない。

d. 13・14区

第6b層下面でSD01を検出した(図128・129、図版14)。北東-南西方向の溝で、長さ7m以上を確認したが、溝の端はトレンチ外へ続いている。幅は13区で1.3m、14区では3.0mに達する。深さは北端で約0.9m、南端で約0.2mであり、南側から北へ深くなっている。出土した遺物には弥生土器の壺426・428、甕432・435および石器遺物88VL201がある(図127・130)。426は口縁部を緩

そのほかに、13区の西端付近に位置する小穴が2個ある。第5層基底面で検出される遺構であるが、出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、層準からは弥生時代中期後葉に属する遺構の可能性が考えられる。

これらのほかに、14区の第6a層から甕431が出土した(図127)。431は口縁部の屈曲が明瞭で、体部をハケで調整している。第Ⅲ様式に属する

ものである。

また、ガス管理設時の立会調査に伴うものであるが、14区に東接する地点では、第6b層から第Ⅱ様式の壺422・423が出土している(図127)。422は広口壺で口縁端部をやや下方に肥厚させ、端面の下部にキザミメを施している。423も広口壺で、同じようにやや下方へ肥厚させた口縁端部にキザミメを施している。

e. 16区

16区ではトレンチ東端で土壌と思われる遺構を検出した。埋土中から弥生土器のほか須恵器が出土しており、古墳時代の遺構と判断される。遺物は細片のため図化していない。なお、付近の第5層から土師器の杯436が出土した(図127)。暗文は確認できないが、飛鳥時代中葉頃の杯Cである。地層の時期よりも下る遺物であり、混入と考えられる。また、15区の攪乱からは石鏃88VL202が出土した(図130、図版39)。凸基無茎式石鏃で、細身の本葉形となるものである。下半は折れて欠失している。サヌカイト製である。

(清水)

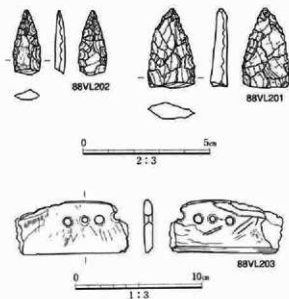


図130 出土遺物(2)

SD01(88VL201)、第6b層(88VL203)、攪乱(88VL202)

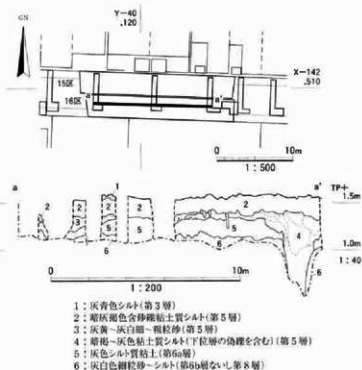


図131 16区平面図・断面模式図

第24節 MS88-22次調査



図132 MS88-22次調査箇所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森4丁目20にあり、遺跡の南東部に位置している(図132)。調査地内で行った試掘調査において第Ⅱ～Ⅳ様式の弥生土器をはじめ、古墳時代中期後葉の土器片を含む地層が確認されたため、本調査を実施した。

調査は建物の基礎の範囲75㎡を対象として実施したが、掘下げに際しては第5層までの各層については重機を用い、これ以下については手掘りで行った。1988年9月6日から調査に着手して9月13日にすべての調査を終えた。

2) 層序

本調査では第1層の表土層以下80cmまでの地層を第2～6層に区分した(図

133、図版15)。

第1層：暗灰色砂礫混りシルト層は、旧作土を主体とする表土層である。上面の高さはTP+1.9m前後あり、調査地の北部が南部に比べてやや高い。

第2層：暗灰褐色粘質シルト～灰褐色極細粒砂混りシルト層で、層厚は20cm前後あり、マンガンを酸化第二鉄を下位に含む。本層は瓦器・土師器のほか江戸時代の陶磁器の細片を含んでおり、江戸時代以後の運根田あるいは水田の作土と思われる。

第3層：黒褐色シルト質粘土層で、層厚は10～20cmあり、上部は色調が紫色味をおびる。第Ⅱ～Ⅳ様式の弥生土器片のほか、古墳時代中期後葉の須恵器片を含む。

第4層：黄灰色粘質シルトおよび灰褐～灰黄褐色極細粒砂シルト層で、層厚は35cm前後ある。極細粒砂のラミナが顕著に観察された水成層である。

第5層：黒色シルト質粘土～粘土層で、層厚は10cm前後あり、場所によっては草類の遺体があった。本層は第Ⅱ様式の弥生土器および極少量のサヌカイトの剥片を含む。なお、第5層中の遺物の包含量は、遺跡の中心部と推定される新森5丁目地域に比べて少ない本層下面で土壌や小穴を検出した。

第6層：褐灰～灰色シルト質粘土と黄橙色含シルト極細粒砂層に2分される。ともに水成層で、本層上面の高さはTP+1.2m前後ある。

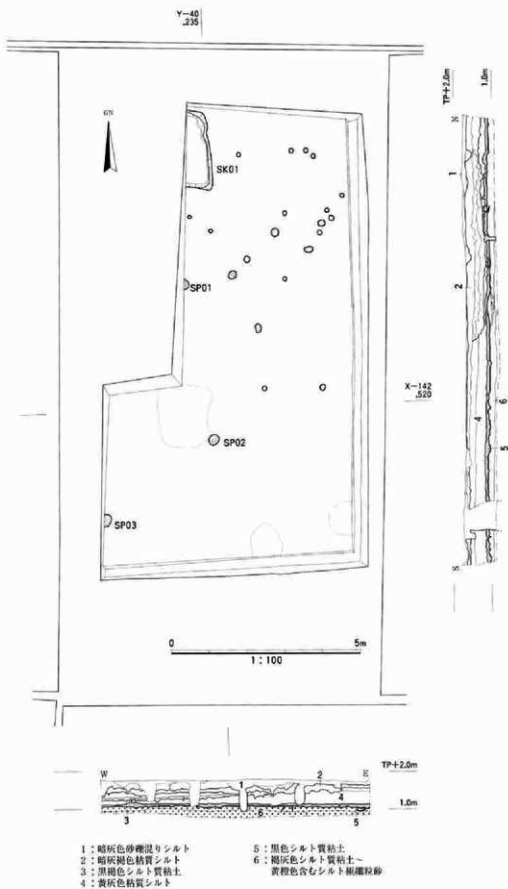


図133 調査区平面図・南および東壁断面図

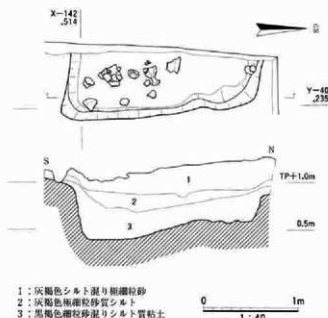


図134 SK01平面図・断面図

3) 遺構と遺物

第5層の下面で土壌および小穴群を検出した(図133・134、図版15)。

SK01 調査地の北西部に位置する長辺約2.2m、短辺0.5m以上で、平面の形態が隅丸方形を呈する土壌である。遺構は西側が調査範囲外であるが、深さは検出面から約0.5mあり、内部には上から灰褐色シルト混り極細粒砂、灰褐色極細粒砂質シルト、植物遺体・炭を多量に含む黒褐色細粒砂混りシルト質粘土が堆積していた。埋土は水つき

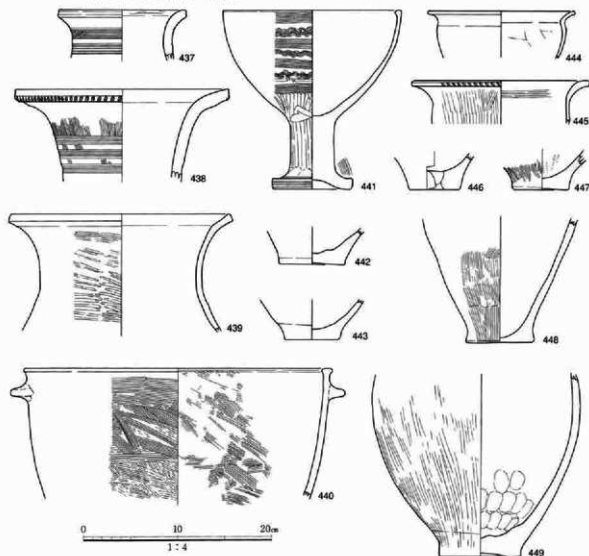


図135 SK01出土遺物

であり、底面から10～20cm浮いた状態で、弥生土器の壺・甕・鉢・高杯や甌え本などが出土した(図134・135、図版15・28)。土壌の性格は断定しがたいが、植物遺体・炭を多量に含むことや出土した土器も破片が多いことからゴミ穴の可能性が高い。

437～439は広口壺である。437の口縁部の開きは他の2点に比べて小さい。437の頸部には横描直線文を施した後、扇形文を加えている。438の口縁部の下端にはキザミメ、頸部には横描直線文が巡る。439は無文である。437・439は胎土中に角閃石を含む生駒西麓産の土器である。440は直口の鉢で、口縁端部を内外に肥厚させている。口縁部の下方に一对の把手を貼付けており、器面調整は内外面ともハケである。441は内湾して立つ碗状の杯部に中実で脚裾が水平に開いた脚部が付く高杯である。杯部には上から横描直線文と波状文が交互に巡る。裾部の上端には横描直線文を巡らせ、脚裾の端面には3条のヘラ描沈線文が施されている。444・445は甕で、後者の口縁部は端部の近くで肥厚しており、端部の下端にキザミメがある。器面調整は444はナデで、445は粗いハケおよびナデである。442・443・446～449は甕の底部および体部で、446の底部の中央には焼成後に内外面から穿った孔がある。447～449の器面調整はハケおよびナデで、442・448は胎土中に角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

以上の土器のうち、混入品と思われる444以外は第Ⅱ様式に属するものである。

小穴群 調査地の北東～南西部に分布する小穴群である。小穴の直径は0.1～0.3m前後あり、深さは0.2m前後のものが多く、直径0.1m前後の小穴は深さ0.3mを越えるものが多く、断面の形態がV字形を呈するものもあり、杭かと思われる。一部の小穴から第Ⅱ～Ⅲ様式の弥生土器の細片が出土した。なお、小穴の中にはSP01～03のように掘形内に柱痕跡が確認されたものもあるが、一連の建物としてはまとまらなかった。

(田中)

第25節 MS88-31次調査

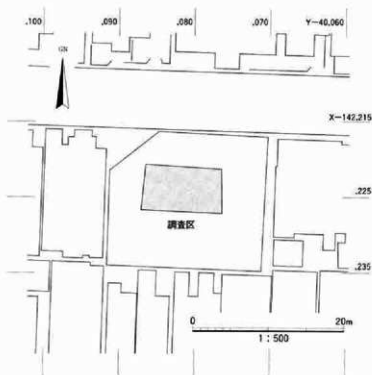


図136 MS88-31次調査箇所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森5丁目16にあり、遺跡の北東部に位置している。当地で民間の建物の建設工事が計画されたため、事前に試掘調査を行った。その結果、現地表面下70cmで弥生時代中期中葉の遺物を含む地層が確認されたため、市教委と事業主間の協議にもとづいて、1988年10月24日～11月1日の間、建物の基礎の範囲内に限って発掘調査を実施した。

調査は現地表面下70cmまでの地層を重機で掘削した後、第2層および第3層を除去した段階で遺構検出作業を行った。

2) 層序

調査地の基本層序は以下に示した通りである(図137)。

第0層：現代の整地層である。

第1層：黄灰色極粗粒砂泥りシルト層で、現代の作土層である。

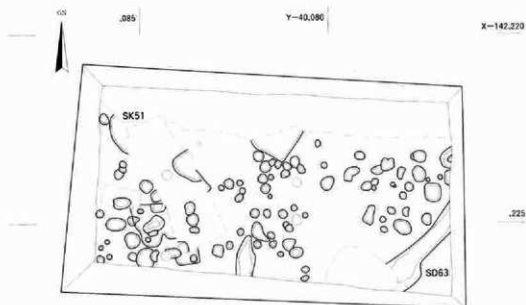
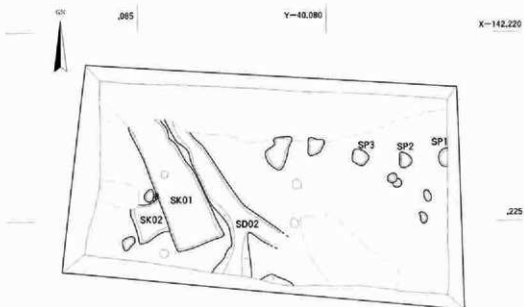
第2層：黒褐色粘質シルト～シルト泥り細粒砂層を主体とする暗色帯で、層厚は20cm前後ある。本層は全般に第Ⅱ～Ⅳ様式の弥生土器を含むが、上部では古墳時代中期後葉の須恵器や土師器、製塩土器が出土した。MS87-6次調査地の第5層に相当し(本章第22節)、本層内でこの時代の遺構が検出された。

第3層：暗灰黄色シルト質細粒砂～極細粒砂層で、層厚10～20cmの水成層である。凸基有茎式石鏃88VN201(図138、図版39)やサヌカイトの剥片をはじめ、第Ⅱ～Ⅳ様式の弥生土器片が出土した。

第4層：黒褐色粘土質シルト層で、第3層を除去して検出された小穴群の埋土である。第Ⅱ様式の弥生土器を含む。

第5層：灰色シルト質粘土層で、層厚20cm前後の水成層である。本層上面の高さはTP+1m前後ある。

第6層：灰黄褐色極細粒砂～細粒砂層で、層厚は20cm以上あり、砂粒のラミナが発達した水成層である。上層の第5層とともに従来から森小路遺跡の地山と呼ばれてきたものである。



0 5m
1:100



- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 0: 整地層 | 4: 黒褐色粘土質シルト |
| 1: 黄灰色極粗粒砂混シルト | 5: 灰色シルト質粘土 |
| 2: 黒褐色粘土質シルト-シルト混り細粒砂 | 6: 灰黄褐色極細粒砂-細粒砂 |
| 3: 暗灰黄色シルト質細粒砂-極細粒砂 | |

図137 調査区平面図・南壁断面図

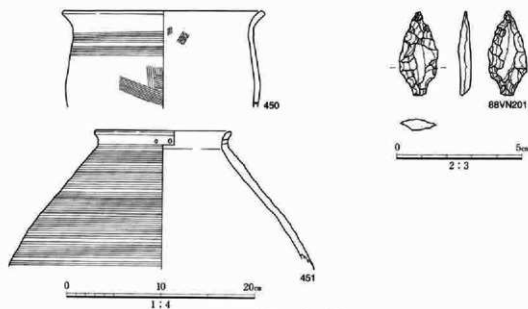


図138 出土遺物
SD63(450)、SK51(451)、第3層(88VN201)

3) 遺構と遺物

本調査では既述したように第2層および第3層を除去した段階で遺構が検出された。

第3層の除去後に検出したおもな遺構は小穴群・SD63、SK51などである(図137、図版16)。

小穴群 調査区のほぼ全域に分布する小穴群で、直径0.1～0.4m、深さ0.1m前後のものが多い。埋土は第4層の黒褐色粘土質シルトで、明確な柱痕跡がないものが多いことから性格については不明である。

SD63 調査区の南東部に位置する幅0.5m、深さ0.1mで、南西から北東方向の溝である。埋土は上層が淡黄色シルト質粘土、下層が炭混りの灰色シルトで、甕450が出土した(図138)。

450は口縁部が緩やかに開く甕で、頸部下端から体部の上半に2条の櫛描直線文が施されている。

第Ⅱ様式に属するもので、類似品は西摂地域に多く見られる。

SK51 調査区の北西部に位置するやや不整形な土壌で、遺構の大半を上層のSK01の掘込みで攪乱されていた。埋土は黒褐色シルト質粘土で、短頸甕451が出土した(図138)。

短頸甕451の口縁部は頸部から直立ぎみに開いており、頸部から体部の中程以下を6帯以上の櫛描直線文で埋めている。頸部には2個一對の紐孔を穿つ。第Ⅱ様式に属するものである。

第2層を除去した段階で検出したおもな遺構はSK01・02、SD02、SP1～3などである(図137、図版16)。

SK01 調査区の西部に位置する平面形が長方形で、幅1.2m、長さ3.5m以上、深さ0.3mの土壌である。埋土は2層に分かれ、上層が黒褐色極細粒砂混りシルト、下層は黒褐色砂混り粘土質シルトで、炭を多量に含む。古墳時代中期後葉に属する須恵器452～459・461～478、土師器479～483、製塩土器484～489・718・719、韓式系土器460などが出土した(図139、図版33)。

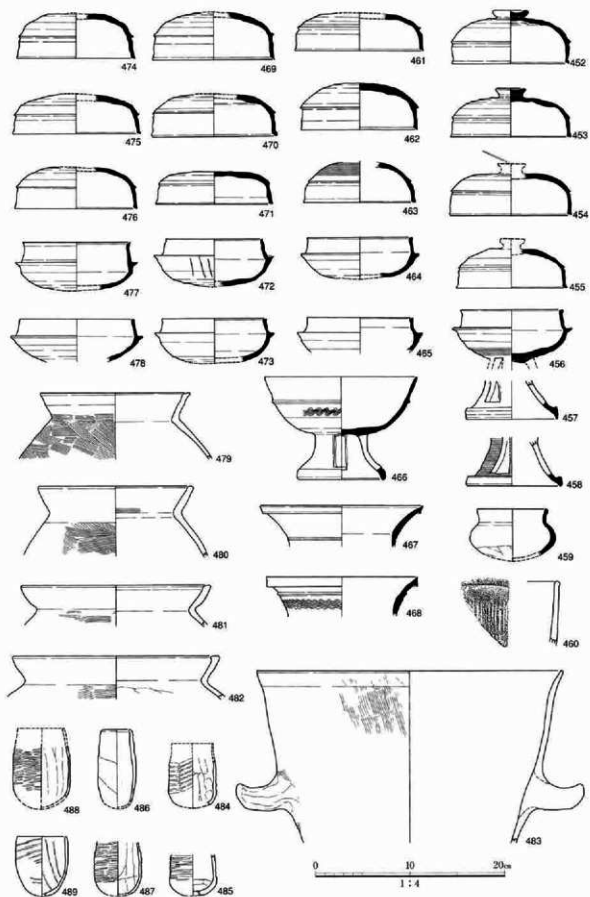


图139 SK01出土遗物

452～455は有蓋高杯の蓋で、452・453の天井部の中央には中凹みのつまみが付く。いずれも口縁部と天井部を分ける後は比較的明瞭である。454の天井部にはヘラ記号がある。456は脚部を欠損した有蓋高杯で、立上りはわずかに内傾しており、杯底部をカキメ調整している。457・458は高杯の脚部で、ともに三方に三角形のスカシ孔を穿つ。458の脚部の外面をカキメ調整している。459は短頸壺で、口縁部はわずかに開く。461～463・469～471・474～476は杯蓋で、462・463・469の天井部は他のものよりやや丸みをもつ。463の天井部はカキメ調整である。471以外の口縁部と天井部の境界の後は明瞭である。464・465・472・473・477・478は杯身で、472・477の立上りはほかのものよりやや長い。472の体部にはヘラ記号がある。466は口縁部が外上方に開いた無蓋高杯で、体部に1条の櫛描波状文が巡る。裾が開く脚部には四方に長方形のスカシ孔を穿つ。467・468は口縁部が緩やかに開いた甕で、前者の頸部にはぶい沈線が1条、後者の頸部には1条の突線と1条の櫛描波状文が巡る。

479～482は甕で、口縁端部は丸くおさめる480以外は内傾している。体部の外面の調整は左上りあるいは横方向のハケで、内面はナデである。色調は黄褐色系で、胎土中に石英・長石・チャート粒を含む。483は口縁部がわずかに開いた甕で、体部の上半には左上りのやや粗いハケが残る。把手は体部の中程に内側から挿入している。色調はぶい黄褐色で、胎土中に角閃石粒を含む。

484～489・718・719はコップ状の製塩土器で、体部の外面をナデ整えた486以外は平行タタキで整形している。器壁は2～3mmの薄いものが多いが、器壁の厚いものもある。色調は灰白～橙色で、胎土中に赤色酸化鉄粒を多量に含む486以外は微細な長石を含む。製塩土器は図示したもの以外にも多数の破片が出土しているが、その過半数は器面を平行タタキで整形したものが占めている。

460は体部の外面を平行タタキで整形した韓式系土器の甕で、口縁端部を丸くおさめている。色調はぶい黄色で、胎土中に長石・チャート・雲母粒を含む。以上の遺物のうち、須恵器はTK23～TK47型式に属するもので、ほかの遺物もこれに伴うものであろう。

SK02 調査区の西側に位置するSK01に切られた幅1m前後の土壌で、深さは検出面から約0.4mある。埋土は上層が炭を多く含んだ黒褐色極細粒砂泥シルトで、下層は黒色粘土質シルトである。特に時期の判明する遺物は出土しなかったが、埋土からみて東側にあるSK01とさほど時期差はないものと思われる。

SD02 SK01の東側に位置する幅0.5～1.0m前後、深さ約0.3mの溝で、途中で二股にわかれていく。埋土は黒褐色シルト混り細粒砂で、古墳時代中期後葉の土師器の細片が出土した。

以上が調査区のおもな遺構と遺物であるが、既述したようにここでは古墳時代中期後葉に属するものがやや多い。特にSK01から出土した土器類は単一時期のものであることが出土状態から判断されたが、これらは当時の日常の生活で使用された土器類の器種の構成を復元する上での基礎資料といえる。また、同様な土壌はMS81-1次調査ほかでも検出されているが[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983]、土器類が単に不用品として廃棄されたのか否かについての検討も今後とも行う必要がある。

(田中)

第26節 MS88-33次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は遺跡のほぼ中央部の新森5丁目7に所在する(図140)。MS85-15次調査(本章第17節)が行われた東西道路に面した北側にあり、西隣ではMS86-45次調査が行われている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1988]。建物建設工事に伴う試掘調査で、現地地下40cm前後で弥生時代中期の遺物包含層および遺構が確認され、1988年11月2～14日の間、本調査を実施した。

調査区は建物建設予定部分の南北約11m、東西約7mの範囲に設定した。調査の方法は、現代の整地層を重機によって掘削し、第1層以下を人力で掘下げた。

遺構検出作業は、第3層を除去した段階と、第5層を除去した段階の、合わせて2面で行った。

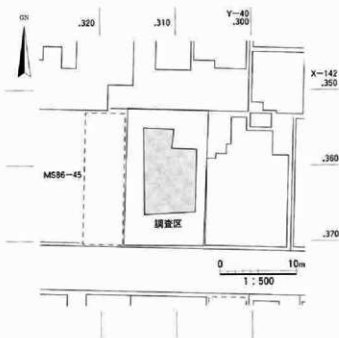


図140 MS88-33次調査箇所位置図

2) 層序

調査地の層序を第1～7層に区分した(図142)。

第1層：黒褐色砂礫混りシルト層で、層厚は20cmある。江戸時代以降の作土層である。

第2層：褐灰色粗粒砂混り粘土層で、層厚は30cmある。江戸時代以降の作土層である。

第3層：黄灰色砂礫混りシルト層で、層厚は10cmある。作土層である。

第4層：下部の灰色砂礫混り粗粒砂と上部の灰黄～黄灰色細粒砂層からなる水成層である。調査区南半に最大30cmの厚さで堆積し、北半では薄くなりシルトに移化している。上部層の基底にはやや黒みを帯びた泥質な堆積物が見られる。第Ⅲ～Ⅳ様式の弥生土器を多量に含み、これらは水流によって他所から流されてきたものと考えられる。

第5層：炭化物を多く含む黒褐色粘土質シルト層である。調査区北半に遺存しており、層厚は15cmあった。下面の境界は明瞭である。第Ⅱ～Ⅲ様式の弥生土器を含む。本層を除去した段階で、溝・土城・小穴群を検出した。第5層上面の高さは、調査区北半でTP+0.9m前後である。

第6層：灰色シルト質粘土層で、調査区北半に残存していた。層厚は約10cmあり、下位の第7層とは漸移関係にある。遺物は出土しなかった。

第7層：灰黄褐色極細粒砂～細粒砂層で、遺物は出土しなかった。調査区南西端で層厚90cmまで確

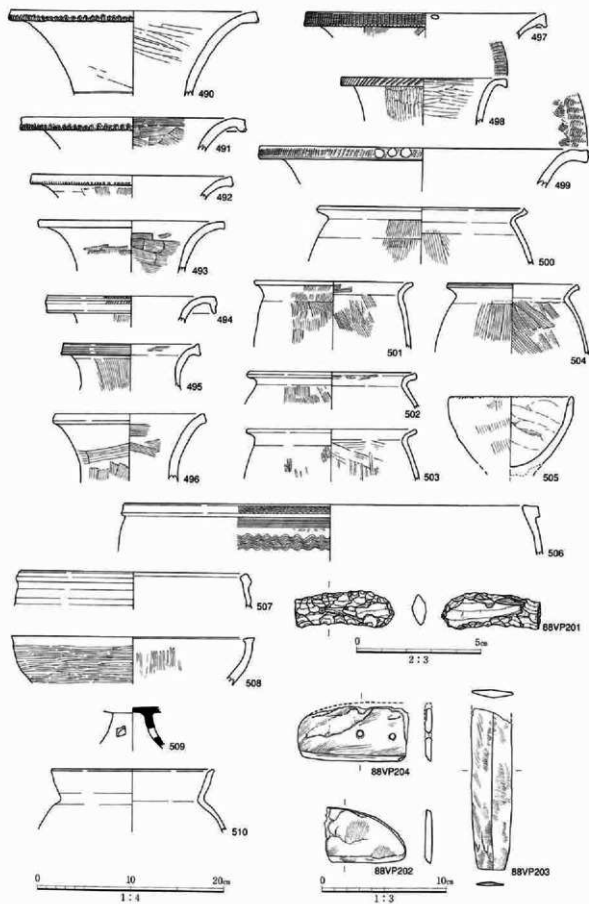


图141 出土遗物(1)

第2层(509·510)、第4层(490~508·88VP201·203)、SD01(88VP202·204)

認した。

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物

第2層出土遺物 遊離資料であるが、須恵器高杯509と土師器甕510が出土した(図141)。

509は有蓋高杯の脚部と思われ、菱形のスカシ孔を三方に穿つ。TK23~TK47型式に属するものであろう。510は頸部があまりすばまらない甕で、口縁端部は内傾する面をもつ。5世紀代のものではある。

第4層出土遺物 第4層から出土した土器は大半が小片であり、このうち広口壺490~499、甕500~504、鉢505~507、高杯508を図化した(図141)。505は底部を欠損しているが、剥離の状態から脚台が付く可能性もある。497は生駒西麓産の胎土である。これらの土器は第Ⅲ様式を主体とし、凹線文をもつ494・495・507や口縁端部を上方に拡張する500は第Ⅳ様式に下るものである。

石器遺物は88VP201・203が出土した(図141、図版38・40)。88VP201は小型の石小刀である。先端は折れて欠失している。88VP203は粘板岩製の磨製石剣である。切先は折れて欠失している。図の下端から11.5cm程度は刃部を研ぎだしておらず、茎に当たる部分であろう。

ii) 第5層下面検出遺構(図142、図版17)

第5層を除去して遺構検出を行った結果、SK01~06、SD01、小穴群を検出した。以下ではおもな遺構について記述する。

SK01 調査区北西端で検出した土壌である。調査区外の北西側に広がっており、規模・形は不明である。深さは調査区内で0.2mあり、埋土は炭泥りの黒褐色粘土質シルトである(図版17)。第Ⅱ様式の土器片が出土した。

SK02 SK01の南側で検出した土壌である。平面形は楕円形で、長径2.5m以上、

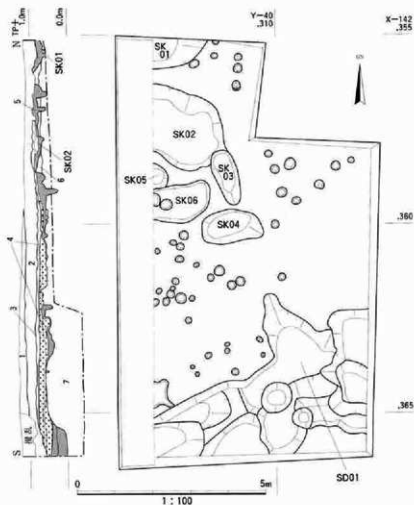


図142 第5層下面平面図・西壁断面図

短径2.0m。深さは0.5mあった。埋土は黒褐色粘土質シルトと灰黄褐色細粒砂混りシルトの互層からなり、自然の状態で徐々に埋っていったようである。第Ⅱ様式の広口壺511～513および円板状土製品523が出土した(図143、図版33)。511・512は生駒西麓産の胎土である。523は流水文を施した第Ⅱ様式の壺もしくは鉢の体部を転用したものである。

SK03 SK02の南東側にあり、これを切る土壌である。平面形は長楕円形で、長径1.6m、短径0.9mである。深さは0.4mあり、埋土は黒色粘土質シルトと灰黄褐色シルトの互層からなり、自然の状態で埋っていったようである。第Ⅱ～Ⅲ様式の広口壺516が出土した(図143)。

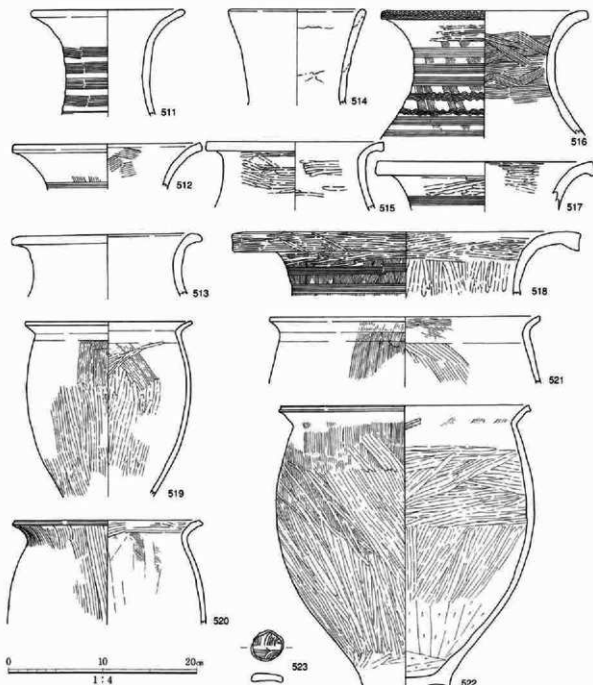


図143 出土遺物(2)

SK02(511～513・523)、SK03(516)、SK04(514)、SD01(515・517～522)

SK04 SK03の南で検出した土壌である。平面形は長楕円形で、長径1.6m、短径0.9mある。深さは0.4mあり、埋土の特徴はSK03と類似する。第Ⅱ～Ⅲ様式に属する細頸の直口壺514が出土した(図143)。

SD01 調査区南部で検出した南西-北東方向の溝である。東側で行われたMS87-1次調査で検出したSD806とつながる可能性がある(本章第22節)。幅3.0m以上あり、深さは0.5～0.8mで凹凸が激しい。上部が削平されているため、本来はもう少し規模が大きかったと考えられる。埋土は下半が水成の灰色細粒砂、上半が黒褐色粘土質シルトで、その上を水成の第4層が覆っている。埋土中からは、広口壺515・517・518、甕519～522をはじめとした多数の弥生土器が出土した(図143、図版29)。515・518が第Ⅱ様式に属するほか、口縁部に強いナデを施す甕519～522および壺517は第Ⅲ様式に属するものである。ほかにも、刃部が直線で背側が半月形の磨製石庖丁88VP202・204が出土している(図141、図版37)。88VP202は緑色片岩、88VP204は黒色の頁岩である。

小穴群 調査区のほぼ全域で、直径0.1～0.3mの小穴を多数検出した(図版17)。建物や櫓の柱穴に属すると思われるが、組み合わせるのは確認できなかった。埋土から出土した土器は第Ⅱ～Ⅲ様式に限られている。

iii) 第3層基底面検出遺構(図144)

第3層を除去した段階で検出した遺構のうち、弥生時代のものであると考えられる遺構にSD02・03、SK07～11がある。後述するように、これらの遺構から出土した遺物は、第4層出土の遺物とは型式差が認められない。

SD02・03 東西方向の溝で、ともに深さ0.1mと浅く、途中で切れている。SD02から直口壺528をはじめとした、弥生土器片が多数出土した(図145)。528は拡張した口縁部の端面に斜格子文を施しており、頸部には突帯の剥離した痕跡が認められる。第Ⅲ様式に属する。

SD03からも比較的多くの弥生土器片が出土しているが、破片中に凹線文を施すものは認められない。

SK07・08 調査区東部で検出した、深さ0.1～0.2mの浅い落込み状の土壌である。人工的なものかどうかはわからない。埋土は褐灰色極細粒砂である。SK07から

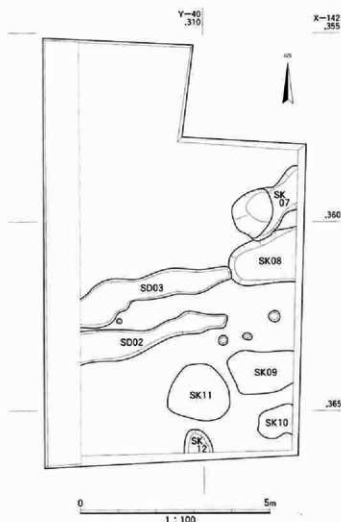


図144 第3層下面平面図

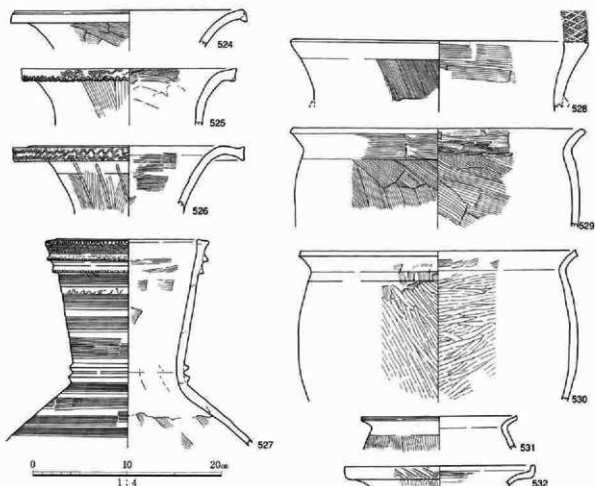


図145 出土遺物(3)

SD02(528)、SK07(531)、SK08(526・527)、SK09(532)、SK10(524・525・529・530)

甕531が、SK08から広口壺526・直口壺527が出土した(図145、図版29)。527は口縁部下と頸部にそれぞれ2条の突帯を巡らせ、口縁部下突帯の上下には波状文を、それ以外の口頸部および体部上半には直線文を巡らす。口縁部下の突帯の上に施した波状文は突帯へのナデによって、また下に施した波状文は直線文によってそれぞれ消されている。口縁端部および口縁部下の突帯にはキザミメを施す。これらは第Ⅲ様式に属するものである。

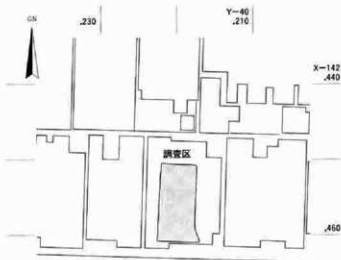
SK09～11 調査区南東部で検出した、深さ0.1～0.2mの浅い落込みである。調査では土壌と認識したが、第4層が堆積した後の小規模な窪地、あるいは第4層自体を遺構と認識したものも含まれている可能性がある。したがって、各土壌から比較的多くの遺物が出土したが、これらの多くも本来第4層に伴っていた可能性もある。SK09からは近江系の甕532が、SK10から広口壺524・525、甕529・530がそれぞれ出土している(図145、図版32)。多くは第Ⅲ様式に属するものである。(大庭)

第27節 MS89-1次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は新森中央公園の東側の、新森4丁目25に所在する(図146)。

1989年4月4～14日の間、調査を実施した。敷地内のほぼ中央に南北約10m、東西約5mの調査区を設定し、第2層までを重機によって掘削して、それ以深を人力で掘下げた。遺構の検出は第2層および第6層を除去した段階の2回に分けて行った。



2) 層序

現地表下1.3mまでの地層を以下の第1～9層に区分した(図147)。

第1層：現代の整地層および攪乱の埋土である。

第2層：調査区南半がにぶい黄褐色粘土、北半が褐灰色粘土混り粗粒砂からなる暗色帯である。層厚は最大で15cmある。西壁面で本層内から掘込まれた小穴が複数観察される。第Ⅳ様式の弥生土器および古墳時代の須恵器・土師器が出土した。

第3層：灰色砂混り粘土層で、調査区南半に分布する。層厚は最大で30cmある。下面は凹凸が顕著で、下部に黒褐色粘土の偽礫を含む。

第4層：調査区の南半に最大50cmの厚さで分布する水成層である。基底に黄灰色砂礫が見られ、その上をラミナが発達した褐灰色シルト～粗粒砂が覆っている。調査区の北半では薄くなる。第Ⅱ様式を中心に第Ⅳ様式までの弥生土器や石器遺物が多量に出土しており、これらは激しい水流によって他所から流されたものと考えられる。

第5層：調査区北半に分布し、有機質を多く含む黒褐色砂混り粘土層と灰黄褐色粗粒砂層が互層で堆積している。水成層と考えられ、層厚は20cmある。SK06の上半を埋積している。

第6層：有機質を多く含む黒褐色砂混り粘土～粘土質シルト層である。調査区北半に最大20cmの厚さで残存しており、南半では第4層によって削平され、遺構の埋土としてのみ残存している。下面は擾乱が著しく、下位層との境界が明瞭である。第Ⅱ～Ⅲ様式の弥生土器が出土した。

第7層：調査区の北半に分布する。黄灰色粗粒砂混り粘土層で、層厚は5cmある。遺物を含まない。

図146 MS89-1次調査箇所位置図

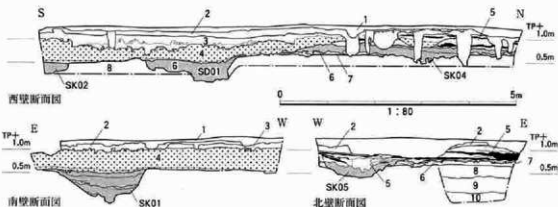


図147 調査区西・南・北壁地層断面図

下位層とは漸移関係にある。

第8層以下は調査区北壁沿いの深掘り部分で確認した地層で、遺物は出土しなかった。

第8層：灰黄褐色粗粒砂層で、層厚は30cmあった。

第9層：灰黄褐色粗粒砂層で、層厚は30cmあった。

第10層：にぶい黄褐色粗粒砂層で、層厚は20cmまで確認した。

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物

第4層出土遺物 第4層から出土した土器は、ほとんどが細片の状態であった。このうち、広口壺533～538、甕539～543、鉢544、高杯545を図化した(図148、図版32)。540は結晶片岩粒を多く含む紀伊地域からの搬入品で、543は生駒西麓産の胎土である。539は口縁部内面に波状文を巡らしており、山城地域からの搬入品であろう。以上の土器は第Ⅱ様式に属するものを主体とするが、口縁端部に凹線文を巡らす536や、口縁端部を上下に拡張する535・542などは第Ⅳ様式に下るものであり、これらが第4層の堆積時期に近いものと考えられる。

石器遺物は89VA201～208・89VA210～216が出土した(図149、図版37・39)。

89VA201・89VA203～207はサヌカイト製の打製石鏃である。89VA201は平基無茎式であるが、逆刺部分の平面形は丸みを帯びている。表裏面ともに素材剥片の剥離面が残っている。89VA203は凸基有茎式で、刃部はやや外湾し、基部下端は折れている。89VA204は凸基有茎式で、刃部は木葉形であり、基部は折れている。表裏面ともに素材剥片の剥離面を残している。89VA205は凸基無茎式で、表裏面ともに素材剥片の剥離面を残している。89VA206は凸基無茎式で、細身の木葉形となる。89VA207は凸基有茎式で、刃部は先端側に最大幅がある。

89VA202・89VA208・89VA210～213はサヌカイト製の石鏃である。89VA202は平面形が逆三角形で、平基無茎式石鏃の転用である可能性も考えられる。鏃部は握り部との境が不明瞭であるが、先端部から1.1cmの範囲に回転による使用痕が認められる。その範囲の回転体の最大直径は1.6cmである。89VA208は小さな剥片を利用した石鏃と考えたが、左図右側縁を機能部とした小型の刃器と考えることも可能であろう。89VA210は棒状で、鏃部先端付近は細かく調整してやや内湾する刃部を作り出し

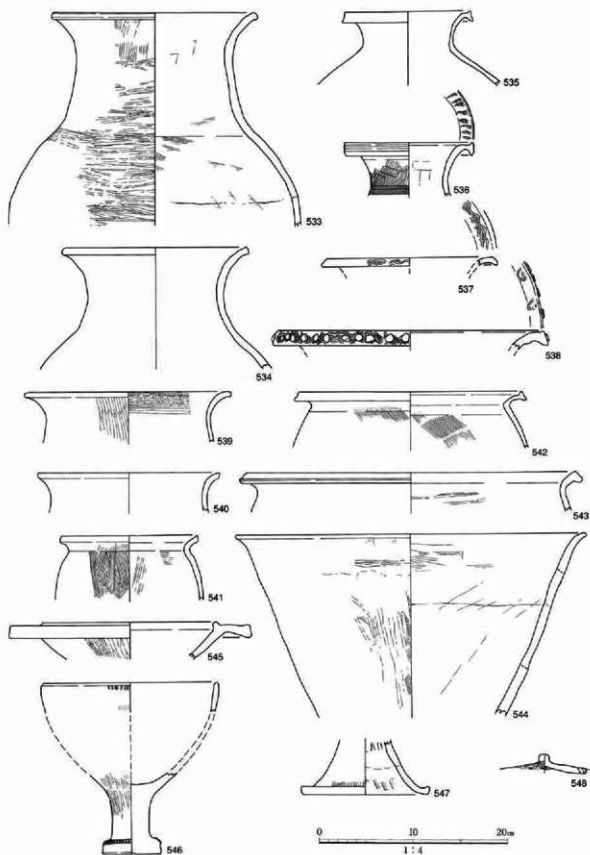


图148 出土遗物(1)

第4层(533~545)、第5层(546)、第6层(547~548)

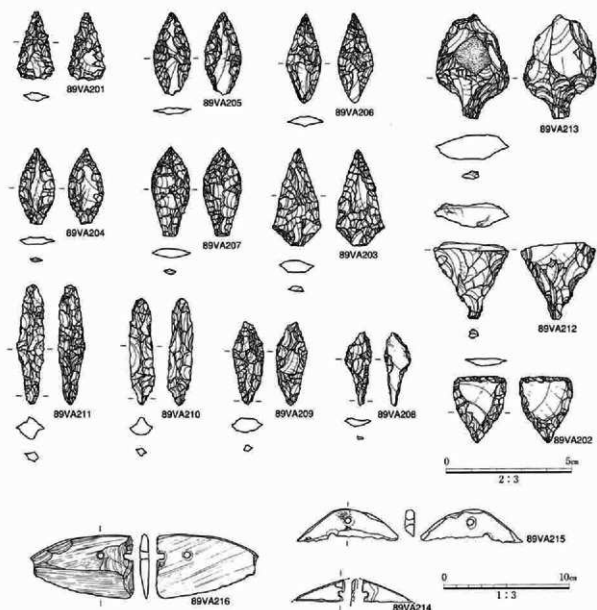


図149 出土遺物(2)

第4層(89VA201~208・210~216)、SD01(89VA209)

ている。89VA211は棒状の石錐であるが、中央付近がやや膨らみ、上半に比下半が細くなっている。調整は上半の後に下半部分に施している。図の上下両端に回転による使用痕が明瞭に認められる。89VA212は握り部をもつ。握り部は上半が欠失しているが、もとはかなり大きなものであったと思われる。89VA213は楕円形に近い握り部をもつ。錐部は折れているが、断面形が扁平である。

89VA214・215・216は磨製石庖丁で、石材は粘板岩・緑色片岩・結晶片岩である。89VA214・215は形態が不明で、89VA216は刃部が外湾している。89VA214は節理に沿って片面側が剥離している。

第5層出土遺物 高杯546が出土した(図148)。杯部は直口で、中実の柱状部から脚端部は段状となる。口縁端部および脚端部にキザミを巡らせ、杯部の外面はタテハケ調整である。第Ⅱ様式に属する。

第6層出土遺物 高杯脚部547・蓋548が出土した(図148)。548は天井部に乳頭状の突起をもつ扁

平な蓋で、2孔一對の組通し孔がある。外面には放射状にヘラミガキを加えており、鉢の蓋になると思われる。これらは相伴した土器の年代観から第Ⅱ～Ⅲ様式に属するものと考えられる。

ii) 第6層下面検出遺構(図150、図版18)

調査区北半に分布する第6層を除去後、SK04・05を検出した。また、調査区南半の第4層基底面で検出したSD01・02、SK01～03も、埋土の特徴や出土遺物の年代観から同じ層準の遺構と考えられる。

SK01 調査区の南端で検出した土壌で、南半は調査区外に及んでいる。東西長2.0m、深さ0.7mあり、埋土は下半がオリブ黒色粗粒砂、上半が有機質を含む暗灰黄色粘土～黒褐色粘土質シルトである。埋土中から鉢553が出土した(図152)。外面に撚描直線文を6条以上巡らせ、上半の3条には扇形文を加えて流水文とする。第Ⅱ様式に属する。

SK02 調査区の南西端で検出した土壌である。南北0.6m、深さ0.2mあり、黒褐色土層で埋っている。弥生時代中期の土器片が出土した。

SK03 調査区の南半で検出した不整形の土壌で、東西1.5m、南北1.0m、深さ0.3mである。埋土は暗灰色粘土～砂で、第Ⅲ様式の弥生土器片やササカイトの剥片が出土した。

SK04 調査区の北西部で検出した南北1.0m、東西1.0m以上、深さ0.3mの土壌である。基底は凹凸が著しく、炭を含む偽礫で埋っている。この東隅で検出した凹凸もSK04の一部であった可能性があり、本来の規模はもう少し大きかったようである。埋土中から弥生土器の甕555・556が出土したほか、付近から木製品549が出土した(図151・152、図版36)。

555・556は口縁部を短く折り曲げる第Ⅱ様式の甕で、体部外面の調整は555がヘラミガキ、556がハケである。555は胎土中に長石を主体に微細な角閃石を含み、556は赤色粒がめだつ。

549は直柄杓の舟形隆起部と考えられる。直径約4.5cmの円形の柄孔が斜め方向に開いている。樹種はアカガシ重属である。

SK05 調査区の北西端で検出した不整形な土壌で、深さは0.3mあった。埋土の下半は有機質を多く含む黒色粘土で、上半は水成の粗粒砂と植物遺体を含むシルト～細粒砂の互層で埋っている。上半部分は第5層に対応する。埋土中からは第Ⅲ様式の弥生土器片が出土した。

SD01 調査区の南半で検出した東西方向の溝である。検出面での幅は2.1

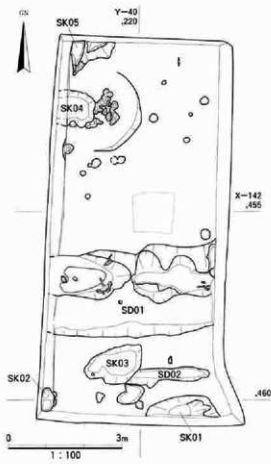


図150 第6層下面平面図



図151 SK04出土木製品

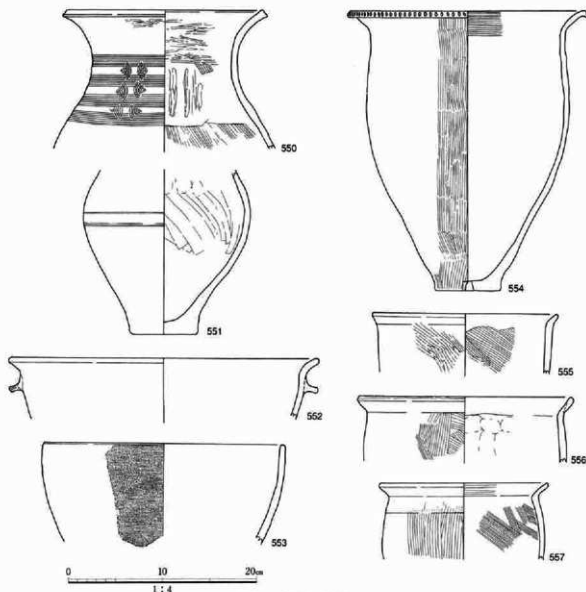


図152 遺構出土遺物

SK01(553)、SK04(555・556)、SD01(550～552・554)、SD02(557)

～2.4m、深さ0.2～0.4mで、溝の北半は南半に比べて深い。埋土は有機物を多く含む黒色砂泥り粘土である(図版18)。埋土中から広口壺550、壺体部551、鉢552、甕554といった弥生土器や打製石鏃89VA209が出土したほか(図149・152、図版39)、イノシシの大腿骨およびイノシシもしくはシカの寛骨が出土した(第Ⅲ章第2節)。

554は口縁部が強く外反し、内面にヨコハケを施す甕で、口縁端部にキザミメを巡らす。底部に焼成後に小孔を穿っている。550・552は生駒西麓産の粘土である。SD01から出土したこれらの土器は、第Ⅱ様式に属するものである。

89VA209は鏃部がやや長い逆三角形となる石鏃で、サスカイト製である。

SD02 SD01の南側でこれと平行する東西方向の溝で、途中で切れている。幅0.3m、深さ0.2mあり、埋土は黒色粘質土である。埋土中から甕557が出土した(図152)。口縁部を「く」の字に屈曲させ、

体部外面および口縁部内面には粗いハケを施すもので、第Ⅲ様式に属する。

iii) 第2層下面検出遺構(図153、図版18)

第2層を除去後、調査区北半で小穴群を検出した。調査区西壁断面の土層観察では、第2層から複数の小穴が掘込まれていることが観察できる。また、調査区の南半には、下面に踏込みの跡と思われる凹凸が顕著な第3層が分布しており、この範囲には小穴は及んでいない。西壁断面で観察できる小穴は直径0.2~0.3m、深さ0.5~0.7mあり、平面で検出した小穴群には建物や櫓を構成する柱穴も含まれていよう。小穴から出土した遺物は、第Ⅲ~Ⅳ様式に属する弥生土器に限られている。しかし、第2層中には古墳時代中期の須恵器・土師器も含まれており、小穴群がこの時期まで下る可能性もある。(大庭)

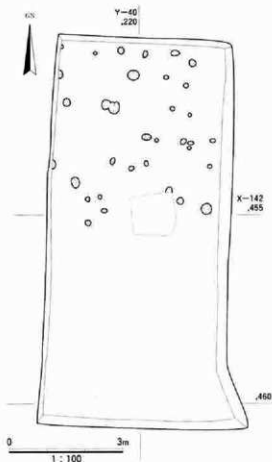


図153 第2層下面平面図

第28節 MS89-4次調査

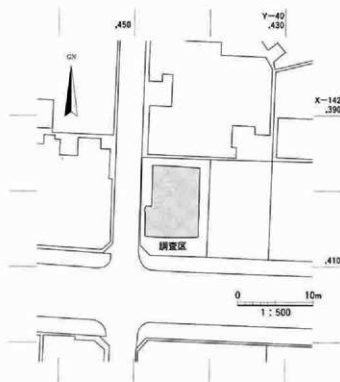


図154 MS89-4次調査箇所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は、調査区西部の新森3丁目15に所在する(図154)。南側の東西道路部分では、MS81-2次調査が行われている(本章第7節)。建設工事に伴う試掘調査で、現地表下20~60cmに弥生時代の遺物包含層が確認され、1989年4月17~27日の間、調査を実施した。

調査の対象は、敷地内のはほぼ全域、南北約10m、東西約6mの範囲である。遺物包含層が現地表面から浅く存在することから、掘削はすべて人力によって行った。

2) 層序

現地表下0.9mまでの地層を、第1~7層に区分した。(図155、図版19)

第1層：現代の整地層である。

第2層：灰オリーブ色粘土混り砂層である。層厚は5~20cmあり、下面でウシの足跡および耕作痕を検出した。瓦器を含んでおり、鎌倉~室町時代の作土層と考えられる。

第3層：黒色粘土層で、層厚は最大20cmある。調査区北西端では第5層と重なり区別できない。弥生時代中期後葉~奈良時代の遺物を含む。本層上で土壌を検出した。

第4層：下部が淡灰色粘土質シルト、上部が淡黄色細粒砂からなる水成層である。調査区の南半に厚く堆積し、層厚は最大20cmある。基底に薄い植物遺体の薄層が見られる。第Ⅱ~Ⅲ様式に属する弥生土器が比較的多く出土した。

第5層：暗色化した暗灰色シルト質粘土層で、層厚は10~15cmある。調査区の北側壁面では本層内から掘込まれた柱穴と思われる遺構が確認でき、また上面で土壌を検出した。上面の高さは調査区北西端でTP+1.0m前後である。第Ⅱ~Ⅲ様式の弥生土器や加工木が出土した。

第6層：上部が灰色粘土層、下部が暗褐色シルト~粗粒砂層からなる水成層で、層厚は30cmある。下部には植物遺体の薄層を多く含む。第Ⅱ様式の弥生土器が出土した。

第7層：暗褐色砂礫層である。

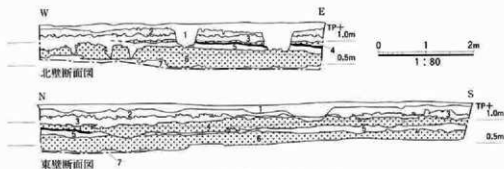


図155 調査区北・西壁地層断面図

3) 遺構と遺物

土壌・溝・小穴・落込みを検出した(図156、図版19)。

SK01 第3層上を精査中に、広口壺563が口縁部を下に向けてつぶれた状態で出土した(図157、図版19)。上面が削平されており掘形は確認できなかったが、土器を埋納した土壌の可能性もある。563は第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。

SK02 調査区の中央西端で一部を検出した隅丸方形の土壌で、深さは0.5mある。調査区西壁の地層観察から第3層より掘込まれていることが確認できる。埋土は下半が暗灰色粘土質シルト、上半が黒色粘土である。弥生土器の小片が出土した。

SK03 調査区のほぼ中央で検出した円形の土壌で、深さは0.5mある。第4層を切っていることから、第3層に伴う遺構と考えられる。埋土は下半が暗オリーブ灰色砂混りシルト質粘土、上半が黒色砂混り粘土である。遺物は出土しなかった。

SK04 調査区の南端で一部を検出した土壌で、深さは0.4mある。調査区南壁の地層観察から第3層から掘込まれていることが確認できる。埋土は暗灰色粘土で、下部に偽罫が多く見られる。須恵器の小片が出土した。

SK05～07 調査区の北部で検出した不整形形の土壌で、深さは0.1～0.2mと浅い。第5層を除去後に検出した遺構であるが、この範囲は第4層が分布しておらず、第3層から掘込まれた遺構の可能性もある。SK05はSK06を切っている。SK05から第Ⅲ～Ⅳ様式の壺564が、SK06・07から弥生時代中期の土器片が

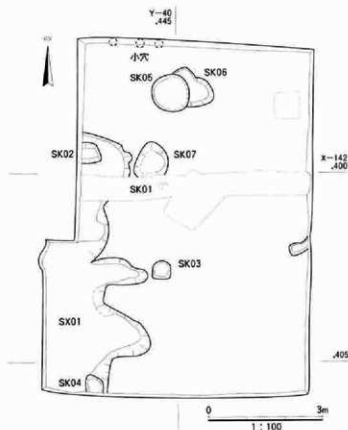


図156 調査区平面図

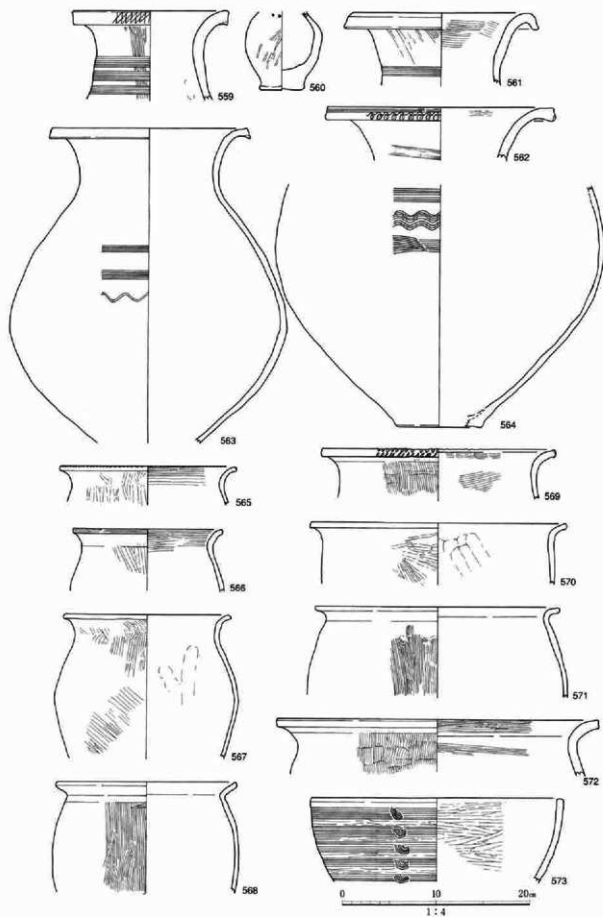


图157 出土器物(1)

SK01(563)、SK05(564)、SX01(560~562、566~573)、第5层(559)、第6层(565)

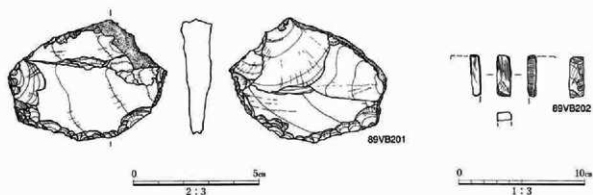


図158 出土遺物(2)

SX01(89VB202), 第3層(89VB201)

それぞれ出土した(図157)。

小穴 調査区北側壁面で第5層内から掘込まれた小穴を3基検出した。平面でも調査区端に東西方向に並んでいることが確認できる(図版19)。深さは約0.4mあり、建物や欄の柱穴の可能性もある。

SX01 第6層を除去後に検出した落込みで、調査区西端で南北6.6m以上にわたって存在する。検出面からの深さは0.3mある。流水によって挟まれ形成されたものと考えられる。植物遺体を多く含む第6層下部を中心に、弥生土器560～562、566～573、磨製石器89VB202のほか、杭もしくは柱の部材と思われる加工木558が出土した(図157・158、図版28・36)。

560はミニチュアの壺、561・562は広口壺、566～572は甕、573は鉢である。560は口縁部端が欠失するが無頸壺と考えられ、肩部に紐通し用の小孔を2孔穿つ。566・569・572は口縁部の内面にハケ調整を施す甕で、569は端部にキザミメを巡らす。570は体部外面にヘラミガキを施し、生駒西麓産の胎土である。これらの大半は第Ⅱ様式に属するものであるが、頸部の屈曲が明瞭な571がやや新しく第Ⅲ様式に属する。

89VB202は扁平片刃石斧の破片で、白色の凝灰岩製である。

第3～6層出土遺物 第3層から89VB201が、第5層から広口壺559が、第6層から甕565が、それぞれ出土した(図157・158)。565・559は第Ⅱ様式に属するものである。89VB201は自然面打面の剥片の縁辺に表裏面から細部調整を加えて刃器としたものである。主要剥離面側は、潜在割れによるバルバー・スカーが生じている。(大庭)

第29節 MS89-50次調査



図159 MS89-50次調査箇所位置図

1) 調査の経緯と経過

調査地は清水4丁目1に所在し、遺跡の最東端、大阪内環状線に面した東側に位置する(図159)。従来から弥生時代の集落の分布範囲が遺跡中央部西よりの新森中央公園周辺から北東側に広がっていることが予想されており、本調査地はその広がり状況を確認するためにも重要な地点に位置している。

建物建設工事に先立ち試掘調査を行ったところ、現地地表下15cmで弥生～古墳時代の遺物を包含する地層を確認し、1990年2月16～22日の間、調査を実施した。

調査区は南北約9m、東西約3mの狭い範囲である。調査の方法は重機と人力を併用しながら掘下げ、須恵器・土師器を包含する第3層を除去した段階で遺構検出を行った。

2) 層序

現地地表下0.8mまでの地層を、第1～4層に区分した(図160)。

第1層：現代の整地層および表土である。

第2層：灰褐色シルト層で、酸化鉄の沈着が見られる。層厚は20cmあった。作土層と考えられ、須恵器・土師器を主体に少量の弥生土器が出土した。

第3層：黄灰色粘土質シルト層で、層厚は20～40cmあった。作土層と考えられる。出土遺物は、第2層と比べて弥生土器が多く、須恵器・土師器は少ない。第2層および第3層は、古墳時代以降の耕作に伴うものであるが、時期は確定できない。

第4層：オリーブ灰～灰色粘土層である。遺物は含まれない。

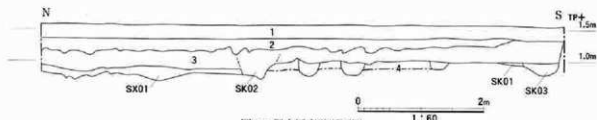


図160 調査区東壁断面図

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物(図162、図版31)

第2～3層から須恵器高杯581・584、甕585、土鍾586が、第3層から弥生土器広口壺575、甕576・577、須恵器高杯582・583が出土した。

575は第Ⅳ様式、576・577は第Ⅱ様式に属する。576は口縁部をわずかに折り曲げ、体部上半に稚拙な罫描直線文を2条巡らす。

581は無蓋高杯の杯部である。582は口径9.9cm、器高9.6cmの有蓋高杯で、ほぼ完形である。脚部に長方形スカシ孔を三方に穿つ。583・584も有蓋高杯の脚部と考えられ、583は菱形のスカシ孔を二方に、584は小円のスカシ孔を四方にそれぞれ穿っており、584は脚根部にカキメを施す。これらはTK23～TK47型式に属するものである。

586は長さ7.1cm、直径3.7cm、孔径0.9cm、重量87.5gの土師質の土鍾である。上記の須恵器と同時期のものであろう。

ii) 第3層内および基底面検出遺構(図161、図版20)

弥生時代中期～古墳時代の地層は耕作により削平されており、遺構の埋土としてのみ残存していた。第3層を除去して遺構の検出作業を行った結果、SK01～03、SX01および多数の小穴群を検出した。このうち、SK02は第3層内から掘込まれた遺構であることが、調査区東壁の地層観察から確認できた。

SK01 調査区の南東隅で検出した浅い土壌である。検出面からの深さは0.1mで、内部には炭が詰まっていた。

SK02 調査区の東壁沿いで検出した土壌である。検出面からの深さは0.3mあった。土師器高杯の破片が出土した。

SK03 調査区の南隅で検出した。土壌としたが全体の形状は不明であり、溝の可能性もある。埋土は灰色粘土層である。弥生土器の破片が出土した。

SX01 調査区の北半で検出した落込みである。検出面からの深さは0.2mで、黒褐色粘土～褐灰色砂で埋っていた(図版20)。褐灰色砂層中から弥生土器を中心に少量の須恵器破片が出土した。須恵器は上位の第3層からの混入の可能性もある。

弥生土器は広口壺574、甕底部578・579、須恵器は杯蓋580を図化した(図162)。574は第Ⅲ～Ⅳ様式に属し、580はTK23型式に属するものである。

小穴群 調査区の南半で、直径0.2～0.3m、深さ0.1m前後の小穴を多数検出した(図版20)。埋土は暗褐～黒褐色粘土質シルトを主体とする。柱痕跡が認められるものもいくつかあったが、調査面積



図161 調査区平面図

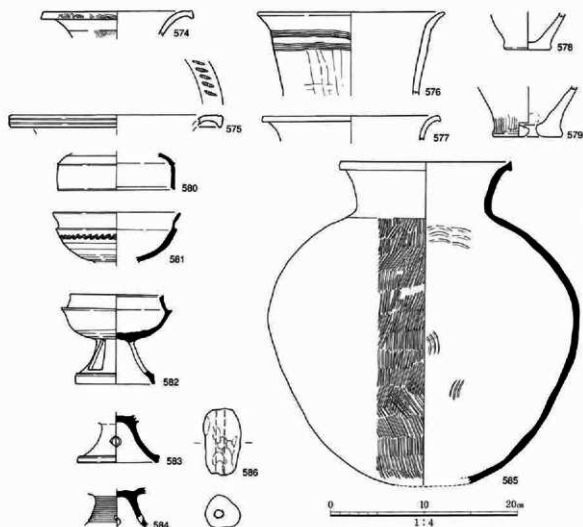


図162 出土遺物

SX01(574・578～580)、第2～3層(581・584～586)、第3層(575～577・582・583)

が狭いため、建物を復元することはできなかった。多くの小穴内から弥生土器の破片が出土しており、第Ⅲ～Ⅳ様式に属するものも認められる。調査区の壁面の地層観察から、第3層から掘込まれたものも存在するが、埋土の違いや弥生土器しか出土しないことから、多くは弥生時代中期の遺構と考えられる。

(大庭)

第30節 MS90-25次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は森小路遺跡の北部に位置し、新森5丁目と清水2丁目との境界にあたる東西道路である(図163、図版21)。この東西道路に面する調査としてはMS88-31次調査(本章第25節)、MS94-6次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996]が行われており、多くの遺構と遺物が確認されている。



図163 MS90-25次調査箇所位置図

調査に先立ち1989年11月19日に試掘調査を実施した。その結果、調査地の中央付近では、弥生時代の遺物包含層が現在の地表面下0.5m付近で確認された。そこで、その付近を中心とする約58㎡(図164の斜線部分)に対して平面的な調査を行った。そのほか、おもに地層観察にとどまるが、調査地の全体にわたる雨水枡の設置個所を調査して、遺物包含層と遺構・遺物の分布状況を確認した。雨水枡の調査では、遺構・遺物が数個所で確認された以外は攪乱が著しく、あまり良好な資料は得られなかった。報告では便宜上、西側をⅠ区、東側をⅡ区として報告する。

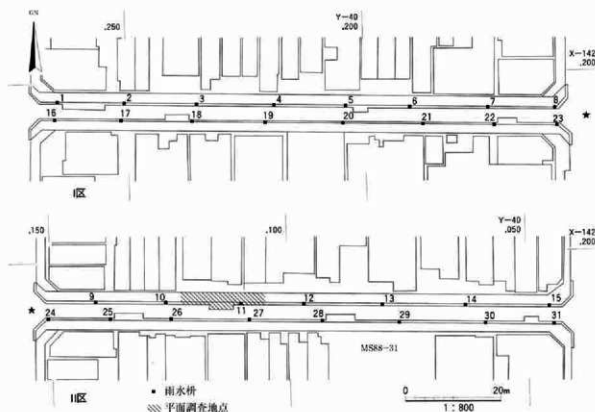


図164 調査地点配置図

2) 層序

1～31の各雨水井地点(図164)からみた調査地の層序は以下の第0～9層に区分できる(図165)。地点によってこれらに当てはまらない地層が存在するばあいは、英字で注記した。

第0層：現代の整地層ないし攪乱の埋土である。

第1層：褐灰色粘土質シルト層で、陶磁器のほか弥生土器・須恵器を含む江戸時代以降の作土層である。なお、同時期とみられる地層に、蓮根田の耕作に係ると考えられるオリープ黒色粘土質シルトがあり、平面調査地点付近で確認されている。

第2層：黄灰色粘土質シルト層で、陶器を含む江戸時代の作土層である。

第3層：黒色含粗粒砂粘土質シルト層で、須恵器・弥生土器・炭化物を多く含む古墳～奈良時代の地層である。5・6・8・10地点で確認された。

第4層：黒褐色粘土質シルト層である。弥生時代の遺物包含層で、第Ⅱ～Ⅳ様式の土器が出土した。Ⅰ区東半部およびⅡ区西側の10地点・平面調査地点に分布している。

第5層：黒色粘土質シルト層で、Ⅰ区の5・6地点で確認した。第4層との上下関係は不明である

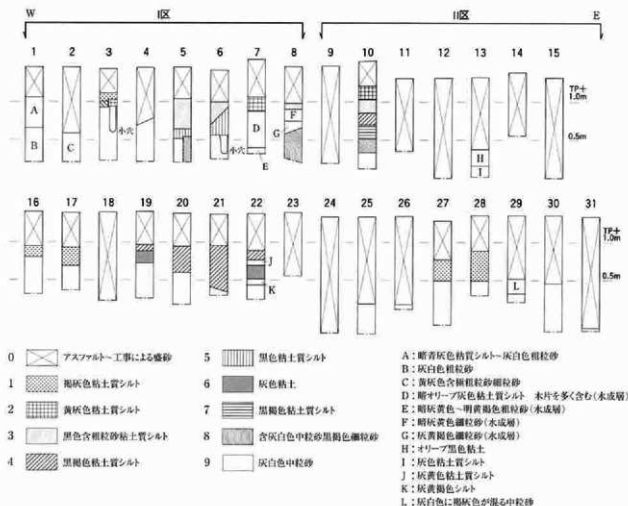


図165 各雨水井の地質柱状図

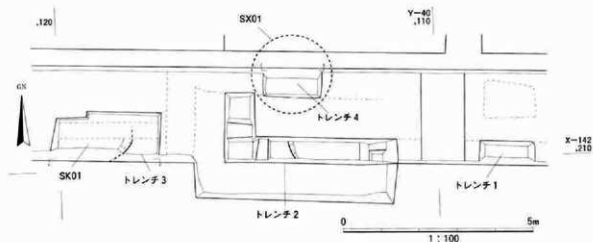


図166 平面調査地点のトレンチ配置図

が、出土遺物は弥生時代のものに限定される。

第6層：灰色粘土層で、Ⅰ区の19・22地点で確認された。第4層の下位に当り、弥生土器が出土している。

第7層：黒褐色粘土質シルト層で、Ⅱ区10地点でのみ確認された。弥生時代の遺物包含層ないし遺構埋土となろう。

第8層：灰白色中粒砂を含む黒褐色細粒砂層の水成層である。Ⅰ～Ⅱ区の5・8・10地点で確認された。弥生時代の遺物を包含する地層の基底となる。平面調査地点のトレンチ4にあるSX01埋土の基底部分も、本層の可能性もある。

第9層：灰白色中粒砂層で、調査地全体に分布している。弥生時代以前に淀川による沖積作用で堆積した自然堤防にあたる。

3) 遺構と遺物

i) 雨水井地点

雨水井部分は以前の工事による擾乱が著しく、遺跡本来の地層が残存する箇所は非常に少なかった。弥生時代のものと思われる小穴が認められたのはⅠ区の3・6地点であった。3地点の小穴埋土は炭化物を含む黒褐色粘土質シルト、6地点の小穴埋土は黒色粘土質シルトである。

雨水井の各地点から出土した遺物には、第2層から弥生土器589・590、第3層から須恵器609、第4層から弥生土器588・596・597、第8層から弥生土器591・592・598・603がある(図168)。そのほか、重機の掘削中や掘削から須恵器607・608が出土している。第2層から出土した弥生土器は、本来の地層に伴うものではない。589は受口状口縁をもつ壺、590は無文の細頸壺で、第Ⅲ～Ⅳ様式に属するものであろう。第3層から出土した壺609はON46段階～TK208型式に属すると思われる。607・608も、本来は第3層に伴うものであろう。杯G607は飛鳥Ⅱに、蓋608はTK23型式に属する。第4層の588は広口壺で、やや肥厚させた口縁端部に斜行するキザミメを施している。第Ⅱ様式に属する。596は受口状口縁の壺ないし鉢で、口縁部上下端に凹線文を巡らせ、その間を櫛櫛波状文で埋

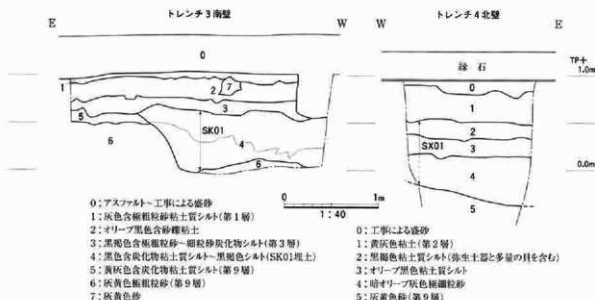


図167 トレンチ3・4の地層断面図

めている。597は鉢もしくは高杯で、2条の凹線文を巡らせている。これらは第Ⅳ様式に属する。第8層の甕591と鉢592は第Ⅱ様式に属する。591は外面に横方向のヘラミガキを施し、592は内外面を横方向のハケで調整する。598・603も甕であるが、598は口縁部が緩やかに外反するものの端部を強くナデており、第Ⅲ様式に下るものと思われる。603は頸部の屈曲が強く、口縁端部を上下に拡張させたもので、第Ⅳ様式に属する。

ii) 平面調査地点(図166)

平面調査地点でも現代の攪乱が著しく、本来の地層が残っていたのはトレンチ1～4部分にすぎなかった。

トレンチ3の南半部で弥生時代のSK01を検出した。全体の規模は不明であるが、深さは0.7m前後で、埋土は第4層に相当する。弥生土器は甕595・高杯599・蓋604(図168)などが出土した。595は口縁部を水平に折り曲げ、内面をヨコハケ調整する甕であり、口縁端部を強くナデる。599は折り曲げ口縁の高杯である。604は外面をケズりで仕上げた甕蓋である。599は第Ⅳ様式に下るものであろう。また、石器遺物に90VV201がある(図168、図版38)。粘板岩製の磨製石器で、図の上下端は破損

しているものの、左右の側縁が刃部として研ぎ出されているため、もとは磨製石剣であったものであろう。破損後に、図の下側を再研磨して石鑿のような刃器にしようとしたと考えられるが、研磨は未完成である。

またトレンチ4で見つかった層厚0.2mの貝層は、層相から遺構に伴う可能性が高い(SK01、図版21)。この貝層はトレンチの南壁を除くすべての壁面で認められた。貝の種類はほとんどがセタシ

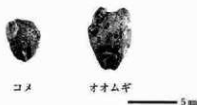


写真8 SK01出土コメ・オオムギ

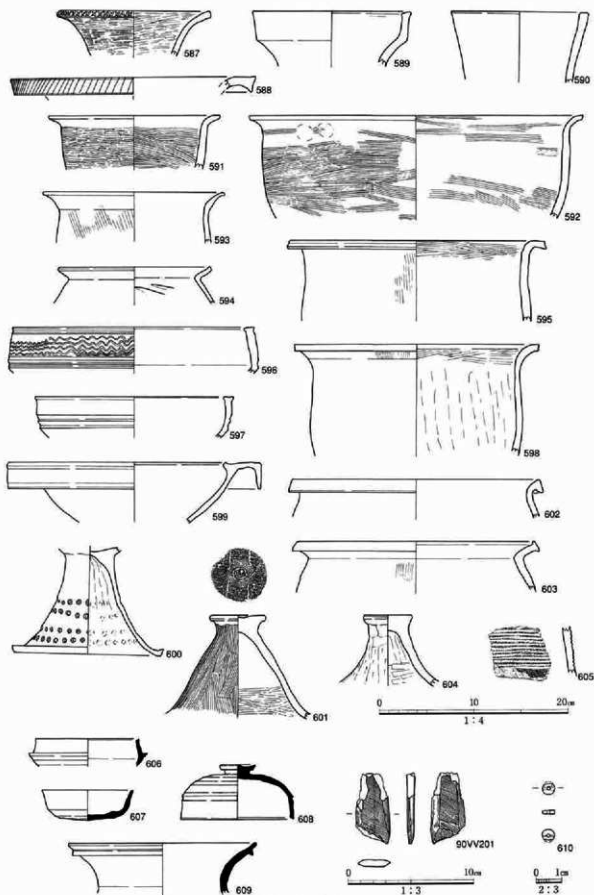


図168 出土遺物

雨水井地点：第2層(589・590)、第3層(609)、第4層(588・596・597)、第8層(591・592・598・603)、その他(607・608)
 平面調査地点：第2層(587・593・594・600～602・605・606・610)、SK01(595・599・604・90VV201)

ジミで、そのほかクロダカワニナ・タニシ科・フネガイ科・カニモリガイがある。貝以外の遺物として、第Ⅱ様式を主体とする甕・壺の破片、炭化したコメやオオムギ(写真8)、微細種子類、加工木片、イノシシの下顎歯が出土した(第Ⅲ章第2節)。

そのほか、遺構に伴わない遺物には、以下のものがある。第2層から出土したものは弥生土器壺587、甕593・594・602・605・高杯600、蓋601および須恵器杯606、滑石製白玉610である(図168)。587は口縁端部に斜格子文を施し、内外面をミガキで仕上げている。第Ⅱ様式に属する。甕のうち593は第Ⅱ様式、594・602は第Ⅳ様式に属する。600は脚部中央から下半にかけて、竹管文を4段巡らせたもので、第Ⅳ様式に属する。601は第Ⅱ様式に属するもので、甕蓋であろう。605はヘラ描沈線文を多条に巡らせたもので、第Ⅱ様式に属する。606はTK23型式、610は表表面に整形時の削痕が残っている。

(清水)

第31節 MS93-29次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は遺跡東端の新森5丁目4に所在する(図169)。建物建設事に伴う試掘調査で、弥生土器に混って須恵器が出土する古墳時代の遺物包含層が確認されたことから、1993年8月18～27日の間、本調査を実施した。

調査範囲は建築予定地中央の南北約15m、東西約5mの部分に限定した。まず、現地地表下約1mまでの現代の整地層および江戸時代の作土層(第1・2層)を重機によって除去し、それ以降を順次、人力で掘削し調査を進めた。第2層を除去した段階で遺構の検出作業を行い、それ以降については調査区南部を一部深掘りし、地層の観察を行った。

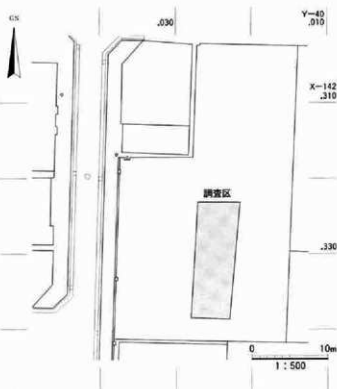


図169 MS93-29次調査箇所位置図

2) 層序

現地地表下1.5mまでの地層を、第1～5層に区分した(図170)。

第1層：現代の整地層である。

第2層：黒褐色粘土層で、層厚は20～25cmあった。江戸時代の作土層である。

第3層：水成のにぶい黄色礫混り小礫～極細粒砂層である。層厚は最大30cmで、調査区東半で検出したSX01を埋積する。弥生時代中期の石甕が出土した。

第4層：灰黄色中粒砂層で、層厚は約50cmあった。本層以降からは遺物はまったく出土しなかった。

第5層：灰色中粒砂層で、調査区南端の深掘り部分で一部を確認した。層厚は20cm以上あり、下限は未確認である。

3) 遺構と遺物

第4層上位の第2層基底面で、SX01、SK01・02、SE01を検出した(図170、図版22)。

SX01 調査区南東部に位置する落込みで、調査区外へ広がっている。深さは調査区内で0.3mあった。自然に形成されたものか、人工的なものかは判断がつかない。埋土は水成層(第3層)で、基底に薄い小礫が見られ、上半は極細粒砂で埋っていた。埋土中から93VB201が出土した(図173、図版39)。

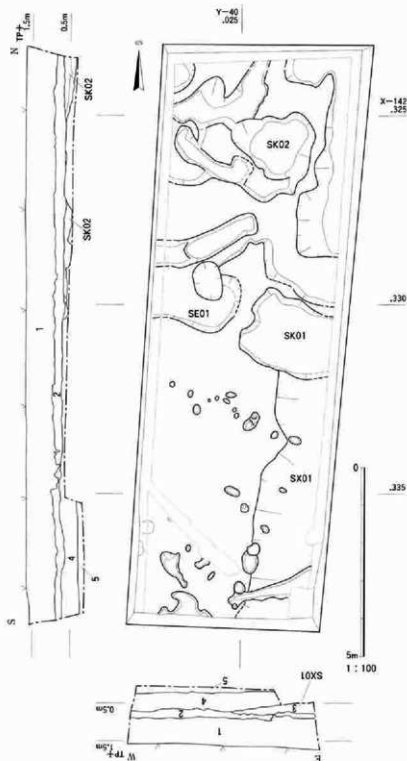


図170 第2層基底面検出遺構平面図および西・南壁地層断面図

626は口縁部が一部欠損していたがほぼ完形であり、窪みの底付近から正立した状態で出土した。出土時には体部の孔に木製の栓が差込まれていた(写真9)。TK208型式に属するものである。

628は検出時にはほぼ原形を保っていたものである(図版22)。検出状況と木目の方向とを参考に図上復元した。直径18.6cm、器高6.5cmに復元できる碗形の刳物で、把手を有する。木取りは横木取り

木の葉形となる凸基無蓋式石
甕で、サスカイト製である。

SK01 調査区中央東寄りで
検出した不整形の土壇で、深
さは約0.2mと浅い。これも人
工的なものかは判断できな
かった。第Ⅱ～Ⅲ様式の弥生
土器の小片が出土した。

SK02 調査区北半に広がる
不整形な土壇である。底は凹
凸があり、深いところで30～
50cmあった。弥生時代中期の
土器が多数出土しており、古
墳時代中期の須恵器・土師器
もわずかに含まれる。調査時
には、古墳時代中期に最終的
に埋った一連の遺構と判断し
たが、複数時期の遺構が重複
していた可能性もある。

SK02からは弥生土器の広口
壺611・612、甕613～617・
619～621、壺底部618・
622、須恵器連626、木製把手
付碗628など多数の遺物が出
土した(図171・172、写真
9、図版29・31)。

613・615は体部外面の調整
がヨコヘラミガキの甕で、生
駒西麓産の胎土である。612
が第Ⅲ様式に下るほかは、第
Ⅱ様式に属するものである。

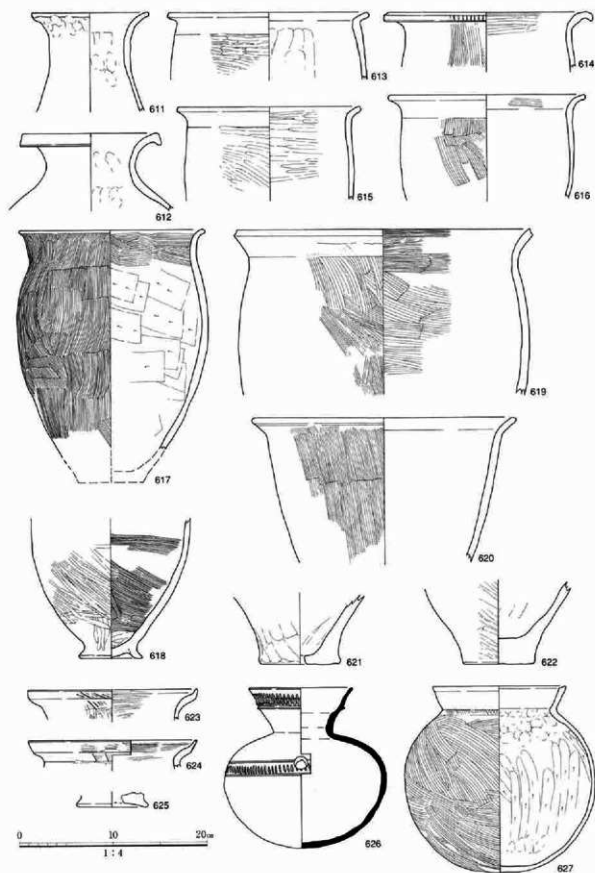


圖171 出土遺物

SK02(611~622, 626), SE01(627), 第2層(623~625)

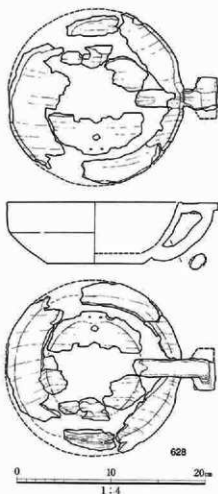


図172 SK02出土木製品

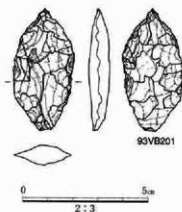


図173 SX01出土石器遺物



写真9 甕626(栓が付いた状態)

である。底は平底で、体部中ほどに稜がある。把手の上端部分はT字形の平坦面をもつ。把手の断面形は隅丸長方形である。樹種はケヤキと思われる。626の近くで出土していることから、時期は5世紀後半と考えられる。

SE01 形態から素掘りの井戸と考えられる。平面形は南北1.1m、東西0.8mの楕円形で、深さは0.5mある。SE01の底からは完形の土師器甕627が口縁部を下に向けた状態で出土した(図171、図版22・31)。627は布留式甕の系譜をひくものであるが、口縁部の形態や分厚い体部の特徴から時期は5世紀中葉と考えられる。

小穴群 調査区の南半分で直径0.1～0.2m、深さ0.1～0.2mの小穴群を検出した。平面ではL字状に並んでいるようにも見える。柱穴の可能性もあるが、調査では判断できなかった。このうちのいくつかはSX01を全掘した段階で検出しており、埋土から弥生時代中期の土器片が出土したことから、弥生時代中期にさかのぼる可能性がある。

第2層出土遺物 遊離資料であるが、第2層から弥生土器甕623～625が出土した(図171、図版32)。623・624は口縁端部を上方に拡張する近江・山城系の甕である。体部外面および口縁部内外面は同一の粗い原体によるハケ調整を行っており、口縁部外面のハケメは623が斜め方向、624が横方向である。625は甕の底部で、結晶片岩粒を多く含む紀伊からの搬入品である。(大庭)

第32節 MS94-11次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は遺跡のほぼ中央部の新森5丁目9に所在する(図174)。東隣ではMS80-11次調査が、道路を挟んだ北西側ではMS93-35次調査が行われており、弥生時代中期や古墳時代の遺構・遺物が密に検出されている。本地点でも民間の建物建設工事に伴う試掘調査で、弥生土層を包含する地層や遺構が検出されたため、1994年5月19日～6月1日の間、調査を実施した。

調査区は敷地の北西部で、南北約10m、東西約10mの範囲に設定した。事前に表土および現代の整地層である第1層を重機で除去したのち、調査を開始した。この際、地層の堆積状況を調べるため削溝を掘削したところ、第2層は須恵器・土師器が多く含まれるものの、江戸時代以降に土化されていたことが判明した。この層は硬く締まっており、限られた調査期間内での人力による掘削は困難と思われた。そこであらためて重機によって、第4層までを掘削し、以下を人力によって掘削した。遺構の検出作業は、第4・6の各層を除去した段階の、合計2面で行ったが、埋土の観察や出土遺物によって5時期に分けることが出来た。

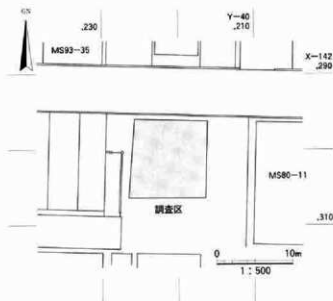


図174 MS94-11次調査箇所位置図

2) 層序

現地表下1.2mまでの地層を、第1～7層に区分した(図175、図版23)。

第1層：表土および現代の整地層である。

第2層：黒褐色粘土質シルト層で、層厚は約20cmあった。下面は凹凸が顕著に認められる。多量の須恵器・土師器のほか瓦片を含むが、江戸時代以降の作土層と考えられる。本層基底面の遺構に土壇1基がある。

第3層：黒褐色砂質粘土～粘土層である。層厚は約10cmで、調査区東部にのみ分布する。古墳時代中期の須恵器・土師器を含む。本層の下面で溝・土壇を検出した。

第4層：黒褐色砂質シルト～シルト質中粒砂層の暗色帯である。南西部では約30cmの厚さがあるが、それ以外の範囲は江戸時代以降の耕作によって失われており、遺構内にのみ遺存する。弥生時代中期後葉の遺物を含む。本層を除去した段階で落込み・土壇・溝・小穴を検出した。上面の高さはもっとも高いところでTP+1.3m前後である。

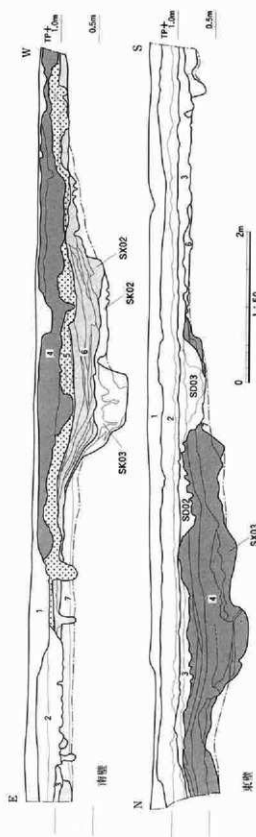


図175 調査区南・東壁地層断面図

第5層：水成の暗褐～黄灰色細粒砂層である。調査区南西部に約20cmの厚さで分布する。遺構内では厚くなる。

第6層：黒褐色粘土質シルト層～黒色砂質シルト層の暗色帯で、層厚は約15cmあった。弥生時代中期前葉の遺物を多く含む。本層を除去後に、落込み・土壌・溝・小穴を検出した。第5層で覆われた上面の高さは、TP+1.0m前後である。

第7層：暗灰黄色粘土層～黄褐色細粒砂層である。遺物は出土しなかった。

3) 遺構と遺物

i) 第6層下面検出遺構(図176、図版23)

第6層を除去後に遺構の検出作業を行い、SX01・02、SK01～04、SD01を検出した。

SX01 調査区の北西部で検出した、不整形な落込みである。深さは約0.3mあった。第Ⅱ様式の弥生土器片を含む。

SX02 調査区の北西部にある東西～南北方向に曲る落込みである。幅約2.5m、深さ約0.3mで、埋土は黒褐色粘土質シルト～黒色砂質シルトである。第6層および洪水層である第5層でも埋りきらず、第4層の形成時にまで窪み(SX04)として残っていたようである。SX02を掘下げていくと、SK01～03の輪郭が検出された。

SK01 SX02内で検出した東西約4.0m、南北約1.4mの隅丸長方形の土壌で、やや湾曲している。深さは約0.6mあり、水つきの粘土で埋っていた。上層から下層にかけて弥生土器が比較的多く出土した。

このうち、広口壺629・630・632・634、甕637～639、甕641、鉢642を図化した(図177、図版30・32)。632は口縁部以外はほぼ完形である。639は体部上半に椎曲な櫛插直線文を1条巡らす甕である。641は壺あるいは鉢の甕と考えられ、一方に縦通し用の孔がある。634は生駒西麓産の胎土である。これらは第Ⅱ様式に属するものである。

SK02 SK01の南側でこれと直交する南北2.8m以上、東西約1.5mの土壇である。深さは約0.2mあり、SK01同様、水つきの黒褐色粘土で埋っている。埋土の下半から甕636・640、鉢644をはじめとした第Ⅱ様式に属する多数の弥生土器のほか、磨製石廬丁94VB202が出土した(図177・184、図版37)。636・644は生駒西麓産の胎土、640は胎土中に結晶片岩を多く含む紀伊からの搬入品である。また、644は後述するSK03の下層から出土した破片と接合している。94VB202は全形が杏仁形となる石廬丁で、緑色片岩製である。

SK03 SK02と隣接する、南北2.0m以上、東西約1.5mの土壇である。深さは約0.4mあり、埋土はSK02同様、水つきの黒褐色粘土である。埋土の下半から第Ⅱ様式の甕633・鉢645が出土した(図177)。これらはともに生駒西麓産の胎土である。

SX02および、これの内部に規則的に配置されるSK01～03は、埋土の特徴や含まれる遺物の時期からみて、同時存在していた可能性が高い。

SK04 調査区の北西部で検出した土壇である。調査区外に延びており、規模や形状は不明である。深さは約0.5mまで確認した。埋土上部から第Ⅱ様式の甕631、甕635、鉢643が出土した(図177、図版30)。

SD01 調査区の中央で検出した北東-南西方向の溝で、幅約1.4m、深さは約0.2mある。SX02の北東コーナー部に連結している。遺物は出土しなかった。

小穴群 調査区全域にわたって多数の小穴を検出した。直径0.1～0.2m、深さ0m前後である。埋土は粘質土を主体とする。建物の柱穴の可能性があるが、組み合わせるのを判別することができなかった。多くの小穴から弥生土器の破片が出土しており、時期が判別できるものは第Ⅱ様式に限定できる。

ii) 第4層下面検出遺構(図178、図版23)
第4層を除去後に遺構検出作業を行った結果、多くの遺構を検出

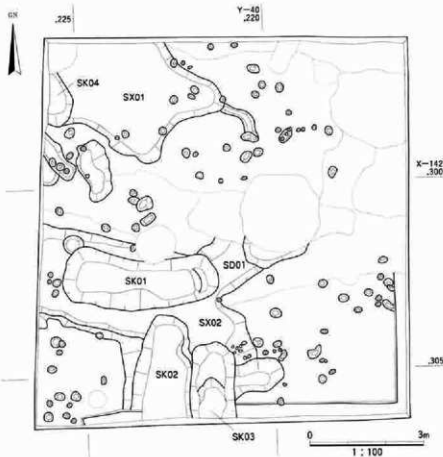


図176 第6層下面平面図

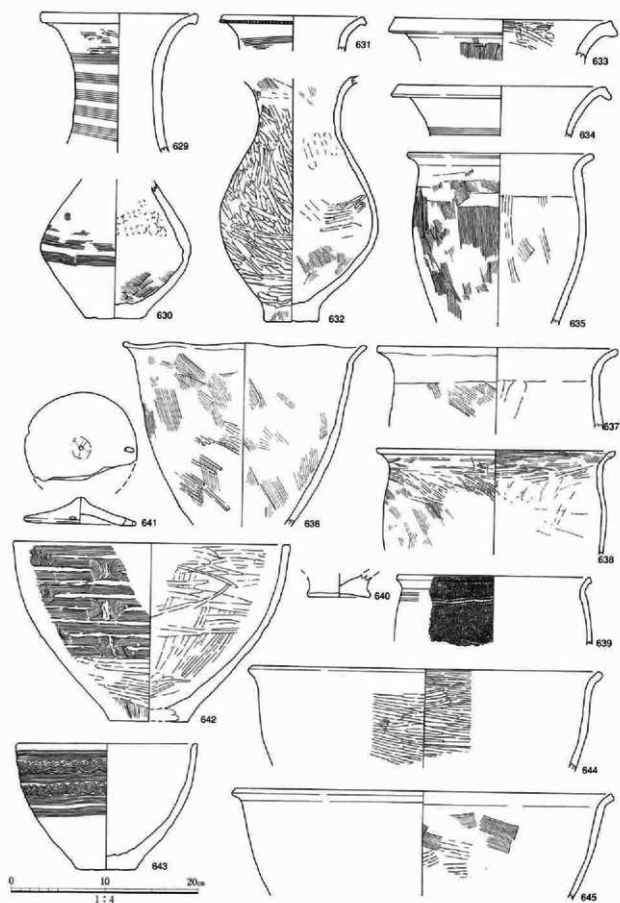


圖177 出土遺物(1)

SK01(629・630・632・634・637~639・641・642)、SK02(636・640・644)、SK03(633・645)、SK04(631・635・643)

した。この中で、第4層を埋土とするSX03・04、SK05～08を第4層下面検出遺構とする。

SX03 調査区北東端で西屑を検出した落込みで、深さは0.7m以上ある。埋土の主体は炭化物を含む水成の細～中粒砂である。埋土から第Ⅱ様式に属する弥生土器片が少量出土している。東隣のMS80-11次調査地および、北西隣のMS93-35次調査地で検出した落込みと一連の可能性が高く、幅約9mの北西-南東方向の流路と考えられる。MS93-35次調査では、埋土の下層から第Ⅱ様式の弥生土器が、最上層から5世紀代の須恵器・土師器が出土しており[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1995]、長期間存在していたものと考えられる。

SX04 調査区の南西部で検出した東西-南北方向に曲る落込みで、幅約3.0m、深さは最大で0.4mある。前述したSX02が第5層までで埋りきらなかったものと考えられる。埋土中からは、多くの弥生土器が出土しており、壺651、甕655・656を図化した(図179、図版32)。651・655は第Ⅱ様式、656は第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。655は口縁端部を欠失しているが、内外面に波状文を巡らす近江系の土器である。

SX04から出土した石器遺物には、磨製の太型蛤刃石斧94VB208、有孔軽石94VB210がある(図184、図版38)。94VB208は砂岩製で、全体に磨滅している。94VB210は軽石製の浮きと考えられる。紐通しのための孔が2箇所あるが、貫通していないため、未製品であろう。孔の断面形は底面の中央がふくらんでおり、穿孔の工具が二股状ないし管状であったことがわかる。

SK05 調査区北端で検出した土壌である。第Ⅳ様式に属する把手付の広口壺647が出土した(図179、図版30)。647は口縁端部を斜め方向に拡張させており、端面には凹線文を巡らせたのち、キザミメを断続的に施す。播磨地域からの搬入品であろう。

SK06 調査区南西部で検出した不整形な土壌で、深さは約0.1mと浅い。第Ⅱ様式に属

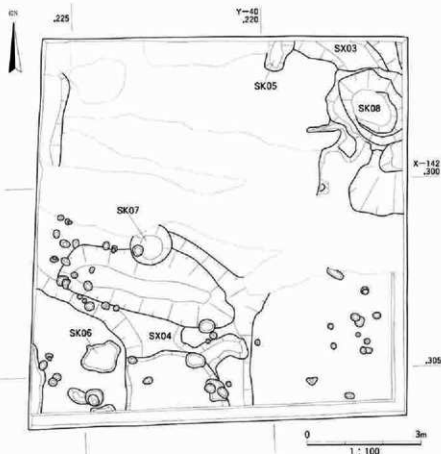


図178 第4層下面平面図

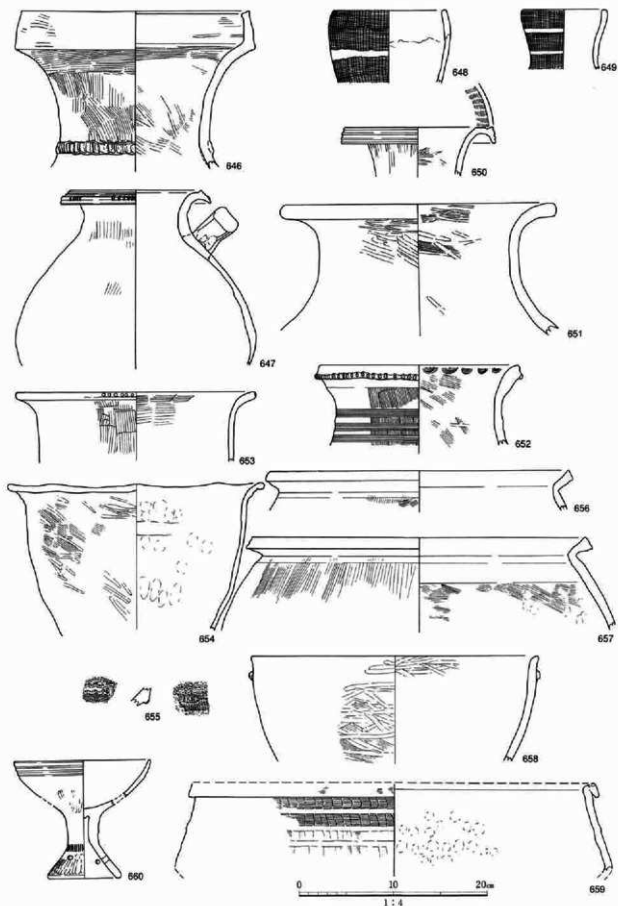


圖179 出土遺物(2)

SX04(651・655・656)、SK05(647)、SK06(658)、SK07(650・657・659)、SK09(652~654)、SD05(646)、東側側溝(648・649)、重機掘削(660)

する鉢658のほか、第Ⅳ様式の弥生土器片が出土した(図179)。658は体部上半に扁平な楕状の把手を付けており、内面におこげ状の黒色物質が付着している。

SK07 調査区の中央やや西よりで検出した円形の土壌である。直径1.2m、深さは約0.7mある。埋土は中層に炭層が2枚認められる以外(図180の2・5層)、壁の崩落などによる第7層起源の偽罅や植物遺体を多く含む細粒砂や粘土である。第Ⅳ様式の壺650、甕657、鉢659が出土した(図179)。ほかにも、モモ核が出土した。

SK08 調査区北東に位置する円形の土壌で、SX03掘削中に検出した。直径2.5m、深さは1.0mある。埋土の上半を中心に、大量の弥生土器や石器遺物が出土した。また、これらに伴って貝が多く認められたため、土器集中部分の埋土を持ち帰り土壌洗浄した結果、セタシジミやハマグリを中心とした淡水～鹹水性の貝類のほか、多量の炭化したコメや淡水～汽水性の魚骨が多く出土した(第三章第2節)。

弥生土器は広口壺661～664、細頸壺665、壺体部666、台付無頸壺678、甕667～674、高杯675・676、蓋677がある(図181・182、図版30)。664は体部上半に上から順に雑な縞状文を2条、直線文を3条、波状文を1条巡らす。色調はにぶい黄褐色で、胎土中に長石・石英・雲母粒を含む。665は器形や文様が生駒西麓産の土器と共通するが、色調が灰黄褐色で、森小路遺跡で一般的に見られるものと変わらない。675・676は垂下する口縁部を有する高杯である。676は柱状部に多条の沈線を2段に配する。色調は明褐灰色で、胎土中に長石や赤色粒を含んでおり、搬入品と考えられる。蓋677と台付無頸壺678はともにほぼ完形に復元できるものであり、セットであった可能性がある。甕は口縁端部に強いヨコナデを施して、上端をつまみあげるものが多い。670・671は端面にキザミメを施す。以上の土器のうち、第Ⅱ様式に属する661以外は、おおむね第Ⅳ様式の範疇におさまるものであり、これらは貝や魚骨などとともに一括して土壌内に投棄された可能性が高い。なお、大型の甕673は内面に赤色顔料が付着している(トーン部分)。土器棺もしくは赤色顔料の容器として用いられたと考えられるが、出土状態からみてこれも二次的に投棄されたものと判断される。

土製品は円板状土製品679がある(図182、図版33)。壺の体部を転用しており、中央に直径0.5cmの円孔を穿つ。側面は平滑に整えている。

石器遺物は磨製石庖丁94VB206・94VB207、打製石錐94VB211、打製石鏃94VB212がある(図183・184、図版37・39)。94VB206は頁岩製で、現状の平面形は刃部が外湾しているが、本来は直線であった刃部の端が折れた後に研ぎ直した可能性も考えられる。94VB207は結晶片岩製で、刃部が直線で全体が半月形となる。94VB211は石錐の錐部の破片である。94VB212は尖頭器ないし石鏃の未製品と考えられる。先端・基部の両方が折れて欠失しているが、その両方の折れ面から数回の細部調整が施

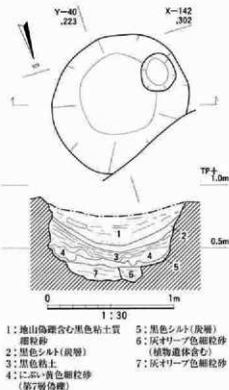


図180 SK07平面図・断面図

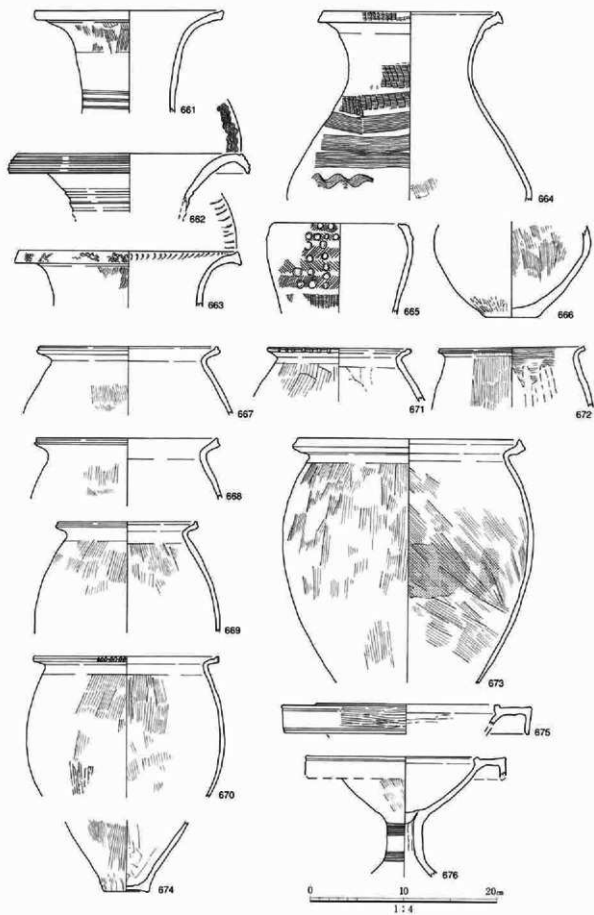


圖181 SK08出土遺物(1)

されている。尖頭器などの折れたものから石鏃へ再利用を試みたものと考えられる。打製石器の石材はサスカイト製である。

小穴群 第4層を除去した段階で多数の小穴を検出した。直径0.1～0.3m、深さ0.1～0.2mある。埋土に砂粒を含んでおり、前述した第6層に伴う小穴とは区別でき、第IV様式の弥生土器片が含まれるものもある。組み合わせるものは判別できなかった。

iii) その他出土の弥生時代遺物

古墳時代以降の遺物包含層・遺構および側溝掘削中からも、弥生時代中期の遺物が多く出土している。これらは、下位の層率に含まれていたものが後世に攪乱されて遊離したものであるが、まとめて記述する。

弥生土器は広口壺646・652、細頸壺648・649、甕653・654、高杯660を図化した(図179、図版30)。

646はSD05、652～654はSK09、660は重機掘削中に、648・649は調査区東壁沿いに設けた側溝からそれぞれ出土した。このうち、648・649は正確な出土層準や属層遺構は不明であるが、同時に出土した別個体の土器片が側溝ぎわで検出したSK08から出土した遺物と接合しており、648・649も本来SK08に伴っていた可能性がある。

646は受口状口縁の広口壺で、頸部に指頭圧痕文突帯を巡らす。頸部にタテハケを施したのち、頸部上端に深いヨコハケを施す。648・649はともに口頸部に幅広の縞状文を巡らすもので、色調はにぶい橙色を呈する。胎土中には長石粒を多く含み、赤色粒もめだつ。660は小型の碗形高杯で、口縁部下に凹線文、脚柱部下端に爪形の列点文を巡らし、脚根部に小円孔を五方に穿つ。生駒西麓産の胎土である。652～654は第II様式、646・648・649・660は第IV様式に属する。

石器遺物は打製の尖頭器94VB201・224、石小刀94VB218・石鏃94VB220～222、尖頭器94VB225、磨製石庖丁94VB203～205、石鋸未製品94VB219、扁平片刃石斧94VB223、石皿94VB209を図化した(図183・184、図版37～40)。

94VB223・224はSD03から、94VB201はSD05から、94VB203・205・209・218は重機掘削後、94VB204は第2層、94VB219は北壁断面清掃中、94VB220・221・225は南半清掃中、94VB222は第6層から出土した。

94VB201は尖頭器の先端部の破片であるが、未製品の可能性が高い。表面側は大ぶりの細部調整によって中央に稜が形成されているが、刃部の細部調整は施されていない。また、背面側は、側縁の一

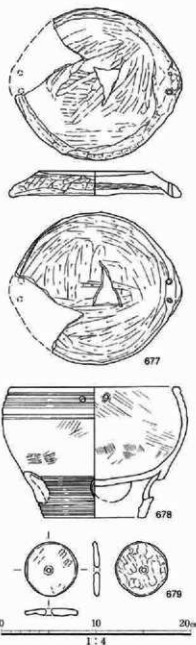


図182 SK08出土遺物(2)

方に細部調整による小さな剥離面が連続するものの、中央に稜が形成されていない。94VB224は刃部の細部調整が不十分であり、未製品の可能性もある。94VB218は石小刀の破片である。基部・先端部が欠損しているが、上下から剥離を施して、中央付近で稜をなすように整形している。さらに、上下縁には、表裏面から浅く細部調整を施して刃部を形成している。下縁の刃部は内湾している。94VB220は背面に自然面がある剥片の打面側を先端とした凸基無茎式石鏃である。主要剥離面側は先端と基部付近にのみ細部調整を加えている。94VB221は刃部が木葉形となる凸基有茎式石鏃である。94VB222は細身の涙滴状となる凸基無茎式石鏃である。94VB225は剥片を素材とした尖頭器で、先端部は一方の側縁にのみ細かな剥離を加えて形態を整えている。以上の打製石器はすべてサヌカイト製である。

94VB203は刃部が外湾する結晶片岩製の石庖丁である。94VB204も結晶片岩製で、刃部が直線となる石庖丁と考えられるが、端部は丸くなっている。紐通しの穿孔位置は一方に偏っている。94VB205は結晶片岩製で、刃部が直線で全体が長方形となる石庖丁である。94VB219は全体に薄いため、石鏃

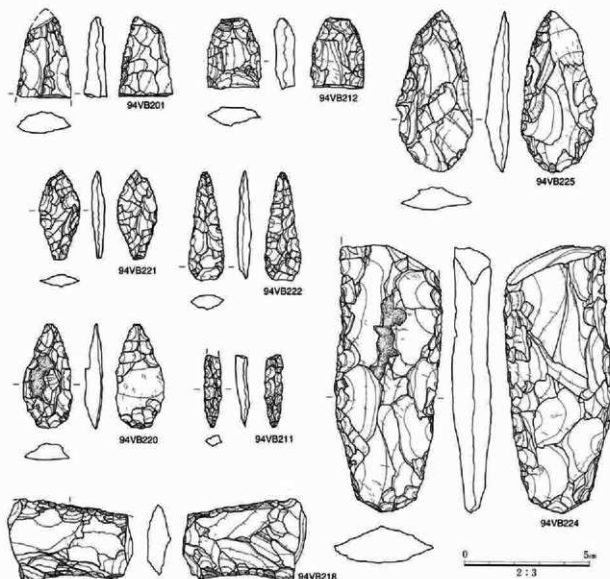


図183 出土遺物(3)

SK08(94VB211・212)、SD03(94VB224)、SD05(94VB201)、重機細削後(94VB218)、南半清掘中(94VB220・221・225)、第6層(94VB222)

の未製品と考えられる。石材は結晶片岩である。下縁は表裏面から剥離して刃部を整えようとした意図がうかがえる。94VB223は小型であり、石盤のような用途であろう。結晶片岩製である。94VB209は砂岩製の石皿の破片である。全体形は楕円形になると考えられる。両面ともに凹面であるが、一方が特に凹んでいる。

iv) 第3層下面検出遺構(図185)

第4層除去後に確認したものであるが、SD02～05、SD09は埋土の特徴や出土遺物から第3層に伴うものと判断される。

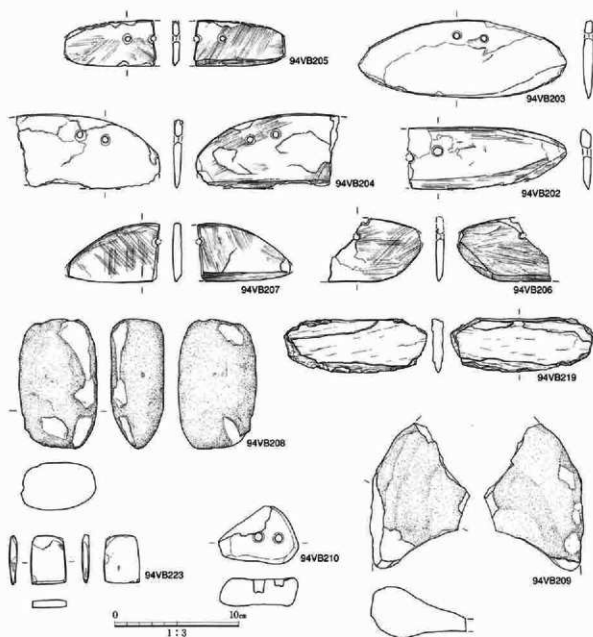


図184 出土遺物(4)

SK02(94VB202)、SK08(94VB206・207)、SX04(94VB208・210)、SD03(94VB223)、重機掘削後(94VB203・205・209)、第2層(94VB204)、北壁断面清掃中(94VB219)

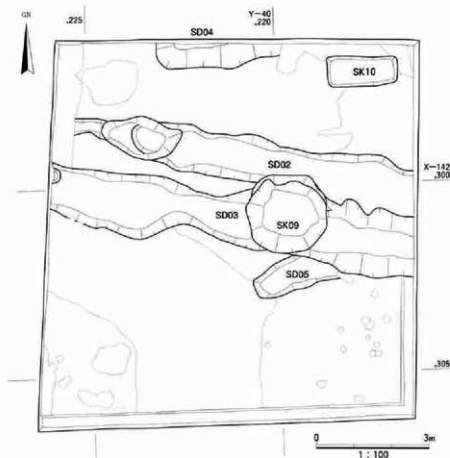


図185 第3層下面および第2層基底面平面図

SD02 調査区の中
央で検出した、幅約
1.0m、深さ約0.1mの
東西方向の溝である。
SD03に切られている。
TK47型式に属する
須恵器杯蓋681、高
杯脚部683が出土した
(図186)。

SD03 幅1.0～1.5
m、深さ0.2～0.3mの
東西方向の溝である。
SD02と平行してこれ
を切っている。TK47
型式に属する須恵器杯
身680、甕684が出土
しており(図186)、出
土遺物からはSD02と
時期差が認められな

い。そのほか、SD03の東半からミニチュア土器686～690、滑石製模造品693～695・697～704が出土した(図186・187、図版34)。重機掘削後に採集した691・692・696も、本来SD03に伴っていた可能性が高く、ミニチュア土器と滑石製品をセットとして祭祀に用いられたものと考えられる。

ミニチュア土器686～692は、手づくねで作られた椀形のものであり、直径3.5～4.4cm、器高2.2～3.8cmである。

693～701は滑石製の有孔円板である。直径は2.0～3.1cm、厚さ0.2～0.4cmで、平面形は正円に近い

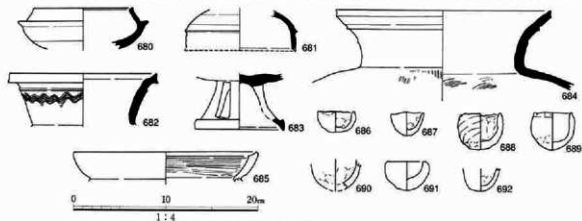


図186 出土遺物(5)

SD02(681・683)、SD03(680・684・686～690)、SK09(682・685)、重機掘削後(691・692)

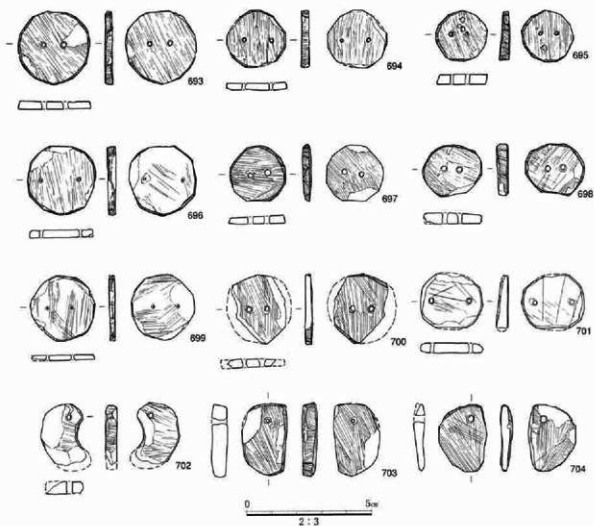


図187 出土滑石製品

SD03(693~695・697~704)、重機掘削後(696)

ものが多い。色調は緑灰色を呈する。孔は2孔を約1.0cmと近接した位置に穿つものが主体で、696・701は約1.5cmとやや離れた位置に穿つ。2孔の穿孔方向が判明した693・695・697・699・700はともに同一方向から穿っている。表裏面および側面には整形段階のものと考えられる粗い擦痕が残っており、側面の擦痕は平面に対して直交する方向で、細かな単位ではほぼ全面に施している。701は風化によって側面の擦痕が観察できない。また、694・696・699は側面に同様の整形ののち横方向の研磨を加えており、平面形を正円に仕上げようとした意図がうかがえる。

702は勾玉形の滑石製品である。厚さ0.4cm、現存長は2.4cmで下端が欠損している。色調は緑灰色を呈する。平面および側面には擦痕が残る、側面の整形痕は腹・背面ともに縦方向である。

703・704は一方が直線的な半月形で、上端に一孔を穿つ滑石製品である。長さ2.7~2.9cm、幅1.8~1.9cm、厚さ0.5~0.6cmで、色調は緑灰色である。平面および側面に擦痕が残っており、側面の整形痕は平面に対して直交する方向である。704の側面のうち、直線的な一方は割れ面がそのまま残っており、未整形である。これらは平面形が非対応の半月形であること、704の孔が直線的な側面側に偏っていることから勾玉を模したものと考えられる。

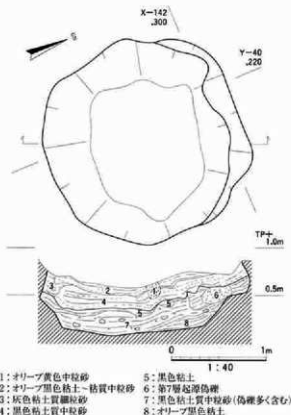


図188 SK09平面図・断面図

る範囲は、第2層の作土が下層を掘込んで厚く分布しており、耕作に伴うものと考えられる。SK10は東西1.8m、南北0.8mの長方形の土壌である。弥生土器や古墳時代の須恵器・土師器に伴って瓦器片が出土した。

SD04 調査区北端で検出した東西方向の溝である。古墳時代中期の須恵器を含む。

SD05 中央やや東で検出した東西方向の溝である。弥生土器のほか、古墳時代中期の須恵器を比較的多く含む。

SK09 調査区中央に位置する円形の土壌で、SD03除去後に検出した。直径1.2m、深さは0.8mあり、埋土の下半は偽礫を含む水つきの粘土、上半は粘土～粘土質中粒砂で、自然の状態で埋っている(図188)。弥生土器のほか、TK23型式に属する須恵器壺682と、土師器甕685が出土した(図186)。

v) 第2層下面および基底面検出遺構(図185)

第4層まで除去した時点で検出したものであるが、埋土から調査区の東部で検出した踏込み群を第2層下面遺構、東北部で検出したSK10を第2層基底面遺構と判断する。踏込みの存在す

(大庭)

第33節 MS94-13次調査

1) 調査の経緯と経過

調査地は清水2丁目15にあり、森小路遺跡の北西部に位置している(図189)。先行して行われた試掘調査において、古墳時代中期後葉の須恵器を含む地層が確認されたことから、建物(東区)および受水槽(西区)予定地内230㎡を対象とした発掘調査を実施した。掘削に際しては、旧建物の基礎および現代の整地層は重機を用いて除去し、これより以下は人力で進めた。1994年5月26日から調査に着手して、6月23日にはすべての調査を終了した。

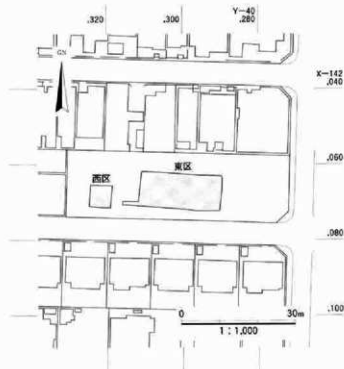


図189 MS94-13次調査箇所位置図

2) 層序

調査地の現地表面はTP+1.1~1.2mであり、西部が東部よりわずかに低い。本調査では現地表面下1.5mまでの地層を第1~7層に区分した(図190、図版24)。

第1層：本層は4層に細分されるが、すべて現代の整地層である。この中には森小路遺跡の別地点から搬入されたと考えられる遺物包含層のブロックも見られた。

第2層：暗灰黄色細礫混り細粒砂を主体とする水成層で、層厚は20cm前後ある。明治時代以降の陶磁器や瓦片をはじめ、大正~昭和初期のガラス瓶などを含むことから、当地域が浸水したとされる昭和9(1934)年の室戸台風時の洪水による堆積物と考えられる[大阪管区気象台1982]。

第3層：本層の層厚は30~40cmあり、第3A層のにぶい黄褐色砂礫混りシルト・暗灰黄色含砂礫シルト、第3B層のオリブ褐色含砂礫シルト・黒褐色含砂礫粘土質シルトに区分される。第3A層は鎌倉~室町時代の瓦器や土師器をはじめ、江戸時代~現代の陶磁器類を、第3B層は古墳~室町時代の土器類を含む。

第3A層の上面で畝や溝SD01、第3B層の下面では土壌SK01を検出したほか、各所で耕作痕跡や人の足跡を確認した。

第4層：黒褐色粘土質シルト層で、層厚は10cm前後あり、古墳時代中期後葉~後期の須恵器の細片を含む。本層は水成層で、上面は上層の踏込みによって擾乱されていたが、調査地の東側にあるMS87-6次調査地区の第5層に相当するものと思われる。

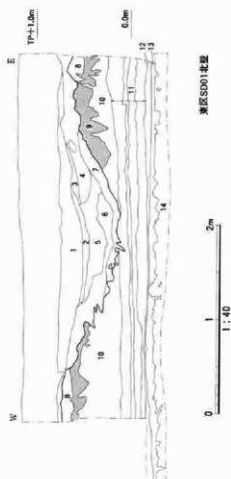
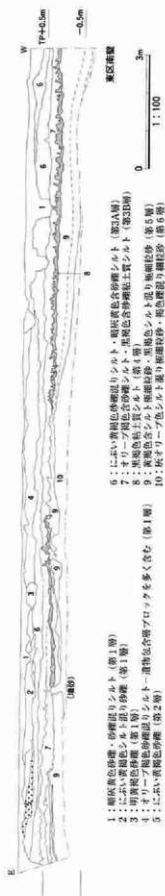


図190 東区南壁・SD01北壁断面図

第5層：黄褐色含シルト極細粒砂・黒褐色シルト混り極細粒砂を主体とする水成層で、層厚は50cm前後ある。

第6層：灰オリーブ色シルト混り極細粒砂・褐色礫混り細粒砂・黄褐色極細粒砂を主体とする水成層で、層厚は1m以上ある。上面の高さは微高地がTP+0.3m前後で、低いところはTP-0.4mあり、調査地の南東部から西部にかけて徐々に低くなる。本層は自然堤防の上部を形成する地層で、調査地のほぼ全域で草の根などが確認された。なお、東区では、南端に幅約1mで設定したサブトレンチ内において、第6層が液状化した噴砂の跡が確認された(図190・192)。

噴砂は東区の南壁の東端から5～13m間にあり、第6層の灰褐色シルト混り極細粒砂が標高10～15cmまで上昇していた。噴砂は第3B層を切っているが、第3A層までは達しておらず、また、この噴砂によって切られた水成層にはラミナの変形が観察された。断面で噴砂を検討した後で、平面でも噴砂の検出を行ったところ、第3A層の基底面では砂礫が蜘蛛の巣状に広がり、3B層を掘下げるにつれ、2本の砂の溝が北方に延びることが判明した。噴砂の広がりは、南側は調査範囲外に及ぶため明らかでないが、北側については南壁から北へ約3mまで追うことができた。噴砂は第3B層を切ることから、江戸時代以降に起きた地震に伴うものと推定されるが、その規模や日時などについては不明である。

3) 遺構と遺物

i) 各層出土遺物(図191)

709・711は第2層から出土したガラス瓶で、ともに大正～昭和初期の薬ビンであろう。702～704は第3A層から出土した。703は瓦質土器の羽釜で、調整は体部の外面が「ヘラケズリ」、内面は粗いハケである。704は櫛前焼の揃鉢である。703・704は15世紀に属するものである。701は第3B層から出土した凸面が縄タキで整形された平瓦である。凹面には布目が残る。8～9世紀代に属するものであろう。706・707は第3B層から出土した須恵器である。706は脚部を欠損した無蓋高杯で、杯部の下半には飾り耳が付く。脚部には三方にスカシ孔を穿つ。杯部内面にカキメを施す。707は天井部の大半を欠損した杯蓋で、口縁部と天井部の残は明確である。706はTK23型式、707はTK47型式に属する。708は第3B層から出土した鉢である。体部上半以上を欠損しており、内面には使用痕が残る。TK209型式に属するものであろう。

ii) 第3B層下面検出遺構(図192)

SK01 東区の北東部に位置する細長い土竈で、第3B層下面の遺構と判断したが、検出面が上部層の踏込みの影響を受けているため、層厚は明確でない。南北約2.8m、東西約0.5mあり、南北の端がやや広く、深さは0.1m前後ある。埋土はオリーブ褐色粘土質シルトで、土師器・瓦器などの細片が出土した。

iii) 第3A層上面検出遺構(図192、図版24)

畝群 調査地のほぼ全域に広がる畝群である。一部の畝は現代の掘削を受けていたが、東西両区とも遺構の残りは比較的良好であった。

西区の畝は南北の方向に広がっており、上幅が約0.3m、下幅は約0.5mで、高さは0.1m前後ある。

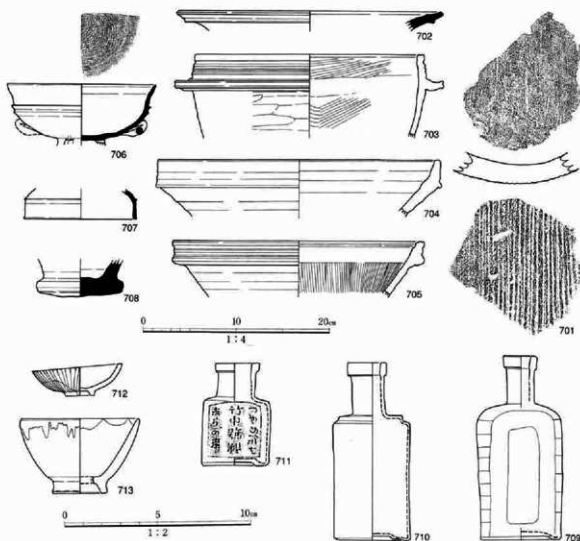


図191 出土遺物

第2層(709・711)、第3A層(702～704)、第3B層(701・706～708)、SD01(705・712・713)、SR01(710)

畝の間隔は0.2～0.3mある。

東区の畝は上幅が約0.2m、下幅は約0.4m、高さ0.1m前後で、個々の間隔は約0.15mある。東区の畝は西区に比べて全体に小ぶりであり、その方向も西区の畝にはほぼ直交して、東西方向に広がっていたが、畝の方向が変換する部分は、調査範囲外のため明らかでない。このほかにも、東区の中央部以南では、畝に沿って上幅約1.0m、下幅約1.2m、高さ0.1m前後で、中央部がU字形に浅く窪む遺構が見られた。ここでは形状や方向からみて、畔道あるいは田畑を区切る大畦畔SR01と考えておきたい。710はSR01上の浅い窪みから出土したガラス瓶である(図191)。大正～昭和初期のものと考えられる。

以上の畝群は、基本的には水成層である第2層に覆われているが、第2層が分布しないところでは第1層の客土直下で確認された。ところで、新森地域が現在の土地区画に変更されるのは、昭和4(1929)年から14(1939)年にかけてであり、これ以前の大正14(1925)年の地図では土地の区割り方向が現在とは異なっている[夕刊大阪新聞社1936・大阪毎日新聞社1924]。今回の調査区はほぼ道路

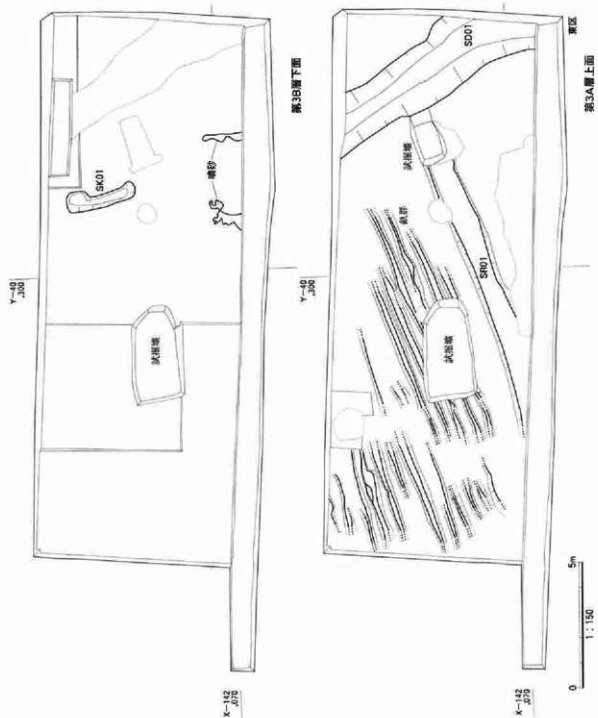


图192 潜淤区平面图

と平行しており、畝群の方向のずれは、現在とは異なる土地区画のもとで形成されたことを物語っている。出土遺物からも本調査で検出された畝群は、昭和の初年頃の洪水によって埋没した土地区画整理以前の畝に伴うものと考えられる。

SD01 東区の東端に位置する上幅約2.0m、下幅0.5～1.0m、深さ約0.6mで、北西から南東方向の溝である。第3A層から掘込まれており、深いところは第5層に達している。溝の両肩には護岸のための杭が打込まれていた。杭はマツ・スギ・ヒノキなどの針葉樹が使われており、長さは60～70cmのものが多く、杭の間隔は、一部で異なっていたが、密なところでは5cm前後あった。調査区北よりの西肩の部分では、杭列に沿って鋼板が一枚置かれていた。

溝内には第2層に相当する黄灰色粗粒砂・黒褐色細粒砂混りシルト・オリブ黒色砂礫などが堆積しており、江戸時代後期～大正時代に属する瓦や陶磁器705・712・713などが出土した(図191)。溝は底から40cm近くが土砂で埋った段階で、砂礫層に覆われて機能をほぼ停止したようであり、埋土や出土遺物などからみて、西方の畝群と同時期の遺構と考えられる。本溝は調査地域に明治から大正時代初期にかけて縦横に巡らされていた漁川(いじかわ：灌溉のほか、農作物や肥料の舟便に利用された水路[大阪市都市協会1983])から続く溝の可能性がある。

以上、本調査の成果について記述したが、調査地周辺は森小路遺跡の中心部と推定されている新森5丁目付近のような弥生時代中期および古墳時代中期後葉の集落遺構などは確認されなかった。ただし、これまであまり調査されることのなかった地震に係わる噴砂や「蓮田層」と仮称されてきた地層についても検討する機会を得た。以下に若干のまとめを行っておく。

調査地の弥生時代中期の旧地表に相当する地層と考えられた第6層の標高は30～40cmと遺跡の中心域に比べて低く、各所で当地が低湿地であったことを示唆する草などの水辺に繁茂する植物の遺体や根跡が確認された。弥生時代以降も当地域が湿潤な土地であったことは、上位層が粘土質シルト・極細粒砂混りシルトであることや、蓮根田などの近現代における周辺地域の土地利用からも推測される。現在の守口・門真・大東といった旧河内郡の湿田では、江戸時代以来蓮根の栽培が盛んであり、明治40年代には作付面積も最大に達していたという[東成郡役所1972]。森小路遺跡の北部に当る地域も水につかりやすく、古墳時代の地層に対比された第4層の上に堆積する第3A・3B層は、ほかの調査地ではこれまで「蓮田層」と解釈されてきた層にあたる。今回は第3A層の上面で畝に伴う畧が検出されたのみで、一概に蓮根の栽培がされていなかったとは断定しがたいが、当地は米や麦の栽培も盛んで、享保年間は越瓜が特産品であったという[大阪市都市協会1983]。第3A層で栽培された作物や本層が蓮根田か否かについては、今後とも土壌のフローテーションや花粉分析などの科学的な検証を行って決めるべきと思われる。

(田中)

第Ⅲ章 遺構と遺物の検討

第1節 森小路遺跡の石器遺物

森小路遺跡では弥生時代の遺物包含層や遺構に伴う石器遺物が多く見つっているが、旧石器・縄文時代の石器遺物は現在までに確認されていない。

石器遺物のうち、打製石器はすべてサヌカイト製で、磨製石器は器種や形態により、さまざまな石材が用いられている。石器遺物の時期は、本稿で扱うものの1/3以上が遊離資料であるため不明な点が多いが、弥生土器と共存する資料は中期前～後葉に属するもので、遊離資料もそれらと同様に考えてよいと思われる。なお、本稿では本書第Ⅱ章で報告した33件の発掘調査(全調査の約1/3)から出土した資料をもって遺跡全体の傾向を代表するものと扱い、かつ、第Ⅱ章各節で実測図を掲載した資料以外にも、重要な器種については細片を含めて扱う(表9)。

1) 打製石器

打製石器には石鏃・尖頭器・石小刀・石錐・その他の刃器・クサビなどがある。

i) 石鏃

石鏃は全部で25点が出土しており、凹基無茎式(2点)・平基無茎式(1点)・凸基無茎式(13点)・凸基有茎式(9点)の4種類がある。凸基式となる石鏃では、基部が丸くなるものと、先端側と同様に尖るが刃部との境が不明瞭なものを無茎式とし、明確に茎を作り出したものを有茎式とした。さらに、有茎式では刃部が木葉形のものや三角形になるものがある。長さ5cmを超える資料は少なく、おおむね3～4cm前後に収まるものが多い。なお、81VT207は石錐の可能性もある。

平野区長原遺跡における石鏃の形態別にみた時期的変遷からは、弥生時代中期に一般的なものとして凸基無茎式・凸基有茎式石鏃を挙げることができるが[菅榮太郎1995]、森小路遺跡の場合もそれと同様に考えてよく、共存する弥生土器も第Ⅱ～Ⅳ様式である。また、凹基無茎式のもの2点と平基無茎式のもの1点も、素材剥片の剥離面を大きく残すような粗い調整方法から、縄文時代ではなく弥生時代のものと考えた方が妥当であろう。

ii) 尖頭器

石鏃より大型で、長軸の一端が尖るように加工された石器類に尖頭器があり、13点が出土している。大きさの違いから大型(長さ10cm以上)と小型(長さ8cm以下)のものに分けた。分類の境は点数が多くないため便宜的なものである。従って、機能的な差異を正確に反映しているか疑問も残るが、大型としたものにはいわゆる打製石剣に相当するものがあろう(94VB224)。小型の尖頭器には長さ6cm程度のものがあるが、厚さから石鏃と区別することができ、槍先の可能性があろう。また、81VU202・

87VJ202は石錐の可能性もある。これらに共伴する弥生土器は第Ⅱ～Ⅳ様式である。

iii) 石錐

石錐は12点出土している。本稿で扱った石錐は、大別して以下の3つに分類される(図193)。出土した各資料の類型と、使用痕のあるものについてはその部位の計測値を表7に示した。

A類：さまざまな平面形の握り部がつくもの

B類：全体が扁平で明瞭な握り部がなく、一端に錐部を作り出したもの

C類：全体が棒状で、握り部はない。

A類としたものの多くは握り部が不定形で分厚く、それに比べ錐部は細小または断面形が扁平な特徴がある。本書では、82VW204・89VA208・212・213が該当する。89VA212はほかの3例に比べ握り部が小さく、錐部との境界も明瞭ではないが、後述するようなB・C類の使用方法を念頭に置いた場合、その範疇には含まれないと考えられる。また、錐部も断面形が扁平であるため、ここではA類に分類しておく。

一方、B・C類としたものは、全体形が主軸に対して左右対称形となるよう意識して製作されている。握り部はなく、全体のうち錐部の占める割合が大きい。

B類は錐部が逆三角形になり、断面形は扁平であるがA類に比べて幅広い傾向がある。錐部の反対側は機能部として作られていない。本報告では81VT202・82VW206・89VA202・209が該当し、84VZ209は形態からB類に含めるが、錐部の断面形が分厚く、C類の未製品の可能性も考えられる。なお、89VA202は先端から1.1cmの範囲に使用痕が認められ、その回転体の最大直径は1.6cmである。また、82VW206では先端から1.4cm程度まで、側縁に回転によって磨滅した端面が生じるほど明瞭な使用痕が認められる。おおむね、錐部全体を使用していることになり、その回転体の最大直径は1.1～1.3cmとなる。

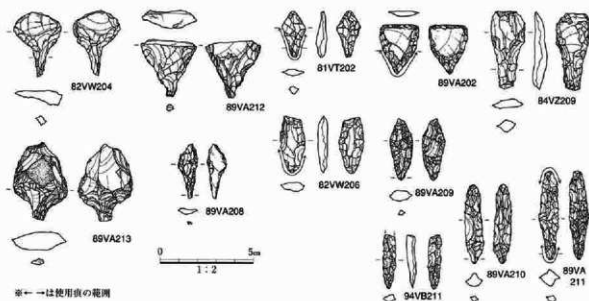


図193 各類型の石錐

表7 石錐計測表

調査次数	登録番号	類型	使用痕(長さ/直径:cm)
MS1981-015	81VT202	B	1.4/1.1
MS1982-018	82VW204	A	
MS1982-018	82VW206	B	1.4/1.3
MS1984-006	84VZ209	B?	
MS1989-001	89VA202	B	1.1/1.6
MS1989-001	89VA208	A	
MS1989-001	89VA209	B	
MS1989-001	89VA210	C	
MS1989-001	89VA211	C	上:0.6/0.7 下:0.8/0.6
MS1989-001	89VA212	A	
MS1989-001	89VA213	A	
MS1994-011	94VB211	C?	

B類の石錐は、明瞭な使用痕を残すものが多く、使用時に相当激しい回転運動が加えられたことが想定されるが、明瞭な握り部を作っていないことから、手に持って使用したことは考えがたい。むしろ、平基式石錐の基部のような作り方をしていることから、着柄して使用したと考えられよう。

C類は錐部が棒状で、分厚い。主軸の両端が錐部として使用された例がある。

本報告では89VA210・211が該当する。94VB211は錐部のみの破片のため、

前述の基準で分類しがたいが、錐部の断面形が分厚く、C類に含まれるものと考えておく。89VA211では図の上下に顕著な使用痕があり、どちらも錐部として使用されたことになる。下半がやや細身のため、本来は基に使用されていた可能性もあるが、調整の順序からは刃部の再形成の結果とも考えられ、断定はできない。使用痕の範囲は図の上の使用痕は先端から0.6cmまで、その回転体の最大直径は0.7cmとなる。下の使用痕では先端から0.8cmまで、その回転体の最大直径は0.6cmである。

以上のことから、このような石錐の形態差は、使用状況や対象物の違いを反映していると考えられる。前述したように、A類は握り部が分厚く大きいので、手持ちによって使用することが考えられる。一方、B類は直接手に持って使用するには不適当な形態であるため、柄に差し込むか挟み込んだ状態で使用したものと想定される。着柄した場合は、さらに舞い錐にして使用すれば、手持ちの錐に比べてはるかに高速で穿孔する力の強い錐となろう。C類の場合も同様で、両端に錐部がある例は、一方を錐部とした場合には、反対側は茎として柄に差し込んで使用されていたと考えられる。B・C類の使用痕は、磨蝕によって回転痕の明瞭な端面が生じるほどであることから、対象物が比較的硬いものであったことが考えられ、こうした使用方法の違いを表しているといえよう。

石錐の穿孔対象として、磨製石庖丁・各種紡錘車・骨角器などが挙げられる[蜂屋晴美1985]。A類の場合には、手持ちによる回転でも穿孔することが可能な布や皮革などの軟質な有機物を対象としていたと想定されよう。着柄して利用したと思われるB・C類でも、錐部の形態差から異なる対象物であったと思われる。B類は薄く、扁平に作られるため、硬質な石器・石製品類には不適当と考えられる。このような、穿孔対象の考察には、実験考古学的な検証を繰り返す必要があるが、ここでは磨製石庖丁などの硬質な対象物の穿孔具としてC類の可能性が最も高いと想定しておく。同様の見解はすでに秋山浩三氏らによって述べられており、舞い錐の使用を想定している点も同意できるものである[秋山浩三・中原知之1998・1999]。ここでは舞い錐の使用が想定される石錐でも複数種に分けることが可能であること、そのうち、磨製石庖丁の穿孔具として最も可能性の高いものがC類であることを付け加えたい。

iv)その他の石器

その他の石器遺物には、石小刀としたものが6点、石鋸が1点あり、その他の刃器としたものが3点ある。

石小刀は、尖頭器に似る個体もあるが、平面形が長軸に対して横に振れているものを挙げた。大型のものは3点あり、84VZ216のように刃部が直線となるのものと、82VW205・94VB218のように基部側が幅広く、刃部が内湾するものに分けることができる。84VZ216は長大で、ていねいに調整が施されており、搬入品の可能性もある。82VW205・94VB218は破損しているため、全体の長さは判明しない。小型の石小刀は3点あり、86VI201・88VP201のように刃部が細身のものと87VJ205のように幅広になるものがあるが、後者は刃部が外湾し、別の器種を企図した可能性も考えられる。

石鋸94VB219は刃部の調整が粗雑で未製品と考えられるものである。87VJ209も結晶片岩製剥片の縁辺が著しく摩耗したものである。ほかに紅簾石石英片岩の剥片81VU204も同様の目的が考えられる。紅簾石石英片岩は近畿周辺では紀伊地域、淡路、四国山脈で露頭しているが、紀伊産の土器が一定量搬入されていることから、これも同地域から搬入された可能性がある。

また、今回報告した石器以外にクサビの本体に相当するものとその使用時に剥離した破片、細部調整を施した剥片、使用痕と思われる微細な剥離痕のある剥片などが多数出土している。これらは集落において日常的に使用された簡便な刃器であろう。

2)磨製石器

i)石剣

粘板岩製の鉄剣形石剣88VP203が出土している。ほかに、90VV201は小型の扁平な石斧に再利用したとも考えられるものだが、もとは石剣であった可能性が考ある。銅剣形の石剣は本書で扱った調査地からは出土していない(註1)。

ii)石庖丁

磨製石庖丁は42点出土している。このうち、大型石庖丁と呼称されているものが1点、石庖丁の未製品が1点ある。

石材は緑色片岩・黒色片岩・泥質片岩などを含む結晶片岩製のものが28点、黒～灰色の粘板岩製のものが7点、珪質頁岩・黒色頁岩を含む頁岩製のものが6点、不明のもの1点で、片岩が主流である。頁岩・粘板岩・片岩は変成の進行度によって分けられるため、両者の分布している地域は近在することが考えられる。したがって、森小路遺跡の石庖丁に使用された石材の違いが、ただちに異なる地域からの石材ないし製品の搬入を意味しているかは即断できないが、以前から酒井龍一氏らによって指摘されている現象と照合すると興味深い[酒井龍一1974]。それによると、摂津地域で片岩製と粘板岩製の磨製石庖丁の出土分布が重なっているが、細かく地域を分けると、いずれの石材が主流となるか差異が見られる。そして、摂津北東部では粘板岩製の磨製石庖丁が主流であり、南部では片岩製のものが大勢を占めるようになるが、前者は淀川以北でより西側へも分布を拡げているという。森小路遺跡は片岩が主体となる南部地域の最北端に位置するといえるであろう。その一方で、本遺跡から南

表8 磨製石庖丁一覧表

調査年度	登録番号	刃部	背部	石材	刃部主部	備考
MS1900-3	80VJ282	不明	不明	緑色片岩	張目	測線付
MS1900-3	80VJ284	不明	不明	緑色片岩	張目	
MS1900-3	80VJ285	不明	不明	緑色片岩	張目	大型石庖丁
MS1900-5	80VJ284	I	II	緑色片岩	張目	
MS1900-5	80VJ285	II	II	緑色片岩	張目	
MS1900-17	81VJ286	II	II	緑色片岩	張目	
MS1902-16	82VJ289	II	II	緑色片岩	張目	
MS1904-6	84VJ281	II	II	緑色片岩	張目	
MS1904-6	84VJ282	II	II	緑色片岩	張目	
MS1904-6	84VJ286	II	II	黒色片岩	張目	
MS1904-6	84VJ287	II	A?	緑色片岩	張目	
MS1904-6	84VJ288	II	不明	緑色片岩	張目	
MS1904-6	84VJ289	不明	不明	緑色片岩	張目	
MS1904-6	84VJ290	II	II	緑色片岩	張目	
MS1908-5	86VJ295	不明	不明	緑色片岩	張目	
MS1908-5	86VJ296	II	II	緑色片岩	張目	
MS1907-6	87VJ291	II	II	緑色片岩	張目	
MS1907-6	87VJ296	I	II	片岩	張目	未製品
MS1907-6	87VJ297	II	II	片岩	張目	
MS1907-6	87VJ298	II	II	緑色片岩	張目	
MS1908-12	88VJ303	II	II	?	張目	
調査年度	登録番号	刃部	背部	石材	刃部主部	備考
MS1908-12	88VJ306	不明	不明	片岩	張目	
MS1908-12	88VJ307	不明	不明	緑色片岩	張目	
MS1908-12	88VJ308	II	II	片岩	張目	
MS1908-33	88VJ309	II	II	緑色片岩	張目	
MS1908-33	88VJ310	A?	A?	片岩	張目	
MS1908-33	88VJ311	I	II	緑色片岩	張目	
MS1908-33	88VJ312	II	不明	緑色片岩	張目	
MS1908-1	88VJ314	不明	不明	緑色片岩	張目	
MS1908-1	88VJ315	不明	不明	緑色片岩	張目	測線付
MS1908-1	88VJ316	II	II	緑色片岩	張目	
MS1908-29	89VJ320	不明	不明	緑色片岩	張目	
MS1904-11	94VJ321	I	II	緑色片岩	張目	測線付
MS1904-11	94VJ322	I	II	片岩	張目	
MS1904-11	94VJ323	II	II	緑色片岩	張目	
MS1904-11	94VJ324	II	II	緑色片岩	張目	
MS1904-11	94VJ325	II	A	緑色片岩	張目	
MS1904-11	94VJ326	I	C	片岩	張目	
MS1904-11	94VJ327	II	II	緑色片岩	張目	
MS1904-11	94VJ328	不明	II	緑色片岩	張目	
MS1904-11	94VJ329	I	不明	緑色片岩	張目	
MS1904-11	94VJ330	不明	II	緑色片岩	張目	

南西へ5km付近に位置する大阪市森の宮遺跡を例にとると、報告された磨製石庖丁13点のうち粘板岩製のもの1点のほかは片岩製である[森の宮遺跡発掘調査団1972・難波宮址顕彰会1978・大阪市文化財協会1996]。森小路遺跡の場合は、石庖丁のほか粘板岩製の石器として石剣などもあり、粘板岩製磨製石器の比率がやや高くなっている傾向もみられる。

石庖丁の製作過程では、片岩製の未製品87VJ207が出土しているため、遺跡内で素材剥片に対して整形剥離・調整剥離を加えて製品まで仕上げた場合もあったようである。さらに、一部に敲打痕が残る製品もあり(84VJ201・87VJ208)、敲打によって器面を整えた後に研磨作業へ移行するものと考えられる。その一方で、89VA215・94VB203など擦り切り技法によって背部を切り離して製作した例があり、注目される。こうした製作過程の差がもつ意味については断定できないが、時期差ないし製作集団の差に起因する可能性を検証していく必要があろう。

穿孔がどの段階で行われたかは、各段階の未製品が出土していないため不明である。技法はすべて工具を回転させて穿孔するもので、器面の両方から行っている。前述のように、確認はないものの打製石錐のC類が穿孔具の候補として有力である。

磨製石庖丁の形態は、研ぎ減りにより製作当初の原形態についてはうかがいがたいものが多いと思われるが、大型石庖丁とした80VB205を除き、刃部と背部の形態に分けて以下のように分類した。

刃部の形態：外湾するもの：I類

直線となるもの：II類

背部の形態：長方形に近いもの：A類

下向きの半月形となるもの：B1類(左右対称形)

：B2類(左右非対称形)

上向きの半月形となるもの：C類

細片のため、第II章で図面を掲載しなかったものも含め、表8に各個体の類型を示し、代表的な資料を図194に示した。

刃部が外湾するI類は6点のみで、直線となるII類が多い。未製品である87VJ207は、刃部を直線に仕上げることを企図していたと考えられるため、本遺跡においてII類として製作された個体が存在

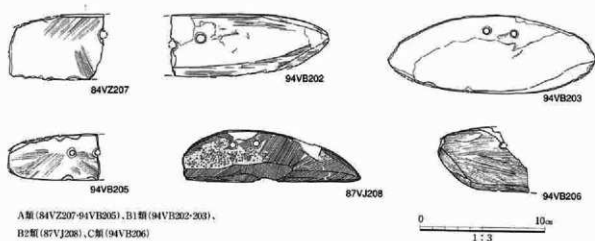


図194 各類型の磨製石庖丁

することは間違いないと思われる。ただし、Ⅱ類のうちには、両端付近がわずかに外湾するものもあり、研ぎ減りによって刃部が直線となった可能性も考えられる。

背部の形態では、両端がやや丸みを帯びたものを研ぎ減りによる結果とみなして除外すると、長方形に近いA類は84VZ207・88VP204・94VB205の3点である。ただし、A類では完形品がなく、石庖丁の端部が欠損して研ぎ直したものである可能性は否定できない。半月状になるものには、刃部を下にした場合に背部側が外湾するB類と刃部側が外湾するC類とがある。さらに、B類は左右対称となるB1類(94VB202など)と、半月の頂部が左右の一方に偏っているB2類(87VZ208など)の2種類に分けられる。B2類の例は紐通し孔も全体の形にあわせて左右の一方に寄っており、意識的に製作された特徴といえるであろう。また、刃部はすべてⅡ類となる。C類に属する資料は94VB206の1点のみであるが、前期に盛行する形態なので、他形態のものが研ぎ減りにより変形している可能性を考えた方がよいかも知れない。なお、B類のうち刃部も外湾するⅠ類(94VB202-203)はいわゆる「杏仁形態」、刃部は直線となるⅡ類(87VB208・94VB204)は「直線刃半月形態」、C類は原形態とすれば「外湾刃半月形態」の石庖丁にそれぞれ該当する[大阪文化財センター1979]。

各形態と石材の関係では、片岩製のものは全形態にわたっているが、粘板岩製のものはA類に属する可能性のある88VP204を除きすべてB類に属している。

各形態の時期をみると、詳細な所属時期が判明した資料が少ない点に問題があるが、有意な差異はみられず、中期前～後葉の遺構・遺物包含層から出土している。全体の傾向では、近畿地方で中期にB類のものが盛行するとの指摘に矛盾しないが[酒井1974]、細かい変遷までは分析することを控えておく。石材の場合も現状では時期的変化を求めることは困難である。

未製品があるため少なくとも一定段階以降の石庖丁の製作が本遺跡で行われていたことは間違いはないが、その量は少なく、多様な形態の石庖丁が混在する状況からも、複数地域の製品を含めた搬入を主体とした消費地的性格を考える方が妥当であろう。

iii) 石斧

磨製石斧が13点出土している。これらには太型蛤刃石斧2点、柱状片刃石斧1点、扁平片刃石斧6

点があり、ほかに挟りのある片刃石斧が1点、破損した柱状石斧を再研磨して扁平片刃石斧にした可能性のあるもの1点、石剣の破片を再研磨して両刃の扁平石斧にしたと考えられるもの1点、石斧未製品1点がある。石材は再利用したと考えられるものを除き、太型蛤刃石斧・挟りのある片刃石斧が砂岩製、扁平片刃石斧が片岩製である。

伐採具と考えられる太型蛤刃石斧は、欠損後に片刃石斧に転用されたものを含めて3点しかなく、逆に木材の加工に使用されたと考えられる扁平片刃石斧の量が多い。

こうした傾向は本章第3節で述べるように、低地にある遺跡周辺に森林が少なかったという立地環境を反映したものと考えられる。

iv) その他の石器

石皿が1点、砥石が2点、有孔軽石が1点ある。軽石の孔は貫通しておらず、浮き石の未製品と考えられるものであるが、弥生時代の森小路遺跡における漁撈の具体像を示す数少ない資料となる。

3) まとめ

森小路遺跡から出土した石器の器種組成は図195のようになる。

最も多く出土しているのは磨製石庖丁である。現在までのところ弥生時代の水田を確認していないが、遺跡内各所で出土している炭化米の存在(本章第2節、表12)と併せ、水稲耕作が集落の主要な生産手段であったと考えられる。なお、オオムギの種子も出土していることから(第2章第30節)、畠作を行っていた可能性もある。石庖丁は石材産出地と消費地の関係、共同体間の分業問題、ひいては弥生時代の集落間ネットワークに絡んで、重要な鍵を握る遺物と認識されている(註2)。森小路遺跡でみられた各種の石材産出地の同定については即断できないが、片岩製と粘板岩製の石庖丁の混在は、遺跡の立地を鑑みて、淀川水系と河内湾・河内湖を媒介とした畿内北部・南部との交流を考える重要な視点となりうるものである。また、量は少ないものの石錐の一部については磨製石庖丁の製作に係わる工具と考えられ、集落内での石庖丁生産のあり方にちなんだ遺物として注目すべきであろう。

石庖丁に次ぐ出土量がある石鏃は小型のものが大半で、狩猟具と考えられる。矢頭器でも打製石剣の可能性もある大型のものは少なく、小型のものは狩猟具としての使用が考えられる。

以上のように、森小路遺跡の石器類は主として農耕・狩猟に係わって利用され、それに加えて日常的に簡便な刃器類が使用されていたと考えられる。また、伐採具が少ないことは、遺跡の周辺環境を反映した森小路遺跡の特徴といえるであろう。

(清水)

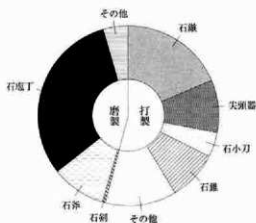


図195 出土石器の組成

(註)

(1) 銅剣形石剣は、MS93-35次調査地から第Ⅲ様式以降の遺構埋土上部または上位の遺物包含層に伴うものが出土し

第3章 遺構と遺物の検討

ている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1995]。それに対し、鉄刻形石剣はMS85-23・87-13・94-6・95-23調査地などで出土し、例が多い[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1987・1989・1996・1997]。

(2) 石庵丁からこのような視点を派生させた研究の概略は、秋山浩三氏らによって詳細にまとめられている[秋山・中原1998・1999]。

表9 石器遺物一覧表

調査年度 石器番号	種別	地区・単位 ・遺構	長さ	幅	厚さ	石種	出土状況	調査年度 石器番号	種別	地区・単位 ・遺構	長さ	幅	厚さ	石種	出土状況
M850-1															
85V10001	細石調製のある石剣	Y100002	2.20	2.75	0.35	中石	出土	85V10008	磨製石刀	Y100004	6.10	14.10	0.70	緑泥片岩	出土
85V10002	磨製石刀(覆背)	Y100002	2.40	2.30	0.25	緑泥片岩	出土	85V10009	石剣	Y100004	4.90	2.30	0.30	緑泥片岩	出土
85V10003	フタ(石)	Y100002	3.10	2.40	0.30	中石	出土	85V10010	磨石	Y100004	1.40	2.70	0.40	緑泥片岩	出土
85V10004	磨製石刀	Y100002	1.40	4.35	0.35	緑泥片岩	出土	85V10011	磨石	Y100004	3.40	2.10	0.50	緑泥片岩	出土
85V10005	磨製石刀(大型)	Y100002	6.20	6.40	0.55	緑泥片岩	出土	M850-2							
M850-2															
85V12001	大石調製(大型)	Y120001	11.00	3.30	1.30	中石	出土	85V12002	大石調製(大型)	Y120001	3.30	1.45	0.70	中石	出土
85V12003	大石調製(大型)	Y120001	5.10	2.30	1.00	中石	出土	85V12004	大石調製(大型)	Y120001	2.55	1.10	0.40	中石	出土
85V12004	大石調製(大型)	Y120001	10.20	3.30	1.30	中石	出土	85V12005	大石調製(大型)	Y120001	1.50	0.80	0.70	中石	出土
85V12006	磨製石刀	Y120006	5.20	4.15	0.40	緑泥片岩	出土	M850-13							
M850-13															
85V12008	磨製石刀(大型)	Y120008	6.20	3.10	1.00	中石	出土	85V12009	石剣	Y120009	4.90	4.90	1.30	中石	出土
85V12010	磨製石刀	Y120010	4.20	2.40	0.50	中石	出土	85V12011	磨製石刀	Y120011	4.20	2.40	0.50	中石	出土
85V12012	磨製石刀	Y120012	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12013	磨製石刀	Y120013	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12014	磨製石刀	Y120014	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12015	磨製石刀	Y120015	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12016	磨製石刀	Y120016	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12017	磨製石刀	Y120017	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12018	磨製石刀	Y120018	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12019	磨製石刀	Y120019	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12020	磨製石刀	Y120020	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12021	磨製石刀	Y120021	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12022	磨製石刀	Y120022	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12023	磨製石刀	Y120023	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12024	磨製石刀	Y120024	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12025	磨製石刀	Y120025	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12026	磨製石刀	Y120026	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12027	磨製石刀	Y120027	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12028	磨製石刀	Y120028	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12029	磨製石刀	Y120029	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12030	磨製石刀	Y120030	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12031	磨製石刀	Y120031	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12032	磨製石刀	Y120032	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12033	磨製石刀	Y120033	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12034	磨製石刀	Y120034	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12035	磨製石刀	Y120035	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12036	磨製石刀	Y120036	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12037	磨製石刀	Y120037	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12038	磨製石刀	Y120038	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12039	磨製石刀	Y120039	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12040	磨製石刀	Y120040	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12041	磨製石刀	Y120041	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12042	磨製石刀	Y120042	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12043	磨製石刀	Y120043	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12044	磨製石刀	Y120044	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12045	磨製石刀	Y120045	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12046	磨製石刀	Y120046	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12047	磨製石刀	Y120047	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12048	磨製石刀	Y120048	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12049	磨製石刀	Y120049	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12050	磨製石刀	Y120050	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12051	磨製石刀	Y120051	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12052	磨製石刀	Y120052	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12053	磨製石刀	Y120053	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12054	磨製石刀	Y120054	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12055	磨製石刀	Y120055	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12056	磨製石刀	Y120056	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12057	磨製石刀	Y120057	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12058	磨製石刀	Y120058	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12059	磨製石刀	Y120059	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12060	磨製石刀	Y120060	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12061	磨製石刀	Y120061	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12062	磨製石刀	Y120062	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12063	磨製石刀	Y120063	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12064	磨製石刀	Y120064	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12065	磨製石刀	Y120065	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12066	磨製石刀	Y120066	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12067	磨製石刀	Y120067	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12068	磨製石刀	Y120068	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12069	磨製石刀	Y120069	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12070	磨製石刀	Y120070	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12071	磨製石刀	Y120071	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12072	磨製石刀	Y120072	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12073	磨製石刀	Y120073	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12074	磨製石刀	Y120074	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12075	磨製石刀	Y120075	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12076	磨製石刀	Y120076	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12077	磨製石刀	Y120077	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12078	磨製石刀	Y120078	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12079	磨製石刀	Y120079	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12080	磨製石刀	Y120080	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12081	磨製石刀	Y120081	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12082	磨製石刀	Y120082	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12083	磨製石刀	Y120083	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12084	磨製石刀	Y120084	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12085	磨製石刀	Y120085	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12086	磨製石刀	Y120086	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12087	磨製石刀	Y120087	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12088	磨製石刀	Y120088	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12089	磨製石刀	Y120089	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12090	磨製石刀	Y120090	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12091	磨製石刀	Y120091	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12092	磨製石刀	Y120092	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12093	磨製石刀	Y120093	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12094	磨製石刀	Y120094	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12095	磨製石刀	Y120095	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12096	磨製石刀	Y120096	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12097	磨製石刀	Y120097	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12098	磨製石刀	Y120098	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12099	磨製石刀	Y120099	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12100	磨製石刀	Y120100	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12101	磨製石刀	Y120101	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12102	磨製石刀	Y120102	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12103	磨製石刀	Y120103	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12104	磨製石刀	Y120104	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12105	磨製石刀	Y120105	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12106	磨製石刀	Y120106	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12107	磨製石刀	Y120107	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12108	磨製石刀	Y120108	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12109	磨製石刀	Y120109	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12110	磨製石刀	Y120110	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12111	磨製石刀	Y120111	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12112	磨製石刀	Y120112	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12113	磨製石刀	Y120113	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12114	磨製石刀	Y120114	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12115	磨製石刀	Y120115	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12116	磨製石刀	Y120116	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12117	磨製石刀	Y120117	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12118	磨製石刀	Y120118	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12119	磨製石刀	Y120119	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12120	磨製石刀	Y120120	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12121	磨製石刀	Y120121	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12122	磨製石刀	Y120122	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12123	磨製石刀	Y120123	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12124	磨製石刀	Y120124	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12125	磨製石刀	Y120125	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12126	磨製石刀	Y120126	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12127	磨製石刀	Y120127	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12128	磨製石刀	Y120128	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12129	磨製石刀	Y120129	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12130	磨製石刀	Y120130	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12131	磨製石刀	Y120131	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12132	磨製石刀	Y120132	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12133	磨製石刀	Y120133	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12134	磨製石刀	Y120134	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12135	磨製石刀	Y120135	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12136	磨製石刀	Y120136	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12137	磨製石刀	Y120137	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12138	磨製石刀	Y120138	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12139	磨製石刀	Y120139	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12140	磨製石刀	Y120140	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12141	磨製石刀	Y120141	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12142	磨製石刀	Y120142	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12143	磨製石刀	Y120143	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12144	磨製石刀	Y120144	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12145	磨製石刀	Y120145	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12146	磨製石刀	Y120146	5.10	4.40	0.50	中石	出土	85V12147	磨製石刀	Y120147	5.10	4.40	0.50	中石	出土
85V12148	磨製石刀	Y120148	5.10.												

第2節 森小路遺跡出土の動物遺存体

森小路遺跡ではこれまでの調査で、おもに弥生時代中期に属する遺構や包含層から多種多様な動物遺体が出土している(表10)。そうした資料の内容を概観するために、ここでは本報告の対象以外の調査で出土した動物遺体についても取上げた。ただし、節足・棘皮・脊椎動物については、同定や数量の確認作業が十分ではなく、あくまで資料の概略であることを付記しておく。なお、貝類を除く資料の同定は久保和士が行い、富岡直人氏(岡山理科大学)および松井章氏(奈良国立文化財研究所)の御助力を賜りつつ、池田が一部を補足した。貝類の同定はMS85-30次および90-25次調査資料の一部が梶山彦太郎氏によるもので、そのほかは石井久夫氏(大阪市立自然史博物館)および中井克樹氏(滋賀県立琵琶湖博物館)の御助力を賜りつつ池田が担当した。皆様の御助力に対し記して深謝の意を表する。

表10 森小路遺跡出土動物種名表

節足動物門	Arthropoda	ウチムラサキ	<i>Saxidomus purpuratus</i> (Sowerby)
甲殻綱	Crustacea	セタシジミ	<i>Corbicula sandai</i> Reinhardt
十脚目	Decapoda fam. indet.	ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> Prime
		イシガイ	<i>Unio douglasiae nipponensis</i> (v. Martens)
棘皮動物門	Echinodermata	オトコタチボシガイ	<i>Inversidens reiniana</i> (Kobelt)
ウニ綱	Echinoidea ord. indet.	マツカサガイ	<i>Inversidens japonensis</i> (Lea)
		ササノハ	<i>Lanceolaria oxyrhyncha</i> (v. Martens)
軟体動物門	Mollusca	イシガイ科	Unionidae gen. et sp. indet.
腹足綱	Gastropoda		
サザエ	<i>Turbo (Batillus) cornutus</i> Solander	脊椎動物門	Vertebrata
フトヘナタリ	<i>Cerithidea rhizophorum</i> A. Adams	軟骨魚綱	Chondrichthyes
クロヘナタリ?	<i>Cerithidea largillierii</i> (Philippi)	エイ目	Rajiformes fam. indet.
カワアイ	<i>Cerithidea (Cerithiopsis) djadjariensis</i> (K. Martin)	硬骨魚綱	Osteichthyes
カニモリガイ	<i>Rhinoclavis (Proclava) kochi</i> (Philippi)	ウナギ	<i>Anguilla japonica</i> Temminck et Schlegel
タマガイ科	Naticidae gen. et sp. indet.	フナ属	<i>Carasius</i> sp. indet.
アカニシ	<i>Rapana thomassiana</i> (Crosse)	ギギ科	Bagridae gen. et sp. indet.
ハビ	<i>Babyronia japonica</i> (Reeve)	ナマズ科	Siluridae gen. et sp. indet.
クロダカウニナ	<i>Semisulcospira kurodai</i> Kajiyama et Habe	ウシサワラ	<i>Scomberomorus sinensis</i> (Lacepede)
チリメンカウニナ	<i>Semisulcospira reiniana</i> Brot	マダイ	<i>Pagrus major</i> (Temminck et Schlegel)
カウニナ科	Pleuroceridae gen. et sp. indet.	フグ科	Tetraodontidae gen. et sp. indet.
ヒメタニシ	<i>Sinotaia quadrata</i> (Benson)	爬虫綱	Reptilia
オオタニシ	<i>Cipangopuludina japonica</i> (v. Martens)	スッポン	<i>Trionyx sinensis</i> Wiegmann
タニシ科	Viviparidae gen. et sp. indet.	哺乳綱	Mammalia
二枚貝綱	Bivalvia	イノシシ	<i>Sus scrofa</i> Linnaeus
サルボウ	<i>Anadara (Scapharca) subcrenata</i> (Lischke)	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck
フネガイ科	Arcidae gen. et sp. indet.	ウシ?	<i>Bos taurus domesticus</i> Gmelin
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg)	鳥綱	Aves
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roeding)	オシドリ	<i>Aix galericulata</i> (Linnaeus)
カガミガイ	<i>Dosinia (Phacosoma) japonica</i> (Reeve)		

表11 森小路遺跡出土動物遺体一覧(貝類以外)

調査次数	種名(部位)	出土遺構	伴伴土器様式	備考
(MS7)	哺乳類	土壌	Ⅱ	
	オシドリ	土壌	Ⅱ	
(81-6)	イノシシ(下顎骨・肩甲骨)	SX01	Ⅱ	解体済み
81-15	イノシシ(上顎骨・下顎骨)	1区下水2地点落込み	Ⅱ	3.5歳以上? アタの可能性あり
	鳥類(大腿骨)	1区下水2地点落込み	Ⅱ	
82-18	イノシシ(前歯・距骨)	V区第5a層	Ⅱ~Ⅳ	
	シカ(下顎骨)	V区第5a層	Ⅱ~Ⅳ	
	イノシシ(第3臼歯)	?	Ⅱ~Ⅳ?	
(82-23)	シカ(上顎骨)	?	Ⅱ~Ⅳ?	
	マダヤ	?	Ⅱ~Ⅳ?	
	フグ科	?	Ⅱ~Ⅳ?	
(83-11)	イノシシ(下顎骨)	SD01	Ⅱ	
(84-25)	イノシシ(下顎骨)	SK02	?	
	哺乳類	SK10	Ⅲ~Ⅳ?	
	フナ属	SK10	Ⅲ~Ⅳ?	
(85-9)	ギギ科	SK10	Ⅲ~Ⅳ?	
	カニ	SK10	Ⅲ~Ⅳ?	
	ウニ類	SK10	Ⅲ~Ⅳ?	
(85-28)	イノシシ?(歯)	包含層	Ⅱ?	
	イノシシ(頭蓋骨・下顎骨・肩甲骨・第1頸椎・上腕骨・脛骨・尺骨)	落込み・包含層	Ⅱ~Ⅲ	幼獣含む
	シカ(大腿骨)	落込み・包含層	Ⅱ~Ⅲ	
(85-30)	イノシシorシカ(肋骨)	落込み	Ⅱ~Ⅲ	
	ウシヤウラ	落込み	Ⅱ~Ⅲ	
	スッポン	落込み	Ⅱ~Ⅲ	
	カニ	落込み	Ⅱ~Ⅲ	
85-32	イノシシ(後頭骨)	11地点第3層	Ⅲ~Ⅳ?	斧による打割痕
(86-4)	イノシシ(歯)	SK17	Ⅱ~Ⅳ?	
86-5	イノシシ(歯・大腿骨)	第4層	Ⅱ~Ⅳ	
	シカ(前頭骨)	第4層	Ⅱ~Ⅳ	
	イノシシ(頭蓋骨・歯・脛骨)	SD808	Ⅱ	
87-6	シカ(脛骨)	SD808	Ⅱ	
	魚類ウロコ	4区第5層	TK23	
(87-13)	イノシシ(下顎骨・歯)	落込み	Ⅱ	
(88-5)	シカ(脛骨)	SX02	Ⅱ	
	哺乳類	SX02他	Ⅱ	
89-1	イノシシ(大腿骨)	SD01	Ⅱ	
	イノシシorシカ(肋骨)	SD01	Ⅱ	
(89-31)	シカ(距骨)	包含層	Ⅱ~Ⅳ?	
89-50	哺乳類	第2~3層	TK47	
(90-1)	イノシシ(脛骨)	落込み状遺構A	Ⅱ~Ⅲ	
	哺乳類	落込み状遺構B	Ⅳ	
90-25	イノシシ(下顎歯)	SX01	Ⅱ	
(93-8)	イノシシ(大腿骨・上顎骨・脛骨)	SD101	Ⅲ~Ⅳ	
(93-35)	哺乳類	SX201・203	Ⅱ(=Ⅲ?)	
	ウシ?(臼歯)	SD02	TK47	
	イノシシ(上顎骨)	SK04	Ⅱ	
94-11	哺乳類	SK04	Ⅱ	
	シカ(角・中手or中足骨)	SK08	Ⅳ	
	エビ目	SK08	Ⅳ	
	フナ属	SK08	Ⅳ	
	ギギ科	SK08	Ⅳ	
	ナマズ科	SK08	Ⅳ	
	ウナギ	SK08	Ⅳ	
	ウニ類	SK08	Ⅳ	

()は本報告対象外、遺構名は各文献による。

1) 脊椎動物(表11)

哺乳類ではイノシシが大半を占め、シカがそれに続く。良好な遺存状態を保ち、同定可能であった資料の中には、MS81-6・85-32次調査出土のイノシシ下顎・後頭骨のように解体痕が観察されるものもみられた。イノシシの年齢構成については、3.5歳以上と推定される個体が数例あるほか、MS85-30次調査出土資料のように幼獣の個体も含まれており、幅をもつものと推測される。また、MS81-15次調査出土資料のように歯の形態からブタの可能性のある資料が含まれている(富岡氏の御教示による)。

一方、魚類ではギギ科・フナ属をはじめ、淡水・汽水性の資料が主体をなしている。

2) 貝類(表12)

森小路遺跡ではこれまでに、14個所の調査で20種を超える貝類が出土しており、共伴した土器からいずれも弥生時代中期に属するものと考えられる。ここでは、同じく河内潟周辺に位置する貝出土遺跡の中で、おもに第Ⅱ様式の土器を伴い、貝種構成や廃棄パターンに共通性がみられる東大阪市宮ノ下遺跡[貝層2上部]および「小貝塚」資料[東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会1996]と比較しながら、森小路遺跡出土資料について検討してみたい。なお、資料の同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954・波部忠重1961]を利用し、個体数については二枚貝綱は左右殻数の多数の方を、腹足綱は殻口数を原則として採用している。

i) 所属時期と出土量

森小路遺跡の貝出土遺構・包含層は、一部の例外を除き概して小規模であり、弥生時代中期前葉から中期後葉まで連続して形成されたとみられるものはない。しかし、形成期間の短い遺構・包含層が各時期に形成されており、貝採取が集落の存続期間を通じて行われていたことが推測される。河内潟周辺では貝出土遺構・包含層が検出された弥生時代の遺跡が数多く分布しているが、その大半は中期中葉までに形成されたものである。宮ノ下遺跡では縄文時代晩期から形成の始まる貝塚が、弥生時代中期前葉には規模が縮小し、途絶える。また、中期後葉まで存続する希少な例である森の宮遺跡についても採取量の減少傾向が指摘されている[難波宮址顕彰会1978]。そうした中で、森小路遺跡はMS94-11次調査出土資料など確実に中期後葉まで下る資料が確認された点で、重要な例であるといえよう。また、その盛衰を時系列で追うと、中期前葉から中葉を中心する一方で、後葉に及ぶ可能性のあるものがMS85-9・93-8・94-11次の各調査で確認されており、各々の貝出土量の比較からも現状では明確な傾向を読みとることがむずかしい。当遺跡においては、同一遺構で長期間にわたり形成され、各時期の形成規模を比較できるような貝塚が検出されていないこと、また、形成時期の異なる遺構が同一遺構内で検出され、各遺構の帰属時期の判定が困難なばあいがあることなどを考慮し、資料の増加を待ち慎重に検討していくべきであろう。

ii) 貝種構成

貝種の構成については、いずれの資料にも含まれているセクシジミが、比率的にも全資料の約90%を占めている。淡水性の資料が全体の95%以上と大半を占める一方で、ハマグリを筆頭とする鹹水性・

汽水性の資料も少量ながら10種以上と多くの種類が含まれており、こうした構成は貝出土遺構・包含層の形成時期に係わりなく共通している。

他遺跡出土の資料をみると、宮ノ下遺跡ではシジミガイ科が全体の99%以上を占め、ついで淡水性のタニシ科・カワニナ科・イシガイ科の資料が続くが、ハマグリ・バイ・サルボウなど鹹水性の資料も多種含まれている。そのほか豊中市勝部遺跡[豊中市教育委員会1972]・島田遺跡・上津島遺跡[豊中市教育委員会ほか1997]、東大阪市水走遺跡[東大阪市文化財協会ほか1998]、大阪市崇禪寺遺跡[池田研1999a]・難波宮跡[池田研2000]・森の宮遺跡などでも、シジミガイ科を中心に淡水・汽水性の貝を主体とし、ハマグリなど鹹水性の貝が各種少量含まれるという貝種構成が見られ、弥生時代から古墳時代にかけての河内潟・河内湖周辺の出土資料に共通したパターンであると考えられる。森小路遺跡出土資料の貝種構成は基本的にそうした共通パターンに合致するものであるといえよう。

また、森小路遺跡出土資料のうち、鹹水性のものは多くの種類から構成されているだけでなく、MS 88-12次調査出土の韓突起をもつサザエなど外洋性の資料が含まれており、採取エリアが広範囲に及んでいたと推測されるにも係わらず、淡水性資料と比して量的にきわめて乏しい。このような偏りは、鹹水性の貝と淡水・汽水性の貝の採取がそれぞれ性格を異にする別次元の(生業)活動であったことによるものと考えられる[池田研1999b]。

iii) 出土状況

前述の通り、森小路遺跡では東西600m、南北850m程度と考えられている遺跡の範囲で、14箇所

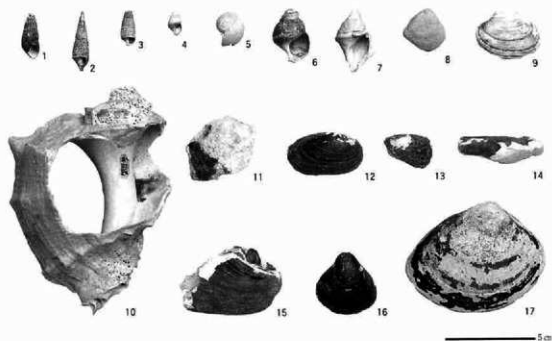


写真10 森小路遺跡出土貝類

85-30次調査：クロダカワニナ(1)、カワアイ(3)、バイ(7)、サルボウ(8)、アカニシ(10)、カガミガイ(11)、イシガイ(12)、マツカサガイ(13)、ササノハ(14)、オトコテボシ(15)、セタシジミ(16)、ハマグリ(17)、90-25次調査：カニモリガイ(2)、85-9次調査：チリメンカワニナ(4)、タマガイ科(5)、ヒメタニシ(6)、98-1次調査：ウチムラサキ(9)

にもほる調査地点から貝が出土しており、このような貝出土地点の分布状況は全国的にも希少な例であるといえる。当遺跡では小規模な発掘調査が大半であり、遺構や貝層の広がりや論ずるには資料に制約があるが、MS7・94-11次調査のように小規模な土壌に伴う例が多く、MS85-30次調査の落込みに堆積した貝層のように比較的大きな広がりをもつものは例外的であるようにみられる。

同様なあり方を示す資料としては、宮ノ下遺跡の小貝塚群が挙げられる。同遺跡では縄文晩期から形成の始まる規模の大きな2つの貝塚と、おもに第Ⅱ様式の土器を伴う6つの小貝塚があり、小貝塚は1~2m四方で、厚さ10~20cm程度またはそれ以下のものを主としている。芋本隆裕氏は、宮ノ下遺跡における貝殻の廃棄パターンが、まとめて投棄する方法から分散して投棄する方法へ、弥生時代中期前葉には変化したと指摘しているが[芋本隆裕1996]、森小路遺跡資料は、そうした廃棄パターンの変化が地理的な広がりをもった現象であった可能性を示唆している。

続いて、貝出土遺構・包含層における共存遺物をみると、イノシシなどの獣骨、種子・炭化米などの植物遺体、炭、木片、サヌカイトチップなどが出土した例が多く、水洗選別を行った資料に関しては高い確率で微細な魚骨、ウニ・カニなどの動物遺体が回収された。内容が偏っておらず特定の作業と結びついたゴミ捨て場ではないこと、集落全体のゴミを小規模に分散して投棄するメリットが見い出しにくいことなどから、日常生活で生じる雑多なゴミを各世帯または数世帯単位で投棄した結果、形成されたものと考えるのが自然であろう。

次に、資料の残存状態については、MS93-8次調査資料のようにチョーク化が進行し原形をとどめない劣悪な状態のものもあるが、総じて補強など特別な処理なしで取上げ可能な状態を保っていた。ハマグリについては計測不能破損資料が多い印象を受けたが、同様に破砕された貝殻が多くみられた宮ノ下遺跡貝層2上面の資料については、浅い流路内の投棄物の上を人が絶えず踏み歩いた結果によるものと指摘されている[芋本1996]。森小路遺跡のばあいには、遺構面が浅く後世の人間活動の影響を受けやすいことが主要な原因と考えられるが、今後の調査では貝層中の堆積位置と破砕率の関係や、貝殻の2次利用の可能性にも留意した上で資料操作を行うことが望まれる。

iv) 計測値からみた資料の特質(表13)

弥生時代前期から中期にかけての河内潟周辺の貝出土遺跡から出土するハマグリは、最高平均値が約60mmを測る宮ノ下遺跡をはじめ、勝部遺跡・東大阪市鬼虎川遺跡など大型の個体から構成される例が少なくない[池田1999b]。森小路遺跡出土のハマグリについても最高平均値が58.5mmと大きいが、最高20mm台の小型のものから80mmを超える大型のものまで幅のある個体から構成されており、前述のように殻の薄い小型の個体が多く破損している点をやや差し引いて比較する必要がある。一方、

表13 セタシジミとハマグリを平均計測値

共存土器様式	Ⅱ				Ⅲ				Ⅳ
調査次数	MS7	86-5	90-25	85-30	87-6	89-31	88-12	85-9	94-11
セタシジミ	最長 23.9(14)	26.1(61)	23.3(26)	26.6(180)	27.9(12)	23.6(5)	24.0(9)	24.7(102)	25.6(43)
最長	25.1(14)	27.0(61)	24.1(26)	27.4(180)	28.5(13)	24.3(5)	25.1(9)	25.4(102)	26.7(43)
ハマグリ	最長 93.6(2)			65.9(9)		86.9以上(1)			
最長	74(2)			53.2(9)	63.7以上(1)	75.5(1)		40~55?	

・単位mm

・()は計測資料数

資料数が多く統計的に捕獲圧や気候の変化などを検討する対象としてより適しているセタシジミについてみると、平均殻長が23.3mm(MS90-25次調査)から27.9mm(MS87-6次調査)まで幅をもつことがわかる。宮ノ下遺跡貝層2出土資料を計測した結果によれば、26.3mmあった下部資料の平均殻長が、上部資料では25.0mmと小型になっており、局地的な貝資源の減少を示すものと指摘されているが[芋本1996]、森小路遺跡出土資料に関しては、出土遺構の時期と計測値の間に明確な相関関係は認められなかった。

3) まとめ

以上、概観してきた森小路遺跡出土の動物遺体について、その資料のもつ意義について要約してみたい。

第一に貝出土遺構・包含層からは、酸性土壌を中和する貝殻の作用もあり、多様な動植物遺体が回収されたことから、当時の生業活動の内容や範囲を復元する上で貴重な資料となった。中でも、貝類については貝種構成やハマグリ等の計測値に関して、河内潟沿岸の他遺跡の傾向との共通性を確認することができた。

次に、瀬戸内海沿岸の貝出土遺跡が激減し、残るものはいわゆる高地性集落に分布が偏る傾向が強い弥生時代中期後葉という時期に、低地集落から出土した資料として時期的・立地的な特異性をもっている。貝殻の計測値からは捕獲圧の上昇など食料資源の枯渇を示す結果は確認できず、当遺跡において貝採集が生業全体に占めていた位置づけも含め、貝塚が形成され続けた原因の究明は課題として残されている。

一方、貝出土地点の分布状況は、弥生時代中期におけるゴミの廃棄パターンを検討する上で重要な事例であるといえる。今後、各遺構の存続時期の細別や配置の分析により、各住居(群)と貝出土遺構の結びつきが特定されれば、遺構出土の食料残滓の内容比較による世帯間の食料分配や、施設の共有といった問題についても検討することが可能となるものと期待される。

(池田)

第3節 弥生時代中期の集落構造とその変遷

1) 集落立地の復元

森小路遺跡は淀川南岸の河口付近に位置する、弥生時代中期を主体とした集落遺跡である。遺跡は砂層を主体とした自然堤防上に立地しており、第Ⅱ章第10節で述べたように、この自然堤防は縄文時代後～晩期の海水準の低下に伴って河口州や河口付近に土砂が堆積したことによって形成されたと考えられ、その上部には離水して干上がったことを示す古土壌が確認できる。同じ自然堤防上に立地していたであろう東方の守口市八雲遺跡では、縄文晩期の滋賀里式土器が出土しており[守口市教育委員会1976]、同橋波西之町遺跡では弥生前期の土器が出土している[守口市役所1962]。森小路遺跡でもヘラ描沈線文をもつ壺や甕が単発的に出土している。しかし、今のところ弥生前期の土器のみが遺

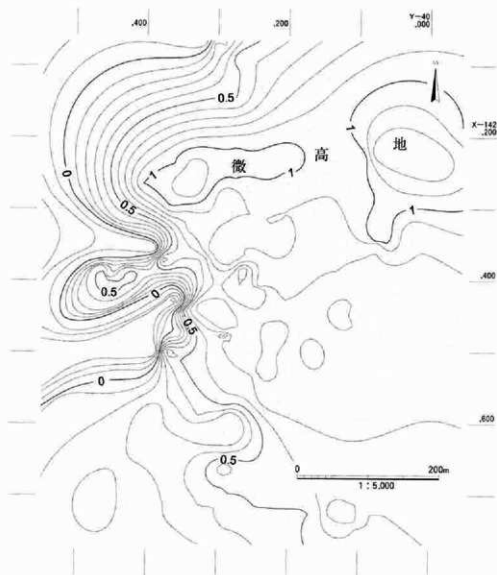


図196 弥生時代中期前葉の森小路遺跡の微地形

構から一括して出土した例はなく、ヘラ描沈線文を施した壺が第Ⅱ様式でも古相に位置づけられる土器群と共存する例がMS84-6次調査で確認されていることから(第Ⅱ章第15節)、従来前期と認識されていた土器も、中期前葉にまで残存していたものの可能性がある。すなわち、遺跡の周辺は縄文晩期ごろには人が生活できる環境が整っていたが、この地に本格的に集落が形成されるのは、現状では弥生時代中期前葉をまたなければならないのである。

過去の調査の標高データをもとに、弥生時代中期前葉の微地形を復元したものが図196である(註1)。遺跡の範囲はTP+1.2m以下の低地にあり、そのなかで北半部にTP+1.0mをこえる東西方向の微高地が存在する。この微高地の南側はTP+0.7~0.5mの平坦な地形が続くのに対し、北側は急に低くなっていく。また、微高地の西側には谷状の地形があり、最深部分ではTP-0.4mまで低くなる。谷内には植物遺体を多く含むシルト層と砂層が互層で堆積しており、弥生時代中期には谷内まで水域が及んでいた時期もあったと思われる。

梶山彦太郎・市原実両氏による河内潟の時代の周辺の地形復元を参考によると[梶山・市川1985]、遺跡北部にある微高地は、淀川に沿って東から延びてきた自然堤防の西端に当る。微高地の先端は水辺に面しており、微高地以北には淀川の本流が流れ、そして以南は河内潟・河内湖へと移行する低地が広がっていたのであろう。このような水域に囲まれた遺跡の環境は、遺跡内各所で検出される貝廃棄土(本章第2節)や、MS7次調査で出土した木製椀[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1981]からもうかがえる。また、弥生時代中期の石器組成を検討すると、伐採具の比率が極端に低く(本章第1節)、このことは周辺が湿地帯で森林を伐採して土地を開拓していく必要がそれほどなかったことを反映していると思われる。遺跡周辺の植生については、今後、花粉・種子分析や出土樹木の同定を通じて検証していく必要がある。

弥生時代を通じて微高地北側には湿地性の堆積物が広く分布しているのに対し、主に微高地南側では中期中～後葉に河川の氾濫による堆積作用が活発化する。これまで少なくとも2時期の大きな氾濫があったことが判明しており、第Ⅱ～Ⅲ様式の土器を含む砂層が微高地の南縁辺を中心に分布し(MS81-17・87-6・89-4次など)、第Ⅳ様式のごく初頭の土器までを含む砂層は前者より南側で確認されている(MS82-8・86-5・88-33・89-1次など)。砂層堆積後の地形を復元することは現時点では困難であるが、微高地に沿って東から西に流れた複数回の氾濫によって微高地の縁辺に砂層が重なっていき、時期を経るにつれ微高地が南側へ広がっていくという地形の変化が読み取れる。

2) 弥生時代中期の遺構分布

前項では時期による微地形の変化を概観したが、この変化と遺構の分布はどのように関わっているのかを検討していきたい。

図197は中期前～中葉の時期の遺構、図198は中期中～後葉の遺構の分布である。地層により区分できる地点では前者が砂層堆積以前、後者が以後のもので、区分できない地点では包含する土器の型式で各遺構の時期を判断した。ただし、時期が不明確な遺構については両方の図に示し、また古墳時代の下る可能性のある遺構についても図198に含めている。

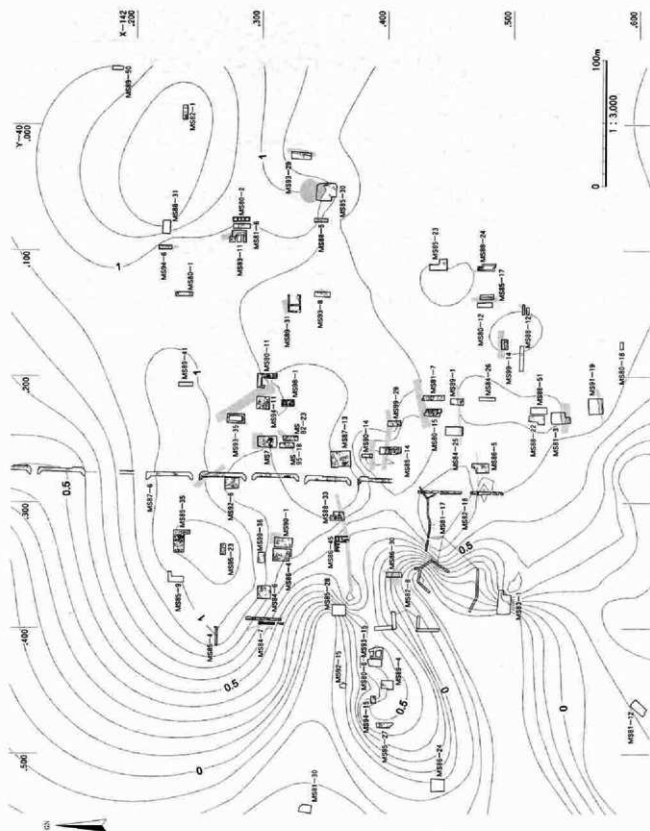


図197 弥生時代中期前-中期の遺跡分布(トーンは道路・溝・落込み)

まず、中期前～中葉の遺構分布をみていこう(図197)。遺跡南半の低地部では、溝や流路が多数検出されており、多くが北側の微高地と平行する東西方向である。シルト～粘土で自然に埋まるものも多く、また溝の掘り直しはなされていない。これらは地形に沿って低地部分を流れていた自然流路あるいは排水用の溝であろう。先にこの場所を平坦な地形に復元したが、実際は流路や落込みなどが多数存在し、起伏に富んでいたようである。同様の溝や落込みは微高地上でも確認されており、水が溜まるような窪地は遺跡内の各所に存在していたことがうかがえる。このような条件下では、水の処理は当時の人々にとって重要な問題であったことは想像に難くない。なお、微高地を横断する南北方向の溝は、低地側の溝・流路の方向と異なっており、居住域を区画する機能を有していた可能性もあるが、現段階のデータでは判断しかねる。

柱穴やゴミ穴と考えられる遺構が多数検出され、居住域と判断される地域は、微高地上を中心に南北約300m、東西約500mの広い範囲に分布している。微高地上だけではなく、微高地南側の低地部にまで遺構が広がっており、流路や溝・落込みのすぐきわまで小穴群が密集して検出される地点がある。森小路遺跡のこれまでの調査では、小穴群に伴って堅穴住居の中央穴や周壁溝が確認された例がなく、住居の形態については不明な点が多い。水の影響を受けやすい立地条件であることから、平地式住居を主体としていた可能性を考慮しておく必要がある。

なお、この時期の生産域・墓域は遺跡内では未確認である。

図198は中期中～後葉の遺構分布である。微高地南側の低地部は頻繁な河川氾濫を受けた結果、遺

構の分布は希薄となる。MS80-12・85-17次調査地にまたがる地点で、堆積した砂の上に中期中～後葉の方形周溝墓が造営されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1982・1987]。この西側150mのMS81-15次調査地でも体部下半に穿孔を施した第Ⅳ様式の壺が出土しており(第Ⅱ章第9節)、微高地の南側は墓域となったようである。

この時期の小穴群や土壁は、微高地上で検出されており、居住域は一個所に集中するようになる。MS98-1・95-18次調査ではそれぞれ堅穴住居が、MS84-6次調査では掘立柱建物が出土されている。

3) 土器の出土頻度からみた集落変遷

森小路遺跡ではこれまで80件を超える調査が行われているが、小規模な調査が多いため、広範囲での遺構の連続性を追っていく、かつ時期が同定できない遺構が多いなどの問題があり、集落の変遷を細かく復元することが難しい。そこで、各調査地点で出土した土器の数量を時

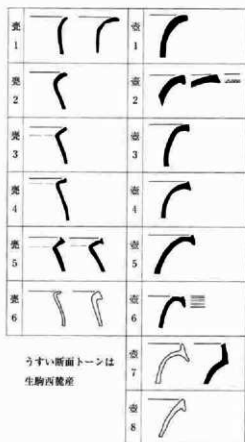


図199 壺・甕口縁部の形態分類

期ごとに比較し、集落の変遷を検討していく。

弥生土器の中で主要な器形である広口壺および甕をとりあげ、口縁部の形態を以下の甕1類～6類、壺1類～8類に分類した。

甕1類：口縁部を緩やかに外反させ、端部を丸くおさめるもの。

甕2類：甕1類と類似するが、頸部がすぼまり、口縁端部に強いヨコナデを施すもの。

甕3類：口縁部内外面にヨコナデを施し、頸部が「く」の字に屈曲するもので、口縁端部にも強いヨコナデを施すが拡張は見られない。

甕4類：甕3類と類似するが、口縁端部を上方につまみ上げるもの。

甕5類：甕3・4類と類似するが、口縁部端面が内傾し端部を上方もしくは上下に拡張させるもの。

甕6類：口縁部を短く折り曲げる、もしくは垂下させるもので、生駒西麓産の胎土である。

壺1類：口縁端部を丸くおさめるもの。

壺2類：口縁端部を下方に肥厚させるが、端面のヨコナデが弱いもの。下端にキザミメを施す場合が多い。

壺3類：口縁端部に強いヨコナデを施すが、上下への拡張は見られないもの。

壺4類：口縁端部に強いヨコナデを施し、上下端を拡張させるもの。

壺5類：口縁部上端をつまみ上げ、明瞭な段を有するもの。

壺6類：口縁部の上端をつまみ上げるとともに、下方にも垂下させるもの。端面に凹線文を施す。

壺7類：口縁部を上方もしくは上下に拡張させる、いわゆる受口状口縁のもの。

壺8類：口縁部を折り曲げる、もしくは垂下させるもので、生駒西麓産の胎土である。

甕1類から壺5類、壺1類から壺6類は、ヨコナデ手法の発達と口縁端部の拡張化という型式変化の組列を組むことができ、甕1類は第Ⅱ様式、甕2・3類は第Ⅲ様式、甕4・5類は第Ⅳ様式に、壺

表14 各調査で出土した類型ごとの土器数

調査次	調査地	甕1	甕2	甕3	甕4	甕5	甕6	壺1	壺2	壺3	壺4	壺5	壺6	壺7	壺8	合計
番号	(m)	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	個数
MS81-02	98	11(1.5)	11(0.1)	0(0.0)	11(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	11(0.1)	11(0.1)	0(0.0)	11(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	19
MS81-17	152	49(2.6)	11(0.1)	0(0.0)	11(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	51(3.3)	41(3.3)	11(0.1)	31(2.3)	0(0.0)	11(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	56
MS82-18	95	11(1.5)	11(0.1)	11(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	51(3.3)	31(2.3)	31(2.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	11(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	32
MS83-01	168	51(2.2)	0(0.0)	0(0.0)	11(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	21(2.2)	11(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	11(0.1)	0(0.0)	8
MS84-06	105	61(6.0)	51(5.5)	13(1.2)	21(2.0)	0(0.0)	21(2.2)	21(2.2)	21(2.2)	17(1.6)	18(1.7)	21(2.2)	14(1.3)	15(1.4)	21(2.2)	228
MS86-05	85	36(4.2)	21(2.2)	0(0.0)	11(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	11(0.1)	10(1.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	11(0.1)	51
MS88-22	75	21(2.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	51(5.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	7
MS88-31	65	51(5.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	11(1.2)	11(1.2)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	7
MS88-33	70	83(11.9)	14(2)	13(1.9)	17(2.4)	11(1.5)	21(2.3)	13(1.9)	23(2.3)	13(1.9)	0(0.0)	11(1.2)	21(2.3)	21(2.3)	0(0.0)	222
MS89-01	44	39(6.0)	11(0.2)	13(1.9)	31(3.3)	11(1.2)	0(0.0)	31(3.3)	11(1.2)	11(1.2)	11(1.2)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	58
MS89-04	57	35(6.1)	11(0.2)	71(2.2)	11(0.2)	0(0.0)	0(0.0)	51(5.9)	11(1.2)	0(0.0)	11(1.2)	0(0.0)	11(0.2)	0(0.0)	0(0.0)	58
MS89-50	26	21(2.0)	11(0.4)	11(0.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	11(0.4)	0(0.0)	11(0.4)	0(0.0)	0(0.0)	21(2.0)	21(2.0)	0(0.0)	10
MS93-29	81	27(3.3)	11(0.1)	11(0.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	81(8.1)	31(3.3)	31(3.3)	0(0.0)	0(0.0)	11(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	67
MS94-11	91	114(12.5)	12(1.3)	17(1.9)	25(2.7)	16(1.7)	31(3.3)	46(5.1)	39(4.3)	39(4.3)	22(2.4)	9(1.0)	21(2.3)	71(8.1)	51(5.5)	366
MS94-13	230	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0
MS96-18	44	43(9.7)	11(0.2)	16(1.6)	21(2.7)	13(2.8)	41(4.8)	18(3.6)	12(1.2)	8(1.8)	13(2.8)	11(0.2)	31(7.0)	61(4.1)	41(4.9)	189
MS96-23	36	57(15.0)	41(1.1)	13(2.6)	16(4.4)	29(5.5)	0(0.0)	10(2.8)	12(3.3)	7(1.9)	18(5.0)	31(8.1)	8(2.2)	8(2.2)	11(3.3)	177
合計		574	45	101	108	60	16	147	125	96	102	16	91	42	13	1536

() = 10m²中の土器数

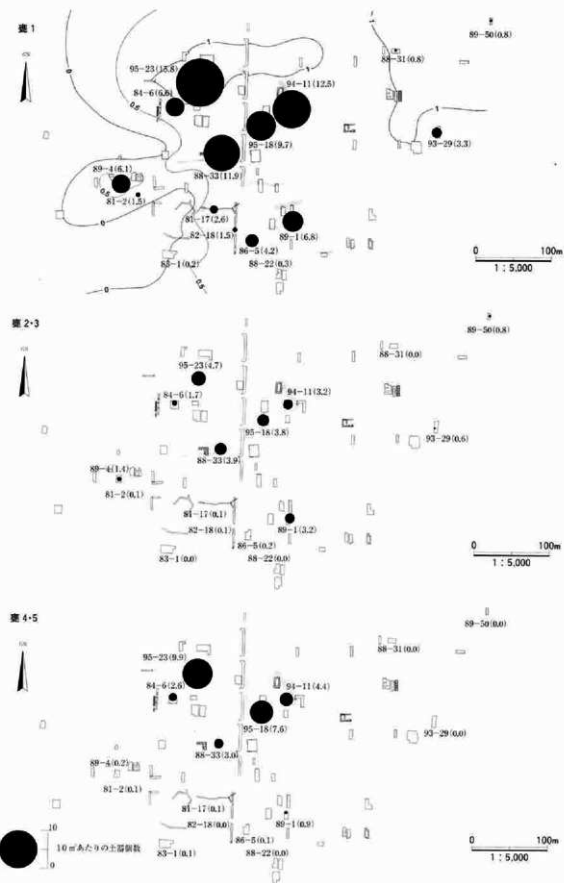


図200 甕の類型別出土頻度

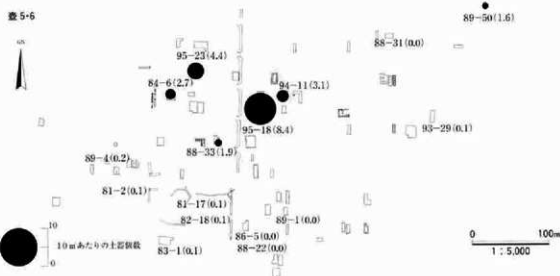
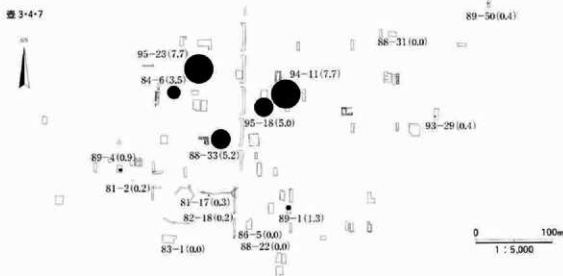
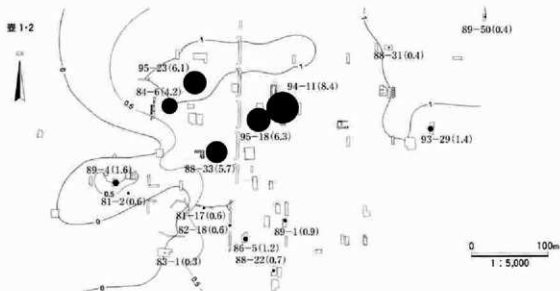


図201 廣口壺の類型別出土頻度

1類は第Ⅱ様式、壺2類は第Ⅱ～Ⅲ様式、壺3類は第Ⅲ様式、壺4類は第Ⅲ～Ⅳ様式、壺5・6類は第Ⅳ様式におおむね対応する。また、壺7・8類および壺6類は第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけて見られる器形で、壺8類および壺6類は生駒西麓産の胎土をもつ。類型によって存続期間が異なっていたことが予想されるが、ここでは各類型を一定の時期を示す基準として用いる。

以上のような分類にもとづき、これまでの調査で出土した土器の口縁部数をカウントしていった。資料の抽出に際しては、以下の基準を設けた。まず第一に、洪水層から出土したり後世の耕作により遊離したものは二次的な資料として除外し、弥生時代の遺構や包含層から出土した遺物を比較的原位置性が高いものと判断して用いる。第二に、分類の基準とした部位が残存する破片を対象とする。第三に、個体判別は同一遺構や同じ層位で取り上げた資料内でのみ行う。

本書で報告したうちの15件と、遺跡の実態をよく示すと判断した近年の2件の調査(MS95-18、95-23次)を合わせた17件について作業を行った結果、上の基準に該当する土器総数は1,536点であった(表14)。この中で壺1類が574点と最も多く、壺全体の中でも63%と過半数を越えている。壺1・2類も壺全体の中で合わせて43%と過半数に近い。そのほかの類型はそれぞれ全体の10%前後である。以上のことから、第Ⅱ様式の土器が全体のほぼ過半数を占めており、集落の最盛期が中期前葉にあったことがわかる。

次に、調査ごとに出土頻度を10㎡当りの土器数で示し、出土の疎密を各地点で比較していく。土器の出土量は、その場所での当時の人びとの活動の度合を判断する材料となる。また、土器が居住地の近くに廃棄されたと仮定すれば、出土頻度はその場所での居住の密集度や継続度を判断するための基準の一つともなる。今回とりあげた資料は、全調査の約1/5にすぎないが、今後データを補充した上で再度検討することとし、とりあえず現段階で読み取れる傾向を指摘することにする。

まず、壺の各類型を時期ごとにまとめ、それぞれの分布傾向をみていく(図200)。

第Ⅱ様式の壺1類は、遺跡北部の直径約150mの範囲内で分布密度が極めて高く、10㎡あたり10点前後がそれ以上と大量に出土する箇所が4地点ある。この範囲は微高地の西端に当たっており、ここから低地側へいくにつれて出土頻度は徐々に低くなっていく。ただし、微高地南側の低地部(MS89-1)や西側の谷地形に挟まれた狭い範囲(MS89-4)でも土器が一定量出土している。

第Ⅲ様式の壺2・3類は、壺1類と比べて出土頻度が各地点で低くなるが、分布の中心は壺1類同様、微高地の西端にある。また、低地側のMS89-1次地点でもこれらと同程度出土している。

第Ⅳ様式の壺4・5類は、出土頻度が壺2・3類と比べて高くなる。分布は微高地西部にほぼ限定され、それ以外の地域ではほとんど出土していない。

微高地西部から土器が多く出土するという傾向は、壺でみるとさらに顕著である(図201)。第Ⅱ様式の壺1・2類、第Ⅲ～Ⅳ様式の壺3・4・7類、第Ⅳ様式の壺5・6類はともに微高地西部で出土頻度が高く、逆に低地側では極端に出土頻度が低くなる。わずかに遺跡北東隅のMS89-50次調査で、壺5・6類の出土頻度が若干高くなっている。

このような分布の時期的変遷から、以下のような傾向が指摘できる。

まず、弥生時代中期を通じて微高地西部から土器が多く出土しており、遺構の分布でも確認したよ

うに、周囲よりも比較的安定した微高地上が、継続して居住域となっていたことが理解できる。

また、微高地南側の低地部からも甕1類が一定程度出土しており、中期前葉には日常的な活動範囲が微高地上に限定されるのではなく、居住に不向きと思われる低地部にも及んでいたようである。ただし、低地部では微高地側と比べて出土頻度が低いことから、そこでの活動は比較的短期間にとどまるものであり、また溝や流路に挟まれた狭い範囲を利用していることから規模も小さかった、などの違いが指摘できる。さらに、第Ⅱ様式の壺と甕の分布を比較すると、MS89-1・4次地点のように微高地上と比べて低地部で壺の出土頻度が低いという傾向がみられる。炊飯具が広い範囲に分布するのに対し、貯蔵具は低地部ではなく微高地上で主に用いられていたということになる。このことは、両地域での活動内容の差を示している可能性もあり、今後データを増やした上で多方面からの検討を再度行ってみたい。

中期中～後葉になると、土器出土量が中期前葉と比べて減少しており、集落の規模も縮小する。また、土器の出土にみる日常的な活動域はほぼ微高地西部に限定され、この範囲に遺構・遺物が集中する。集落規模の縮小は、低地部が河川の氾濫によって被害を受け、日常生活の場が放棄されたことにも起因するのであろう。ただし、MS89-1次地点で甕2・3類が多く出土していることからみて、集落の移動は一気になされたのではなかったと判断される。また、MS89-50次地点では壺5・6類が一定程度出土していることから、中期後葉には微高地上の別地点にも居住域があった可能性もある。

4) まとめ

最後に、これまで述べてきた森小路遺跡の集落の推移を、周辺遺跡との関係や他地域との交流から位置づけてみたい。

森小路遺跡の本格的な集落形成は弥生時代中期前葉に始まり、この時期に最も規模が拡大する。居住域は比較的安定していたと考えられる微高地上を中心に営まれているが、居住には不向きと思われる低地側にまで日常的な活動域が及んでいた点がこの時期の特徴といえる。

森小路遺跡の集落形成とほぼ時期を同じくして、淀川下流域には多くの集落が出現するようになる[第Ⅰ章第1節、濱田延光2001]。森小路遺跡でも穂柄具である石版丁が多数出土していることから、周辺の遺跡と同様、水稲農耕を主たる生業とした集落であったと考えてよい。この時期の低地部への指向性は、水田可耕地を求めて淀川下流域が積極的に開拓されていたことを示しているのであろう。

また、中期前葉には森小路遺跡内に河内・山城・近江・紀伊など各地の土器が持ち込まれている。これらの土器は隣接する集落を介して搬入されたものと考えられ、この時期、淀川下流域の集落群の間で緊密な地域ネットワークが形成されていたことが想定される。特に集落群の西端にあり、周囲を水域に囲まれた場所に立地する森小路遺跡では、多くの生駒西麓産の土器の搬入が示すように、河内湖・河内湖を介した南部地域との交流が活発であったようである。遠距離地域の土器の搬入についても、これまで近江地域との交流が強調されることがあったが[西畑佳恵1994]、近江よりも紀伊地域からの搬入品の方がどちらかというと目立つのが実状である。粘板岩よりも結晶片岩を素材とした石版丁の割合が高いことも、このことを裏付けている(本章第1節)。

さて、中期前葉に出現した淀川下流域の集落の多くは短期間で廃絶している[濱田2001]。中期後葉まで継続するのは今のところ森小路遺跡に限られており、森小路遺跡でも集落の縮小傾向は否めない。森小路遺跡の集落縮小の要因の一つとしては河川の氾濫による生活環境の悪化を想定した。

中期後葉には、土器からみた他地域との流通関係にも変化がみられる。それまでの土器にみる活発な他地域との交流は希薄となり、例えば第Ⅲ・Ⅳ様式の生駒西麓産の土器数は激減している(表14)。このような現象は、淀川下流域の多くの集落が廃絶したことにより、それまでの近隣集落との日常的な交流のネットワークが途絶えたことを示唆する。逆に新たな現象として、播磨地域から土器が搬入されるようになり、西側地域との接触がみられる点は注目される。多くの近隣集落が廃絶するなかで、規模が縮小するものの森小路遺跡のみが存続する背景については、本遺跡は河内湾への出入口という要衝地としての性格をより強く持つようになったという、積極的な評価を与えることも可能であろう。

弥生時代後期～古墳時代前期の間、遺跡内で人の生活痕跡をみだすことがほとんど出来なくなる。遺跡北部で弥生時代後期末～古墳時代前期の土器が出土しており(第Ⅰ章第1節)、今後、この時期の集落が見つかる可能性も残されているが、中期で一旦集落が途絶えることは間違いない。また、この間に遺跡内で急激な環境の変化が想定できる根拠は見いだせず、同様の現象は河内平野の広い範囲で確認されていることから、広い地域で起こった社会的変化を反映しているものと推定される。

(大庭)

註)

- (1) 地図のコンタラインはGolden Software社のSurfer Version 7.00を用いて、過去の調査で得られた標高データを入力し、作成したものである。用いたポイントは145点である。今回は、あくまでソフトを用いて復元したものを提示しており、データが少ない地域は今後資料の増加を待って更新する必要がある。

引用参考文献

- 赤木克規1987、「第Ⅱ章成果の概略 第3項瓜生堂遺跡」：大阪府教育委員会・大阪文化財センター編『河内平野遺跡群の動態』Ⅰ、pp. 55-61
- 秋山浩三・中原知之1998・1999、「近畿における石廬丁生産・流通の再検討—池上曾根遺跡の石廬丁製作工程—(上)・(下)」(Ⅰ)：『大阪文化財研究』15号・16号、pp. 1-13・pp. 38-62
- 池田研1999a、「古墳時代の貝出土遺跡—崇禪寺遺跡を中心に—」：『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp. 373-379
- 1999b、「高地性集落の機能と生業—出土具を中心として—」：大阪大学考古学研究室編『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』、pp. 149-166
- 2000、「貝類」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp. 196-199
- 李本隆裕1996、「縄紋時代晩期末—弥生時代中期初頭の貝塚」：東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会編『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書』、p. 10
- 大阪管区気象台1982、「第3節地震・津波」：『大阪の気象百年』
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1981、「昭和54年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1982、「昭和55年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1983、「昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1984、「昭和57年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1985、「昭和58年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1986、「昭和59年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1987、「昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1988、「昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1989、「昭和62年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1990、「昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1991a、「平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1991b、「平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1992、「平成3年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1993、「平成4年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1995、「平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1996、「平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 1997、「平成7年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 大阪市都市協会1983、「旭区史」
- 大阪市文化財協会1981a、「中嶋邸新築工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS80-6)略報
- 1981b、「浅野邸に伴う森小路遺跡発掘調査(MS80-18)略報
- 1983、「大阪瓦斯管入替に伴う森小路遺跡発掘調査(MS82-10)略報
- 1986a、「川相氏による共同住宅新築に伴う森小路遺跡発掘調査(MS85-9)略報
- 1986b、「共同住宅建築に伴う森小路遺跡発掘調査(MS85-3)概報
- 1986c、「和田邸の建替えに伴う森小路遺跡発掘調査(MS85-27)概報

- 1986d,「松井コンピューター事務所の建替えに伴う森小路遺跡発掘調査(MS85-28)略報」
- 1986e,「山本マンションの建築に伴う森小路遺跡発掘調査(MS85-30)略報」
- 1986f,「藤川邸新築に伴う森小路遺跡発掘調査(MS85-35)略報」
- 1989,「城東区第225号線他2路線、歩道設置工事その他工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS88-12・15・16)略報」
- 1995,「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅲ
- 1996,「森の宮遺跡」Ⅱ
- 1999,「上西昌子氏による建設工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS98-1)報告書」
- 2000a,「山田義弘氏による建設工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS99-14)報告書」
- 2000b,「株式会社ユニによる建設工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS99-29)報告書」
- 2000c,「平野見之氏による建設工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS99-36)報告書」
- 2001,「長原遺跡の地層」:「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅵ, pp. 7-26
- 大阪府教育委員会1987,「八雲遺跡発掘調査概要」Ⅰ
- 大阪府立泉北考古資料館1986,「大阪府の銅鐸図録」大阪府立泉北考古資料館図書第3冊
- 大阪文化財センター1979,「池上遺跡」第3分冊の2 石器編, pp. 111-119
- 大阪毎日新聞社1924,「最新実測大阪明細地図」
- 梶山彦太郎・市原実1985,「続大阪平野発達史」古文物学研究会
- 1986,「新大阪駅の地下」:「大阪平野のおいたち」青木書店, pp. 26-30
- 門真市教育委員会1990,「普賢寺遺跡発掘調査概要」Ⅰ
- 1993,「西三荘・八雲東遺跡発掘調査概要」
- 1999,「古川遺跡」
- 吉良哲明1954,「原色日本貝類図鑑」保育社
- 古代の土器研究会1992,「都城の土器集成」
- 古代の土器研究会1993,「都城の土器集成」Ⅱ
- 酒井龍一1974,「石庵丁の生産と消費を巡る二つのモデル」:「考古学研究」第21巻第2号, pp. 23-36
- 島田貞彦・有光教一1931,「大阪市東成区森小路発見の弥生式遺跡に就いて」:「考古学雑誌」21巻10号, pp. 19-37
- 菅榮太郎1987,「森小路遺跡出土の打製石剣」:大阪市文化財協会編「葦火」6, p. 7
- 1995,「石蔵資料の型式および製作技法の幅年の検討」:「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅲ, pp. 367-388
- 大東市教育委員会1987,「寺川・北条遺跡発掘調査報告書」
- 田中清美1987,「森小路遺跡出土の木製品」:大阪市文化財協会編「葦火」11, p. 6
- 田辺昭三1965,「陶器古窯跡群」Ⅰ 平安学園考古学クラブ
- 1981,「須恵器大成」角川書店
- 堀田啓一・関川尚功1988,「玉造稲荷神社の考古学」:「創祀二千年祭奉祝記念誌 まかたま」玉造稲荷神社 pp. 62-93
- 道哲清1995,「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」:大阪市文化財協会編「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅲ, pp. 41-44
- 2000,「河内平野中・南部の層序対比試案」:大阪府文化財調査研究センター編「池島・福万寺遺跡」Ⅰ, pp. 158-163
- 土質工学会関西支部・関西地質調査業協会1987,「大阪地盤の地質構成・構造の地形的特性」:「新編大阪地盤図」コ

ロナ社、pp. 12-30

豊中市教育委員会1972、「勝部遺跡」

豊中市教育委員会・上津島遺跡調査団1997、「上津島遺跡第5次発掘調査報告」

中川信作1976、「森小路遺跡」：『日本考古学年報』27（1974年版）、p. 119

那須孝梯1987、「大阪平野」：『日本の地質 近畿地方』 共立出版、pp. 158-160

那須孝梯・樽野博幸・下村春文・才原弘弘1980、「基本層序」：東大阪市遺跡保護調査会編『鬼虎川遺跡調査概要』Ⅰ、
pp. 4-9

那須孝梯・樽野博幸・松田順一郎1984、「基本層序」：東大阪市文化財協会編『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3—遺
構編Ⅰ—』、pp. 5-9

難波宮址顕彰会1978、「森の宮遺跡 第3・4次調査報告書」

奈良国立文化財研究所1976、「平城宮発掘調査報告書」Ⅷ 奈良国立文化財研究所学報第26冊

1978、「川原寺西南部の調査」：『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』Ⅱ 奈良国立文化財研究所学報
第31冊

西畑佳恵1994、「森小路遺跡にみる近江との地域間交流—弥生時代中期の近江系を要を中心として—」：大阪市文化財
協会編『大阪市文化財論集』、pp. 85-117

蜂屋晴美1985、「5工具 4石鏝」：『弥生文化の研究』5、pp. 53-58

濱田延久1993、「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」：『弥生時代文化博物館研究報告』第2集、pp. 111-126

2001、「北河内地域における弥生時代遺跡群の動態」：寝屋川市史編纂課編『市史紀要』第8号、pp. 21-39

波部忠重1961、『続原色日本貝類図鑑』 保育社

東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会1996、「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書」

1998、「水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告」

東大阪市文化財協会1998、「鬼虎川遺跡第35-2・3次発掘調査報告」、pp. 1-85

東成郡役所1972、「第13編古市村」・「第14編清水村」：『東成郡誌』下巻、pp. 1052-1188

平田洋司1994、「森小路遺跡の銅剣形石剣」：大阪市文化財協会編『草火』50、pp. 1-3

平凡社1986、「旭区」：『日本歴史地名体系28 大阪府の地名Ⅰ』、pp. 609-615

別所秀高1996、「層序および遺跡形成過程」：東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会編『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報
告書—第2分冊Ⅰ—』、pp. 7-26

2000、「池島・福万寺遺跡における完新世の堆積環境変遷過程」：大阪府文化財調査研究センター編『池島・
福万寺遺跡』Ⅰ、pp. 150-158

守口市教育委員会1976、「八雲遺跡」

1993、「西三荘・八雲東遺跡発掘調査概要」

守口市役所1962、「守口市史」第1巻本文編

森田克行1988、「複合櫛櫛文」：『弥生時代文化の研究』10、pp. 183-192

1990、「摂津地域」：『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ、pp. 79-191

森の宮遺跡発掘調査団1972、「森の宮遺跡—第1・2次調査報告—」

松尾信裕1986、「大阪市内出土の絵画土器」：大阪市文化財協会編『草火』4、p. 7

八木久栄1978、「森小路遺跡(第2・3次)」：『日本考古学年報』29（1976年版）、p. 212

夕刊大阪新聞社1936、「大大阪区勢地図」

あ　と　が　き

これまで森小路遺跡で行われた調査は100件近くに及ぶ。しかし、弥生時代の集落遺跡として学史的にも著名であるにもかかわらず、その具体的な内容は必ずしも明らかにされてきたとはいえなかった。住宅街での建物の建替えなどに伴う小規模な調査が多く、個々の調査の事実報告にとどまっていたこともその要因としてあげられる。その意味で、本書は33件の調査成果を合わせて報告した、遺跡としては最初のまとまった報告書であるといえる。遺跡の中では点にすぎない個々の調査成果をつなぎ合わせることによって、遺跡の全体像を復元することも可能である。本書ではそれぞれ調査成果の記載とともに、石器・動植物遺体や、集落変遷についての考察を加え、遺跡を総体的にとらえてその特徴を提示することにも努めた。

短い整理期間の中で、十分に検討できなかった事項や残された問題はあるものの、本書が弥生時代研究の一助となれば幸いである。忌憚なきご批判を願う次第である。

(田中清美)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- O ON46段階 165
- T TK23型式 105, 113, 142, 145, 161,
165, 168, 186, 189
TK47型式 16, 111, 113, 142, 145,
161, 184, 189
TK208型式 165, 170
TK209型式 189
- あ アカガシ亜属 121, 122, 153
福台目盛板 118
- い 飯焼窓 102
石小刀 58, 66, 89, 145, 181,
182, 193, 196
石皿 181, 183
石鋸 182, 196
石甕丁 7, 11, 13, 18, 69, 71, 72,
105, 113, 124, 130, 147,
152, 175, 179, 181, 182,
195~200, 217
石鑿 55, 69, 166, 183
井戸 172
イノシシ 38, 58, 86, 89, 154, 168,
203, 206
- う 白玉 168
ウリ 49
- え 円形浮文 38, 58, 100, 118
円板状土製品 41, 58, 89, 146, 179
- お オオムギ 168, 199
- か 海成砂層 50
海成粘土層 46, 49~51
海退期 51
角閃石 11, 13, 98, 100, 102, 111,
115, 118, 137, 142, 153
韓式系土器 140, 142
- き 汽水城 2, 51
- く 獣 4, 121, 153
- け 結晶片岩 7, 11, 13, 18, 46, 55, 66,
67, 69, 71, 89, 90, 105,
113, 130, 147, 150, 152,
172, 175, 179, 183, 196,
217
ケヤキ 119, 121, 172
剣形木製品 121
- こ 紅崖石片岩 183, 196
瓶 142
木の葉圧痕 11, 86, 102, 117
コメ 168, 179
- さ 砂岩 41, 66, 177, 183, 199
- し シカ 58, 89, 154
上部砂層 49~51
- す 果穴化石 46, 51, 61, 62
- せ 製塩土器 7, 26, 138, 140, 142
赤色顔料 179
石鐘 41, 42, 49, 58, 65, 150,
152, 154, 179, 193~195,
197, 199
石鐮 41, 46, 65~67, 69, 89,
107, 133, 138, 150, 169,
170, 179, 181, 182, 199
セタシジミ 90, 130, 166, 179, 203,
207
尖頭器 14, 18, 23, 41, 42, 49,
59, 89, 105, 124, 132,
179, 181, 182, 193
- た 台形土器 72
壁穴住居 107, 212
- ち 柱状片刃石斧 66, 198
- と 砥石 41, 42, 199
土鍾 161
把手付甕 170
- ね 粘板岩 145, 166, 196~199, 217
- は 蓮田・蓮根田 2, 43, 54, 74, 80, 83,

	92, 96, 123, 134, 164, 192	ほ	方形周溝墓	2, 4, 107, 212
ハマダリ	90, 130, 179, 205~207	掘立柱建物	64, 73, 107, 212	
ひ ヒノキ	118, 119, 121, 122, 192	ま	勾玉	185
ふ 複合櫛	18, 55	磨製石剣	145, 166	
太型蛤刃石斧	3, 42, 66, 177, 198, 199	み	ミニチュア	89, 100, 159, 184
へ ヘラ描沈線文	66, 69, 168, 208, 209	ゆ	有孔円板	184
扁平片刃石斧	55, 66, 69, 159, 181, 198, 199	有孔軽石	177, 199	
		り	流水文	69, 117, 137, 146, 153

〈地名など〉

い	生駒西麓	11, 13, 28, 41, 49, 55, 58, 59, 67, 69, 71, 72, 77, 89, 90, 98, 100, 102, 111, 115, 118, 130, 137, 145, 146, 150, 154, 159, 170, 174, 175, 179, 181, 213, 216~218	河内平野	2, 50, 218	
			き	紀伊	11, 13, 38, 46, 55, 67, 89, 90, 150, 172, 175, 196, 217
			は	播磨	177, 218
			や	山城	46, 89, 172, 217
			よ	淀川	1, 2, 37, 49~51, 62, 85, 124, 165, 196, 199, 208, 209, 217, 218
お	近江	11, 46, 49, 67, 89, 148, 172, 177, 217			
か	河内舘	2, 199, 203, 209, 217, 218			

**Archaeological Reports
of the
Morishoji Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of Excavations
Prior to the Development of
Morishoji Area between 1980 and 1994

July 2001

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SA : Palisade or Fence

SB : Building

SD : Ditch

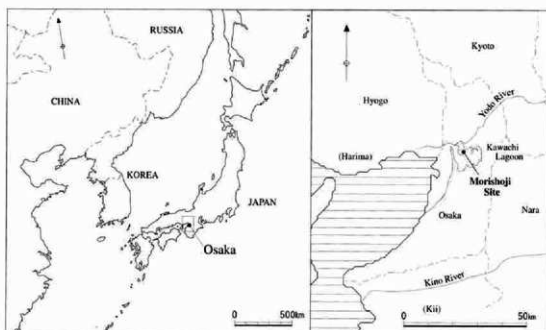
SE : Well

SK : Pit

SP : Posthole

SX : Other features

NR: Natural Stream



CONTENTS

Introduction

Acknowledgements

Explanatory Notes

Chapter I. Site Environment and Previous Investigations	1
S.1 Topography and Environmental Setting	1
S.2 History of Research	3
Chapter II. Results of Investigations	7
S.1 MS80-3	7
1) Background and Progress of Research	7
2) Stratigraphy	7
3) Features and Artifacts	8
i) Artifacts by Stratum	ii) Features Observed at the Top of Stratum 7
S.2 MS80-5	14
1) Background and Progress of Research	14
2) Stratigraphy	14
3) Features and Artifacts	16
i) Artifacts by Stratum	ii) Features Observed at the Base of Stratum 5
S.3 MS80-13	19
1) Background and Progress of Research	19
2) Stratigraphy	19
3) Features and Artifacts	20
i) Artifacts by Stratum	ii) Features Observed at the Base of Stratum 4
S.4 MS80-14	22
1) Background and Progress of Research	22
2) Stratigraphy	23
3) Features and Artifacts	24
i) Artifacts by Stratum	ii) Features Observed at the Base of Stratum 4
S.5 MS80-16	25
1) Background and Progress of Research	25
2) Stratigraphy	25
S.6 MS80-17	26
1) Background and Progress of Research	26
2) Stratigraphy, Features, and Artifacts	26
S.7 MS81-2	27
1) Background and Progress of Research	27
2) Stratigraphy	27
3) Features and Artifacts	28
i) Artifacts by Stratum	ii) Features
S.8 MS81-13	31
1) Background and Progress of Research	31
2) Stratigraphy	31
3) Features and Artifacts	34
S.9 MS81-15	35
1) Background and Progress of Research	35

2) Stratigraphy	35
i) Trench I	ii) Trench II-IV
3) Features and Artifacts	38
i) Yayoi Period	ii) After Kamakura Periods
S. 10 MS81-17	43
1) Background and Progress of Research	43
2) Stratigraphy	43
3) Features and Artifacts	46
4) Natural stratigraphy of the Morishoji site	49
S. 11 MS82-8	52
1) Background and Progress of Research	52
2) Stratigraphy	52
3) Features and Artifacts	53
S. 12 MS82-18	54
1) Background and Progress of Research	54
2) Stratigraphy	54
3) Features and Artifacts	55
i) Trench I-III	ii) Trench IV
iii) Trench V	iv) Trench VI
S. 13 MS83-1	60
1) Background and Progress of Research	60
2) Stratigraphy	60
3) Features and Artifacts	62
S. 14 MS84-5	63
1) Background and Progress of Research	63
2) Stratigraphy, Features, and Artifacts	63
S. 15 MS 84-6	64
1) Background and Progress of Research	64
2) Stratigraphy	64
3) Features and Artifacts	65
i) Artifacts by Strata	ii) Features Observed at the Base of Stratum 5
iii) Features Observed at the Top of Stratum 4	iv) Features Observed at the Base of Stratum 3
S. 16 MS84-7	74
1) Background and Progress of Research	74
2) Stratigraphy	74
3) Features and Artifacts	75
S. 17 MS85-15	78
1) Background and Progress of Research	78
2) Stratigraphy	78
i) Trench I	ii) Trench II
3) Features and Artifacts	82
S. 18 MS85-32	83
1) Background and Progress of Research	83
2) Stratigraphy	83
3) Features and Artifacts	85
S. 19 MS86-5	87
1) Background and Progress of Research	87
2) Stratigraphy	87
3) Features and Artifacts	89

i) Artifacts by Stratum	ii) Features Observed at the Base of Stratum 5
S.20 MS86-18	92
1) Background and Progress of Research	92
2) Stratigraphy	92
S.21 MS86-38	94
1) Background and Progress of Research	94
2) Stratigraphy	94
3) Features and Artifacts	94
S.22 MS87-6	96
1) Background and Progress of Research	96
2) Stratigraphy	96
3) Features and Artifacts	98
i) Artifacts by Stratum	ii) Trench 1
iii) Trench 2	iv) Trench 3
v) Trench 4	vi) Trench 5
vii) Trench 8	viii) Wooden Artifacts
S.23 MS88-12	123
1) Background and Progress of Research	123
2) Stratigraphy	123
3) Features and Artifacts	124
i) North-South Transect	ii) East-West Transect
S.24 MS88-22	134
1) Background and Progress of Research	134
2) Stratigraphy	134
3) Features and Artifacts	136
S.25 MS88-31	138
1) Background and Progress of Research	138
2) Stratigraphy	138
3) Features and Artifacts	140
S.26 MS88-33	143
1) Background and Progress of Research	143
2) Stratigraphy	143
3) Features and Artifacts	145
i) Artifacts by Stratum	ii) Features Observed at the Base of Stratum 5
iii) Features Observed at the Base of Stratum 3	
S.27 MS89-1	149
1) Background and Progress of Research	149
2) Stratigraphy	149
3) Features and Artifacts	150
i) Artifacts by Stratum	ii) Features Observed at the Base of Stratum 2
iii) Features Observed at the Base of Stratum 6	
S.28 MS89-4	156
1) Background and Progress of Research	156
2) Stratigraphy	156
3) Features and Artifacts	157
S.29 MS89-50	160
1) Background and Progress of Research	160
2) Stratigraphy	160
3) Features and Artifacts	161

i) Artifacts by Stratum	ii) Features Observed within and at the Base of Stratum 3	
S.30 MS90-25		163
1) Background and Progress of Research		163
2) Stratigraphy		164
3) Features and Artifacts		165
i) Test Pits	ii) Trenches	
S.31 MS93-29		169
1) Background and Progress of Research		169
2) Stratigraphy		169
3) Features and Artifacts		169
S.32 MS94-11		173
1) Background and Progress of Research		173
2) Stratigraphy		173
3) Features and Artifacts		174
i) Features Observed at the Base of Stratum 6	ii) Features Observed at the Base of Stratum 4	
iii) Yayoi Period Artifacts	iv) Features Observed at the Base of Stratum 3	
v) Features Observed at the Base of Stratum 2		
S.33 MS94-13		187
1) Background and Progress of Research		187
2) Stratigraphy		187
3) Features and Artifacts		189
i) Artifacts by Stratum	ii) Features Observed at the Base of Stratum 3B	
iii) Features Observed at the Top of Stratum 3A		
Chapter III Examination of Features and Artifacts		193
S.1 Morishoji Site Lithic Artifacts		193
1) Chipped Stone Tools		193
i) Projectile Points	ii) Drills	
iii) Other Chipped Stone Points	iv) Other Chipped Stone Artifacts	
2) Ground Stone Artifacts		196
i) Swords/Daggers	ii) Adzes/Axes	
iii) Knives	iv) Other Chipped Stone Artifacts	
3) Summary		199
S.2 Faunal Remains Recovered from the Morishoji Site		201
1) Vertebrates		203
2) Mollusks		203
i) Quantities Recovered from Each Time Period	ii) Mollusk Species Composition	
iii) Recovery Contexts	iv) Metric Analysis	
3) Summary		207
S.3 Early Middle Yayoi Period Settlement Analysis		208
1) Settlement Location's Reconstruction		208
2) Distribution of Middle Yayoi Period Artifacts		209
3) Earthenware's Observed in the Excavated Settlement Area		209
4) Summary		216

Postscript and Index
English Contents and Summary

ENGLISH SUMMARY

Introduction

The Morishoji site is located near the banks of the downstream portions of the Yodo River in the northern part of Osaka city. More than 80 different excavations have been conducted since investigation began in 1975. However, since the site is located in a residential district, the majority of the excavations are small in scale due to the size of the buildings and lots that are developed in the area. This volume covers the results of 33 different excavations located within the Yayoi period settlement. The remains observed include those of structures, pits, ditches, stone tools, and earthenware, wooden artifacts, and animal and plant remains, from the Middle Yayoi period along with a variety of Haji ware, Sue ware, and stone religious items from the Middle Kofun period.

Settlement Overview

The Yayoi period settlement at Morishoji was located about 1m above sea-level on the south side of the ancient course of the Yodo River in the level floodplain near its former mouth where it flowed into the Kawachi lagoon that is now the present day Osaka plain. The landform on which it sat was a peninsula surrounded on the north by the Yodo River and the west and south by the ancient Kawachi lagoon.

The Yayoi settlement here began in the early part of the middle Yayoi period (around 250BC) and continued through the end of the Middle Yayoi period (around 50BC). At its height in the early part of the Middle Yayoi period the settlement spread out over an area about 300m north-south and about 500m east-west. Investigation of the sediments at the site has revealed both drier settings in the northern portions of the site toward the riverbank and wetter settings to the south, towards the lagoon. During the later portions of the Middle Yayoi period, the settlement becomes restricted to the northern area near the river. Evidence for flooding has been observed in several investigation areas in the southern portion of the site and this has suggested an explanation of the sporadic habitation in the less stable lower environment on the southern edge of the sites as opposed to the continual habitation in the higher ground of the northern area.

Overview of Subsistence Patterns at the Site

Numerous stone sickles have been observed in the excavation areas indicating that wet-rice agriculture was the main occupation of the inhabitants of this settlement. Furthermore, though no evidence for actual paddy fields has been observed, considerable amounts of carbonized rice remains have been recovered from pits of the Yayoi period as well. In addition to rice production, small shell middens were observed in almost every investigation area indicating frequent use of the readily available aquatic resources, particularly freshwater clams. In addition a wide variety of other faunal remains were observed including those of wild boar, deer and fish as would be expected in this type of environment. In addition a variety of seeds but primarily those of barley and melon were found.

Evidence for Extra-Regional Interaction

One interesting aspect of this waterside settlement is the evidence for regular procurement

of goods and materials from other regions. The presence of non-local earthenware and lithic materials suggest a flow of materials from these outside areas into the site along a variety of paths that appear to change through time. Many of the stone sickles recovered from deposits of the early part of the Middle Yayoi periods were produced from Chlorite-Schist quarried from the Kino River valley in the distant Kii region to the south. However there is no evidence yet of use of the more readily available slates from known quarry areas nearby to the northeast of the site. Furthermore, small amounts of earthenware produced in the Kii region and near the base of Mt. Ikoma, to the south and southeast respectively, have been recovered from the site as well. This, along with the presence of the non-local lithic raw materials mentioned above, is indicative of extra-regional procurement focusing on materials from the south and southeast during the first part of the Middle Yayoi period. Deposits from the later portions of the Middle Yayoi period do not appear to contain the materials from the southern foci but rather, there appears to be a shift in procurement orientation to the northwest. Though exact nature of this extra-regional procurement is unclear, it has been argued that the presence of these non-local materials is indicative of trade and/or exchange with these neighboring regions. The implications for extra-regional interaction suggest that this problem requires further investigation.

Site Abandonment

The settlement appears to have been abandoned sometime during the late Yayoi period and there is very little evidence for occupation again until the 5th century AD during the Middle Kofun period. Similar evidence of abandonment comes from the sites along the Yodo River slightly further upstream from the Morishoji site. Evidence from that site suggests rapid environmental change throughout the area. This rapid environmental change may in turn have had an influence on social changes in the communities of the Yodo River basin.

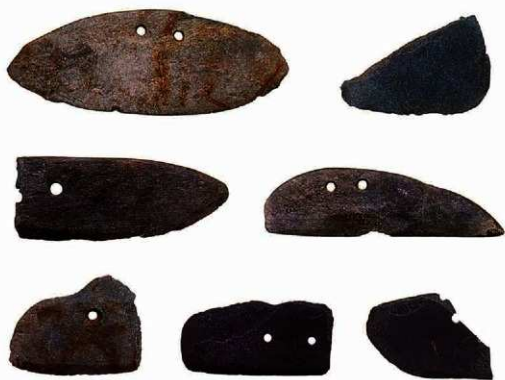
報告書抄録

ふりがな		もりしょうじいせきはくつちょうさほうこく1						
書名		森小路遺跡発掘調査報告Ⅰ						
副書名								
編著者名		田中清美・大庭重信・清水和明・趙哲済・池田研・Matthew W. Van Pelt						
編集機関		財団法人 大阪市文化財協会						
所在地		〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833						
発行年月日		西暦 2001年7月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
もりしょうじいせき 森小路遺跡	大阪府中津市 大阪市旭区 新森・清水	27117	-	34°42'55"	135°33'40"	19800602-19940623	10,810㎡	下水管工事などの 公共事業のほか、 民間の建設工事。 計33件
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		
森小路遺跡	集落	弥生時代	掘立柱建物・溝・土曜 ・小穴			弥生土器・円板状土製品・打製石器（石鏃・石錐）・磨製石器（石砲丁・石剣・石斧） ・木製高杯ほか		
		古墳時代	溝・井戸・土曜・小穴			土師器・須恵器・製塩土器・滑石製品 ・木製碗ほか		
		奈良・平安時代	土曜			土師器・須恵器・瓦		
		鎌倉・室町時代	溝・土曜			土師器・瓦器・瓦質土器		
		江戸時代以降	溝・畝・畦畔			陶磁器・ガラス瓶		

原 色 図 版



白ラインは遺跡範囲



森小路遺跡出土石庖丁



森小路遺跡出土木製品

图 版

MS80-3次
15区地層断面
(北から)



MS80-13次
C地点地層断面
(南から)

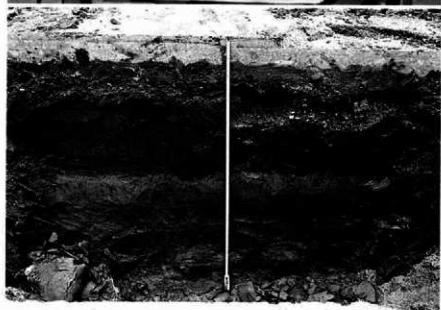


MS80-14次
調査地全景
(東から)





調査地風景(東から)



地層断面(1)



地層断面(2)

歩道部分調査状況
(西から、手前トレンチ
は15地点)



3区(東から)



2区SK04断面
(南から)





調査地全景



12地点地層断面



13地点遺物出土状況

I区地層断面



II区第4層土器出土状況
(北から)



I区下水6・植樹帯5地点
第7層下面検出小穴群
(東から)





B-1区全景
(南から)



A-4区遺構検出状況
(東から)



A-4区SD01
地層断面(北から)

I区全景(南から)



V区SD01(西から)



IV区SK04地層断面
(西から)

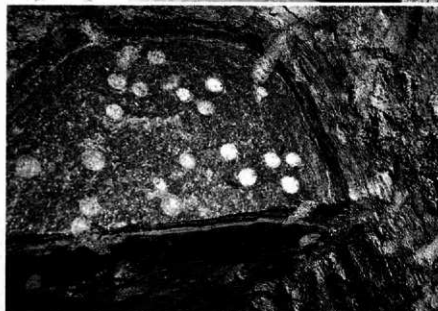




調査区全景(西から)



SX01地層断面
(北西から)



果穴化石検出状況

第5層下面遺構検出状況
(北西から)



第4層上面遺構検出状況
(南から)



SK08地層断面
(西から)





MS84-5次
I区高杯出土状況



MS84-7次
II区SK101西壁地層断面
(東から)



MS84-7次
II・III区間
西壁地層断面(東から)

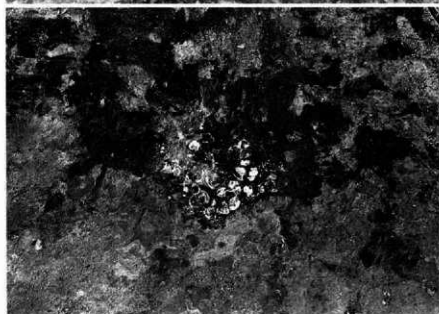
第5層下面遺構検出状況
(南から)



SK01~03(南から)



SK02貝類出土状況

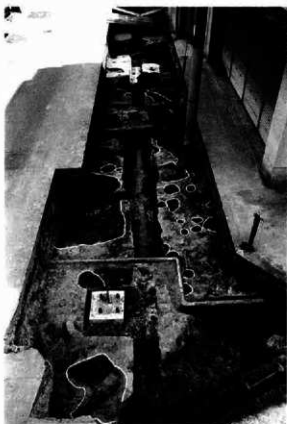




2区遺構検出状況(南から)



3区南部遺構検出状況(南から)



4区北部第5層下面遺構検出状況(北から)



5区南部第8層上面遺構検出状況(南から)

4区北部第6層
遺物出土状況
(北から)



5区北部SK705・708
東壁断面(西から)



8区南トレンチ木製品
出土状況(北から)





11区第5層遺物出土状況
(東から、手前側SX01)



11区SK01基底出土土器・
貝類(南から)



14区SD01遺物出土状況
(南西から)

調査区全景(南から)



南壁地層断面



SK01検出状況
(東から)





第5層上面遺構検出状況
(東から)



調査区東半柱列検出状況
(東から)



SK01(北から)

第5層下面遺構検出状況
(南から)



SD01(西から)



小穴群検出状況
(西から)





第2層下面遺構検出状況
(北から)



第6層下面遺構検出状況
(北から)



SD01(東から)

調査区全景(南から)



調査区北壁地層断面



SK01遺物出土状況





調査区全景(北から)



小穴群検出状況
(東から)



SX01地層断面
(東から)

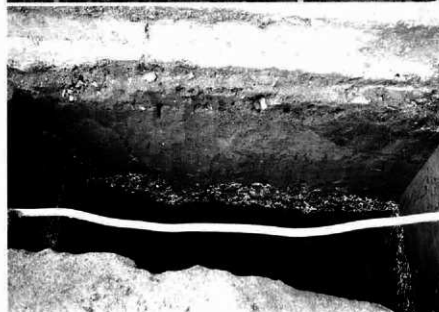
I区全景(東から)



II区全景(西から)



II区SX01北壁地層断面
(南から、白く見える
のは貝層)





調査区全景(北から)



SE01土器出土状況



SK02木製把手付碗
出土状況

第4層下面遺構検出状況
(東から)



第6層下面遺構検出状況
(東から)



SK02・03地層断面
(北から)





西区第3A層上面遺構
検出状況(東から)



東区第3A層上面遺構
検出状況(東から)



東区第6～8層上面
および地層断面
(東から)



10



65



8



75



31



74



33

80-3次(14区第5層: 8・10・31、15区第5層: 33)、80-5次(29区SK06: 65)、
80-14次(第4層: 74・75)



210

119



209



189



211



187



213

81-15次(第7層:119)、84-6次(第5層:187・189、SK07:209~211、SK08:213)



368



378



364



364



379



334



389



441



381



428



282



304



560



427

87-6次(4区第5層:282・304、3区SX501:381、4区SD02:389)、88-12次(13・14区SD01:428、11区SK01:427)、88-22次(SK01:441)、89-4次(SX01:560)



527



270



519



253



522



617

86-5次(SK03:270、第4層:253)、88-33次(SD01:519・522、SK08:527)、93-29次(SK02:617)



632



647



676



654



677



643



678



388



627



385



626



386

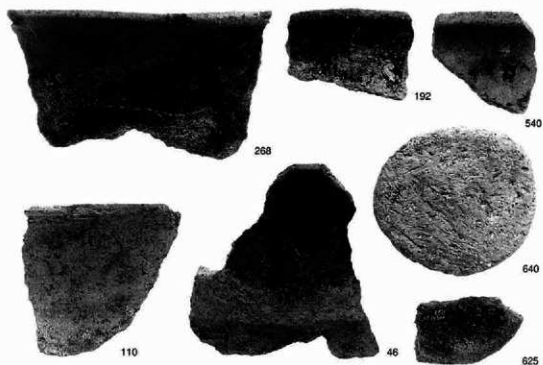


355

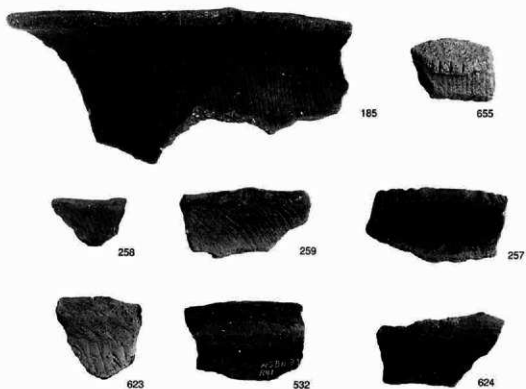


582

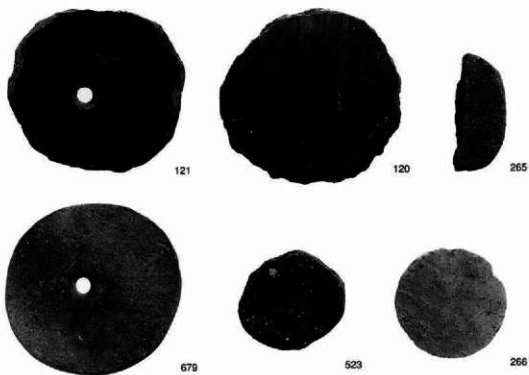
87-6次(4区第5層:355、3区SX501:385・386・388)、89-50次(第3層:582)、
93-29次(SE01:627、SK02:626)



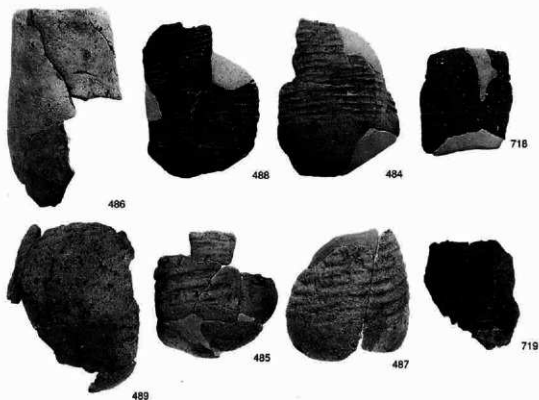
80-3次(9'区SK02:46)、81-15次(第1~3層:110)、84-6次(第5層:192)、86-5次(SK01:268)、89-1次(第4層:540)、93-29次(第2層:625)、94-11次(SK02:640)



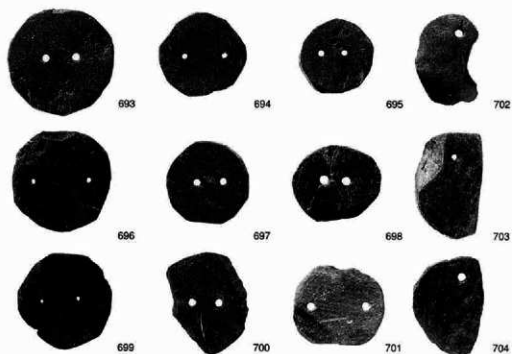
84-6次(第5層:185)、86-5次(第4層:257~259)、88-33次(SK09:532)、93-29次(第2層:623・624)、94-11次(SX04:655)



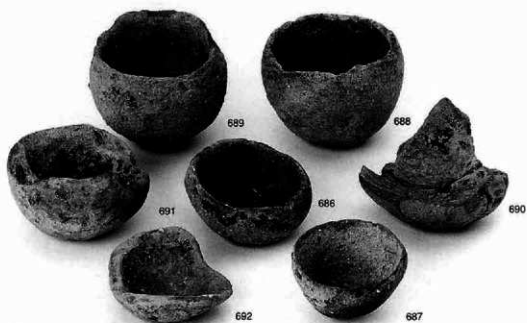
81-15次(第7層:120・121)、86-5次(第4層:265・266)、88-33次(SK02:523)、94-11次(SK08:679)



88-31次(SK01:484~489・718・719)



94-11次(SD03: 693~695・697~704、重機掘削後: 696)



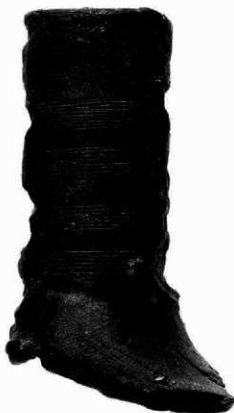
94-11次(SD03: 686~690、重機掘削後: 691・692)



411 横



411 上



412 横



411 下



412 下



412 細部



416



409



408



549



413



421



410



420



419

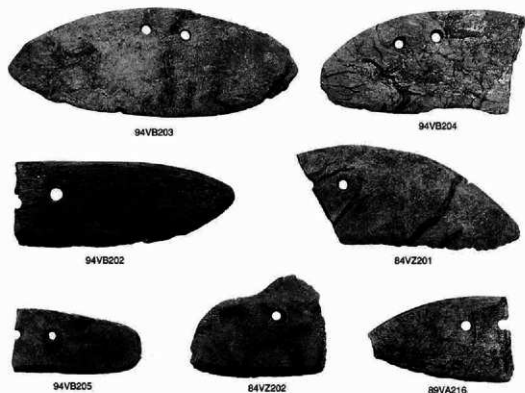


418

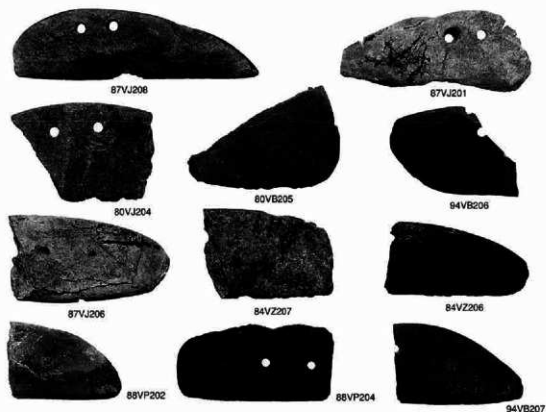


558

87-6次(8区第7層上面:408・409、5区SK705下層:410・413、8区南第7層:418、3区SX701:419、SK14:420、3区SX701上面:421)、89-1次(SK04:549)、89-4次(SX01:558)



84-6次(SK01:84VZ201・202)、89-1次(第4層:89VA216)、94-11次(SK02:94VB202、第2層:94VB204、重機掘削後:94VB203・205)



80-3次(9'区SK01:80VB205)、80-5次(29区SK06:80VJ204)、84-6次(SK08:84VZ206、第5層:84VZ207)、87-6次(6区第4b層:87VJ201、3区第4b層:87VJ206、3区SX501:87VJ208)、88-33次(SK01:88VP202・204)、94-11次(SK08:94VB206・207)



84VZ204



84VZ213



94VB223



90VV201



84VZ203



80VJ203



81VT208



88VP
203

80-5次(29区SK06:80VJ203)、81-15次(第7層:81VT208)、84-6次(第4層:84VZ203・204、第5層:84VZ213)、88-33次(第4層:88VP203)、90-25次(SK01:90VV201)、94-11次(SD03:94VB223)



94VB208



84VZ205



94VB209

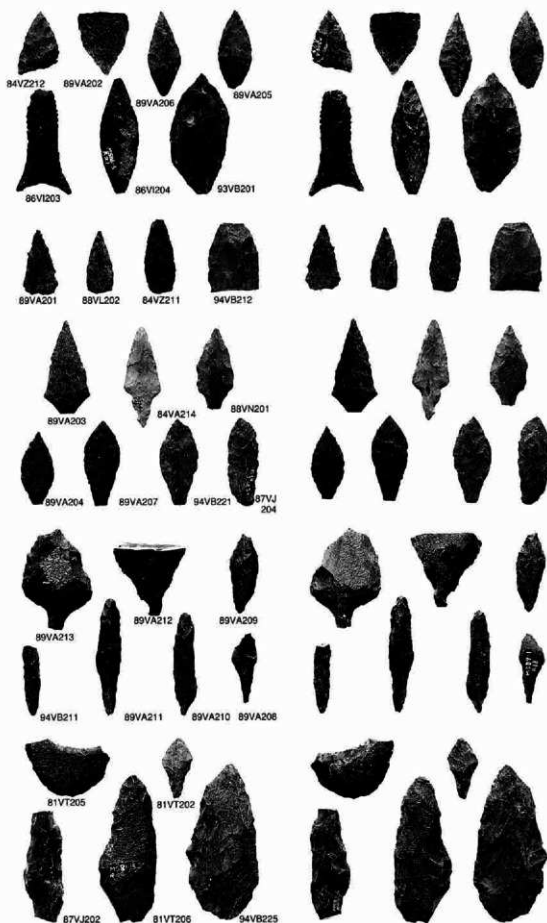


94VB210

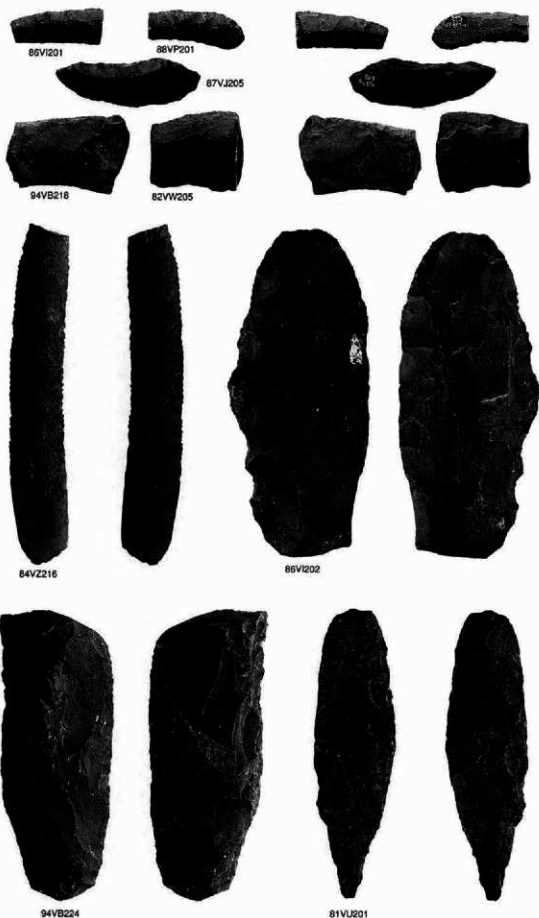


81VT201

81-15次(その他:81VT201)、84-6次(第4層:84VZ205)、94-11次(SX04:94VB208・210、重機掘削後:94VB209)



81-15次(その他: 81VT202・205・206), 84-6次(第2層: 84VZ214, 第3層: 84VZ212、第5層: 84VZ211)、
86-5次(第4層: 86VI203・204)、87-6次(5区第4a層: 87VJ202, 1区第5層: 87VJ204)、88-12次(概凡:
88VL202)、88-31次(第3層: 88VN201)、89-1次(第4層: 89VA201~208・210~213, SD01: 89VA209)、
93-29次(SX01: 93VB201)、94-11次(SK08: 94VB211・212, 南平清輝中: 94VB221・225)



81-17次(SX05: 81VU201)、82-18次(第5a層: 82VW205)、84-6次(第3層: 84VZ216)、
86-5次(第4層: 86VI201・202)、87-6次(2区SD806: 87VJ205)、88-33次(第4層:
88VP201)、94-11次(SD03: 94VB224、重機掘削後: 94VB218)

大阪市旭区 森小路遺跡発掘調査報告Ⅰ

ISBN 4-900687-51-0

2001年7月31日 発行

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 ヨシダ印刷株式会社 大阪営業所

〒532-0003 大阪市淀川区宮原5-1-18

**Archaeological Reports
of the
Morishoji Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of Excavations
Prior to the Development of
Morishoji Area between 1980 and 1994

July 2001

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of the
Morishoji Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of Excavations
Prior to the Development of
Morishoji Area between 1980 and 1994

July 2001

Osaka City Cultural Properties Association

『森小路遺跡発掘調査報告』Ⅰ 正誤表

頁	行など	誤	正
図版目次vii	右列10・11行目	4A層上面	3A層上面
挿図目次ix	右列20行目 図144	第3層下面平面図	第3層基底面平面図
写真目次x	右列5行目写真10の頁	204	205
45	21行目	第6a～6e層	第6a～6d層
117	図114キャプション	SX702	SK702
147	図144キャプション	第3層下面平面図	第3層基底面平面図
149	28行目	SK06	SK05
175	20行目	深さ0.m前後	深さ0.2m前後
194	9行目	89VA212	89VA208
196	20行目	…可能性が <u>考</u> ある。	…可能性が <u>有</u> る。
209	12行目	[梶山・市川1985]	[梶山・市屋1985]
221	6行目	下村 <u>臺</u> 文	下村 <u>隆</u> 文
同	17行目	『弥生時代文化博物館…』	『弥生文化博物館…』
英文目次iii	40行目	…Stratum <u>2</u>	…Stratum <u>6</u>
同	41行目	…Stratum <u>6</u>	…Stratum <u>2</u>
英文目次iv	27行目	ii) <u>Drills</u>	ii) <u>Other Chipped Stone Points</u>
同	28行目	iii) <u>Other Chipped Stone Points</u>	iii) <u>Drills</u>
同	30行目	ii) <u>Adzes/Axes</u>	ii) <u>Knives</u>
同	31行目	iii) <u>Knives</u>	iii) <u>Adzes/Axes</u>

